

嵯峨遺跡

埋蔵文化財発掘調査報告書

2019

国際文化財株式会社



1. 調査地遠景（北から）



2. B区遺構完掘状況全景（北から）



1. 搾り遺構上層全景（東から）



2. 搾り遺構上・中層（西から）



3. 搾り遺構中層（北東から）



4. 搾り遺構中・下層（北東から）



5. 搾り遺構下層（北東から）

例 言

1. 本書は京都市右京区嵯峨天龍寺車道町2番1他5筆における嵯峨遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本調査は、関電不動産開発株式会社の計画する集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査である。文化財保護法（昭和25年法律第214号）第92条の規定により、平成30年4月13日付け埋蔵文化財発掘調査届出により京都府教育委員会文化財保護課に届け出をし、0教文第5号の12で許可を受け、文文財第164号の受付番号17S496で通知されて実施したものである。
3. 調査の体制は、京都府教育庁指導部文化財保護課ならびに京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の指導のもとに、国際文化財株式会社が実施した。
4. 発掘調査の面積は、693㎡である。
5. 発掘調査は、平成30年5月8日～平成30年8月31日まで実施した。
6. 発掘調査及び本報告書作成にあたっては、下記の体制にて行った。

西日本支店長 森下 賢司

主任調査員 村尾 政人

補 助 員 河野 凡洋・田渕 成巳・多田 雅美・小林 郁也・齋藤 智子・廣畑 寧々

整 理 員 田中 修司・小林 郁也・齋藤 智子・廣畑 寧々・上野 亮子

作 業 員 安西工業株式会社、一般社団法人歴史文化研究所

7. 発掘調査及び整理事業は村尾が担当した。
8. 本書の執筆は第Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ章を村尾、第三章 3木器を小林・齋藤が、第四章 自然科学分析を辻 康男（株式会社パレオ・ラボ）が行った。
9. 遺構・遺物の写真撮影、編集は村尾が担当した。
10. 遺構図に使用した座標、水準測量は、テクノ・システム株式会社が行った。
11. 調査図面、写真などの記録類及び出土遺物は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課で保管される。
12. 発掘調査及び整理事業、報告書作成にあたっては、以下の方々及び関係機関のご指導、ご協力を得ることができました。ご芳名を記して感謝の意を表します。

家崎 孝治、池田 勝文、石井 明日香、市田 英介、伊藤 淳史、岩城 こよみ、馬瀬 智光、江沼 晃、大井 一郎、奥井 智子、小長谷 正治、笠原 啓太、柏田 有香、加藤 あずみ、鴨奥 弘志、川鍋 知秋、木立 雅朗、木許 守、國下 多美樹、熊谷 洋一、熊谷 舞子、黒須 亜希子、小池 智美、越野 亮司、小谷 亮二、小林 大太、澤田 拙二、島津 功、吹田 宏海、鈴木 久史、関野 豊、園田 和洋、谷口 尚之、辻 広志、辻 康男、中塚 武、新田 和央、橋本 清一、日山 正紀、前谷 宏明、三輪 祥智、持田 透、森岡 秀人、山田 邦和、山田 功一、山本 義雄、弓削 寿夫、吉川 義彦、義田 紗奈子（五十音順）

京都府教育庁指導部 文化財保護課、京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課、（公財）京都市埋蔵文化財研究所、関電不動産開発株式会社、株式会社長谷工コーポレーション大阪エンジニアリング事業部、安西工業株式会社、株式会社アクセス都市設計、テクノ・システム株式会社、一般社団法人歴史文化研究所、株式会社パレオ・ラボ、月桂冠株式会社大倉記念館、みやのまえ文化の郷、株式会社四門、株式会社アート、株式会社イビソク、株式会社地域文化財研究所、京都保存科学株式会社、株式会社吉田生物研究所、覚雄山大福田宝幢禅寺 鹿王院

凡 例

1. 遺構に使用した座標値は、世界測地系に基づいており、方位は座標の真北を北として表記した。水準点は T.P. 値（東京湾平均海面値）を使用し、本文中では「T.P.」と略称している。
2. 色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄、1994）を使用した。
3. 遺構図は各図にスケールを掲載し、原則として縮尺を 20・30・40・50・100 分の 1 とした。
4. 遺物実測図は各図にスケールを掲載し、原則として縮尺を 4 分の 1 とした。
5. 本書に収録した各資料の図は、本書の体裁に合わせて整えるためにそれぞれ縮小した。
6. 本書に収録した図・資料等の引用、参考文献、索引は、巻末に註として掲載した。
7. 遺構の分類記号は、下記の呼称を用いた。
 竪穴建物（S I）、掘立柱建物・礎石建物（S B）、柱穴（S P）、礎石（S S）、土坑（S K）、溝（S D）、井戸（S E）、カマド・炉（S L）、築地・堀（S A）、畑（S N）、自然流路（N R）。
8. 遺構名は分類記号の後に通し番号を付加した。建物番号は遺構とは別の番号を付加した。
 遺物番号は通し番号を付加した。実測図・写真図版共に一致している。
9. 出土遺物の内容については、小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要第 3 号』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996、小森俊寛『京から出土する土器の編年的研究 - 日本律令的研究・日本律令的土器様式の成立と展開、7～19 世紀』京都編集工房 2005、角田文衛他「第四部平安京の遺物」『平安京提要』（財）古代学協会・古代学研究所 1994 に従った。

本文目次

第I章 はじめに	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	3
第3節 位置と環境	5
1) 地理的環境	5
2) 歴史的環境	5
第II章 調査成果	13
第1節 基本層序	13
第2節 遺構の概要	21
1. A区下層遺構(飛鳥～平安時代)	23
2. B区下層遺構(飛鳥～平安時代)	29
3. A区上層遺構(鎌倉～室町時代)	32
4. B区上層遺構(鎌倉～室町時代)	48
第3節 遺物の概要	63
1. A区下層遺構出土遺物	63
2. B区下層遺構出土遺物	65
3. A区上層遺構出土遺物	66
4. B区上層遺構出土遺物	70
第III章 まとめ	81
第1節 小結	81
調査地の変遷	81
1期 縄文時代	81
2期 古代	82
3期 中世1	86
4期 中世2	92
自然科学分析	97

挿図目次

図1 調査地位置図1	1
図2 調査地位置図2	2
図3 調査地位置図3	2
図4 調査区地区割図	3
図5 A区調査風景	4
図6 現地説明会風景	4
図7 嵯峨野地区の遺跡分布図	6
図8 室町時代の嵯峨復元図	8
図9 周辺調査位置図	10
図10 調査位置図	13
図11 A区西壁断面図	14
図12 A区北・南壁断面図	16

图 13	B 区西·南壁断面图	18
图 14	基本層序模式图	19
图 15	A·B 区遺構平面图	20
图 16	A 区下層遺構平面图	22
图 17	A 区豎穴建物 1·2 平面图	25
图 18	豎穴建物 1·2 断面图	26
图 19	豎穴建物 1 竈平·断面图	27
图 20	烧土 1054 平·断面图	27
图 21	B 区下層遺構平面图	28
图 22	溝 5218 断面图	30
图 23	豎穴建物 3 平·断面图	31
图 24	豎穴建物 3 竈 5233 平·断面图	31
图 25	A 区上層遺構平面图	33
图 26	礎石建物·礎石列平面图	34
图 27	礎石列 1~9 平·断面图	36
图 28	礎石列 10~13、礎石建物 1 平·断面图	37
图 29	土坑 192 断面图	41
图 30	土坑 1017 變遷图 (1~3 段階)	41
图 31	土坑 1017 變遷图 (4~7 段階)	42
图 32	土坑 1017·1018 平·断面图	43
图 33	土坑 1001-1·1001-2 平·断面图	44
图 34	土坑群平面图	46
图 35	土坑 1100·1101 断面图	47
图 36	溝 173 断面图	47
图 37	B 区上層遺構平面图	49
图 38	掘立柱建物·杭列 1·柵列 1 平面图	50
图 39	掘立柱建物 1 平·断面图	51
图 40	掘立柱建物 2 平·断面图	52
图 41	掘立柱建物 3 平·断面图	52
图 42	掘立柱建物 4 平·断面图	53
图 43	掘立柱建物 5·6 位置图	54
图 44	掘立柱建物 5 平·断面图	55
图 45	掘立柱建物 6 平·断面图	56
图 46	土坑·溝断面图	58
图 47	土坑群平·断面图	59
图 48	土坑断面图	60
图 49	溝 5210~5212 断面图	62
图 50	A 区下層遺構出土遺物 (1~13)	63
图 51	豎穴建物 1 出土遺物 (14~30)	64
图 52	B 区下層遺構出土遺物 (31~55)	65
图 53	A 区上層遺構出土遺物 (56~83)	65
图 54	土坑 170 出土遺物 (84~90)	67
图 55	溝 173·土坑 1001 出土遺物 (91~114)	68

図 56	土坑 1017・1018 出土遺物 (115～123)	68
図 57	埋甕土坑 2・1101・土坑 5103 出土遺物 (124～126)	69
図 58	埋甕土坑 1100 出土遺物 (127・128)	69
図 59	井戸 169 出土遺物 (129・130)	69
図 60	井戸 169 出土遺物 (131～138)	70
図 61	井戸 169 出土遺物 (139～175)	71
図 62	B 区上層遺構出土遺物 (176～206)	72
図 63	土坑 5071・5072 出土遺物 (207～224)	73
図 64	溝 5032 出土遺物 (225～238)	74
図 65	包含層出土遺物 (239～264)	75
図 66	瓦・埴 (265～273)	76
図 67	木製品 (箸) (274～291)	77
図 68	木製品・金属製品 (292～303)	78
図 69	土坑 1017 木製品 (304～307)	79
図 70	壁土・鉄滓 (308～311)	80
図 71	遺構変遷図	83
図 72	平安時代の嵯峨復元図	85
図 73	調査地周辺の条里制復元図	86
図 74	搾り工程絵図	89
図 75	搾り施設復元図	89
図 76	調査地周辺の中世復元変遷図	91
図 77	暦年較正結果	98
図 78	遺跡周辺の地形分布図	101

表目次

表 1	遺跡分布表	7
表 2	周辺調査一覧表	11
表 3	A・B 区遺構概要表	21
表 4	遺物概要表	63
表 5	測定試料および処理	97
表 6	放射性炭素年代測定および暦年較正の結果	97
表 7	樹種同定結果	103

図版目次

図版 1	遺構
1.	A・B 区調査地全景 (北から)
2.	A 区上層遺構調査状況全景 (北から)
図版 2	A 区遺構
1.	A 区南側上層遺構全景 (北から)
2.	上層遺構検出状況 (北から)
3.	上層遺構掘削状況 (東から)
4.	南側礎石群 (東から)
5.	北側礎石群 (東から)

図版3 A区遺構

1. 南東側礎石群（東から）
2. 北東側礎石群（南から）
3. 南西側礎石群（南から）
4. 南東側礎石群（南から）
5. 南側中央礎石群（南から）
6. 西側中央礎石群（南から）
7. 南東側礎石群（南から）
8. 南側中央礎石群（東から）

図版4 A区遺構

1. 溝 171 掘削状況（南から）
2. 溝 171 掘削状況（東から）
3. 溝 172 断面（東から）
4. 溝 173 断面（西から）
5. 溝 173 断面（東から）
6. 溝 173 断面（西から）
7. 溝 173 遺物出土状況（東から）

図版5 A区遺構

1. 土坑 103 掘削状況（北から）
2. 土坑 106 断面（南から）
3. 土坑 150 断面（西から）
4. 土坑 192 断面（北から）
5. 土坑 193 断面（南から）
6. 土坑 1001 断面（西から）
7. 土坑 1001 完掘状況（西から）
8. 土坑 1001 完掘状況（東から）

図版6 A区遺構

1. 柱穴 55 断面（南から）
2. 柱穴 90（南から）
3. 土坑 106（西から）
4. 柱穴 125 断面（南から）
5. 土坑 201 断面（南から）
6. 柱穴 1011 断面（南から）
7. 柱穴 1082 断面（南から）
8. 柱穴 1092 断面（南から）

図版7 A区遺構

1. 礎石 15（東から）
2. 礎石 31（南から）
3. 礎石 34・35（東から）
4. 礎石 39（東から）
5. 礎石 46（南から）
6. 礎石 60（南から）
7. 礎石 66・78（南から）
8. 礎石 66・78 断面（南から）

図版8 A区遺構

1. 礎石 67（南から）
2. 礎石 68・161（南から）

3. 礎石 73 (東から)
4. 礎石 74 (南から)
5. 礎石 78 (南から)
6. 礎石 85 (南から)
7. 礎石 97 (南から)
8. 礎石 128 (西から)

図版 9 A区遺構

1. 礎石 131 (南から)
2. 礎石 134 (南から)
3. 礎石 148 (南から)
4. 礎石 164 (南から)
5. 礎石 178 (南から)
6. 礎石 209 (南から)
7. 礎石 210 (南から)
8. 礎石 213 (南から)

図版 10 A区遺構

1. A区下層遺構調査状況風景 (北から)
2. 埋甕群完掘状況 (北から)
3. 埋甕群完掘状況 (西から)
4. 埋甕群完掘状況 (南から)
5. 埋甕 1100 断面 (東から)

図版 11 A区遺構

1. 埋甕 1100・1101 (東から)
2. 埋甕 1 (南から)
3. 埋甕 2 (南から)
4. 埋甕 6 (南から)
5. 埋甕 98 (南から)

図版 12 A区遺構

1. 搾り遺構 1017・1018 (東から)
2. 搾り遺構 1017 上層 (西から)
3. 搾り遺構 1017 上層 (北から)
4. 搾り遺構 1017 上層 (南から)
5. 搾り遺構 1017 上層 (北から)
6. 搾り遺構 1017 上層 (東から)
7. 土坑 1018 (南から)
8. 土坑 1018 断面 (南から)

図版 13 A区遺構

1. 搾り遺構 1017・1018 中層 (東から)
2. 搾り遺構 1017 中層 (北から)
3. 搾り遺構 1017 中層 (東から)
4. 搾り遺構 1017 中層 (北から)
5. 搾り遺構 1017 下層 (北から)
6. 搾り遺構 1017 下層 (北から)
7. 搾り遺構 1017 下層 (北から)
8. 搾り遺構 1017 最下層 (北から)

図版 14 A区遺構

1. 搾り遺構 1017 中層 (西から)

2. 搾り遺構 1017 下層 (東から)
3. 搾り遺構 1017 下層 (北から)
4. 搾り遺構 1017 下層 (西から)
5. 搾り遺構 1017 完掘状況 (北から)
6. 搾り遺構 1017・1018 完掘状況 (西から)
7. 搾り遺構 1017 矢穴石 (西から)

図版 15 A区遺構

1. 竪穴建物 1・2 掘削状況 (東から)
2. 竪穴建物 1・2 掘削状況 (北から)
3. 竪穴建物 1・2 掘削状況 (西から)
4. 竪穴建物 1・2 掘削状況 (東から)
5. 竪穴建物 1・2 完掘状況 (西から)
6. 竪穴建物 1・2 完掘状況 (南から)
7. 竪穴建物 1 完掘状況 (北東から)
8. 竪穴建物 1 竈完掘状況 (南から)

図版 16 A区遺構

1. 竪穴建物 1 遺物出土状況 (南から)
2. 竪穴建物 1・2 遺物出土状況 (南から)
3. 竪穴建物 1 竈断面 (南から)
4. 竪穴建物 1 竈断面 (南から)
5. 竪穴建物 1 竈断面と支脚 (南から)
6. 竪穴建物 1 竈遺物出土状況 (東から)
7. 1054 竈断割状況 (南から)
8. 柱穴 92 遺物出土状況 (南から)

図版 17 A・B区遺構

1. A・B区下層遺構掘削状況 (北から)
2. B区上層遺構掘削状況 (東から)

図版 18 B区遺構

1. B区遺構掘削状況全景 (西から)
2. B区西側遺構掘削状況 (北から)

図版 19 B区遺構

1. B区西側上層遺構検出状況 (北から)
2. B区上層遺構検出状況 (西から)

図版 20 B区遺構

1. B区上層遺構掘削状況全景 (北から)
2. B区上層遺構掘削状況全景 (西から)

図版 21 B区遺構

1. 土坑 5034 断面 (東から)
2. 土坑 5098 断面 (南から)
3. 土坑 5262 断面 (南から)
4. 溝 5092 断面 (東から)
5. 溝 5226 断面 (東から)
6. 溝 5229 断面 (東から)
7. 溝 5232 断面 (北から)
8. 溝 5237 断面 (南から)

図版 22 B区遺構

1. 土坑 5042・5067・5070・5071・5072・5101 (北から)

2. 土坑群完掘状況（東から）
3. 土坑 5071・5101 完掘状況（東から）
4. 土坑 5071・5101 完掘状況（南から）
5. 土坑 5071 断面（東から）

図版 23 B区遺構

1. 土坑 5042・5070 完掘状況（東から）
2. 土坑 5042 完掘状況（南から）
3. 土坑 5067・5072 完掘状況（南から）
4. 土坑 5067 断面（東から）
5. 土坑 5103 断面（東から）
6. 土坑 5042 断面（南から）
7. 井戸 5106 断面（南から）
8. 井戸 169 断面（南から）

図版 24 B区遺構

1. 柱穴 5224 断面（南から）
2. 柱穴 5228（南から）
3. 柱穴 5235 断面（南から）
4. 柱穴 5245 断面（南から）
5. 柱穴 5251 断面（南から）
6. 柱穴 5258（南から）
7. 柱穴 5263 断面（南から）
8. 柱穴 5264（南から）

図版 25 B区遺構

1. 柱穴 5265（南から）
2. 柱穴 5267（南から）
3. 柱穴 5269 断面（南から）
4. 柱穴 5271 断面（南から）
5. 柱穴 5283（西から）
6. 柱穴 5285（東から）
7. 柱穴 5290 断面（南から）
8. 柱穴 5291 断面（南から）

図版 26 B区遺構

1. B区下層遺構検出状況全景（北から）
2. B区下層遺構検出状況全景（西から）

図版 27 B区遺構

1. 竪穴建物3 完掘状況（南から）
2. 竪穴建物3 完掘状況（西から）

図版 28 B区遺構

1. 竪穴建物3 掘削状況（南から）
2. 竪穴建物3 掘削状況（西から）
3. 竪穴建物3 西壁溝完掘状況（南から）
4. 竪穴建物3 竈掘削状況（南から）
5. 竪穴建物3 竈完掘状況（南西から）

図版 29 B区遺構

1. B区遺構完掘状況全景（東から）
2. 溝 5210・5211 断面（南から）
3. 溝 5063 断面（東から）

4. 溝 5218 断面（西から）

5. 溝 5249 断面（北から）

図版 30 遺物

1. A区下層遺構出土遺物（1～13）

2. 竪穴建物 1 出土遺物（14～30）

図版 31 遺物

1. B区下層遺構出土遺物（31～55）

2. A区上層遺構出土遺物（56～76）

図版 32 遺物

1. 土坑 150 出土遺物（77～83）

2. 土坑 170 出土遺物（84～90）

3. 溝 173 出土遺物（91～107）

4. 土坑 1001 出土遺物（108～114）

図版 33 遺物

1. 土坑 1017・1018 出土遺物（115～123）

2. 埋甕土 2・1101・土坑 5103・井戸 169 出土遺物（124～126・129）

3. 埋甕土坑 1100 出土遺物（127・128）

4. 井戸 169 出土遺物（130）

図版 34 遺物

1. 井戸 169 出土遺物（131～175）

図版 35 遺物

1. B区上層遺構出土遺物（176～188）

2. 柱穴 5274・5281・5012・5041・5071 出土遺物（189～215）

図版 36 遺物

1. 柱穴 5072 出土遺物（216～224）

2. 溝 5032 出土遺物（225～238）

3. 包含層出土遺物（239～247）

図版 37 遺物

1. 包含層出土遺物（248～264）

2. 瓦類・埴（265～273）

図版 38 遺物

1. 木製品（274～300）

2. 錢貨（301～303）

図版 39 遺物

1. 男柱 304 側面

2. 男柱 304 下面

3. 横木 306 小口面

4. 男柱 305 側面

5. 男柱 305 下面

6. 横木 306 小口面

7. 横木 306 側面

8. 横木 307 側面

第 I 章 はじめに

第 1 節 調査に至る経緯

今回の調査地は、史跡・名勝嵐山の範囲に該当する大堰川の北側に位置する。所在地は京都市右京区嵯峨天龍寺車道町 2 番 1 他 5 筆である。当地は J R 嵯峨嵐山駅より南側へ約 80 m、嵐山鉄道嵯峨駅より北西側へ約 50 m の地点であり、駅近に位置していることから、関電不動産開発株式会社住宅事業本部によって利便性の高いマンション「(仮称)嵯峨天龍寺(事業面積 2345.97㎡)」が計画された。

調査の経緯は、平成 29 年 12 月 20 日付けで「嵯峨天龍寺計画」の標識設置が行われ、文化財保護法第 93 条第 1 項に基づいた届出が提出されたことが発端となる。京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課(以下「市文化財保護課」)は、当地に残存する遺構・遺物の有無、状況を把握するための試掘調査を平成 30 年 3 月 14 日～同年 3 月 16 日まで実施した。

試掘調査は既存建物等の影響を受けていない南東側を中心に設置された。トレンチ(図 10)は南北方向に長軸を有した 3 列があり、東側は 1・2・4～7 トレンチ、中央は 3・9 トレンチ、西側は 8 トレンチの計 9 本がある。調査の結果、北西側の一部において既存建物等の基礎によって遺構が失われている部分が確認されたものの、南東側は中世から近世にかけての包含層と柱穴、土坑、溝等の遺構を検出することができた。また、地山直上にて飛鳥時代の良好な遺物を含む包含層を確認した。調査範囲は試掘結果から得られた成果を元に遺構の残存率の高い箇所や、建物が計画されている南東側を中心に 693㎡の調査面積が設定された。

これらの試掘調査の結果から発掘調査の必要性が生じたため、関電不動産開発株式会社と市文化財保護課との間で調査の事前協議が持たれた。発掘調査は関電不動産開発株式会社より既存建物の解体から建築段階までの委託を受けた安西工業株式会社から国際文化財株式会社が請け負うことになった。

国際文化財株式会社は、調査体制として主任調査員 1 名、調査補助員 4 名の配置を行った。また、学術研究に基づいた調査検証委員会については、同志社女子大学教授現代社会学部博士(文化史学)山田邦和教授に依頼した。

埋蔵文化財発掘調査届出の提出を平成 30 年 4 月 13 日付けで行い、京都府教育庁指導部文化財保護課(以下「府文化財保護課」)から教文第 5 号の 12、市文化財保護課から文文財第 164 号、受付番号 17S496 の発掘調査許可通知書を受理した。

現地調査は平成 30 年 5 月 8 日～平成 30 年 8 月 31 日まで府文化財保護課、市文化財保護課の指導を受けながら実施した。

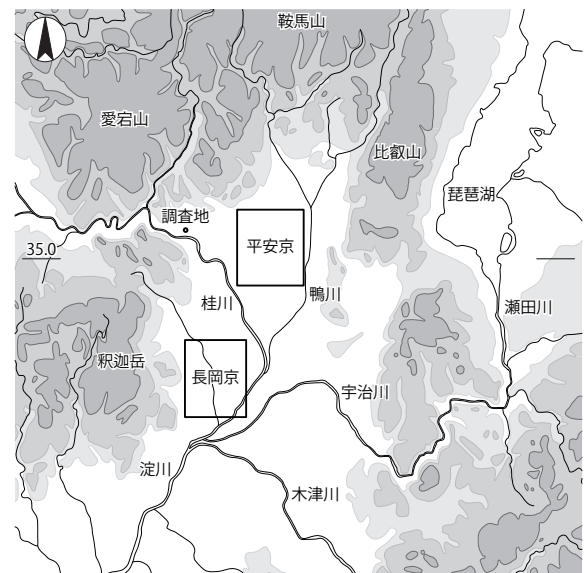


図 1 調査地位置図 1 (1 : 500,000)



図2 調査地位置図2 (1 : 25,000)

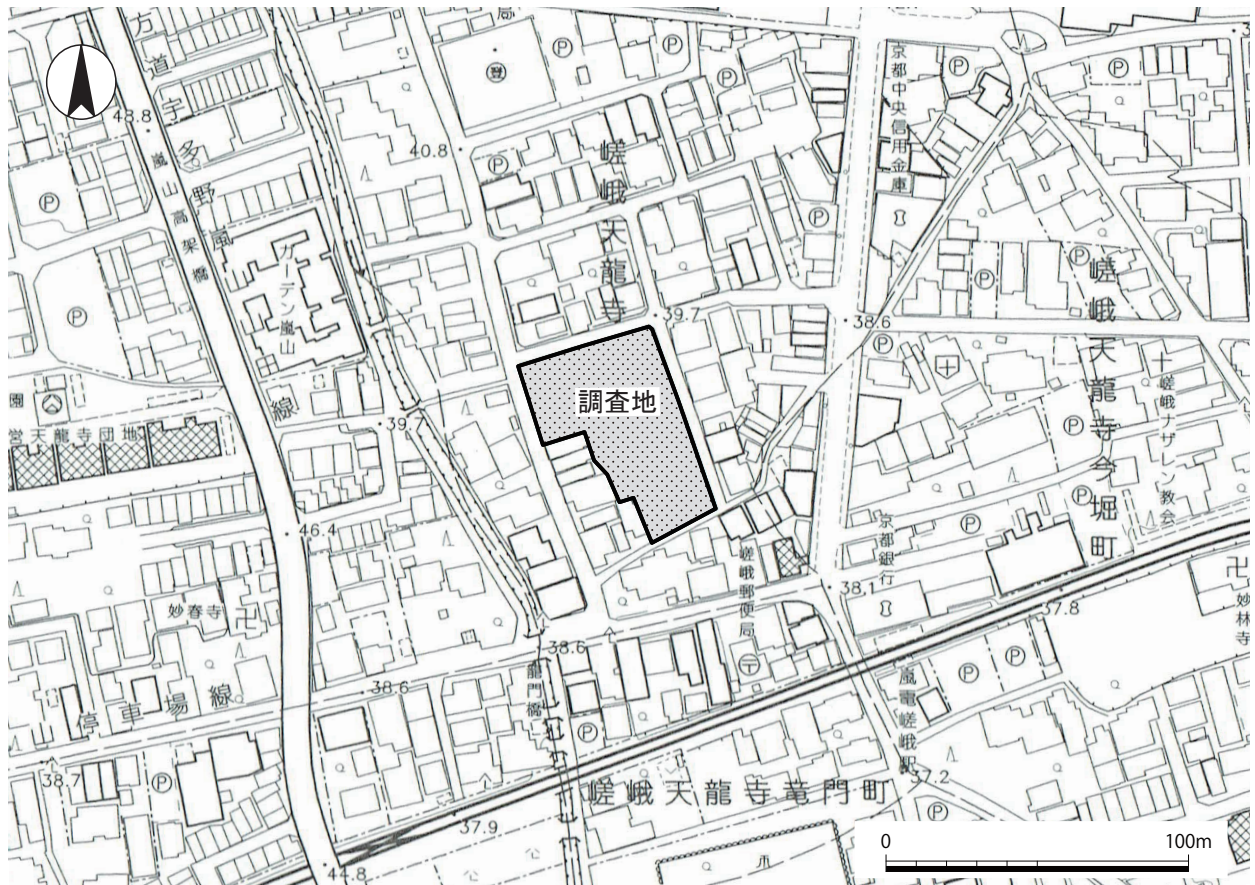


図3 調査地位置図3 (1 : 2,500)

第2節 調査の経過

発掘調査は調査体制と調査工程を決めるために周辺の本調査や立会調査の成果をまとめるとともに、今日までの研究論考や古絵図の検証を行った。また、今回の試掘調査の成果を基本資料とした。

当地は周知の埋蔵文化財包蔵地である「嵯峨遺跡」に該当し、遺跡は室町時代から江戸時代初期までに比定される遺跡であるが、周辺での調査例が少なく、不明な点が多い地域であった。

今回の調査方法は、先ず試掘調査によって得られた成果を元に精細な時代、遺構面数、遺構検出深度、遺構・遺物の密度、残存状況等の内容を検討した。中でも重要な点としては、遺跡の性格を把握することであった。これらの成果を検討した結果、当地には少なくとも中世を中心とした上層遺構1面と、その下層に飛鳥時代の包含層が地山直上に存在していることが想定された。上層については遺構の密度が高く、遺物の量についても多いものと判断した。下層については飛鳥時代の明確な遺構を検出していないものの、良好な遺物が出土していることから、遺構が検出される可能性が高いものと判断した。以上の総体的な検証から、遺構面は最低2面の残存が推測された。

掘削方法は調査面積が693㎡に及ぶことから、南側のA区（3E～I、4E～I、5E～I）と北側のB区（1～5A、1～5B、1～5C、1～5D）に二分割し、反転による掘削方法とした。調査期間は5月から8月までの4ヶ月を想定した。また、土壌汚染分析が行われた結果、以前の染物工場によるものと思われる微量の土壌汚染が検出された。汚染は各箇所にて濃度に違いがみられるので、濃度別に区分けを行い仮置きした。排土は一定量溜まった時点で場外に搬出、残土処分を行う方法を採用した。

調査地の地区割りについては、調査地に沿った任意の方向で5mの方眼による地区割付（図4）を全域に設定した。地区名については北西角を基点とし、東西方向を数字による1区から5区、南北方向をアルファベットによるA区からI区の地区名として設定した。

平成30年5月8日に市文化財保護課による調査の開始立会を行った。掘削方法は残土の仮置き場の都合上A区の南側から開始し、B区の北側を後半の調査とした。調査地のB区（北側）には以前に四階建てのアネックス嵯峨Ⅲが建っており、この建物のコンクリート基礎や施設の攪乱が多いことが予測された。A区の南東側には平屋のネオアネックス嵯峨の建物が建っていたが、建物基礎は表土内で収まる浅いものと考えられ、遺構面まで達していないものと判断した。

発掘調査は5月8日にA区の南東側より重機によって表土掘削を開始した。掘削は土壌汚染の濃度に分けて行い、排土は区分けにて仮置き場に置いた。表土掘削は表土から約0.3mまでを徐々に掘削した。現代の整地層、盛土を除去し、その下位の近世包含層を人力にて掘削、精査した。A区の中央にて試掘トレンチ No. 7を確認し、試掘調査成果と検出土層の検証を

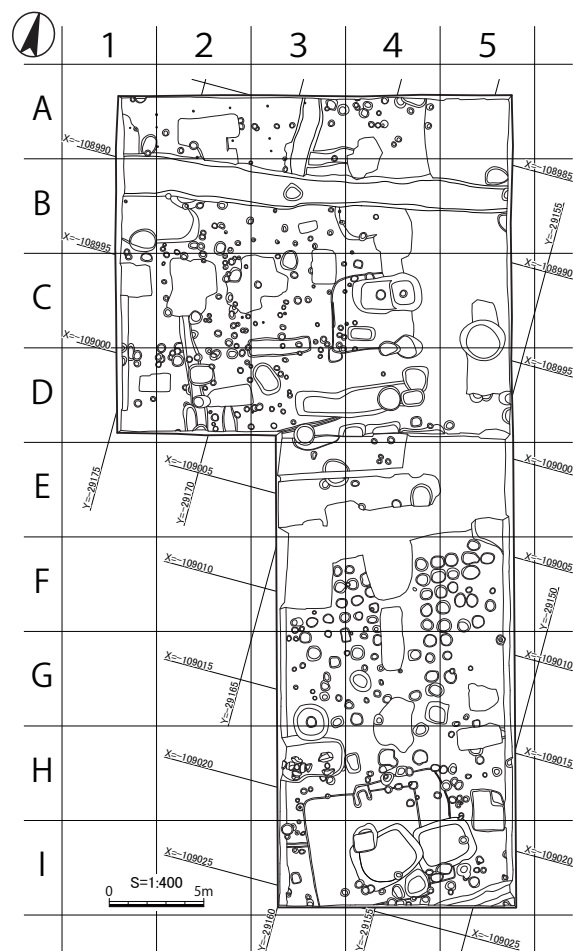


図4 調査区地区割図（1：400）



図5 A区調査風景（南から）



図6 現地説明会風景（南から）

行った。当トレンチは北側から南側方向に設定されており、調査地の南端であることから、遺構の南限の性格を確認するために重要な箇所であった。当試掘では東西方向に延びる深さ約0.6 mの溝状遺構がにぶい黄色シルトの地山を切り込んだ状態で検出されていた。検出された遺構は北側の肩部のみで、全容は不明であったが、今回の調査にて東西方向に長軸を有した2基の土採用の大型土坑であることが判明した。

土層については試掘の断面を基準として検証した。試掘で確認されている基礎層であるオリーブ色混砂は南側で0.4 m、北側で0.6 mの深度を測り、北側と南側で高低差を有することが判明した。また、オリーブ色混砂の上層には中世の整地層と考えられている暗灰黄色シルトが堆積していた。

A区の遺構面としては、上層を暗灰黄色シルト直下のにぶい黄色シルト、下層を黄色シルト面として認識し、2面の遺構として調査を進めた。上層の暗灰黄色シルトは室町時代の遺物を含んでいることから、中世の整地層と捉え、当層の直下にみられるにぶい黄色シルト面にて精査、遺構検出を行った。

その結果、上層遺構は最低2時期が重複している状態が確認できた。これらの遺構は真北から西側へ大きく45°振ったものと、西側へ小さく25°振ったものがあり、種類としては掘立柱建物、礎石建物、土坑、柱穴、溝、築地があった。時期は大きく分けて鎌倉時代と室町時代があり、その中でも西側へ大きく振った遺構は天龍寺の天下龍門に沿った築地塀、龍門の北側溝と考えられた。室町時代前半に機能していたものが室町時代後半に埋め戻され、機能しなくなったことが想定される。西側へ小さな振りを有する遺構は、室町時代後半に属する。遺構の種類としては、掘立柱建物、礎石建物、土坑、柱穴、溝、搾り遺構、埋甕酒造遺構がある。酒造遺構は男柱を有した搾り遺構と酒を貯蔵する埋甕土坑群があった。平成30年8月3日に酒造遺構を中心とした現地説明会を開催した。下層遺構は飛鳥時代の竪穴建物、溝、土坑等があった。

B区の調査は、平成30年7月9日より開始した。調査はA区と同様に2面の遺構を対象とした。上層にて多くの掘立柱建物等、下層にて竪穴建物、溝を検出したが、酒造に関しては、男柱を有する搾り遺構はみられたが、埋甕遺構は検出できなかった。測量図化の記録方法は、世界測地座標を基準としたオルソ写真測量と手描きにて図化した。

調査終了に関しては、平成30年8月27日に市文化財保護課の立会を受けた。平成30年8月31日に埋め戻しを行い、現地調査は終了した。

第3節 位置と環境

1) 地理的環境

当地は京都盆地の北西部に位置する嵯峨野地域である。行政区分は京都市右京区の南西部に属し、地形的には北側の朝原山から発する瀬戸川、有栖川、御室川によって形成された洪積台地と扇状地に立地する。一般的に嵯峨野といわれる範囲は、西は小倉山、北は上嵯峨の朝原山まで、東は御室川、太秦、南は大堰川、梅津までとされており、当地はその西寄りに位置する。

朝原山などの山地は、中生代、古生代に堆積した泥岩・砂岩・チャートからなる丹波山地の端部に位置し、この地域の山裾から標高25～100mの範囲に低地が広がっている。全体的には北から南に向かって傾斜するが、有栖川・瀬戸川付近では北西から南東に向かって傾斜する。大きくは北寄りの段丘面や御室川、有栖川が形成した扇状地と桂川による氾濫平野に分けられるが、今回の調査地は低位の沖積段丘や氾濫平野に属し、その中でも瀬戸川と有栖川に挟まれた後背湿地、旧河道に立地する。

2) 歴史的環境

調査地の所在地名である嵯峨天龍寺車道町は、大正12年の町制施行による新しい地名であるが、車道町の祖形は西側の薄馬場、南側の造路は天龍寺の主要参道に該当し、室町時代まで遡る地名としてその性格を考察することは重要である。なお、当地は古代の行政区分によると山城国葛野郡に含まれる。

嵯峨地区の歴史は、少なくとも旧石器時代まで遡れるが、総体的には中世以降に急増するものと予測される。また、当調査地に近接した調査例としては、天龍寺、臨川寺に伴うものに限られ、大きな寺院に関連しない調査は少ないことから、当地の実態については不明な点が多い。当地を知る術としては、近隣にて行われた広域立会調査¹⁾、試掘調査の成果に頼るものとした。広域立会は細長いトレンチによる成果であるため、点と点から線状に得られるものであり、面的な広がりを持つ精細な内容にまでは至らないが、地点としての集まりの中で広域な範囲を考察することが可能であり、重要な資料となっている。以下、今日までの調査と広域立会調査の成果を元に歴史的環境について記述した。

旧石器時代の遺跡は、朝原山山中に位置する菖蒲谷遺跡や広沢池遺跡、沢ノ池遺跡がある。これらの遺跡からナイフ形石器、尖頭器、搔器、彫器などが採取されている。縄文時代の遺跡は、早期・前期の上ノ段町遺跡、中期の嵯峨院跡下層、天龍寺下層、広沢池遺跡、菖蒲谷遺跡などがあり、各遺跡から縄文土器が採取されている。遺跡の立地は、時代が下るに連れて山麓から洪積台地に広がるのが判る。近隣の調査では、天龍寺の南側(図9)33地点で縄文時代中期末から後期初頭の土器²⁾、39地点で縄文時代後期の土器、石錘³⁾、34地点で縄文土器が包含層から単独出土している⁴⁾。

弥生時代に入ると水稻耕作の始まりに伴い河川や湿地に集落が形成される。弥生時代中期の村ノ町遺跡、和泉式部町遺跡、西野町遺跡で竪穴建物が検出され、弥生土器が出土している。また、梅ヶ畑遺跡からは銅鐸4点が出土している⁵⁾。近隣の調査では、13地点から弥生時代中期の土器が出土している⁶⁾。

古墳時代に至ると御室川と有栖川の間に位置する洪積台地に急激な開発が進んでおり、御室川の西側に和泉式部町遺跡、村ノ町遺跡、有栖川の東側に西野町遺跡、松室遺跡が存在し、各地点から竪穴建物が検出されている。古墳時代中期の5世紀末から6世紀には、段ノ山古墳、清水山古墳、天塚古墳、仲野親王陵古墳、太秦馬塚古墳、蛇塚古墳などの前方後円墳と集落が台地上に出現する。

6世紀後半以降の嵯峨野の丘陵は、常盤御池古墳を始めとした円墳が築造されていくが、この時期の古墳には巽古墳、甲塚古墳、印空寺古墳、遍照寺古墳、稲荷古墳、広沢古墳、一本木古墳、南野古墳、大覚寺古墳、嵯峨七ツ塚古墳、常盤東ノ町古墳などの群集墳がみられる。また、古墳時代後期には鳥居

本古墳、観空寺谷古墳、朝原山古墳、長刀坂古墳、遍照寺山古墳、山越古墳、御堂ヶ池古墳、音戸山古墳、朱山古墳、住吉山古墳、三瓦古墳などの群集墳が山麓・池畔などに密集して築造される。また、双ヶ岡一ノ丘古墳や双ヶ岡古墳群も後期に属しており、後期の古墳群と同時期の集落としては、広隆寺旧境内とその周辺地域に位置する常盤仲之町遺跡、上ノ段町遺跡、西野町遺跡、多藪遺跡などがある。近隣の調査にて確認されているものは皆無であるが、(図9) 61 地点にて古墳時代に属する須恵器が出土している⁷⁾。

飛鳥時代の遺跡としては嵯峨遺跡、松室遺跡などがあり、いずれも奈良時代まで継続する遺跡と考えられている。本調査で確認されているものは、臨川寺旧境内遺跡(図9) 29 地点において検出された竪穴建物1軒がある。竪穴建物は、焼土を有した馬蹄形のカマドと壁溝が検出されている⁸⁾。

広域立会調査において確認されている成果は点状であるが、有栖川北岸に位置する(図9) 4 地点、鹿王院地区の67・74・78・79・84・86・88・89・90・94・97・101 地点では飛鳥時代の包含層、67・68・71 地点から土坑、69 地点から柱穴など数多く検出されている。

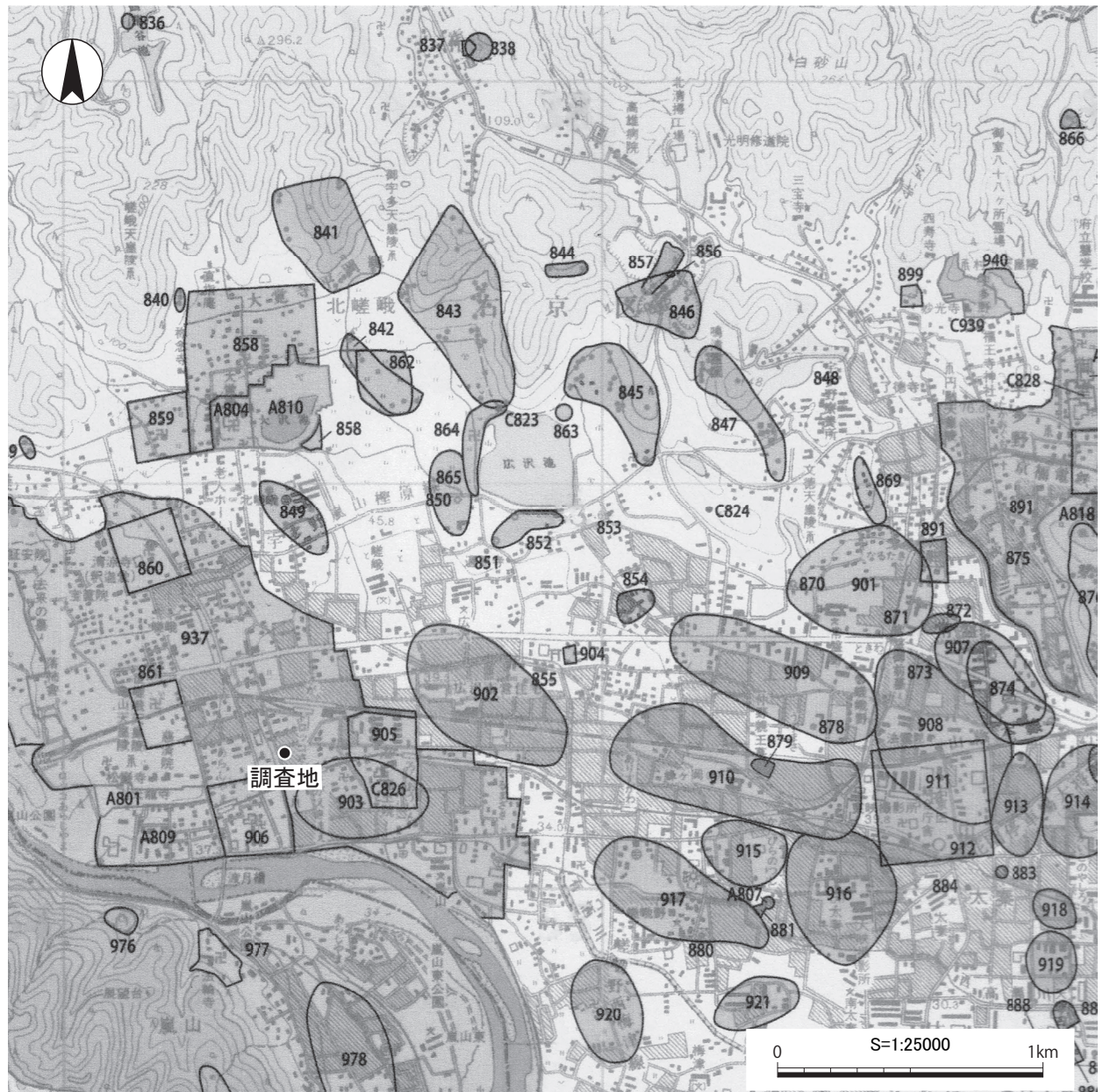


図7 嵯峨野地区の遺跡分布図

表1 遺跡分布表

遺跡番号	名称	種別	時代	遺跡番号	名称	種別	時代
801	天龍寺庭園	史跡・特別名勝	室町	871	常盤馬塚古墳	古墳	古墳後期
804	大覚寺御所跡	史跡	平安	872	常盤柏ノ木古墳群	古墳	古墳
807	蛇塚古墳	史跡	古墳	873	常盤稲荷塚古墳	古墳	古墳
808	天塚古墳	史跡	古墳	874	常盤東ノ町古墳群	古墳	古墳後期
809	嵐山	史跡・名勝	平安～江戸	875	常盤御池古墳	古墳	古墳後期
810	大沢池附名古曾滝跡	名勝	平安	876	双ヶ岡古墳群	古墳	古墳後期
818	雙ヶ岡	名勝	平安	878	太秦馬塚古墳	古墳	古墳後期
823	遍照寺旧境内建物跡	史跡	平安	879	仲野親王墓古墳	古墳	古墳後期
824	御堂ヶ池1号墳	史跡	古墳	880	千代ノ道古墳	古墳	古墳
826	鹿王院庭園	名勝	江戸	881	蛇塚古墳	古墳	古墳後期
828	仁和寺庭園	名勝	平安	883	千首塚古墳	古墳	古墳
836	菖蒲谷遺跡	散布地	旧石器・縄文～古墳	884	組石塚古墳	古墳	古墳
837	平岡八幡宮	神社	平安	885	清水山古墳	古墳	古墳後期
838	平岡八幡宮窯跡	窯跡	平安	888	松本古墳群	古墳	古墳
840	観空寺古墳群	古墳	古墳後期	891	仁和寺院家跡	寺院跡	平安
841	朝原山古墳群	古墳	古墳後期	899	鳴滝乾山窯跡	窯跡	江戸
842	嵯峨七ツ塚	古墳	古墳後期	901	草木町遺跡	集落跡	平安
843	長刀坂古墳群	古墳	古墳後期	902	嵯峨折戸町遺跡	集落跡	飛鳥～平安
844	遍照寺山古墳群	古墳	古墳後期	903	嵯峨北堀町遺跡	集落跡	飛鳥～平安
845	山越古墳群	古墳	古墳後期	904	阿刀神社	神社	不詳
846	御堂ヶ池古墳群	古墳	古墳後期	905	宝幢寺境内	寺院跡	室町
847	音戸山古墳群	古墳	古墳後期	906	臨川寺境内	寺院跡	室町
848	宇多野病院古墳	古墳	古墳	907	村ノ内町遺跡	集落跡	弥生
849	大覚寺古墳群	古墳	古墳後期	908	常盤仲之町遺跡	集落跡・墓跡	古墳後期・平安～江戸
850	一本木古墳	古墳	古墳後期	909	太秦馬塚町遺跡	古墓	平安後期
851	稲荷古墳	古墳	古墳後期	910	上ノ段町遺跡	集落跡	古墳
852	広沢古墳群	古墳	古墳後期	911	広隆寺旧境内	寺院跡	飛鳥～平安後期
853	遍照寺古墳	古墳	古墳後期	912	弁天島経塚(群)	経塚	平安後期～鎌倉
854	南野古墳群	古墳	古墳後期	913	一ノ井遺跡	散布地	奈良～平安
855	甲塚古墳	古墳	古墳後期	914	和泉式部町遺跡	集落跡	古墳
856	梅ヶ畑遺跡	祭祀跡	弥生	915	御所ノ内町遺跡	集落跡	平安
857	梅ヶ畑祭祀遺跡	祭祀跡	奈良～平安	916	多藪町遺跡	集落跡	古墳～平安
858	嵯峨院跡	離宮跡	平安	917	西野町遺跡	集落跡	古墳・平安
859	観空寺跡	寺院跡	平安	918	井戸ヶ尻遺跡	散布地	奈良～平安
860	清涼寺境内	寺院跡	平安	919	門田町遺跡	散布地	奈良～平安
861	檀林寺跡	寺院跡	平安	920	嵯峨野高田町遺跡	集落跡	古墳後期～平安
862	北嵯峨洞ノ内町遺跡	散布地	平安前期	921	梅津坂本町遺跡	集落跡	平安前期～中期
863	広沢池遺跡	散布地	旧石器	937	嵯峨遺跡	寺院跡	平安～室町
864	遍照寺跡	寺院跡	平安	939	妙光寺境内	史跡	鎌倉～江戸
865	広沢西裏遺跡	散布地	縄文	940	宇多野上ノ谷廃寺	寺院跡	中世～近世
866	宇多野谷古墳群	古墳	古墳	976	蔵王神社城跡	山城跡	室町
869	三瓦山古墳群	古墳	古墳後期	977	法輪寺境内	寺院跡	奈良
870	巽古墳	古墳	古墳後期	978	嵐山谷ヶ辻子町遺跡	散布地	平安

鹿王院地域で行われた立会調査においては、鹿王院の北側と西側、南側の3箇所に包含層の広がりが見られ、中でも北側からは遺構を検出している関係から、遺跡の密度が高いものと考えられる。

調査地を中心に、約1 kmの範囲において飛鳥時代を考察すると、瀬戸川の東岸に位置する低地にて飛鳥時代の遺物包含層が広がり、北側の微高地に柱穴、土坑等の遺構が伴う集落が想定される。これらの状況は、鹿王院の西方にて南北方向に流れる瀬戸川を境界とした微高地が存在し、飛鳥時代から平安時代にかけて集落跡が展開した後に安定した微高地に鹿王院が建立されたものと考えられる。

太秦蜂ヶ岡の中心地は、渡来系氏族である秦氏の拠点地といわれており、飛鳥時代の603年に広隆寺が築造され、当地一体は律令制下の山城国葛野郡に比定される。広隆寺や北野廃寺等の飛鳥時代の寺院と北部の丘陵に群集している後期古墳群は、秦氏の影響によるものと考えられている。当地は葛野川(桂川)の盆水によって出来た沼沢地であったが、秦氏によって改修されて肥沃な田畑となった⁹⁾。

奈良時代に属する成果は見当たらないが、近隣の調査では(図9)33地点から奈良時代後半の遺物がまとまって出土¹⁰⁾しており、出土地の対岸にあった葛井寺(法輪寺)との関係が指摘されている。

平安京が造営されると、太秦安井・花園一带は右京二条・北辺域に属せられ、平安時代初期には二条大路からの末道は桓武天皇の頻繁な行幸にて嵯峨・大櫃河畦に通じていたといえよう。この古道を通して行幸の目的地として考えられる「大櫃離宮」の成立、続いて嵯峨天皇の嵯峨山荘・葛原親王の高田別業・仲野親王の別業などがあげられる。嵯峨院の成立に伴い都城より院に直接到達する道が造られたと



図8 室町時代の嵯峨復元図

みられ、双ヶ岡の清原夏野の山荘、源常の山荘、上嵯峨の源融の棲霞観、有智子親王の嵯峨西荘などが出現する。また、梅津周辺では、橘氏の梅宮大社や修理職の木屋、藤原氏の別業なども造営されている。

これら別業の多くは、平安時代中期より仏教の道場や寺院に継承され、大井寺、大覚寺、観空寺、壇林寺、清涼寺、平等寺、双丘寺(法金剛院)などがそれにあたる。遷都以前からの寺院では、広隆寺、徳願寺(安養寺)、葛井寺(法輪寺)も続いており、平安時代前期の土地利用状況を示す「山城国葛野郡班田図¹¹⁾」には壇林寺と周辺の道路などが描かれていることから、当時の状況を覗い知ることができる。また、当地の大堰川沿いには、平安時代から安土桃山時代に至るまで丹波から運搬された木材の集散の拠点地といわれる「大井津」が存在し、重要な地域であったことが想定される。

平安時代の調査成果としては、天龍寺南東側の天龍寺下層遺跡、鹿王院地区などを中心とした広範囲に包含層が検出されている。特に天龍寺地区では(図9)3・36・42～44・48・52・54・55地点で前期、7・28・49地点で中期、13・14・18～24・26・27・37・38・50・53・91・92地点で後期に属するものが確認されており、前期段階に大堰川北岸に出現した後、後期には天龍寺東側までその範囲は拡大している。鹿王院地区では44・81～83・98～100・104・105地点から前期、40・41地点から中期、2・62・63・66・70・72・73・75～77・87・102・103地点から後期の包含層が確認されている。範囲としては、前期段階に鹿王院の南西、南側に出現し、その後、北側へ拡大していったことが伺える。

遺構の検出については、天龍寺地区の(図9)5・29・64・89地点にて土坑、12地点にて溝、32地点にて前期の土坑、9・13・30・32地点にて前期の溝、2地点で前期の瓦が出土している。34地点では、庭園遺構から継続すると考えられる31・33地点検出の溝が排水溝であろうと想定されている¹²⁾。13地点では「大井寺」の銘が入った軒平瓦が多量に出土しており、当地は檀林寺の推定地であることから、寺の北限と推測されている¹³⁾。また、6地点では檀林寺の瓦が出土し、「大井寺」銘の瓦は、15・25地点からも出土していることから、嵯峨地区の広域に供給されていたことが指摘できる。

平安時代中・後期になると、13・30地点で中期の溝、8・10・11・33・59地点で後期の溝、2・16・17・35地点で後期の土坑、33・56・60地点で後期の柱穴が検出されている。11地点と9地点で検出された溝は平行に延び、延長線上で120m間である点から、葛野郡条里に伴うことが示唆されている¹⁴⁾。鹿王院地区において確認されている成果はほとんどが包含層のみであるが、鹿王院地区の北限に位置する64・65地点で後期の土坑、80地点で東西方向の溝が検出されている。

嵯峨地域は、建長年間(1249～1256)に後嵯峨上皇が亀山の東麓に院の御所である亀山殿を造営している。建武2(1335)年に臨川寺、貞和元(1345)年に臨濟宗の禅寺である天龍寺が建立される。

天龍寺の寺域は北嵯峨まで広がっており、寺院が林立する都市構造へと展開する。広隆寺、法輪寺、大覚寺、清涼寺は鎌倉時代を通じて存続するが、当時描かれた「嵯峨舎那院御領絵図¹⁵⁾」には壇林寺など平安時代の寺院が廃絶した鎌倉時代初期の嵯峨の景観を示している。亀山殿は後に亀山上皇の仙洞ともなり、この地域一帯は院政の中心として隆盛を極める。南北朝の時代に後醍醐天皇が院政を嫌い亀山殿は解体されるが、室町時代に入り武家政権が京都に政治拠点をおくと、花園御所を引き継いだ妙心寺、後醍醐天皇による臨川寺、亀山殿の跡地には足利尊氏が天龍寺を造営し、嵯峨野の景観を一変させることとなる。特に臨川寺、天龍寺に関わる塔頭、在家は「山城国嵯峨諸寺応永鈞命絵図¹⁶⁾」にみられるように拡大し、その数は150以上を数え、周辺には門前町が出現している。しかし、室町時代後期に応仁の乱が勃発し、嵯峨地域の臨川寺、天龍寺等が戦乱に巻き込まれ、全山が焼失する事態となって嵯峨野は荒廃する。これらの多くの塔頭群を抱えた天龍寺は度重なる火災に見舞われ、少なくとも延文3(1358)年、貞治6(1367)年、応安6(1373)年、康暦2(1380)年、文安4(1447)年、応



図9 周辺調査位置図

表2 周辺調査一覧表

番号	遺構	遺物	時代	番号	遺構	遺物	時代
1	土坑	土師器	室町	53	溝	土器・瓦・鉄製品	平安～江戸
2	土坑	土器・瓦	平安	54	溝	土器・瓦	平安～室町
3	土坑	土師器	平安後期	55	包含層・他	土師器・須恵器・施釉陶器・瓦器・瓦	平安～室町
4	土坑	土師器・青磁	平安後期	56	柱穴・他	土師器・天目碗・青磁・須恵器	平安～室町
5	包含層	土師器	平安	57	庭園跡・他	土器・瓦	鎌倉～江戸
6	土坑	軒瓦・瓦	平安～室町	58	建物跡・他	天目碗・染付・青磁・白磁・陶器・軒瓦・瓦	室町
7	包含層	土師器	平安中期	59	土坑・他	土師器・陶器・軒瓦・瓦	室町
8	溝	土器・瓦	平安～室町	60	包含層	土師器・瓦	室町
9	土坑・溝	土器・瓦	平安～江戸	61	流路	土器・須恵器・瓦	鎌倉～室町
10	溝	瓦・炭	平安	62	包含層	土師器	平安後期
11	溝	土器	平安～桃山	63	包含層	土師器	平安後期
12	溝	瓦	平安	64	土坑	土師器	平安後期
13	溝・土坑	土師器・緑釉陶器・軒平瓦	平安～江戸	65	土坑	土師器	平安後期
14	包含層	土器・瓦	平安	66	包含層	土師器・須恵器	平安後期
15	土坑・溝	土師器・軒瓦・瓦	飛鳥～室町	67	土坑	土師器	飛鳥
16	土坑	瓦	平安後期	68	土坑	土師器	飛鳥
17	土坑	土師器・瓦	平安後期	69	柱穴	土師器	飛鳥
18	包含層	土師器・瓦	平安後期	70	包含層	土師器	飛鳥
19	包含層	瓦	平安	71	土坑	土師器	飛鳥
20	包含層	土師器・瓦器・瓦・炭	平安後期	72	包含層	土師器	平安後期
21	包含層	土師器・瓦	平安後期	73	包含層	土師器	平安後期
22	包含層	土師器・瓦	平安後期	74	包含層	土師器	飛鳥
23	包含層	土師器・瓦	平安後期	75	包含層	土師器	平安後期
24	包含層	瓦	平安	76	包含層	土師器・瓦	平安後期
25	土坑	土器・瓦	鎌倉	77	包含層	土師器	平安後期
26	包含層	土師器・軒瓦・瓦	平安後期	78	包含層	土師器	飛鳥
27	包含層	土師器・瓦	平安	79	包含層	土師器・須恵器	飛鳥
28	包含層	土師器・軒瓦・瓦	平安中期	80	溝	土師器・須恵器	平安
29	土坑	土師器小片・瓦	平安	81	包含層	土師器	平安前期
30	溝	土師器・須恵器	平安前～中期	82	包含層	土師器	平安前期
31	井戸	土器・瓦	室町	83	包含層	土師器	平安前期
32	土坑	土師器・須恵器	平安前期	84	包含層	土師器	飛鳥
33	土坑・他	土器・瓦・石製品	縄文～江戸	85	包含層	土師器・須恵器・炭	飛鳥
34	庭園跡・他	土器・瓦	平安～室町	86	包含層	土師器・須恵器	飛鳥
35	土坑・他	土師器・瓦器・焼締陶器・瓦	室町	87	包含層	土師器・須恵器・炭	平安後期
36	包含層	土師器・須恵器・黒色土器・灰釉陶器・瓦	平安後期	88	包含層	土師器	飛鳥
37	包含層	土師器	平安後期	89	包含層	土師器	飛鳥
38	包含層	須恵器・黒色土器・瓦器・瓦	平安後期	90	包含層	土師器・須恵器	飛鳥
39	土坑・他	土器・銭貨・石製品・金属製品	縄文～江戸	91	包含層	土師器	平安
40	包含層	土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・瓦	平安後期	92	包含層	土師器	平安
41	包含層	土師器・緑釉陶器・瓦	平安後期	93	包含層	土師器	飛鳥
42	包含層	土師器・須恵器・瓦	平安前期	94	包含層	土師器	飛鳥
43	包含層	土師器	平安前期	95	包含層	土師器・須恵器	平安前期
44	包含層	土師器・須恵器・瓦	平安前期	96	包含層	土師器・須恵器	飛鳥
45	建物跡・他	土器・瓦・石製品・金属製品	平安～江戸	97	包含層	土師器	飛鳥
46	柱穴	土器・瓦・石製品・金属製品	平安～江戸	98	包含層	土師器	平安前期
47	石垣	土器・瓦	室町	99	包含層	土師器・瓦	平安
48	井戸	土器・瓦	鎌倉	100	包含層	土師器	平安
49	包含層	土師器・緑釉陶器	平安中期	101	包含層	須恵器	飛鳥
50	包含層	土師器	平安後期	102	包含層	土師器	平安
51	溝・他	軒瓦・瓦	室町	103	包含層	土師器	平安後期
52	土坑・他	土器・瓦	中世～江戸	104	包含層	土師器・須恵器	平安前期

仁元（1467）年の計6回の炎上にて寺勢が衰えていった。

臨川寺旧境内の調査¹⁷⁾は、今回の調査地から南西側へ約200mの地点に位置し、最も近接している。当調査では、平安時代前期から江戸時代の遺構が検出されている。中でも検出長22mを測り、北端で直角に曲がる溝状遺構は、臨川寺を取り囲む堀と考えられている。

江戸時代に入り戦乱は収まり復興が始まるが、盛時の興隆を取り戻すことはなく、現在の嵯峨野の景観は寺院の再建より2世紀半を経てからの風景が現在に受け継がれたものである。

註

1) 『京都嵯峨野の遺跡』「広域立会調査による遺跡調査報告」京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊（財）京都市埋蔵文化財研究所 1997

2) 『史跡・名勝 嵐山』「京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-7」（財）京都市埋蔵文化財研究所 2004

3) 『史跡・名勝 嵐山』「京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-11」（財）京都市埋蔵文化財研究所 2005

4) 註3に同じ。

5) 田辺昭三・佐原 眞『京都市梅が畑出土の銅鐸』「日本考古学協会昭和39年度大会 研究発表要旨」日本考古学協会 1964

6) 『史跡・名勝 嵐山』「京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2012-3」（財）京都市埋蔵文化財研究所 2012

7) 有馬 伸『長慶天皇 嵯峨東陵嵯峨部事務所改築工事に伴う立会調査』「書陵部紀要」第61号 2010

8) 註1に同じ。

9) 惟宗允亮『政事要略』1002

10) 註2に同じ。

11) 「山城国葛野郡班田図」康和3年(1101)書写、原図は10世紀初頭頃作成。東京大学史料編纂所編『日本荘園絵図聚影 二 近畿一』財団法人東京大学出版会 1992

12) 『史跡・名勝 嵐山』「京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2013-17」（財）京都市埋蔵文化財研究所 2015

13) 註12に同じ。

14) 註12に同じ。

15) 『嵯峨舎那院御領絵図』建永2年8月16日

16) 『山城国嵯峨諸寺応永鈞命絵図』応永33(1426)年

17) 吉川義彦・石井望・中村敦『臨川寺旧境内遺跡発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告IV（財）京都市埋蔵文化財研究所 1978

第Ⅱ章 調査成果

第1節 基本層序

当地の地形は北西側の小倉山より南側の桂川に向かって緩やかに傾斜する。調査地の北側は標高 39.5 m、南側は標高 39.1 m を測り、約 0.4 m の高低差がみられる。当地の環境は密集した住宅地の一角に該当し、近年まで北側に四階建てのアネックス嵯峨Ⅲ、南側に平屋のネオアネックス嵯峨の建物が建っており、中央にはアネックス嵯峨の駐車場が存在していた。

当地は工事に先立ち、市文化財保護課によって試掘調査（図 10）が実施された。その結果、北側の 1・5・8 トレンチより攪乱が確認されたことから、北西側は調査の対象から除かれた。また、北側は総体的にコンクリート建物基礎や施工する際の攪乱が等間隔にみられるなど、基盤層直上までは全面に削平を受けていることから、薄い中世の整地層（褐色泥砂層 10YR4/4、暗灰黄色砂泥層 2.5Y4/2）と中央から南側で薄い古代の整地層（オリーブ褐色砂礫層 2.5Y4/3）を検出した。また、南側については、比較的厚めの中世整地層（暗灰黄色泥砂層 2.5Y4/2、黄褐色泥砂層 2.5Y5/4）、古代の整地層（にぶい黄色シルト 2.5Y6/4、黄褐色シルト 2.5Y5/3）が確認されたため、発掘調査を実施することとなった。

土層断面については、調査地が北側から南側へ下がる高低差があり、攪乱が多いことから、各壁面に違う状況がみられるので、調査地全周の壁面を実測し、記録を採ることとした。本稿では堆積状況の良い A 区南壁、西壁、北壁、B 区南壁、西壁を掲載した。土層断面図は当調査の成果をより明確にできる西壁、北壁、南壁断面図（図 11～13）を掲載した。南北方向の傾斜に対しての堆積状況は、A 区西壁、B 区西壁、東西方向の状況は、A 区南・北壁、B 区南壁断面を基本とした。土層の観察は、現地表面下約 1.0 m（T.P. 38.5 m）の基盤層までの地層を対象とした。

基本層序は北側と南側で約 0.6 m の勾配を有することや、大きく削平、攪乱を受けている箇所などが

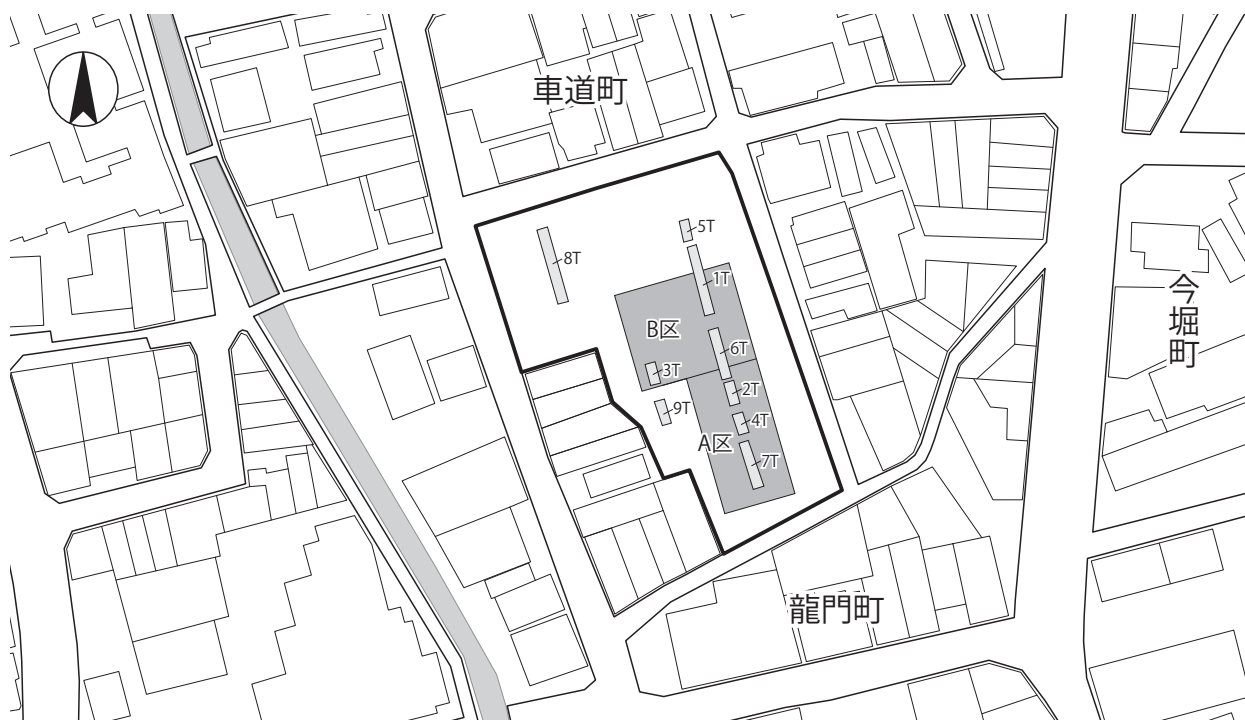


図 10 調査位置図

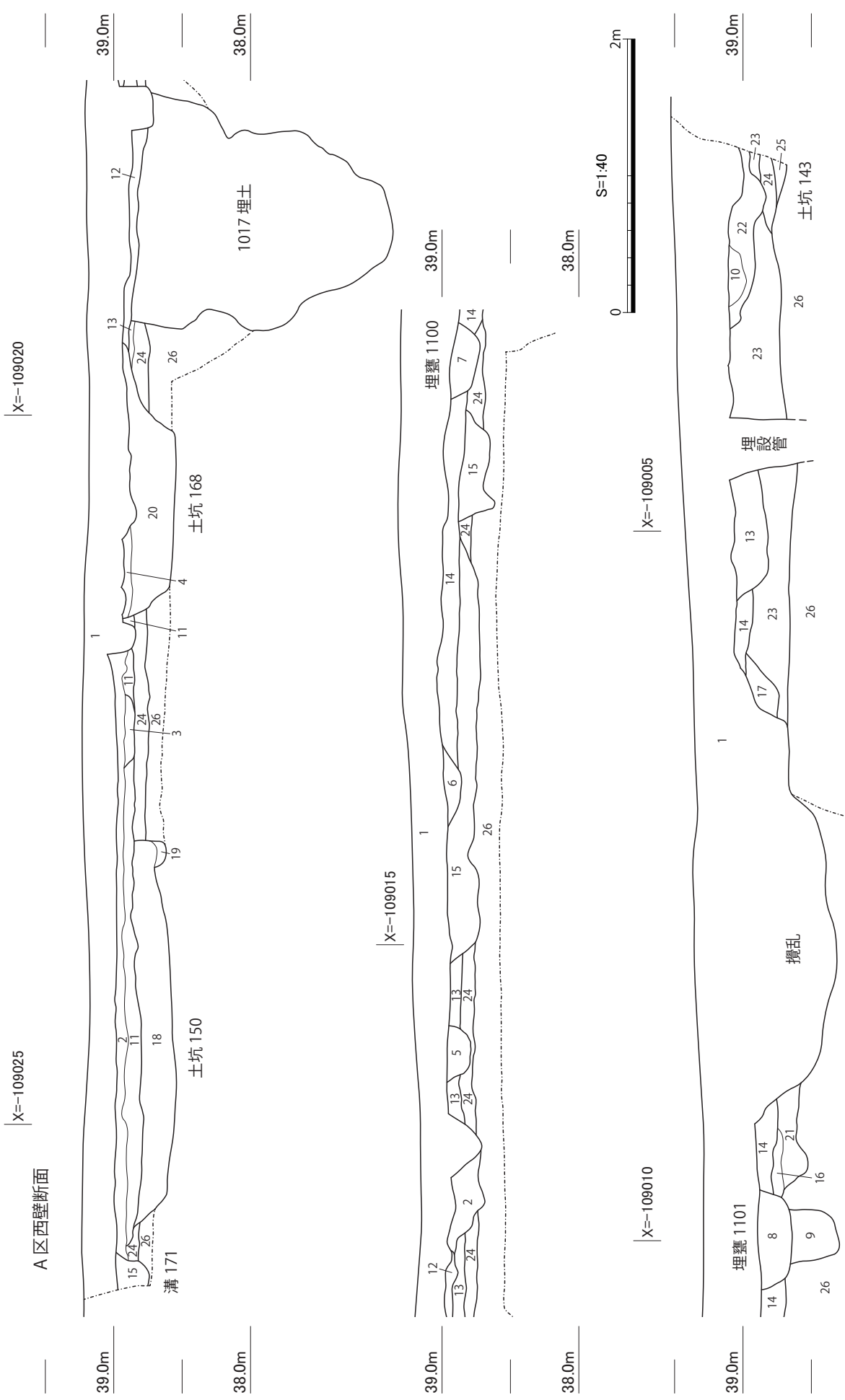


图 11 A 区西壁断面图

図 11 A区西壁断面土層注記

1. 黒褐色土 (10YR3/2) I 層、表土・攪乱
2. 黒褐色シルト (10YR3/1) I - 2 層、近代整地層
3. 灰黄褐色シルト (10YR5/2) I 層、近世遺構
4. にぶい黄褐色シルト (10YR4/3) II 層、中世整地層
5. 灰黄褐色シルト (10YR5/2) I 層、近世遺構
6. 褐灰色シルト (10YR6/1) I 層、近世遺構
7. 灰黄褐色シルト (10YR6/2) II 層、埋甕土坑 1100
8. 灰黄褐色シルト (10YR6/2) II 層、埋甕土坑 1101
9. にぶい黄橙色シルト (10YR6/3) III 層、古代遺構
10. 赤褐色粘土 (5YR4/8) I 層、近世遺構
11. にぶい黄褐色シルト (10YR4/3) II - 1 層、中世整地層
12. にぶい黄褐色シルト (10YR4/3) II - 1 層、中世整地層
13. 褐色シルト (10YR4/4) II - 2 層、中世整地層
14. にぶい黄褐色シルト (10YR4/3) II - 1 層、中世整地層
15. 灰黄褐色シルト (10YR5/2) II 層、中世遺構
16. にぶい黄褐色シルト (10YR5/4) II 層、中世整地層
17. 黒褐色シルト (10YR3/1) II 層、中世整地層
18. 褐灰色シルト (10YR4/1) II 層、土坑 150
19. 褐灰色シルト (10YR6/1) II 層、中世遺構
20. 灰黄褐色シルト (10YR4/2) II 層、土坑 168
21. 灰黄褐色シルト (10YR6/2) II 層、中世遺構
22. にぶい黄褐色シルト (10YR4/3) II 層、中世遺構
23. 褐色シルト (10YR4/4) II - 2 層、中世整地層
24. 灰黄褐色シルト (10YR4/2) III 層、古代遺構
25. 赤褐色粘土 (5YR4/8) II 層、中世遺構
26. にぶい黄褐色シルト (10YR5/4) IV 層、地山

11. 灰黄褐色シルト (10YR4/2) II 層、中世遺構
12. 褐色シルト (10YR4/4) II 層、中世遺構
13. 褐色シルト (10YR4/4) II 層、中世遺構
14. にぶい黄褐色シルト (10YR4/3) II 層、中世遺構
15. 灰黄褐色シルト (10YR4/2) II 層、中世遺構
16. にぶい黄褐色シルト (10YR4/3) II 層、中世遺構
17. 黒褐色シルト (10YR3/2) II 層、中世遺構
18. 褐灰色シルト (10YR4/1) II 層、中世遺構
19. 褐黄灰色シルト (10YR4/2) II 層、中世遺構
20. 褐灰色シルト (10YR5/1) II 層、中世遺構
21. 灰黄褐色シルト (10YR6/2) II 層、中世遺構
22. にぶい黄褐色シルト (10YR4/3) II 層、中世遺構
23. 褐色シルト (10YR4/4) II 層、中世整地層
24. にぶい黄褐色シルト (10YR5/3) II 層、中世整地層
25. にぶい黄褐色シルト (10YR5/4) II 層、中世整地層
26. 褐色シルト (10YR4/4) II 層、中世遺構
27. にぶい黄褐色シルト (10YR5/4) II 層、中世遺構
28. 黒褐色シルト (10YR3/1) I 層、近世整地層
29. にぶい黄褐色シルト (10YR4/3) II 層、中世整地層
30. 灰黄褐色シルト (10YR5/2) II 層、中世遺構
31. 灰黄褐色シルト (10YR4/2) III 層、古代整地層
32. にぶい黄褐色シルト (10YR4/3) II 層、中世遺構
33. 灰黄褐色シルト (10YR4/2) II 層、中世遺構
34. 灰黄褐色シルト (10YR6/2) II 層、中世遺構
35. 灰黄褐色シルト (10YR4/2) II 層、中世遺構
36. にぶい黄褐色シルト (10YR4/3) III 層、竪穴建物 1
37. 灰黄褐色シルト (10YR5/2) III 層、竪穴建物 1
38. にぶい黄褐色シルト (10YR5/4) IV 層、地山

図 12 A区南壁断面土層注記

1. 黒褐色土 (10YR3/2) I 層、表土・攪乱
2. 灰黄褐色シルト (10YR5/2) II 層、古代遺構
3. 灰黄褐色シルト (10YR5/2) II 層、中世遺構
4. にぶい黄褐色シルト (10YR3/3) II 層、中世遺構
5. 褐色シルト (10YR4/4) II 層、中世整地層
6. 褐灰色シルト (10YR6/1) I 層、近世整地層
7. 褐灰色シルト (10YR6/1) I 層、近世整地層
8. 灰黄褐色シルト (10YR5/2) II 層、中世遺構
9. 黒褐色シルト (10YR3/1) I 層、近世整地層
10. 灰黄褐色シルト (10YR5/2) II 層、中世遺構

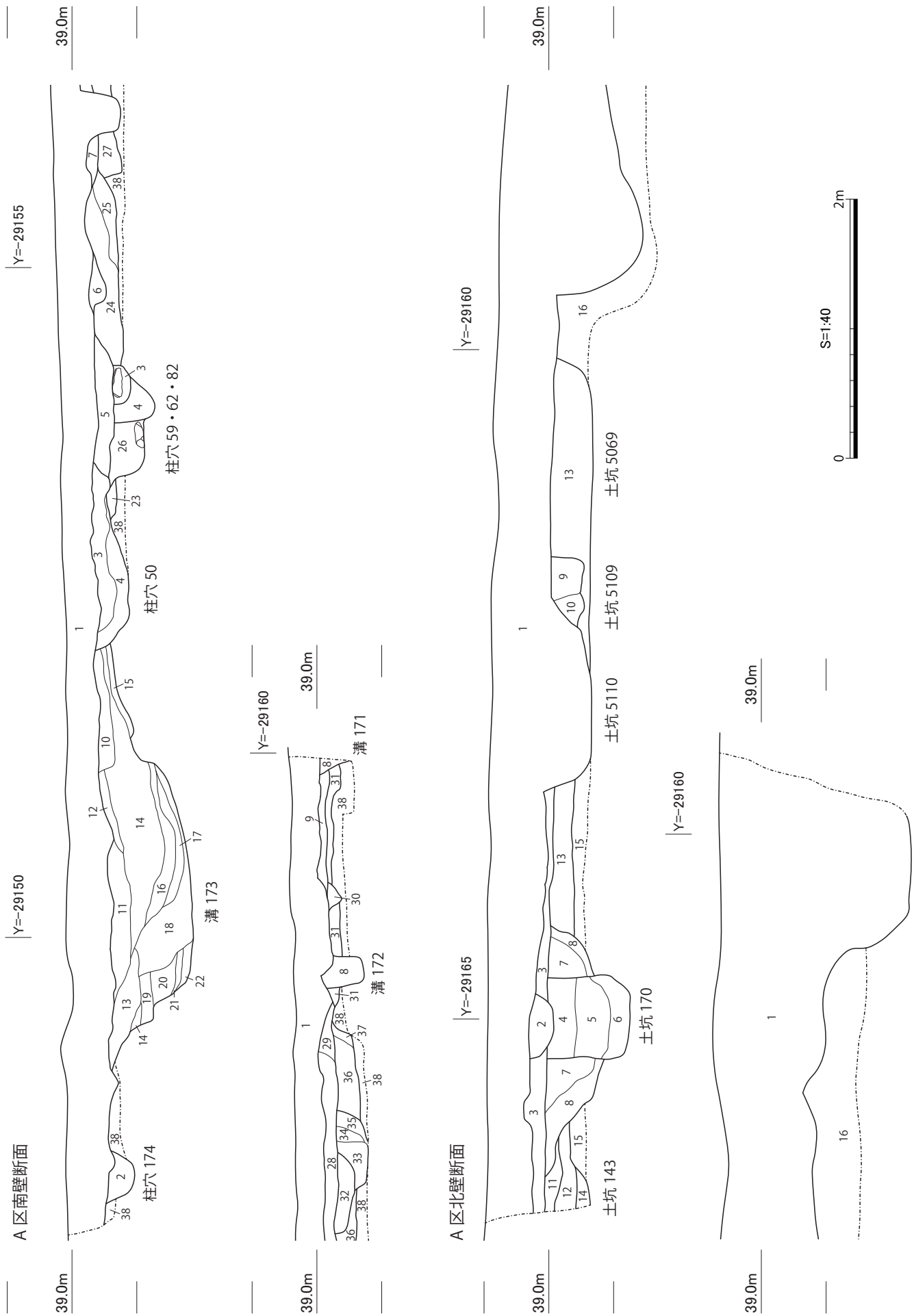


图 12 A 区北·南壁断面图

図 12 A区北壁断面図

1. 黒褐色土 (10YR3/2) I層、表土・攪乱
2. 灰黄褐色シルト (10YR5/2) I層、近世遺構
3. にぶい黄褐色シルト (10YR4/3) II層、中世整地層
4. 褐灰色シルト (10YR6/1) II層、中世遺構
5. 灰黄褐色シルト (10YR5/2) II層、中世遺構
6. 褐灰色シルト (10YR5/1) II層、中世遺構
7. 灰黄褐色シルト (10YR6/2) II層、中世遺構
8. 灰黄褐色シルト (10YR6/1) II層、中世遺構
9. 黄褐色シルト (10YR5/6) II層、中世遺構
10. 明黄褐色粘土 (10YR6/6) II層、中世遺構
11. 褐色シルト (10YR4/4) II層、中世整地層
12. 灰黄褐色シルト (10YR4/2) II層、中世遺構
13. 灰黄褐色シルト (10YR6/1) II層、中世整地層
14. 赤褐色粘土 (5YR4/8) II層、中世遺構
15. 灰黄褐色砂礫 (10YR4/2) IV層、流路
16. にぶい黄褐色シルト (10YR5/4) IV層、地山

図 13 B区西壁断面図

1. 黒褐色土 (10YR3/2) I層、表土・攪乱
2. にぶい黄褐色シルト (10YR4/3) II層、中世整地層
3. にぶい黄褐色シルト (10YR5/4) II層、中世遺構
4. 褐灰色シルト (10YR6/1) II層、中世遺構
5. 褐色シルト (10YR4/4) II-2層、中世整地層
6. 褐灰色シルト (10YR4/1) II層、中世遺構
7. 灰黄褐色シルト (10YR4/2) II層、中世遺構
8. にぶい黄橙色シルト (10YR6/3) III層、古代整地層
9. にぶい黄橙色シルト (10YR6/3) III層、古代遺構
10. 褐色粘土 (10YR4/4) III層、古代遺構
11. 明黄褐色粘土 (10YR6/6) III層、古代遺構
12. にぶい黄橙色シルト (10YR6/3) III層、古代遺構
13. にぶい黄褐色シルト (10YR5/4) IV層、地山

図 13 B区南壁断面図

1. 黒褐色土 (10YR3/2) I層、表土・攪乱
2. 灰黄褐色シルト (10YR4/2) I層、近世遺構
3. 褐色シルト (10YR4/4) I層、近世遺構
4. 褐灰色シルト (10YR6/1) I層、近世整地層
5. 灰黄褐色シルト (10YR4/2) II層、中世遺構
6. 褐灰色シルト (10YR4/1) II層、中世遺構
7. 灰黄褐色シルト (10YR4/2) II層、中世遺構
8. 灰黄褐色シルト (10YR5/2) II層、中世遺構
9. にぶい黄褐色シルト (10YR4/3) II層、中世整地層
10. 褐色粘土 (10YR4/4) II層、中世遺構
11. 明黄褐色粘土 (10YR6/6) II層、中世遺構
12. にぶい黄褐色シルト (10YR5/4) II層、中世遺構
13. 灰黄褐色シルト (10YR6/2) II層、中世遺構
14. 灰黄褐色シルト (10YR4/2) II層、中世遺構
15. 褐色シルト (10YR4/4) II-2層、中世整地層
16. 灰黄褐色シルト (10YR4/2) II層、中世整地層
17. 赤褐色粘土 (5YR4/8) II層、中世遺構
18. にぶい黄褐色シルト (10YR5/4) IV層、地山

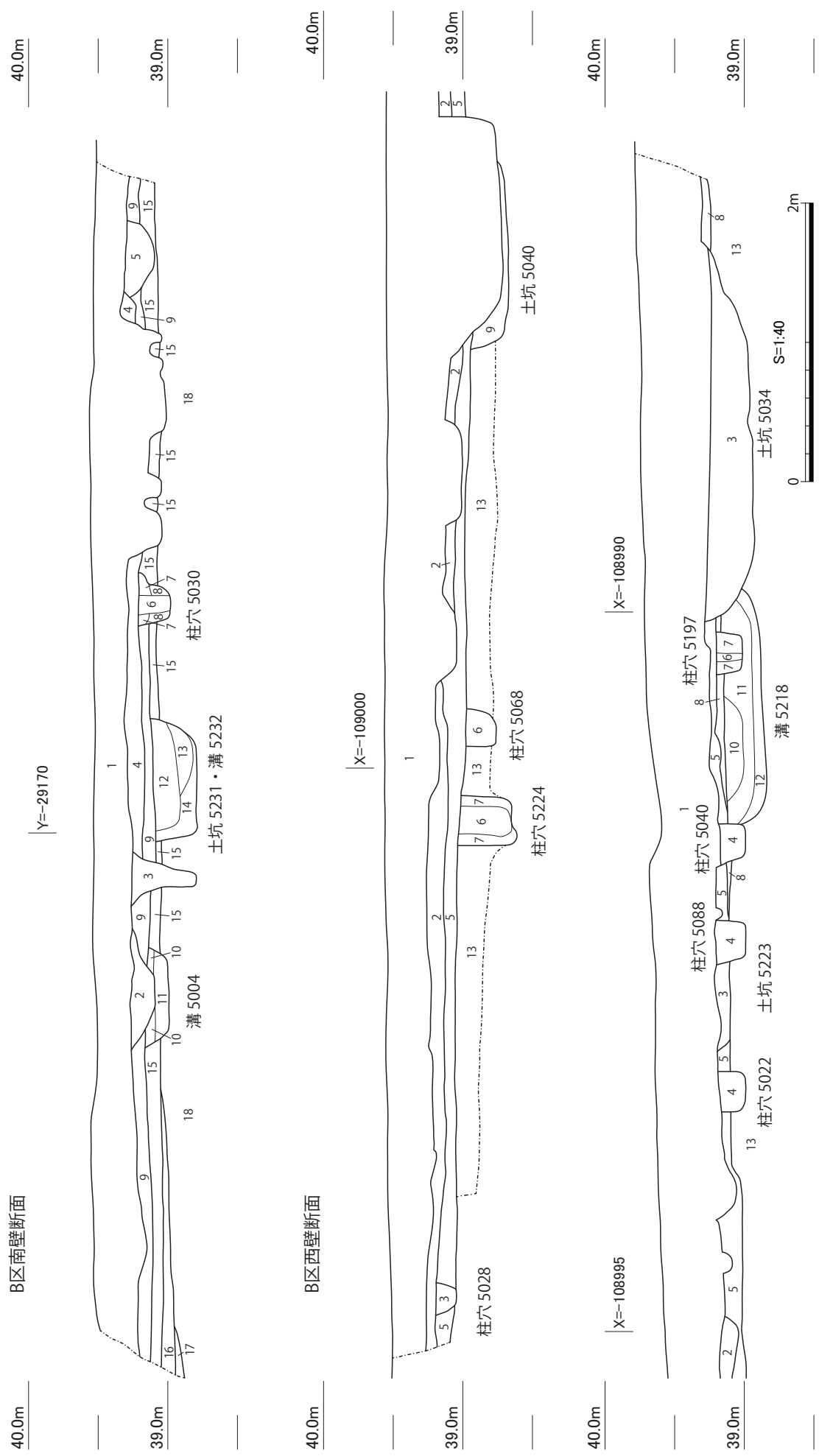


图 13 B 区西·南壁断面图

あり、全域の中で基本的な箇所を設定できなかつたが、部分的に残存状態の良い地点を選出した。

以下、表土から基盤層までを第Ⅰ－１層から第Ⅳ－２層に分層して述べた。第Ⅰ層は現地表から中・近世の整地層までの現代盛土、近世・近代耕作土、攪乱である。堆積の厚さはB区北側で1.1 m、A区南側で0.6 mを測る黒褐色（10YR3/2）土である。B区東側では南北方向に耕作された畑作の畦畔3条、溝2条を現地表から約1.2 m下位にて検出した。

分層としては、当地区に限定して第Ⅰ－１層が現代整地層、第Ⅰ－２層が近世～近代の耕作土である。第Ⅰ－２層の耕作地に畦畔がみられ、検出長は18 m、幅は約0.6 m、高さは約0.4 mを測る。溝は検出長18 m、幅約1.1 m、深さ約0.4 mを測る。畦畔はにぶい黄褐色（10YR5/4）シルト、溝の埋土は暗灰黄色（2.5Y5/2）砂礫砂、黒褐色（10YR3/2）粘質土、灰黄色（2.5Y6/2）粘質土である。溝内から中世の陶磁器類が出土したことから、中世の耕作地と考えられる。耕作地は地山まで達しており、古代の遺構面は残存していなかつたが、古代の山城国葛野郡条里まで遡る可能性がある。

第Ⅱ層は現地表から約0.6～1.2 m下位にて検出した。時期は鎌倉時代から室町時代の整地層である。当層は上位の第Ⅱ－１層ににぶい黄褐色（10YR4/3）シルト、下位の第Ⅱ－２層に褐色（10YR4/4）シルトの2層の堆積が検出された。南側のB区では削平によって第Ⅱ－１層はあまり残存していなかつた。第Ⅱ－１層は厚さ約0.2 m、第Ⅱ－２層は厚さ約0.2 mを測る。この第Ⅱ層から第Ⅲ層に切り込まれた中世の遺構が多くみられ、遺構埋土は灰黄褐色（10YR6/2）シルト、褐灰色（10YR4/1）シルト、にぶい黄褐色（10YR4/3）シルト等である。遺構の時期は第Ⅱ－１層が室町時代から近世前半、第Ⅱ－２層が鎌倉時代から室町時代に比定され、今回の調査で得られた成果は、室町時代が圧倒的に多くみうけられた。遺構の種類としては、A区北側より礎石建物、埋甕、土坑、井戸、中央に搾り遺構、南側より天龍門北側側溝、築地、土採り土坑、B区西側より掘立柱建物群、礎石建物、土坑、溝を検出した。第Ⅱ－２層下面にて検出した遺構を上層遺構（第2面）とした。

第Ⅲ層は現地表から0.7～1.2 m下位にて検出した。時期は古代の整地層である。第Ⅳ層の基盤層（地山）直上にて0.1～0.2 mの厚さがみられ、A区北側、B区南側では全く検出できない箇所もあった。A区の南側では厚さ0.2 mを測る箇所もあり、竪穴建物を検出した。土質としては、灰黄褐色（10YR4/2）シルト、灰黄褐色（10YR5/2）シルト、にぶい黄橙色（10YR6/3）シルトである。B区では検出できる箇所が少なく、最も良好な北側では地山直上にて厚さ0.2 mを測る。土質としては、にぶい黄橙色（10YR6/3）を呈し、細砂を少量含んでいた。土層内からは7世紀から9世紀にかけての土師器、須恵器、緑釉陶器が出土した。土層の性格としては、飛鳥時代から平安時代前半にかけて整地された土層と考えられる。第Ⅲ層下面、第Ⅳ層直上で検出した遺構を下層遺構（第1面）とした。検出した遺構は柱穴、溝、竪穴建物、焼土がある。

第Ⅳ層は現地表から約1.0～1.3 m下位にて検出した。土層の性格としては、当調査地中央に存在した幅広い流路の堆積である。流路の影響を受けた堆積を第Ⅳ－１層、安定した基盤層（地山）を第Ⅳ

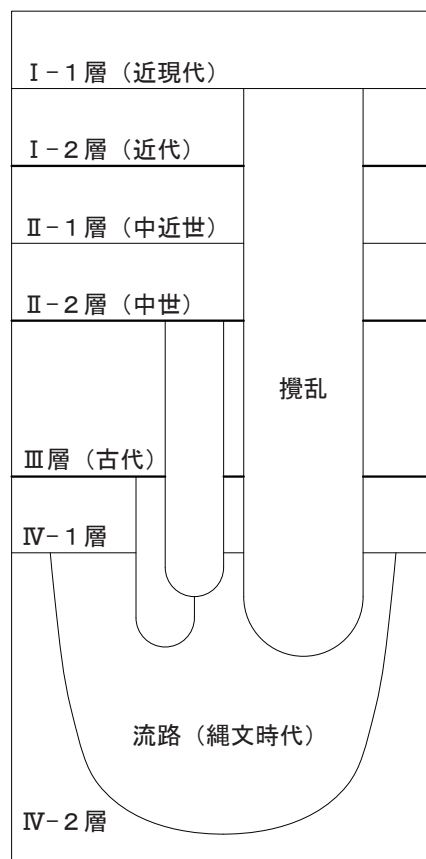


図14 基本層序模式図

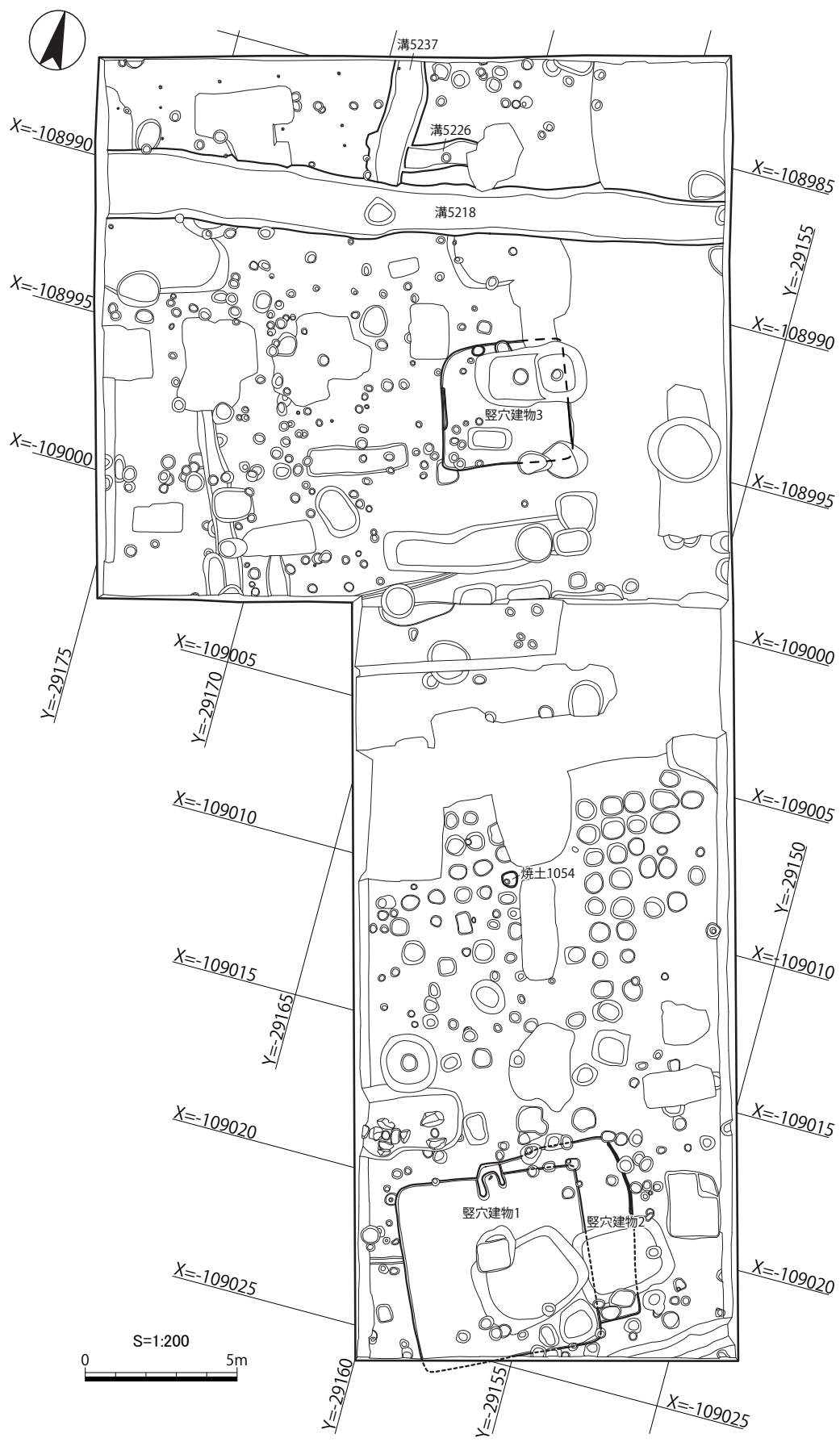


图 15 A·B区遗构平面图

－ 2 層として扱った。調査地の中央には北側から南側へ激流にて流れた灰黄褐色（10YR4/2）砂礫が多量に堆積しており、その河川肩部はにぶい黄褐色（10YR5/4）シルトの堆積であった。流路は調査地の北側である A 区から、南側の B 区まで 4 回の蛇行を繰り返しながら流れていた。規模は最大幅 9 m、深さ約 1 m を測る。流路の中央には激流にて堆積した砂礫がみられる。分析の結果、縄文時代早期の埋没であることが判明した。この流れは調査地の西側に存在する旧芹川の旧河川と考えられる。流路については考察にて株式会社パレオ・ラボによる分析データを掲載した。

第 2 節 遺構の概要

検出した遺構は、A・B 区ともに第Ⅳ層上面にて検出した下層遺構と第Ⅲ層上面にて検出した上層遺構がある。時期的には、下層遺構が飛鳥時代から室町時代前半、上層遺構が室町時代前半から近世前半にかけてである。本稿では時代を決定できる遺物を含む遺構を優先的に取り上げ、飛鳥時代から平安時代までの遺物を含む遺構を下層遺構とした。中世の遺物を含む遺構は上層遺構として記述した。

A 区の下層にて検出した飛鳥時代から平安時代の遺構は、柱穴 7 基（1007・1008・1009・1010・1012・1035・1043）、土坑 2 基（12・1064）、竪穴建物 2 棟（1・2）と竪穴建物に伴っていたと考えられる竈 1054 がある。柱穴 1012・1043、1007・1010・1035 は東西方向に等間隔で並ぶことから掘立柱建物の可能性もあったが、付設する柱列を確認することはできなかった。竪穴建物は 2 棟が切り合っており、西側の切っている竪穴建物 1 は北辺に竈を有していた。

B 区下層遺構は、柱穴 10 基（5003・5018・5031・5208・5230・5245・5251・5261・5273・5274）、溝 3 条（5237・5218・5226）、竪穴建物 1 棟（3）がある。柱穴 5018・5031・5230 は南北に並ぶことから、掘立柱建物であった可能性がある。東西方向に延びる大型の溝 5218・5226 と南北方向に延びる溝 5237 は T 字状を呈した区画溝と考えられる。竪穴建物は A 区で検出したものと同様に北辺に竈を有していた。

A 区の上層にて検出した遺構は、鎌倉時代から近世前半に至るまでのものがみられ、その中心は室町時代である。掲載した遺構は、柱穴 10 基（39・56・57・83・108・167・213・1024・1026・1034）、礎石建物 1、礎石列 1～13、土坑 10 基（24・59・67・150・170・192・194・1001・1017・1018）、

表 3 A・B 区遺構概要表

時 代	A 区遺構	B 区遺構
飛鳥時代	柱穴 1007・1008・1010・1012・ 1035・1043 土坑 12・1064 竪穴建物 1・2、焼土 1054	柱穴 5003・5018・5031・5245・5261・ 5273・5274 溝 5226・5237 竪穴建物 3
平安時代	柱穴 1009	柱穴 5208・5230・5251、溝 5218
鎌倉・室町時代	柱穴 39・56・57・83・108・167・ 213・1024・1026・1034 礎石建物 1、礎石列 1～13 土坑 24・59・67・150・170・ 192～194・1001・1017・1018 埋甕土坑 2・1100・1101 溝 101・168・171～173 井戸 169	柱穴 5050・5093・5215・5274・5281 掘立柱建物 1～6、柵列 1、杭列 1 土坑 5012・5034・5041・5042・5044・ 5067・5068・5070・5071・5072・5087・ 5093・5098・5101・5108・5245・5262 溝 5004・5032・5063・5085・5092・5104・ 5210～5212・5249 井戸 5106

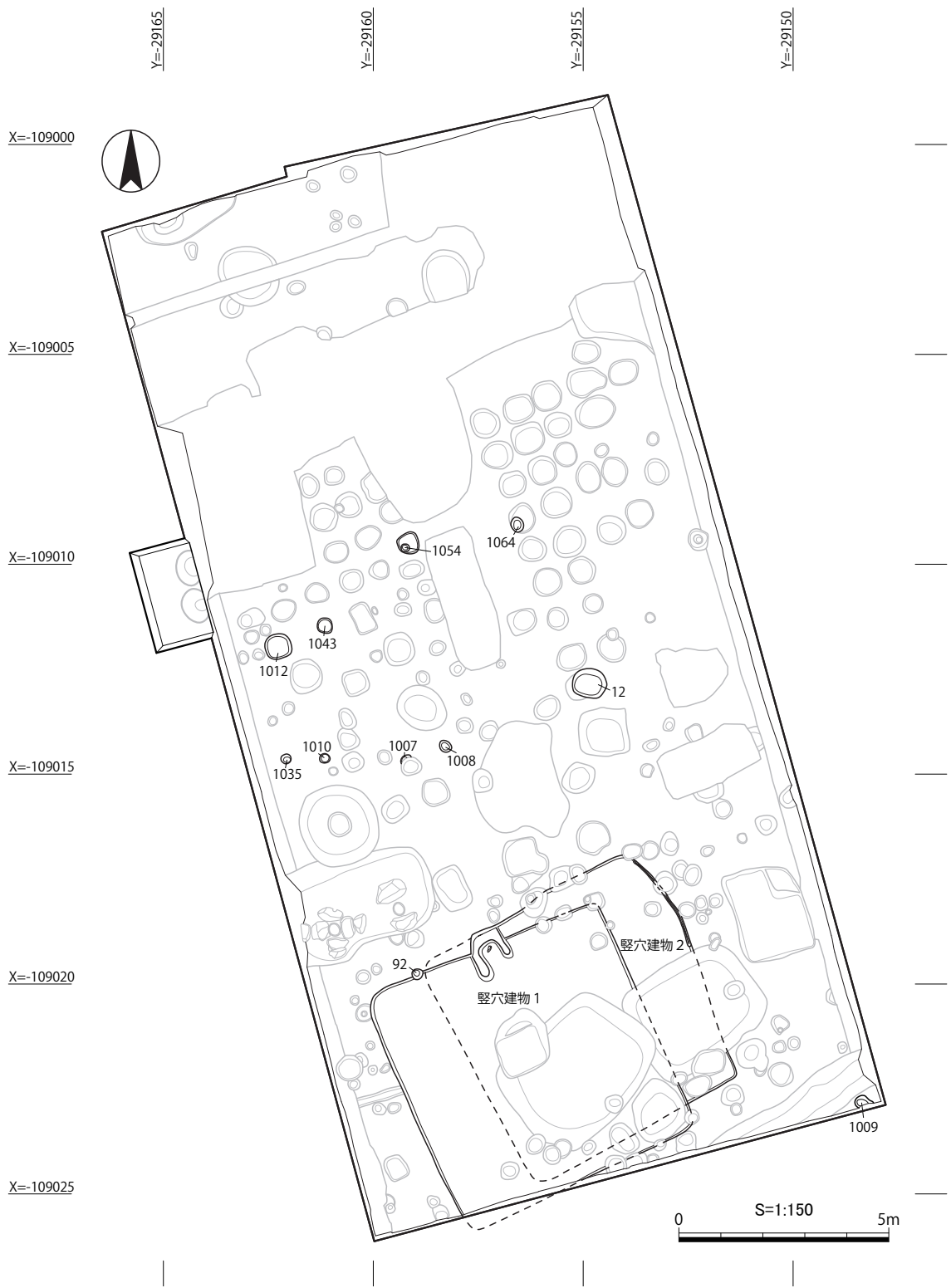


图 16 A 区下层遺構平面図

埋甕土坑3基(2・1100・1101)、溝5条(101・168・171～173)、井戸1基(169)がある。中でも特筆すべきものとしては、酒造に関連する搾り遺構、貯蔵施設の埋甕土坑と天龍寺の天下龍門に関連する塀、側溝がある。

酒造遺構は酒蔵と考えられる礎石建物の内部に配置されており、南西角に酒を搾る男柱を中心とした施設(土坑1017-1・1017-2)、搾った酒造を溜める垂壺を設置した施設(土坑1018)がある。搾り遺構は東西方向に造り替えられた2基が切り合っており、施設の中央には男柱が残存していた。西側の新出の土坑1017-2は残存状態が良好で、男柱の下位には2か所の臍が穿っており、臍には横木が十字に組んであった。また、横木には搾り工程の際に男柱が浮上しない様に多数の重石が載せてあった。垂壺土坑1018は球形に掘られ、底部中央にも小型の土坑を有していた。底部の土坑には、円形の扁平石を設置していた。また、土坑の下位や壁面には砂層が多く見られた。壁面の砂層は垂壺を設定するための摩り合わせに使用し、下位の扁平石は垂壺の底部を安定するための基底石と考えられる。

酒蔵の内部は、南西側を除いた全域に多数の埋甕土坑が整然と並んでおり、その北側には井戸169を囲んだ礎石建物1が存在していた。埋甕土坑は西側と東側に群を成し、西側は東西方向6列、南北方向9列、計54基、東側は東西方向9列、南北方向14列、計126基、合計180基の埋甕が設置されていたものと考えられる。埋甕は全て備前焼の一石甕(180L)を使用していたものと推測される。

天下龍門に関する遺構は、A区の南端にて検出した築地塀157、塀北側側溝171・172、築地塀南側溝173がある。いずれも応永鈞命絵図にみられる龍門の北側築地塀と考えられる。塀は削平を受けており上部構造は確認できなかったが、両側には側溝172・173を検出した。塀の北側は細い雨落ち溝171・172であるが、塀の南側は龍門の内側であり、門広場の側溝を兼ねていることから、規模の大きさは幅1.1m、深さ0.7mを測る。龍門が倒壊する前に土採りが塀に沿って2か所(土坑1001-1・1001-2)で行われている。その後、塀が倒壊した後に畑作の素掘り溝101・105・152・160・191等が塀、側溝を切った状態で南北方向に出現する。

B区の上層にて検出した遺構は数多くみられるが、その中心は室町時代である。掲載した遺構は柱穴群、掘立柱建物1～6、柵列1、杭列1、土坑(5012・5034・5041・5042・5067・5068・5071・5072・5098・5101・5245・5262)、溝(5004・5032・5092・5101・5249)、井戸5106がある。中でも特筆すべきものとしては、酒造に関連する搾り遺構(5071・5101)、居住区の建物群、葛野郡条里の残存と考えられる溝5210～5212がある。

搾り遺構は、土坑5071・5101の2基がある。両者ともにA区にて検出した搾り遺構(1017-1・2)と同様の規模、形状を呈し、2基の切り合い状況も類似している。土坑は掘り返されて男柱、横木、重石は抜き取られていた。土坑の中央には男柱の痕跡がみられた。

居住区の建物群は6棟が同一箇所にて建て替えられており、古出のものは3×3間以上の掘立柱建物5がある。同一箇所にて4×4間以上の掘立柱建物6に建て替えられ、その後、南北に平行に並んだ3間×4間の掘立柱建物1・2が建てられる。更に同一箇所にて同規模の掘立柱建物3・4が建て替えられる。また、掘立柱建物1～4と同時期に施工されたと考えられる柵列1、杭列1が北側、東側にみられる。

葛野郡条里に関連する遺構は、南北方向に延びる溝5210～5212がある。当溝は近世に埋没が比定されるが、古代から継続していた可能性は高い。条里としては、櫟原里の十一坪と十二坪の境に一致している。その中でも溝5210は境の西端に該当し、東側に広がっていた畑地との境界であろう。溝5211・5212は畑地の耕作溝と考えられる。

以下、A・B区の下層・上層遺構について述べた。

1. A区下層遺構（飛鳥～平安時代）

柱穴 1007（図 16、図版 10） A区西側中央の4G区にて検出した柱穴である。平面は円形を呈する。規模は長径 0.39 m、短径 0.36 m、深さ 0.26 mを測る。埋土は主に明黄褐色（2.5Y7/6）シルトである。柱痕は抜き取りが行われた形跡がみられた。柱穴内から土師器の坏（図 49 - 12）が出土した。出土した遺物から飛鳥時代に属するものと考えられる。建物として検証できなかったが、東側に隣接する柱穴 1008、西側の柱穴 1010・1035 から飛鳥時代の遺物が出土している。これらの柱穴は 0.6～0.8 m間隔で列を成すが、建物としては確認できなかった。柱穴間が狭いことから柵列の可能性を残している。

柱穴 1008（図 16、図版 10） A区西側中央の4G区にて検出した小型の柱穴である。平面は円形を呈する。規模は長径 0.29 m、短径 0.27 m、深さ 0.30 mを測る。埋土は単層のにぶい黄色（2.5Y6/4）シルトである。柱痕は確認できなかったが、柱穴内から土師器の把手（図 49 - 13）が出土した。出土した遺物から飛鳥時代に属するものと考えられる。建物として検証できなかったが西側に同時期の柱穴 1007がある。柱穴間は 1 mを測る。柱穴 1035 から柱穴 1008 までは線上に並ぶが、当柱穴は北東側に位置することから列を外している。

柱穴 1009（図 16、図版 10） A区南東端の5I区にて検出した小型の柱穴である。平面は円形を呈する。規模は長径 0.30 m、短径 0.28 m、深さ 0.32 mを測る。埋土は主ににぶい黄色（2.5Y6/4）シルトである。柱痕は確認できなかった。柱穴内から須恵器の鉢底部（図 49 - 11）が出土した。出土した遺物から平安時代に属するものと考えられる。近隣から古代に属する遺構は検出できなかった。

柱穴 1010（図 16、図版 10） A区西側中央の3G区にて検出した小型の柱穴である。平面は円形を呈する。規模は長径 0.30 m、短径 0.28 m、深さ 0.32 mを測る。埋土は単層のにぶい黄色（2.5Y6/4）シルトである。柱痕は確認できなかったが、柱穴内から須恵器の坏身（図 49 - 1・2）が出土した。出土した遺物から飛鳥時代に属するものと考えられる。建物として検証できなかったが東側に列を柱穴 1007・1008・1010、西側に柱穴 1035 がある。柱穴間は 0.6～0.8 m間を測り、ほぼ線上に並ぶ。柱穴間が狭いことから、柵列の可能性がある。

柱穴 1012（図 16、図版 10） A区西側中央の3G区にて検出した柱穴である。平面は円形を呈する。規模は長径 0.43 m、短径 0.41 m、深さ 0.36 mを測る。埋土は主に明黄褐色（2.5Y7/6）シルトである。柱痕は抜き取りが行われた形跡がみられた。柱穴内から須恵器の坏（図 49 - 8）が出土した。出土した遺物から飛鳥時代に属するものと考えられる。建物として検証できなかったが、東側に隣接する柱穴 1043 から飛鳥時代の遺物が出土している。柱穴間は 1.2 mを測る。

柱穴 1035（図 16、図版 10） A区西側中央の3G区にて検出した小型の柱穴である。平面は円形を呈する。規模は長径 0.34 m、短径 0.32 m、深さ 0.32 mを測る。埋土は主に明黄褐色（2.5Y7/6）シルトである。明確な柱痕は確認できなかった。柱穴内から須恵器の坏（図 49 - 5）が出土した。出土した遺物から飛鳥時代に属するものと考えられる。建物として検証できなかったが、東側に列を成す柱穴 1007・1008・1010・1035 がある。これらの柱穴は 0.6～0.8 m間隔で列を成すが、建物としては確認できなかった。柱穴間が狭いことから柵列の可能性を残している。

柱穴 1043（図 16、図版 10） A区西側中央の3G区にて検出した柱穴である。平面は円形を呈する。規模は長径 0.38 m、短径 0.36 m、深さ 0.30 mを測る。埋土は主に明黄褐色（2.5Y7/6）シルトである。柱痕は抜き取りが行われた形跡がみられた。柱穴内から須恵器の坏（図 49 - 4）が出土した。出土した遺物から飛鳥時代に属するものと考えられる。建物として検証できなかったが、西側に隣接する柱穴

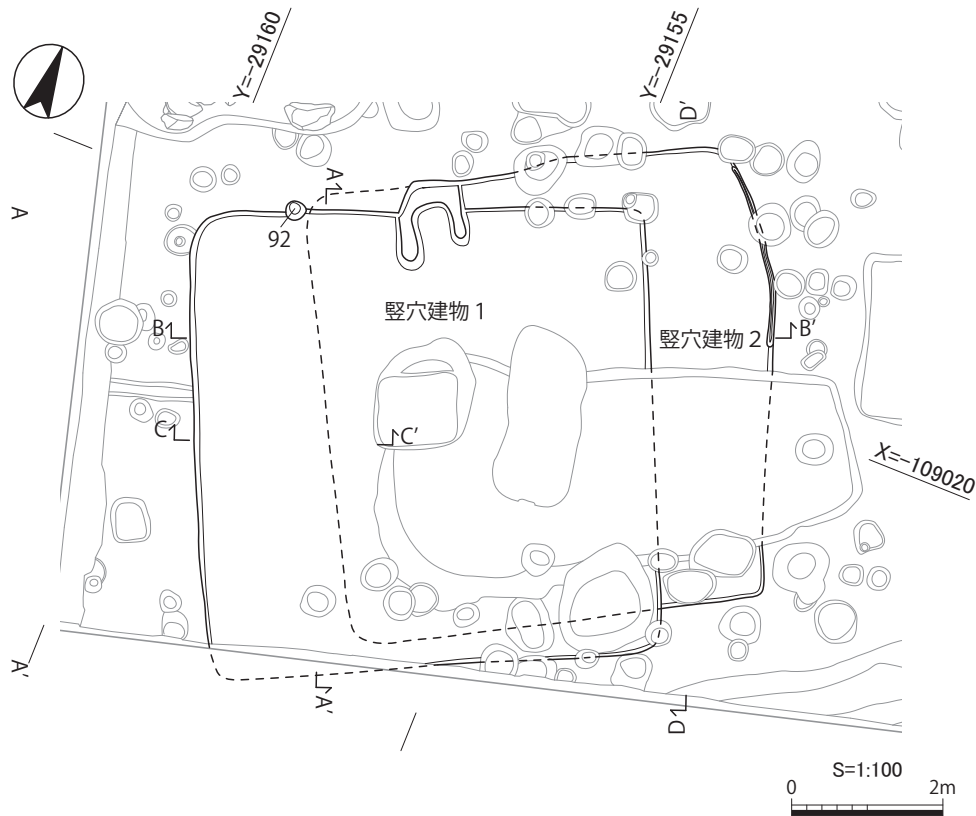


図 17 A区竪穴建物1・2平面図

1012からも飛鳥時代の遺物が出土している。柱穴間は1.2mを測る。

土坑 12 (図 16、図版 10) A区中央の4G区にて検出した土坑である。平面は円形を呈する。規模は長径0.82m、短径0.78m、深さ0.52mを測る。埋土は単層の褐灰色(10YR5/1)シルトである。土坑内から須恵器の坏身(図 49-6)が出土した。出土した遺物から飛鳥時代に属するものと考えられる。近隣からは同時期の遺構は確認できなかった。中世の埋甕土坑1069に切られていた。

土坑 1064 (図 16、図版 10) A区中央の北寄り4F区にて検出した土坑である。平面は円形を呈する。規模は長径0.52m、短径0.49m、深さ0.32mを測る。埋土は単層の褐灰色シルト(10YR5/1)である。土坑内から須恵器の坏身(図 49-7)が出土した。出土した遺物から飛鳥時代に属するものと考えられる。近隣からは同時期の遺構は確認できなかった。上層から中世の埋甕に切られていた。

竪穴建物 1 (図 16～19、図版 15・16) A区の南側3H・I、4H・I区にて検出した竪穴建物である。埋土は基盤層である明黄褐色(10Y6/6)シルトに類似する浅黄色(2.5Y7/3)シルトが切り込んでいた。北辺東側と東辺は検出できなかった。規模は東西方向に推定6.1m、南北方向に5.7mを測る。平面形状は方形を呈している。建物の南西角は調査地外に伸びており、東側に重なる竪穴建物2を切っている。建物の方位は、N15°Wである。竪穴建物の床面からの高さは最大深度0.21mを測る。支柱穴、貯蔵穴、壁溝は確認できなかった。また、竪穴建物に付随する施設の遺構についても明確なものは検出できなかった。同時期の遺物(図 50-22)が出土したピット92は建物の北辺に位置する。壁に付設した施設の可能性がある。位置としては、竪穴建物2の推定される北西角である。床面の貼床、床面の掘方については、竈の南側にて床下を浅く掘り込んでいた。

竈は建物の北辺中央にて検出した。規模は南北幅1.2m、横幅1.1mを測る。平面形状は建物の北辺からコの字状に突き出している。竈の袖は平行に南側へ伸び、削り出された基盤層上にシルトを積み重

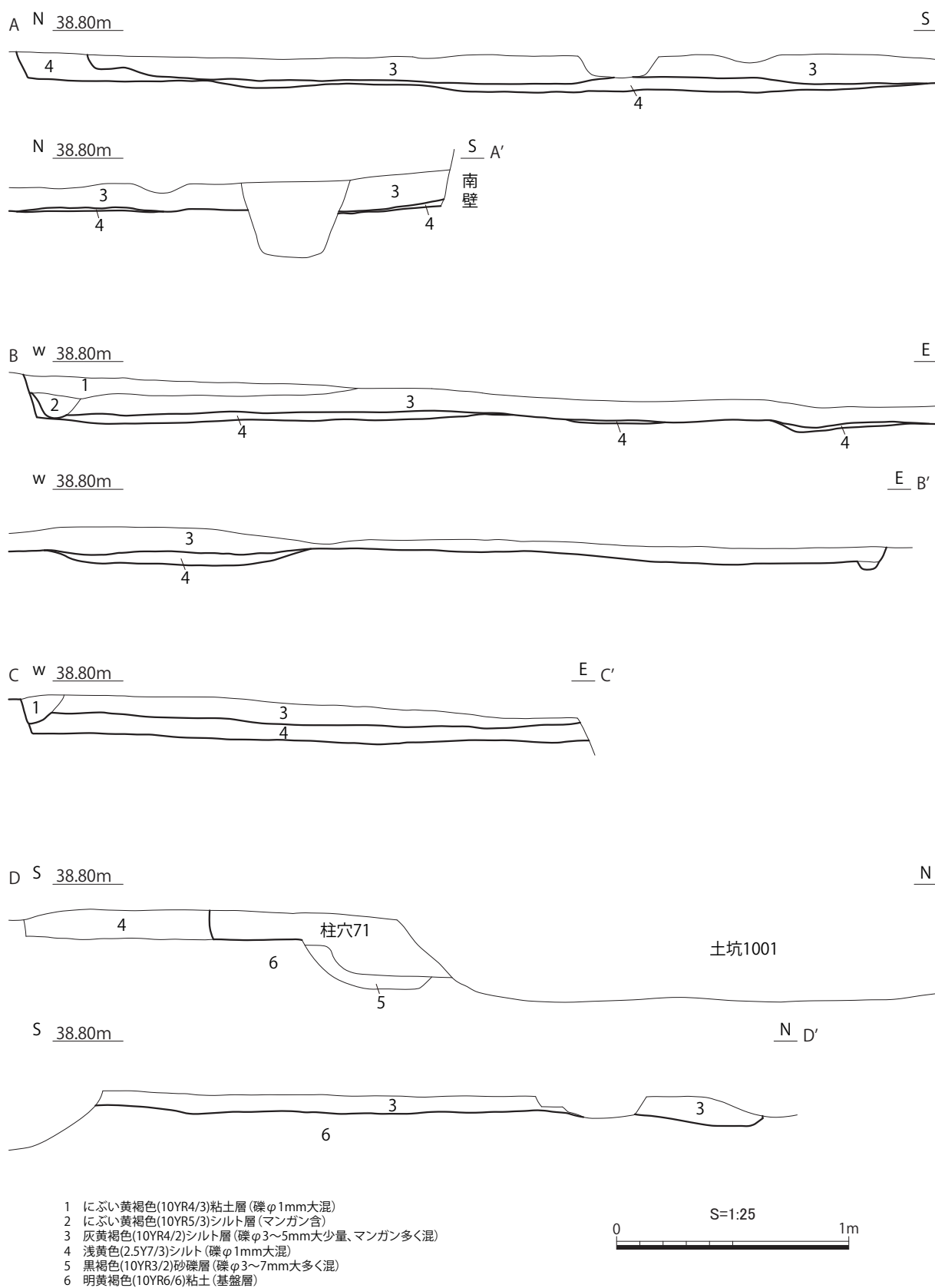


図 18 竪穴建物 1・2 断面図

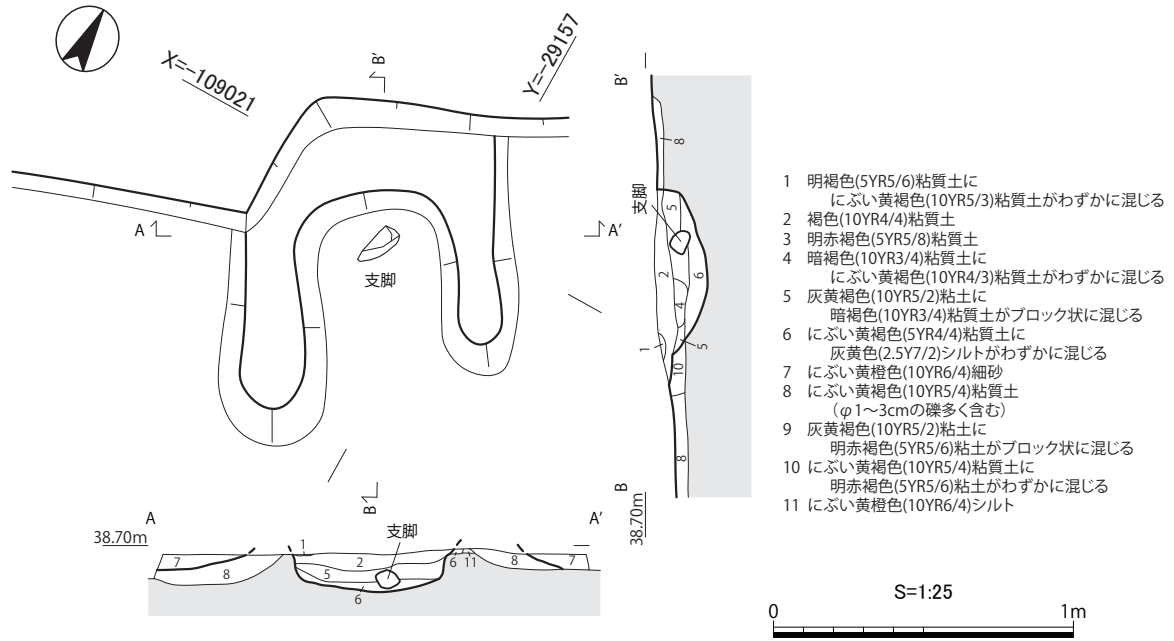


図 19 竪穴建物 1 竈平・断面図

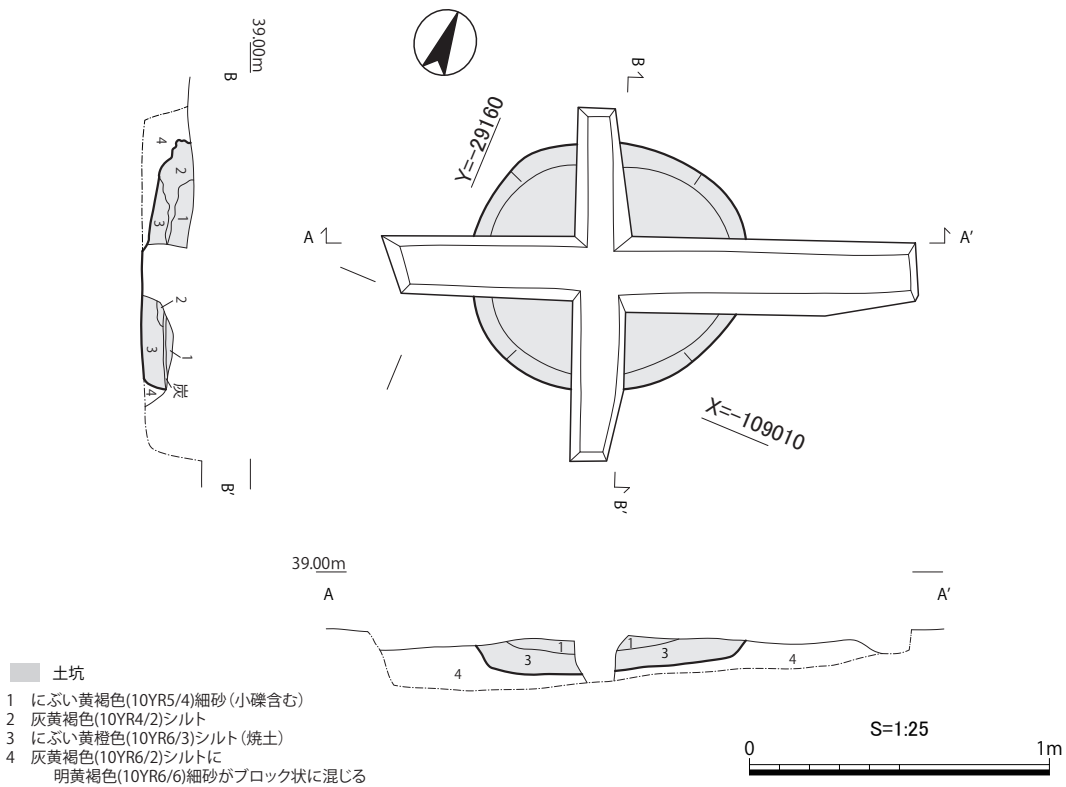


図 20 焼土 1054 平・断面図

ねていた。床面には貼床がみられ、被熱して硬く締っていた。竈の燃焼部中央には支脚が設置されていた。支脚は全長 0.22 m、厚さ 0.08 m を測るチャート質の楕円形礫である。竈の床面に突き刺した状態で鍋の底を支えていたものと推定されるが、南西方向に傾いていた。竈内から土師器の甕（図 50 - 29）、竈周辺から須恵器の坏（図 50 - 16・24・25）、須恵器の坏蓋（図 50 - 14）が出土した。南西側の床面直上から須恵器の坏（図 50 - 19 ~ 21）、土師器の甕（図 50 - 28）、北西側から須恵器の杯（図 50 - 15）が出土した。

竪穴建物 2（図 16 ~ 18、図版 15・16） A 区の南側 3 H・I、4 H・I、5 H・I 区にて検出した竪穴建物である。埋土は基盤層である明黄褐色（2.5Y6/6）シルトに類似する浅黄色（2.5Y7/3）シルトが切り込んでいた。西側、南側は西側に重なる竪穴建物 1 に切られていた。北辺の西側と西辺、南辺の西側は検出できなかった。規模は東西方向に推定 5.9 m、南北方向に 5.7 m を測る。平面形状は方形を呈しているものと考えられる。建物の南側半分は土坑 1001 に切られている。建物の方位は、N 20° W である。竪穴建物の床面からの高さは最大深度 0.12 m を測る。壁溝は東辺の北側にて検出した。規模は検出長 2.1 m、幅 0.1 m、深さ 0.03 m を測る。竈は北辺の中央に設定されていたものと推定されるが、焼土の塊としてのみ残存であり、形状としては検出できなかった。焼土は東西幅 0.3 m、南北幅 0.25 m、



図 21 B 区下層遺構平面図

深さ 0.01 m を測る。また、竪穴建物の支柱穴、貯蔵穴や付随する施設、貼床、床面の掘方は確認できなかった。南側から須恵器の坏（図 50 - 19）、北東から須恵器の坏（図 50 - 17・26）、土師器の甕（図 50 - 30）が出土した。

焼土 1054（図 16・20） A 区の北側 4 F 区にて検出した焼土である。焼土の形状としては、東西方向に長軸を有する楕円形である。断面形状としては皿状を呈する。規模は東西幅 0.9 m、南北幅 0.83 m、深さ 0.14 m を測る。周辺には中世の埋甕土坑が接していた。遺構の基盤は明黄褐色（10YR6/6）細砂と流路の堆積である灰黄褐色（10YR6/2）砂礫シルトである。埋土は基盤に類似するにぶい黄褐色（10YR5/4）細砂とにぶい黄橙色（10YR6/3）シルトであるが、間層として灰黄褐色（10YR4/2）の炭層、明赤褐色（5Y5/8）の焼土ブロックが混在している。堆積としては上位ににぶい黄褐色（10YR5/4）細砂、中位に灰黄褐色（10YR4/2）シルト、にぶい黄橙色（10YR6/3）シルト、下位に灰黄色（10YR6/2）粘質土が切り込んでいた。中位の埋土には炭層、焼土のブロックが多く見受けられるが、原型を留めていない。焼土内から須恵器の坏（図 49 - 3）が出土した。

焼土は出土した遺物の時期や焼土塊の残存状況から、竪穴建物に付随していた竈の可能性が高い。

2. B 区下層遺構（飛鳥～平安時代）

柱穴 5003（図 21、図版 29） B 区南西側の 2 D 区にて検出した柱穴である。周辺は南北方向に柱穴が多く見受けられるが、同時期として確定できる遺構は見当たらない。平面は円形を呈する。規模は長径 0.42 m、短径 0.40 m、深さ 0.29 m を測る。埋土は単層のにぶい黄褐色（10YR5/4）シルトである。柱痕は確認できなかったが、柱穴内から須恵器の坏蓋（図 51 - 31）が出土した。出土した遺物から飛鳥時代に属するものと考えられる。建物として検証できなかった。

柱穴 5018（図 21、図版 26） B 区南西側の 2 C 区にて検出した柱穴である。平面は円形を呈する。規模は長径 0.38 m、短径 0.36 m、深さ 0.30 m を測る。埋土は単層の浅黄色（2.5Y7/3）シルトである。柱痕は確認できなかったが、柱穴内から須恵器の坏（図 51 - 40）が出土した。出土した遺物から飛鳥時代に属するものと考えられる。建物として検証できなかったが、南側に隣接する柱穴 5251 から同時期の遺物が出土している。柱穴間は 0.5 m を測る。

柱穴 5031（図 21、図版 26） B 区中央西よりの 2 C 区にて検出した柱穴である。東西、南北方向に柱穴列がみられるが、同時期に確定できるものは見当たらない。平面は円形を呈する。規模は長径 0.40 m、短径 0.38 m、深さ 0.33 m を測る。埋土は単層のにぶい黄褐色（10YR5/4）シルトである。柱痕は確認できなかったが、柱穴内から須恵器の坏（図 51 - 35）が出土した。出土した遺物から飛鳥時代に属するものと考えられる。建物として検証できなかったが、東西方向と南北方向に列を成す柱穴は多く見受けられ、南側には同時期の柱穴 5230・5251 がある。同時期に属することから、建物として成立する可能性がある。また、柱穴間は約 2.1 m を測る。

柱穴 5208（図 21、図版 26） B 区北側中央の 3 B 区にて検出した柱穴である。周辺は東側に柱穴、土坑が多く見受けられるが、同時期として確定できる遺構は見当たらない。平面は円形を呈する。規模は長径 0.32 m、短径 0.31 m、深さ 0.56 m を測る。埋土は単層のにぶい黄褐色（10YR5/4）シルトである。柱痕は確認できなかったが、柱穴内から須恵器の坏身（図 51 - 42～44）が出土した。出土した遺物から平安時代に属するものと考えられる。建物として検証できなかった。

柱穴 5230（図 21、図版 26） B 区中央西よりの 2 C 区にて検出した柱穴である。大型の攪乱に切られているが、柱穴の基底部分は残存していた。南北方向に柱穴列が多く並んで見られる。北側の柱穴

5031、南側の柱穴 5251 と同時期の遺物が出土している。平面は円形を呈する。規模は長径 0.30 m、短径 0.28 m、深さ 0.15 m を測る。埋土は単層のにぶい黄褐色（10YR5/4）シルトである。柱痕は確認できなかったが、柱穴内から須恵器の坏（図 51 - 37）が出土した。出土した遺物から飛鳥時代に属するものと考えられる。建物としては、北側の柱穴 5031、南側の柱穴 5251、南西側の柱穴 5274 が成立する可能性がある。

柱穴 5245（図 21、図版 26） B 区南西側の 2 C 区にて検出した柱穴である。上層は大型の攪乱に切られており、柱穴の南側と基底部が残存していた。南側は多くの柱穴が見受けられるが、同時期として確定できる遺構は見当たらない。平面は円形を呈する。規模は長径 0.37 m、短径 0.36 m、深さ 0.30 m を測る。埋土は単層のにぶい黄褐色（10YR5/4）シルトである。柱痕は確認できなかったが、柱穴内から須恵器の坏身（図 51 - 34）が出土した。遺物から飛鳥時代に属するものと考えられる。建物としては検証できなかった。

柱穴 5261（図 21、図版 26） B 区北側中央の 3 A 区にて検出した柱穴である。同時代の溝 5226 に切られており、基底部分のみ検出した。周辺は遺構がまばらで数少ない箇所である。平面は円形を呈する。規模は長径 0.22 m、短径 0.20 m、深さ 0.1 m を測る。埋土は単層のにぶい黄褐色（10YR5/4）シルトである。柱痕は確認できなかったが、柱穴内から須恵器の坏身（図 51 - 33）が出土した。遺物から飛鳥時代に属するものと考えられる。溝に伴うピットの可能性がある。

柱穴 5274（図 21、図版 26） B 区南西側の 2 D 区にて検出した柱穴である。周辺は東西方向に柱穴が多く見受けられ、東側の柱穴 5251 と同時期の遺物が出土している。平面は円形を呈する。規模は長径 0.38、短径 0.36 m、深さ 0.20 m を測る。埋土は単層のにぶい黄褐色（10YR5/4）シルトである。柱痕は確認できなかったが、柱穴内から須恵器の坏身（図 51 - 38）が出土した。遺物から飛鳥時代に属するものと考えられる。建物としては検証できなかった。

溝 5218（図 22、図版 29） B 区北側の 1 B ~ 5 B 区にて検出した東西方向に延びる大溝である。溝

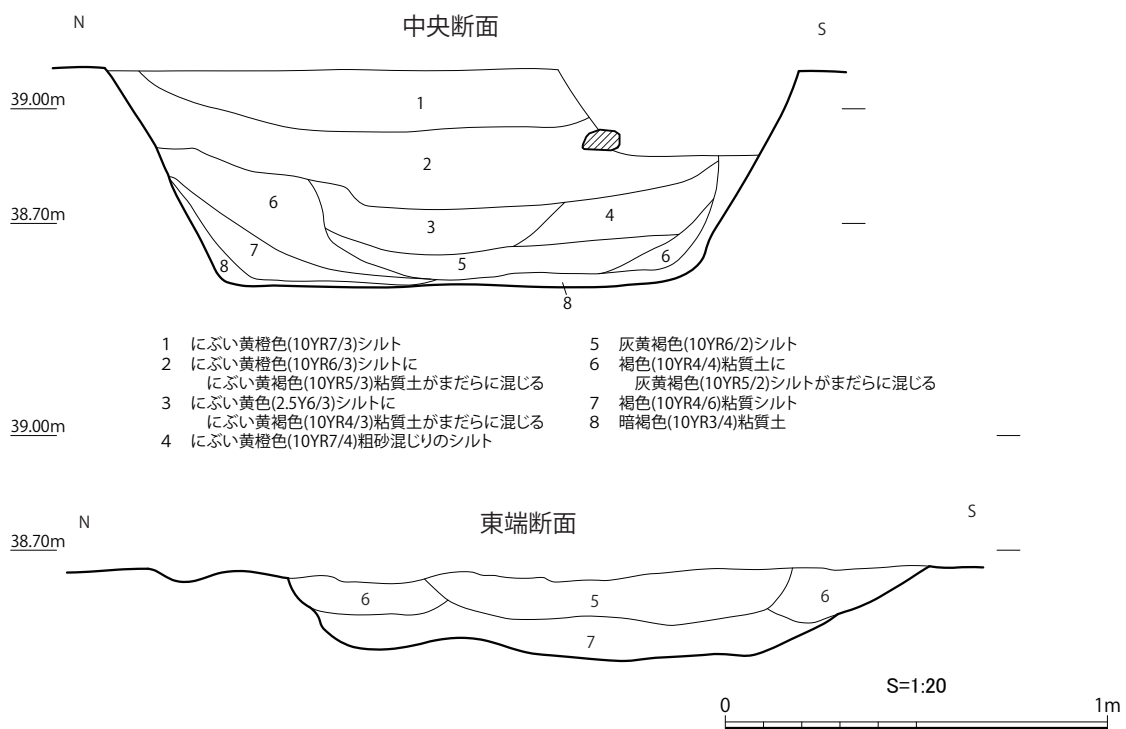


図 22 溝 5218 断面図

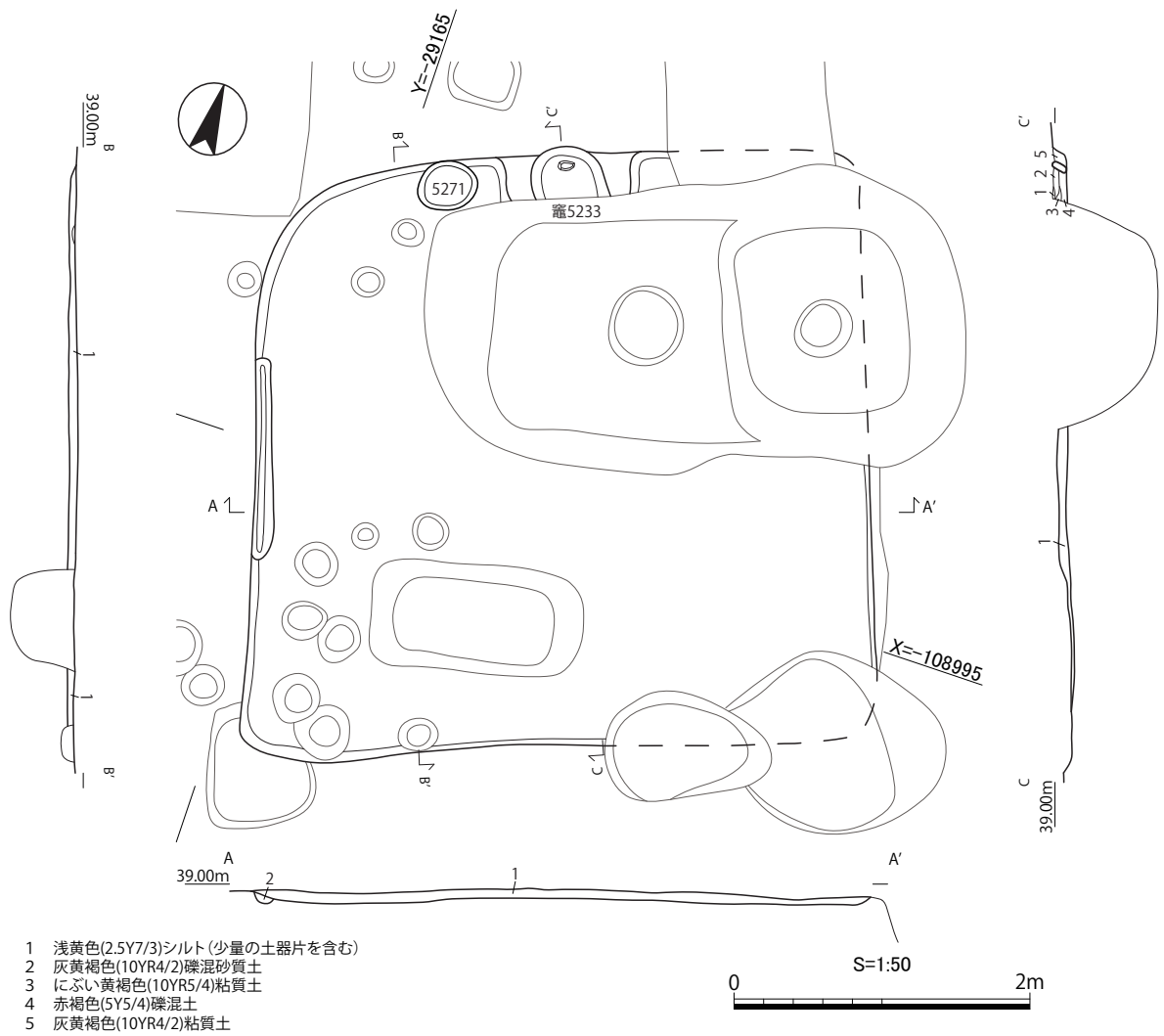


図 23 竪穴建物 3 平・断面図

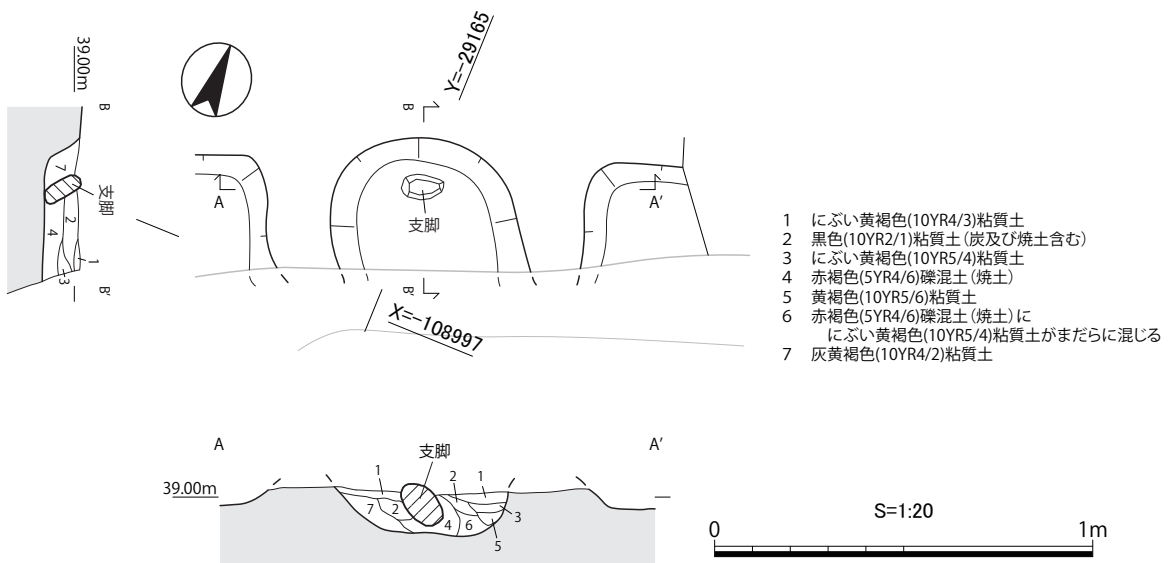


図 24 竪穴建物 3 竈 5233 平・断面図

は全体的に大きく削平を受けている関係から浅い。特に東側は畑地の開墾によって削平されていた。溝自体は東、西側共に調査地外に延びている。平面は直線状を呈する。規模は検出長 20.1 m、幅 1.8 m、深さ 0.4 m を測る。方向は W13° S である。埋土は基本層がにぶい黄橙色 (10YR7/3) シルトである。溝内から須恵器の円面硯 (図 51 - 54)、須恵器の坏蓋 (図 51 - 46 ~ 49)、須恵器の坏 (図 51 - 50 ~ 53)、瓦 (図 65 - 270 ~ 272) が出土した。出土した遺物から平安時代に属するものと考えられる。当溝は北側にて南北方向に延びる溝 5237 を切っている。北側にて並列する溝 5226 と出土遺物が同時期であることから、同時に稼働していた可能性が高い。条坊に関連した区画溝であろう。

溝 5226 (図 21、図版 29) B 区北側中央の 3 A・B、4 A・B 区にて検出した溝である。東西方向に延びており、東端は攪乱、西端は溝 5237 によって切られている。平面は直線状を呈する。規模は検出長 2.4 m、幅 0.8 m、深さ 0.23 m を測る。方向は W11° S である。埋土は基本層としてにぶい黄褐色 (10YR5/4) シルトである。溝内から須恵器の坏身 (図 51 - 40) が出土した。時期は出土遺物から飛鳥時代に属するものと考えられる。当溝は溝 5237 の出土遺物から同時期の L 字状区画溝であろう。

溝 5237 (図 21、図版 26) B 区北側中央の 3 A 区にて検出した南北方向に延びる溝である。当地は深く削平を受けている。北側は調査地外に延びている。南側は東西方向に延びる溝 5218 に切られている。平面は直線状を呈する。規模は検出長 3.8 m、幅 1.3 m、深さ 0.33 m を測る。方向は N 3° W である。埋土は基本層がにぶい黄褐色 (10YR5/4) シルトである。溝内から須恵器の坏 (図 51 - 36) が出土した。遺物から飛鳥時代に属するものと考えられる。当溝は南側の溝 5218 よりも古出であるが、同時期に稼働していた可能性が高い。

竪穴建物 3 (図 21・23、図版 27・28) B 区中央の 3・4 C 区にて検出した竪穴建物である。埋土は基盤層である明黄褐色 (2.5Y6/6) シルトに類似する浅黄色 (2.5Y7/3) シルトが切り込んでいた。東辺は攪乱によって削平されており検出できなかった。建物の北東、南東側は中世の土坑によって切られていた。規模は東西方向に推定 4.7 m、南北方向に 4.1 m を測る。平面形状は方形を呈している。建物の方位は、N 20° W である。北辺中央に竈を有していた。竪穴建物の床面からの高さは最大深度 0.11 m を測る。支柱穴、貯蔵穴は確認できなかった。また、竪穴建物に付随する施設の遺構についても明確なものは検出できなかった。建物の北辺に位置する土坑 5271 から同時期の須恵器が出土しており、竈の西側に接する関係から貯蔵穴の可能性もあるが小規模である。床面の貼床、床面の掘方についても検出できなかった。

竈は建物の北辺中央に位置する。南側の袖裾部は中世の土坑に切られており、検出できなかった。規模は南北検出幅 0.6 m、横幅 0.8 m を測る。平面形状は建物の北辺からコの字状に突き出している。竈の袖は平行に南側へ延び、削り出された基盤層上にシルトを幾重にも積み重ねていた。床面には貼床がみられ、被熱を受けて固く締っていた。竈の燃焼部中央には支脚が設置されていた。支脚は全長 0.18 m、厚さ 0.06 m を測るチャート質の楕円礫である。竈の床面に突き刺した状態で鍋の底を支えていたものと推定されるが、南西方向に傾いていた。建物の南東側床面から須恵器の坏 (図 51 - 39) が出土した。

3. A 区上層遺構 (鎌倉時代～室町時代)

柱穴 39 (図 25、図版 1・2) A 区南側中央の 4 I 区にて検出した柱穴である。平面は円形を呈する。規模は長径 0.39 m、短径 0.36 m、深さ 0.26 m を測る。中央に礎石を有する。埋土は主に暗灰黄色 (2.5Y5/2) シルトである。柱痕は抜き取りが行われたものと考えられる。柱穴内から青磁の碗 (図 52 - 63) が出土した。出土した遺物から鎌倉時代に属するものと考えられる。建物として検証できなかったが、北側

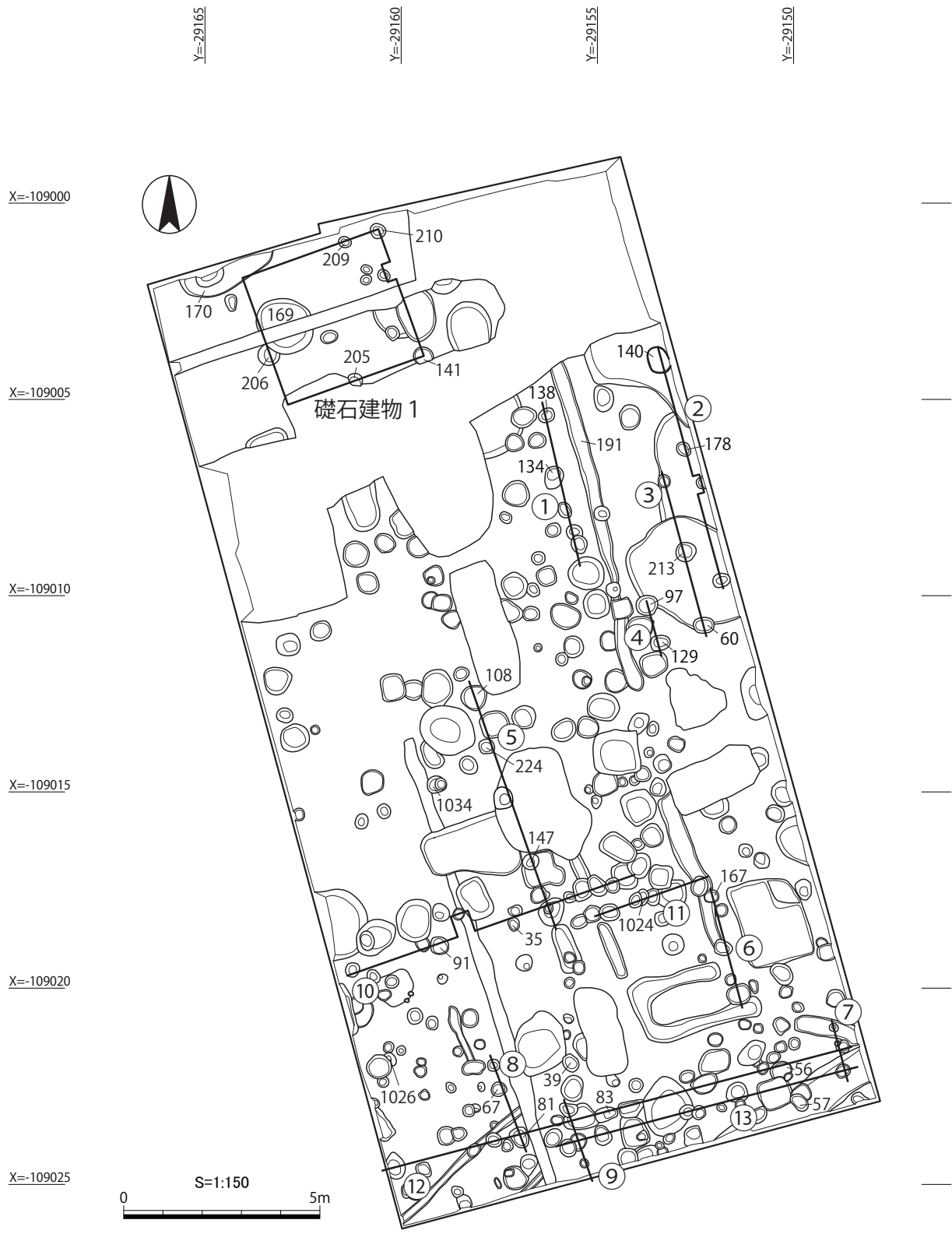


图 26 礎石建物・礎石列平面图

に隣接する柱穴 38・215 の柱穴から同柱穴と同様の礎石を検出した。これらの柱穴は 0.6 ～ 0.8 m 間隔で列をなしている。柱穴間が狭く継続する柱穴は検出できなかった。

柱穴 56 (図 25、図版 1・2) A 区南東側の 5 I 区にて検出した柱穴である。平面は円形を呈する。規模は長径 0.51 m、短径 0.48 m、深さ 0.36 m を測る。埋土は主に暗灰黄色 (2.5Y5/2) シルトである。柱痕は抜き取りが行われた形跡がみられた。柱穴内から土師器の坏 (図 52 - 56・59) が出土した。出土した遺物から室町時代に属するものと考えられる。建物としては検証できなかった。北側に隣接する柱穴 55 は築地塀に伴う柵列の柱穴である関係から、当柱穴も築地塀に関連している可能性もある。

柱穴 57 (図 25、図版 1・2) A 区南東側の 5 I 区にて検出した柱穴である。平面は円形を呈する。規模は長径 0.49 m、短径 0.38 m、深さ 0.32 m を測る。埋土は主に灰黄褐色 (10YR4/2) シルトである。柱痕は抜き取りが行われた形跡がみられた。柱穴内から土師器の皿 (図 52 - 71 ~ 75)、陶器の碗 (図 52 - 76) が出土した。出土した遺物から室町時代に属するものと考えられる。柱穴は築地塀の側溝 173 を切っていることから、龍門がなくなった後に建てられた建物の柱穴と考えられる。

柱穴 83 (図 25、図版 1・2) A 区南側中央の 4 I 区にて検出した柱穴である。平面は楕円形を呈する。規模は長径 0.61 m、短径 0.46 m、深さ 0.21 m を測る。中央に礎石を有する。埋土は主に灰黄褐色 (10YR4/2) シルトである。柱痕は西側に抜き取りが行われた形跡がみられた。柱穴内から土師器の羽釜 (図 52 - 64) が出土した。出土した遺物から室町時代に属するものと考えられる。建物として検証できなかったが、東側に隣接する柱穴 185、西側の柱穴 65 から同様の礎石が出土している。これらの柱穴は 0.8 m 間隔で並ぶことから、東西方向の建物の可能性がある。

柱穴 108 (図 25、図版 1・2) A 区中央の 4 G 区にて検出した柱穴である。平面は円形を呈する。規模は長径 0.62 m、短径 0.58 m、深さ 0.20 m を測る。中央に礎石を有する。埋土は主に灰黄褐色 (10YR4/2) シルトである。柱痕は抜き取りが行われた形跡がみられた。柱穴内から土師器の皿 (図 52 - 62) が出土した。出土した遺物から室町時代に属するものと考えられる。南側の柱穴 9 から同様の礎石が出土している。この柱穴は 1.6 m 間隔で並ぶことから、南北方向の建物の可能性がある。

柱穴 167 (図 25、図版 1・2) A 区南東側の 5 H 区にて検出した柱穴である。平面は円形を呈する。規模は長径 0.38 m、短径 0.36 m、深さ 0.23 m を測る。中央に礎石を有する。埋土は主に灰黄褐色 (10YR4/2) シルトである。柱痕は検出できなかった。柱穴内から備前焼の大甕 (図 52 - 66) が出土した。出土した遺物から室町時代に属するものと考えられる。南側の柱穴 42・43 から同様の礎石が出土している。これらの柱穴は 1.3 m 間隔で並ぶことから、南北方向の建物の可能性がある。

柱穴 213 (図 25、図版 1・2) A 区北東側の 5 F 区にて検出した柱穴である。平面は円形を呈する。規模は長径 0.37 m、短径 0.36 m、深さ 0.11 m を測る。中央に礎石を有する。埋土は主に灰黄褐色 (10YR4/2) シルトである。柱痕は検出できなかった。柱穴内から土師器の皿 (図 52 - 63) が出土した。出土した遺物から室町時代に属するものと考えられる。南側の柱穴 60、北側の柱穴 211 から同様の礎石が出土している。これらの柱穴は 1.4 m 間隔で並ぶことから、南北方向の建物の可能性がある。

柱穴 1024 (図 25、図版 1・2) A 区南側中央の 4 H 区にて検出した柱穴である。平面は円形を呈する。規模は長径 0.27 m、短径 0.26 m、深さ 0.25 m を測る。中央に礎石を有する。埋土は主に灰黄褐色 (10YR4/2) シルトである。柱痕は検出できなかった。柱穴内から土師質の土錘 (図 52 - 68) が出土した。東側の柱穴 27 ~ 29 から同様の礎石が出土している。これらの柱穴は切り合った状態で列をなす。東西方向の建物の可能性がある。

柱穴 1026 (図 25、図版 1・2) A 区南西側の 3 H 区にて検出した柱穴である。平面は円形を呈する。

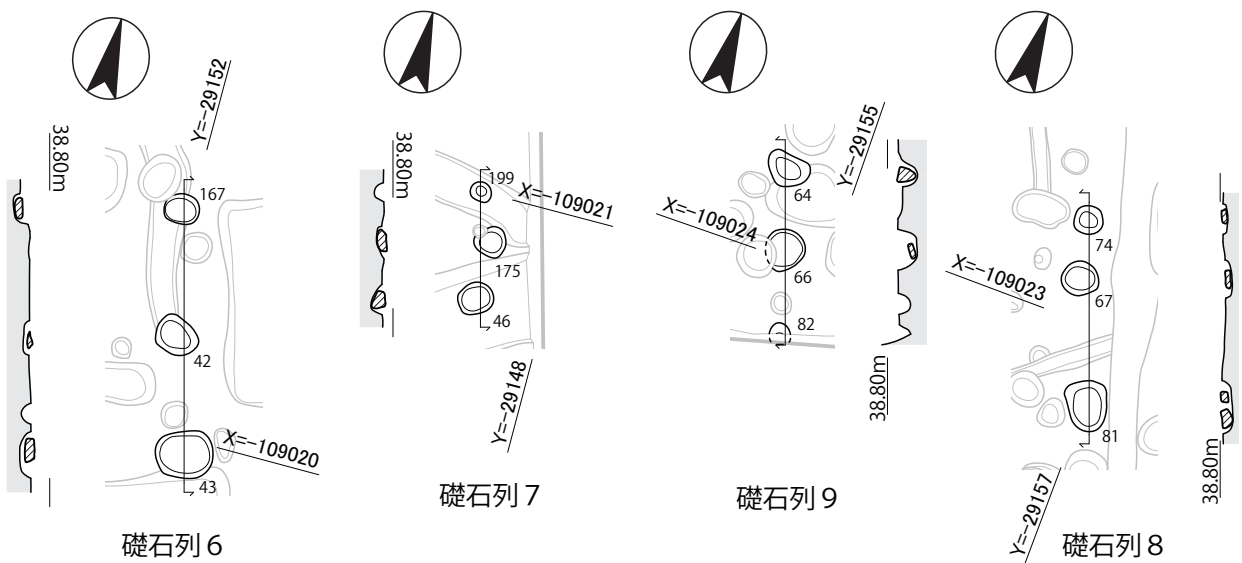
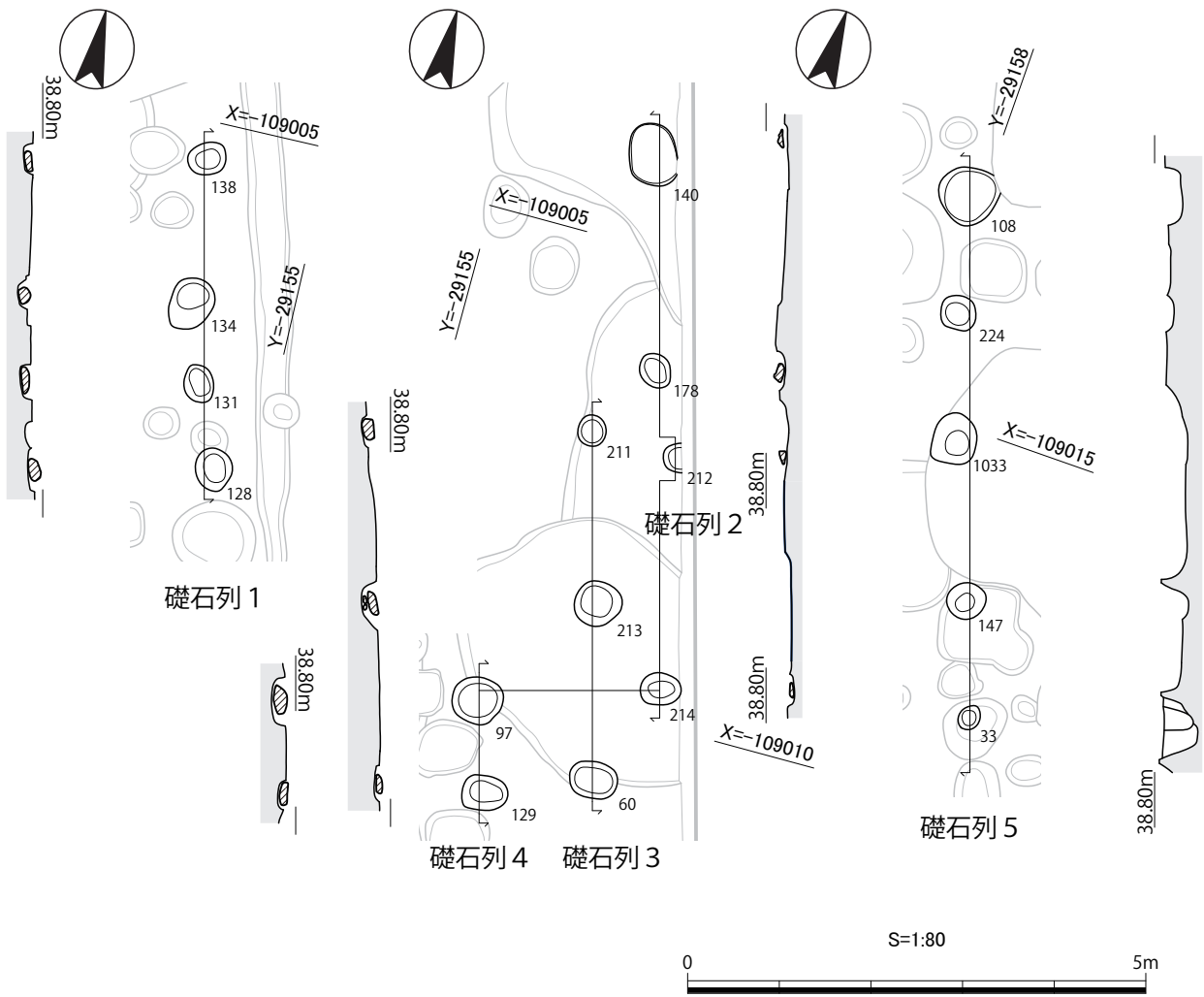


图 27 礎石列 1 ~ 9 平・断面图

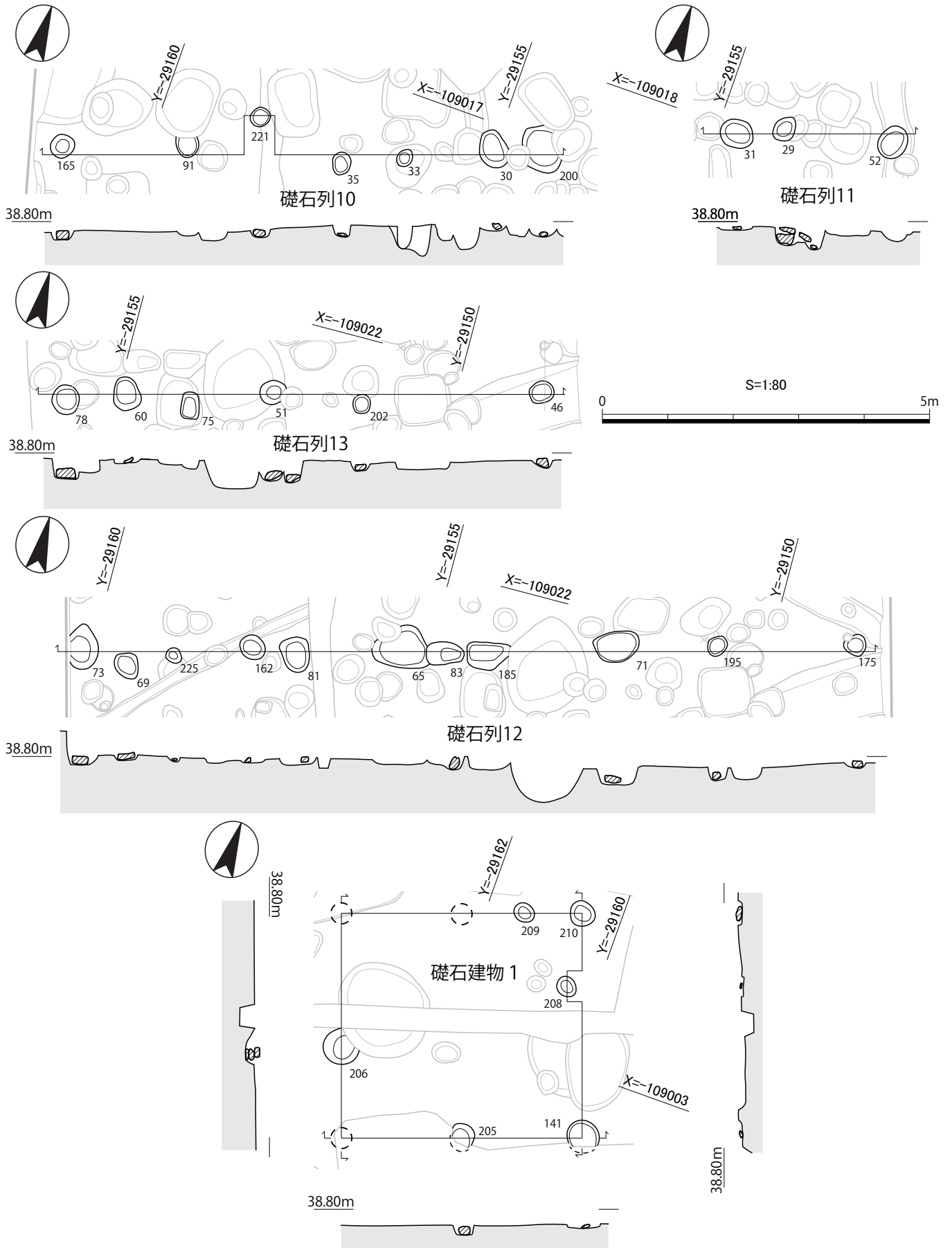


图 28 礎石列 10 ~ 13、礎石建物 1 平・断面图

規模は長径 0.32 m、検出短径 0.21 m、深さ 0.22 mを測る。埋土は主に灰黄褐色（10YR4/2）シルトである。柱痕は検出できなかった。柱穴内から土師質の土錘（図 52 - 67）が出土した。建物として検証できなかった。

柱穴 1034（図 25、図版 1・2） A区中央の 4 G 区にて検出した柱穴である。南北方向に延びる溝に切られている。平面は円形を呈する。規模は長径 0.31 m、短径 0.30 m、深さ 0.16 mを測る。埋土は主に灰黄褐色（10YR4/2）シルトである。柱痕は検出できなかった。柱穴内から土師質の土錘（図 52 - 69）が出土した。

礎石建物 1（図 26・28、図版 1・2） A区北側中央の 3・4 E 区にて検出した礎石建物である。南北方向に 2 間、東西方向に 2 間の建物である。南西側の柱穴と東辺中央の柱穴は攪乱に切られている。北西の柱穴は土坑 170 に切られている。全ての柱穴に礎石を持っている。南辺は中央に礎石 205 を有するが、北辺の中央は確認できなかった。北辺の東から半間の位置に礎石 209 を有している。柱穴は円形を呈する。柱穴は直径 0.20 ~ 0.30 m、深さ約 0.10 mを測る。埋土は主に暗灰黄色（2.5Y4/2）シルトである。柱痕は検出できなかった。礎石は安定した平石を掘方の中央に設置している。

礎石列 1（図 26・27、図版 1・2） A区北側中央の 4 F 区にて検出した礎石列である。南北方向に延びる 4 間である。礎石 138 と礎石 134 の間が広いことから 1 基の礎石が欠損しているものと考えられる。柱穴は円形を呈する。規模は検出長 3.4 m、個々の柱穴は直径 0.30 ~ 0.35 m、深さ約 0.20 mを測る。方向は N17° W である。埋土は主に灰黄褐色（10YR4/2）シルトである。柱痕は検出できなかった。礎石は安定した平石を掘方の中央に設置している。東側に近接して平行に延びる溝がある。建物の雨落ち溝の可能性はある。

礎石列 2（図 26・27、図版 1・2） A区北東側の 5 E・F 区にて検出した礎石列である。南北方向に延びる 3 間である。礎石 140 と礎石 178 の間が広いことから 1 基の礎石が欠損しているものと考えられる。柱穴は円形を呈する。規模は検出長 3.2 m、礎石間は約 0.9 m、個々の柱穴は直径 0.30 ~ 0.40 m、深さ約 0.10 mを測る。方向は N19° W である。埋土は主に灰黄褐色（10YR4/2）シルトである。柱痕は検出できなかった。礎石は安定した平石を掘方の中央に設置している。西側に平行に延びる礎石列 3 が接している。

礎石列 3（図 26・27、図版 1・2） A区北東側の 5 F 区にて検出した礎石列である。南北方向に延びる 2 間である。柱穴は円形を呈する。規模は検出長 3.7 m、個々の柱穴は直径 0.40 ~ 0.50 m、深さ約 0.15 mを測る。方向は N19° W である。埋土は主に灰黄褐色（10YR4/2）シルトである。柱痕は検出できなかった。礎石は安定した平石を掘方の中央に設置している。

礎石列 4（図 26・27、図版 1・2） A区東側の 5 G 区にて検出した礎石列である。南北方向に延びる 1 間である。礎石 97 と礎石 129 の間は狭く、約 0.9 mを測ることから半間の縁側、底部分と考えられる。柱穴は円形を呈する。規模は検出長 1.0 m、礎石間は約 0.9 m、個々の柱穴は直径 0.48 ~ 0.53 m、深さ約 0.15 mを測る。方向は N20° W である。埋土は主に灰黄褐色（10YR4/2）シルトである。柱痕は検出できなかった。礎石は安定した平石を掘方の中央に設置している。東側に平行に延びる礎石列 3 がある。

礎石列 5（図 26・27、図版 1・2） A区中央の 4 F・G 区にて検出した礎石列である。南北方向に延びる 4 間である。礎石 224 と礎石 147 の間が広いことから 2 基の礎石が欠損しているものと考えられる。柱穴は円形を呈する。規模は検出長 5.7 m、礎石間は約 1.2 m、個々の柱穴は直径 0.60 ~ 0.70 m、深さ約 0.20 mを測る。方向は N20° W である。中央に礎石を有し、埋土は主に灰黄褐色（10YR4/2）

シルトである。柱痕は検出できなかった。礎石は安定した平石を掘方の中央に設置している。南側の礎石 201 にて東西方向の礎石列 10 に繋がるものと考えられる。

礎石列 6 (図 26・27、図版 1・2) A 区南東側の 5 H 区にて検出した礎石列である。南北方向に延びる 2 間である。北側にて東西方向に延びる礎石列 10・11 に繋がる可能性がある。柱穴は円形を呈する。規模は検出長 2.9 m、礎石間は約 1.3 m、個々の柱穴は直径 0.40～0.50 m、深さ約 0.10 m を測る。方向は N20° W である。埋土は主に灰黄褐色 (10YR4/2) シルトである。柱痕は検出できなかった。礎石は安定した平石を掘方の中央に設置している。

礎石列 7 (図 26・27、図版 1・2) A 区南東側の 5 I 区にて検出した礎石列である。南北方向に延びる 2 間である。龍門の側溝を切っている。柱穴は円形を呈する。規模は検出長 1.2 m、礎石間は約 0.6 m、個々の柱穴は直径 0.35～0.40 m、深さ約 0.20 m を測る。方向は N16° W である。中央に礎石を有し、埋土は主に灰黄褐色 (10YR4/2) シルトである。柱痕は検出できなかった。礎石は安定した平石を掘方の中央に設置している。西側の礎石列 7・9 に繋がる可能性がある。

礎石列 8 (図 26・27、図版 1・2) A 区南西側の 3 H・I 区にて検出した礎石列である。南北方向に延びる 3 間である。礎石 67 と礎石 81 の間が広いことから 1 基の礎石が欠損しているものと考えられる。柱穴は円形を呈する。規模は検出長 2.1 m、礎石間は約 0.6 m、個々の柱穴は直径 0.30～0.50 m、深さ約 0.15 m を測る。方向は N25° W である。埋土は主に灰黄褐色 (10YR4/2) シルトである。柱痕は検出できなかった。礎石は安定した平石を掘方の中央に設置している。南側の礎石列 12 に繋がるものと考えられる。

礎石列 9 (図 26・27、図版 1・2) A 区南側中央の 4 I 区にて検出した礎石列である。南北方向に延びる 2 間である。柱穴は円形を呈する。規模は検出長 1.8 m、礎石間は約 0.9 m、個々の柱穴は直径 0.35～0.40 m、深さ約 0.25 m を測る。方向は N19° W である。埋土は主に灰黄褐色 (10YR4/2) シルトである。柱痕は検出できなかった。礎石は平石を掘方の中央に設置している。北側の礎石列 12・13 に繋がるものと考えられる。

礎石列 10 (図 26・28、図版 1・2) A 区中央の 3～5 H 区にて検出した礎石列である。東西方向に延びる 5 間である。礎石 91 と礎石 35 の間が広いことから 1 基の礎石が欠損しているものと考えられる。柱穴は円形を呈する。規模は検出長 7.1 m、礎石間は約 0.9 m と約 1.8 m、個々の柱穴は直径 0.35～0.70 m、深さ約 0.20 m を測る。方向は W18° S である。中央に礎石を有し、埋土は主に灰黄褐色 (10YR4/2) シルトである。柱痕は検出できなかった。礎石は安定した平石を掘方の中央に設置している。南側の礎石列 11 は平行に延び、近接している。建物の南側底の可能性はある。

礎石列 11 (図 26・28、図版 1・2) A 区南側中央の 4 H 区にて検出した礎石列である。東西方向に延びる 2 間である。礎石 29 と礎石 52 の間が広いことから 1 基の礎石が欠損しているものと考えられる。柱穴は円形を呈する。規模は検出長 2.4 m、礎石間は約 0.9 m、個々の柱穴は直径 0.30～0.45 m、深さ約 0.15 m を測る。方向は W17° S である。中央に礎石を有し、埋土は主に灰黄褐色 (10YR4/2) シルトである。柱痕は検出できなかった。礎石は安定した平石を掘方の中央に設置している。東側の礎石列 6 に繋がる一連の建物と考えられる。

礎石列 12 (図 26・28、図版 1・2) A 区南側中央の 3～5 I 区にて検出した礎石列である。東西方向に延びる 9 間である。礎石間は約 1.8 m、0.9 m のものと不規則な間隔のものがある。柱穴は円形を呈する。規模は検出長 12.5 m、礎石間は約 0.9～1.8 m、個々の柱穴は直径 0.30～0.70 m、深さ約 0.25 m を測る。方向は W19° S である。中央に礎石を有し、埋土は主に灰黄褐色 (10YR4/2) シルトである。

柱痕は検出できなかった。礎石は安定した平石を掘方の中央に設置している。南側の礎石列 13 が狭い間隔で平行している。当建物の底に該当するものと考えられる。

礎石列 13 (図 26・28、図版 1・2) A 区南東側の 4・5 I 区にて検出した礎石列である。東西方向に延びる 5 間である。礎石 202 と礎石 46 の間が広いことから 1 基の礎石が欠損しているものと考えられる。礎石間は約 1.2 m と約 0.9 m のものがある。柱穴は円形を呈する。規模は検出長 6.2 m、礎石間は約 0.9 ～ 1.2 m、個々の柱穴は直径 0.30 ～ 0.40 m、深さ約 0.25 m を測る。方向は W18° S である。中央に礎石を有し、埋土は主に灰黄褐色 (10YR4/2) シルトである。柱痕は検出できなかった。礎石は安定した平石を掘方の中央に設置している。北側の礎石列 12 に接している。礎石列 12 の底部分の可能性はある。

土坑 150 (図 25、図版 5-3) A 区南西側の 3 I 区にて検出した土坑である。西側の調査地外に延びる。平面形状は不定形を呈する。規模は検出長 1.2 m、検出幅 0.5 m、深さ約 0.35 m を測る。埋土は主に灰黄褐色 (10YR4/2) シルトである。埋土中には大量の土師器皿 (図 52-77～83、図版 32-1)、壁土 (図 69-308・309) が含まれていた。遺物は細かく破損されていることから廃棄土坑と考えられる。

土坑 170 (図 25) A 区北西側の 3 D 区にて検出した大型の土坑である。北側は B 区に跨っている。平面形状は不定形を呈する。規模は検出長 2.5 m、検出幅 0.6 m、深さ約 0.65 m を測る。埋土は主に灰黄褐色 (10YR4/2) シルトである。出土遺物は土師器皿 (図 53-84～86、図版 32-2)、陶磁器 (図 53-87～89、図版 32-2)、瓦質の羽釜 (図 53-90、図版 32-2) がある。

土坑 192 (図 25・29、図版 5-4) A 区北東側の 5 E 区にて検出した大型の土坑である。北側は攪乱に切られ、南側は土坑 193 を切っている。東側は調査地外へ広がっている。平面形状は不定形を呈する。規模は検出長 2.6 m、検出幅 2.1 m、深さ約 0.25 m を測る。埋土は主に灰黄褐色 (10YR4/2) シルトである。出土遺物は土師器皿等の細片があった。

土坑 194 (図 25、図版 2・3) A 区北東側の 5 F・G 区にて検出した大型の土坑である。北側は土坑 193 を切っている。東側は調査地外へ広がっている。平面形状は楕円形を呈する。規模は検出長 3.4 m、検出幅 2.3 m、深さ約 0.20 m を測る。埋土は主に灰黄褐色 (10YR4/2) シルトである。出土遺物は東播系須恵器の片口鉢 (図 52-65、図版 31-2)、鉄滓 (図 69-310) があった。

土坑 1001 (図 25・33、図版 5-6～8) A 区南側の 4・5 I 区にて検出した大型の土坑である。東側は溝 101、西側は土坑 103 に切られている。平面形状は長方形を呈する。規模は検出長 6.6 m、検出幅 3.3 m、深さ約 0.6 m を測る。埋土は主に褐色 (10YR4/2) 粘質砂礫シルトである。出土遺物には中世の陶磁器 (図 56-108～114、図版 32-4) がある。遺構の性格は、土採り土坑であろう。方形を呈する採掘坑が東西に切り合っている。

土坑 1017-1・2 (図 25・30～32) A 区西側の 3 H 区にて検出した土坑である。層位は中・近世整地層下面にて検出した。当初は 1 基の土坑として調査を進めたが、後の検証で東西方向に並列した状態で 2 基が設立されたことが判明した。両土坑は、東側の 1017-1 を先に造り、その後西側に 1017-2 を造り替え、或いは増築している。

遺構の性格は、酒造の工程で搾る作業を行う男柱の施設である。北側の土坑 1018 は搾った酒を溜めるための垂壺を設置していた土坑と考えられる。

平面形状は個々に隅丸方形を呈する。断面形状は中層にて掘返しが行われていることから、2 段のフラスコ状を呈する。規模は 1017-1・2 の東西方向 3.4 m、南北方向 2.1 m、最深部 0.9 m を測る。両土坑共に土坑の中央より南寄りに柱を設置している。形状、規模等も同様であることから、単体の土坑

が造り替えられたか、或いは増築して重複したものと解釈される。

土坑は東側 1017-1 から施工された後に、西側 1017-2 が追加された。また、形状は並列していることから、両土坑は一連の流れで短期間に施工され、同時期に機能していたことも考えられる。その変遷を工程別に分類すると、少なくとも東側 1017-1 は 2 段階、西側 1017-2 は 5 段階となる。

以下、構築過程の変遷を 7 段階（図 30・31）に分けて述べた。

1 段階（1017-1） 隅丸方形を呈した東西辺 1.8 m、南北辺 2.1 m、深さ 0.9 m を測る土坑が掘削される。土坑の中心から南側へ約 0.4 m 寄った箇所に直径 0.4 m、深さ 0.15 m の掘方が掘削され、直径 0.3 m の男柱が垂直に設置されている。男柱は埋土が乾燥状態であったため劣化し、表面に樹皮が残存しているにも関わらず、中心部は空洞となっていた。残存していた大きさは、僅か全長 0.3 m であり、横木等の他の部材については残存していなかった。男柱は残存部分が基底部に近いことから、ほぞ孔等の特別な加工痕は確認できなかった。材は栗である。

2 段階（1017-1） 土坑床面に垂直に設定された男柱は、南北側に固定するためと考えられる重石を設置している。重石は南北側の 2 方向から男柱を挟み込んでいるが、なお強度の高まる四方に 4 石を置く方法ではない。重石は角礫で、東西方向に長軸を有する。規模は北側が全長 0.74 m、幅 0.45 m、高さ 0.32 m、南側は全長 0.62 m、幅 0.35 m、高さ 0.28 m を測る。石の下位は、水平に埋められた数層の埋土が観察できたが、横木等の施設は確認できなかった。重石の置かれた配置から、南北方向に横木が設定されていたことが想定されるが、乾燥により残存しなかったものと考えられる。

3 段階（1017-2） 土坑 1017-1 の西

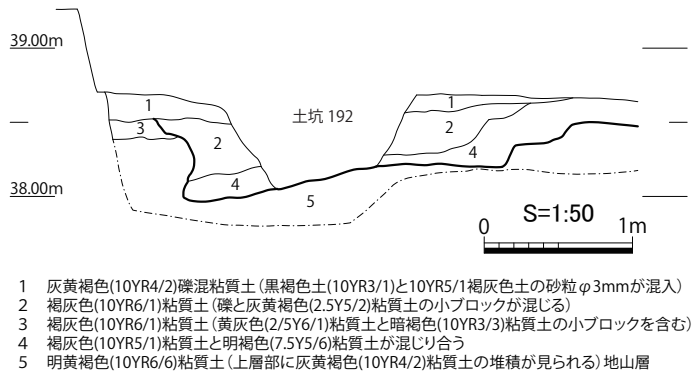


図 29 土坑 192 断面図

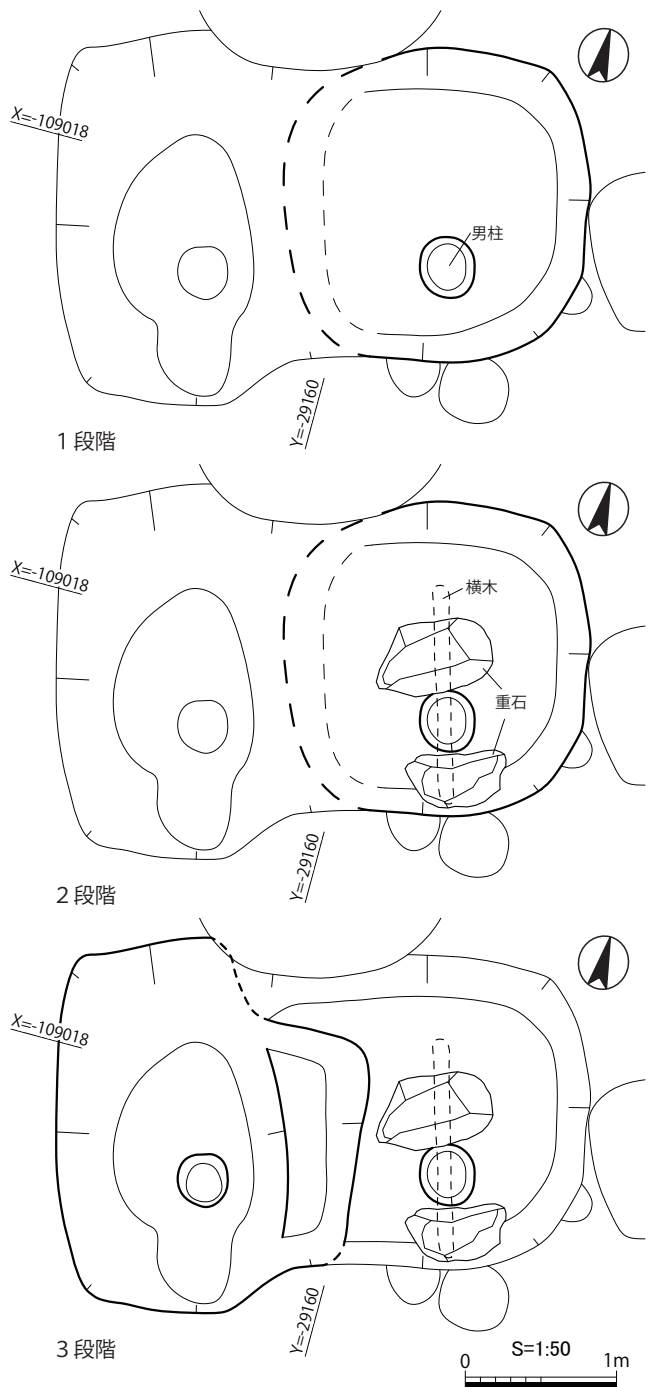


図 30 土坑 1017 変遷図（1～3 段階）

側を切る状態で東西方向 1.9 m、南北方向 2.4 m、最深部 1.6 m の土坑が掘削される。平面形状は隅丸方形である。断面形状は中部が膨らんだフラスコ状を呈する。特に南側の壁は抉れており、横木の南端や重石は壁面に入り込んだ状態であった。規模的には土坑 1017-1 とほぼ同じであるが、掘削された深度は当土坑の方が約 0.9 m 深い。土坑の中心から南側へ約 0.4 m 寄った箇所に直径 0.45 m の男柱が垂直に設置されている。男柱の掘方は、基盤層が水性を多く含んだ粘質及びシルト層であることから明確に検出できなかったが、柱を固定するために設置されていたものと推定される。男柱、横木は栗材を使用していた。

4 段階 (1017-2) 土坑 1017-2 のほぼ中央に設置された男柱は、ほぞ孔が穿たれ、横木が南北方向に通されている。ほぞ孔は男柱の下端から約 0.3 m の位置に縦幅 0.18 m、横幅 0.12 m の大きさで方形を呈する。横木は全長 1.8 m、最大厚 0.16 m を測るが、北端と南端では大きさ、形状が共に異なる。北端は断面が方形を呈し、一辺 0.12 m の建物の柱状に横木の中央まで面取り加工が施されている。南端は材木の樹皮を残した直径 0.16 m を測る丸材である。横木の北側半分は、男柱のほぞ孔を通るが、南半分はほぞ孔より太いので通らない。また、土坑の掘方は、北側が緩い勾配であるが、南側はオーバーハングした状態で抉れ込んでおり、横木が南壁面まで刺さった状態であった。これらの状況を施工された工程から推測すると、男柱に通された横木は、北側がほぞ孔より細いので南側から通している。中央まで通された横木は、南端を南壁の抉られた箇所に突き刺し、上方に上がらない工夫を行っている。また、横木の北端は、横木が南北方向に移動しないように北壁と横木間に板石を挟んで固定している。

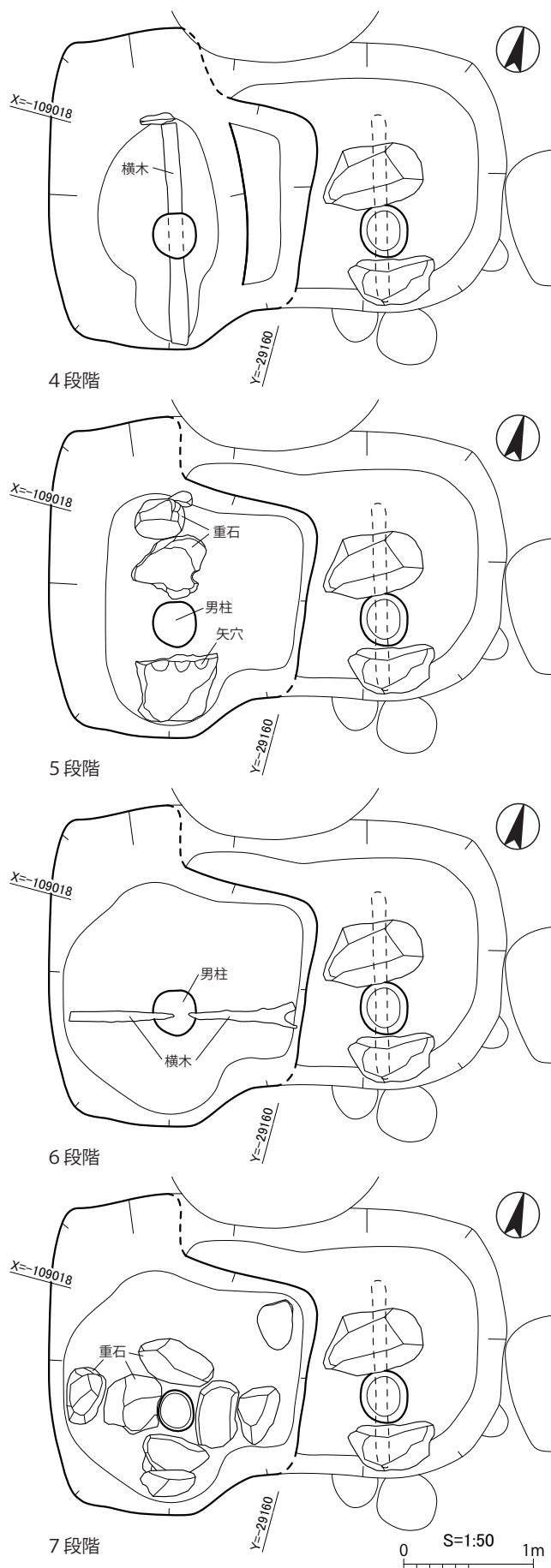


図 31 土坑 1017 変遷図 (4~7 段階)

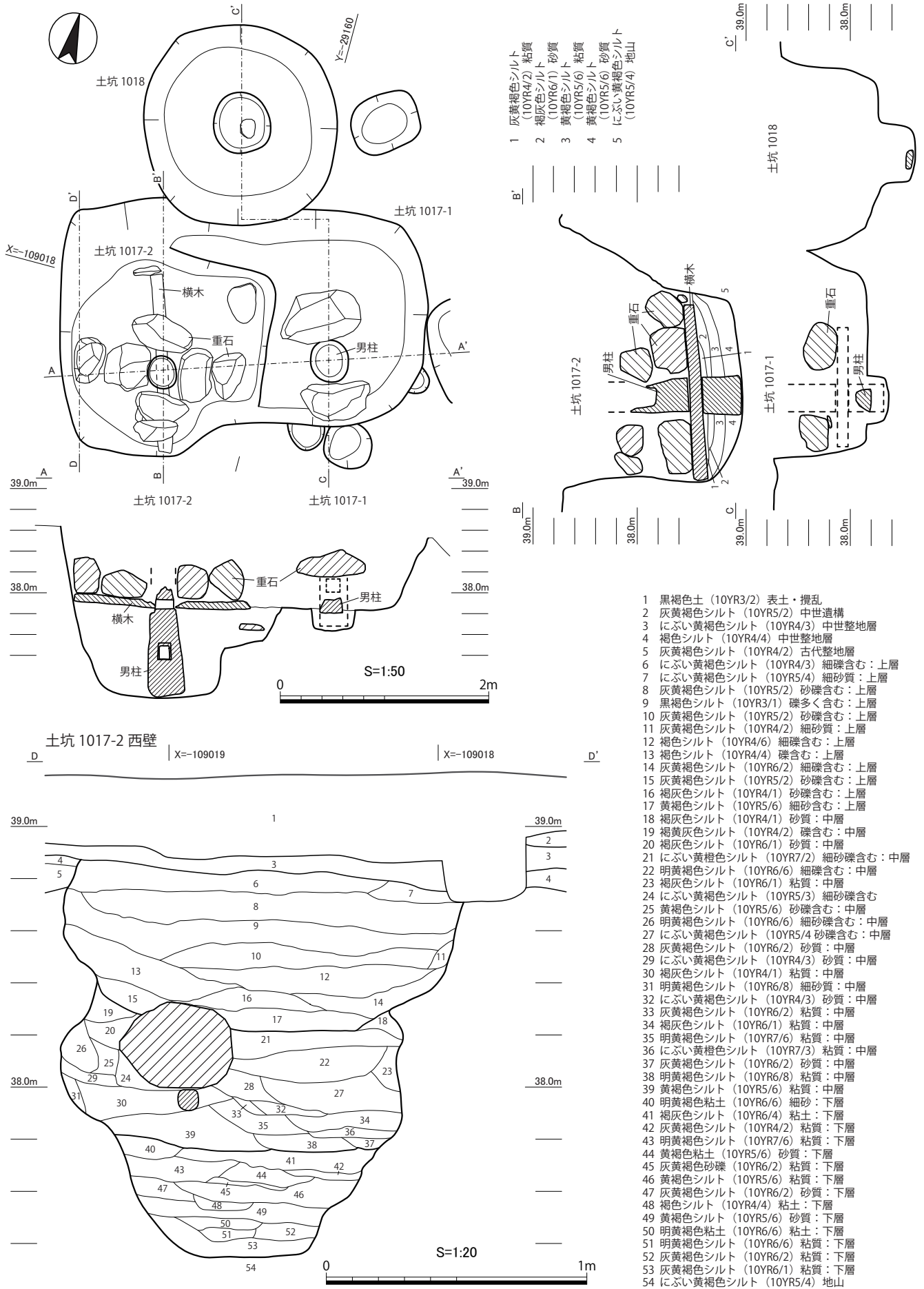


図 32 土坑 1017・1018 平・断面図

5 段階（1017 - 2） 横木は男柱のほぞ孔に南北方向に通され、男柱が南北方向に動かないように横木の上に3石の重石を載せている。重石は北側に2石、南側に1石が置かれており、北端の重石は長辺0.37 m、短辺0.32 m、厚さ0.31 mを測る円礫、中央の重石は長辺0.57 m、短辺0.45 m、厚さ0.36 mを測る角礫、南端の重石は長辺0.62 m、短辺0.55 m、厚さ0.29 mを測る方形の花崗岩である。個々に違った石材を用いられており、特に南端の花崗岩は上面に矢穴が見られることから、寺社、城郭の石垣に用いられていたものの転用品と考えられる。矢穴は石材の長辺に3カ所並んで穿たれており、石材の両端から0.07 m内側にみられる。最大の矢口は幅約0.12 m、深さ約0.08 mを測る。これらの横木と重石は、男柱が搾り工程で浮上しないように施工した最下部の施工である。

6 段階（1017 - 2） 南北方向の横木と重石は約0.30 m埋め戻され、男柱の上位に穿かれたほぞ孔に東西方向の横木が設置されている。横木は東西方向に動かないように西壁に端部を当てて固定している。横木は男柱部分の乾燥によって著しく劣化しており、中央部分は残存していなかった。男柱もこの部分で劣化しており、上位は残存していなかった。横木は全長1.8 m、直径0.15 mを測る樹皮を残した栗の丸材である。西端は面取りしているが、東端は二股に枝分かれた股木を用いている。

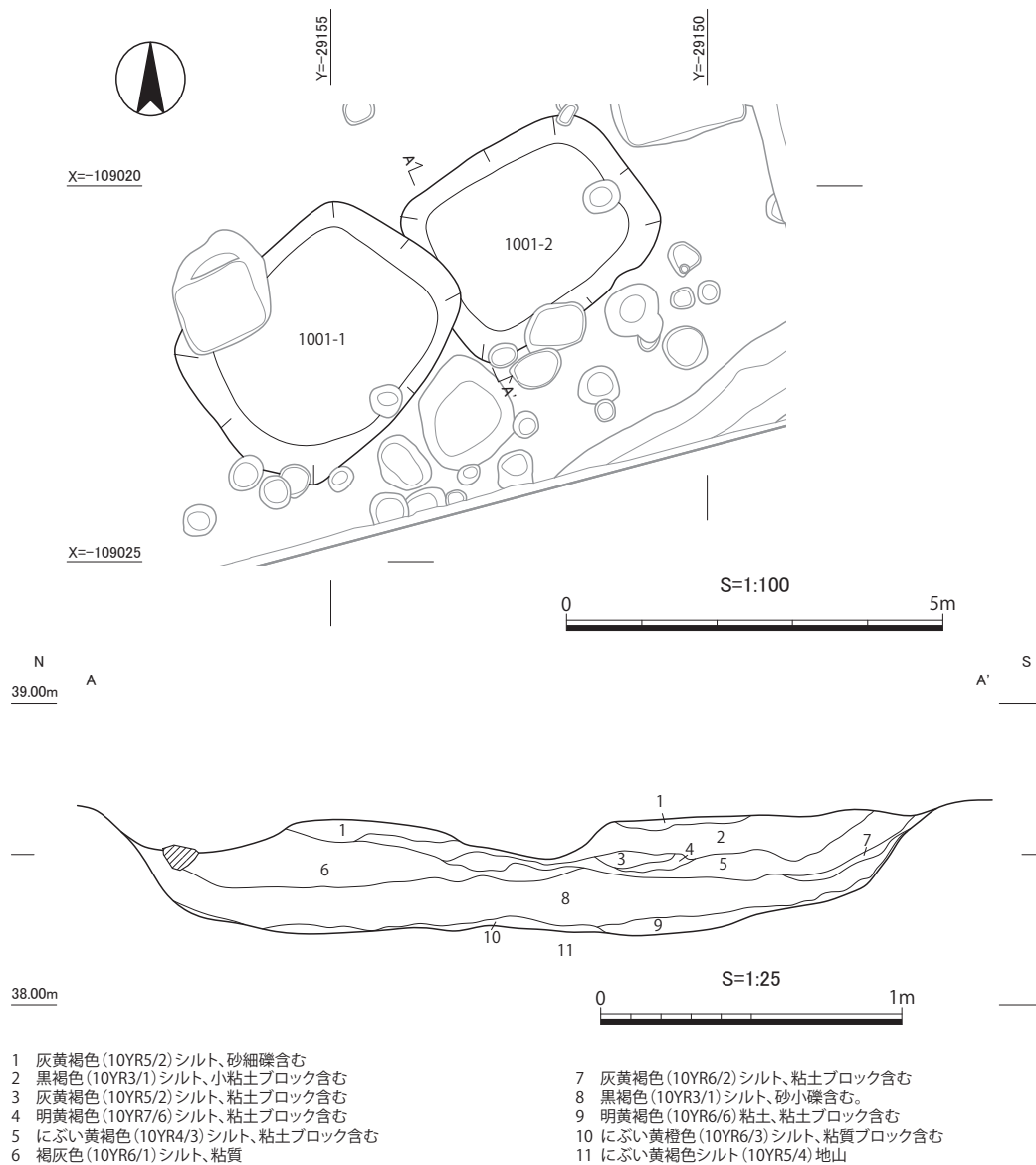


図 33 土坑 1001 - 1・1001 - 2 平・断面図

7段階（1017－2） 東西方向の横木上に4石、南北方向の横木上に3石の重石を載せている。重石は男柱を中心に東西南北方向に列を成しており、北側は長辺0.61 m、短辺0.32 m、厚さ0.31 mを測る1石がある。東側列は2石あり、東端が長辺0.47 m、短辺0.32 m、厚さ0.31 m、西側が長辺0.52 m、短辺0.35 m、厚さ0.29 mを測る角礫である。南側列は南端が長辺0.47 m、短辺0.32 m、厚さ0.31 m、北側が長辺0.49 m、短辺0.31 m、厚さ0.26 mを測る角礫である。西側列は2石あり、東端が長辺0.43 m、短辺0.30 m、厚さ0.32 m、西側が長辺0.42 m、短辺0.41 m、厚さ0.27 mを測る角礫である。

上位の重石は全体的に長方形に近い角礫を用いている。東西方向の重石は、横木に直接載せて男柱が浮上しない上部構造であるが、南北方向の重石は直に横木に接していないことから、男柱が南北に振れないように固定した可能性がある。また、男柱の浮上を止めるための余力の重石と考えられる。土坑内から土師皿（図55－115～119）、白磁の合子（図55－120）、灰釉碗（図55－121）、土師質の土錘（図55－123）が出土した。

土坑1018（図25・32） A区西側の3G区にて検出した2段の掘り込み土坑である。層位は南側に接する土坑1017と同様に中・近世整地層下面にて検出した。平面形状は正円、断面形状は碗状を呈する。規模は直径1.8 m、深さ1.5 mを測る。土坑底部にはピットが有した二段掘りとなっている。ピットの規模は直径0.52 m、深さ0.22 mを測る。ピット内には円形の扁平石が設置されていた。埋土は灰黄褐色（10YR4/2）シルトの単一層である。また、埋土内には多くのブロック土が含まれていることから、短期間に埋め戻されたことが窺える。遺構の性格としては、南側に接している土坑1017と同様の酒造に関連した垂壺を設置していた土坑と推測される。土坑内から瓦質の片口鉢（図55－122）が出土した。

埋甕土坑1100（図34・35、図版10・11） A区北西側の3F区にて検出した埋甕土坑である。西側の調査地外に延びる。平面形状は正円形を呈する。断面形状は丸底状を呈し、備前焼の大甕を正位置に据えている。規模は直径0.76 m、深さ約0.31 mを測る。埋土は主に灰黄褐色（10YR4/2）シルトである。土坑内には破損された備前焼の大甕がみられる。A区調査地の中央から北側にかけて多数検出した埋甕の一連である。ほとんどの埋甕土坑から甕を検出することはできなかったが、土坑1000と南側の土坑1001には破損した状態の大甕が残存していた。土坑内から備前焼の大甕（図57－127・128）が出土した。大甕は大きく円球状に膨らんだ丸胴形を呈している。僅かに短く外反した口縁部にはやや縦長に変遷した玉縁状の口縁部を有している。胴部外面は丁寧なヘラ削りにて整形されている。焼成は赤褐色を呈し良好である。

埋甕土坑1101（図34・35、図版10・11） A区北西側の3F区にて検出した埋甕土坑である。北側に接する土坑1100と同様に西側の調査地外に延びる。平面形状は正円形を呈する。断面形状は丸底状を呈し、備前焼の大甕を正位置に据えている。規模は直径0.63 m、深さ約0.22 mを測る。埋土は主に灰黄褐色（10YR4/2）シルトである。土坑内には破損された備前焼の大甕がみられる。A区調査地の中央から北側にかけて多数検出した埋甕の西端に位置する。ほとんどの埋甕土坑から甕を検出することはできなかったが、当土坑から破損した備前焼の大甕（図56－125）が出土した。

埋甕土坑群（西側）（図34、図版10） A区北西側にて検出した埋甕土坑群である。東側の土坑群と同様の埋甕土坑群である。平面形状は円形、断面形状は碗状を呈している。規模は平均直径0.7 m、深さ0.15 mを測る。南北方向に8列、東西方向に7列の埋甕群を検出した。南西側は疎らで他の遺構や攪乱に切られていることから全容を検出することは出来なかった。西端の列は比較的良好的な状態で検出した土坑1100・1101である。北端列の土坑1094・122、北側2列目の1051・1053、北側3列目の1050・1015、北側4列目の1016・1013・1044・1048は等間隔に並んだ状態を検出できた。南側の土

坑 98・1038・140 は並びが不規則であり、規模についても様々であるが、最南端の土坑 1 や西端の土坑 2 からは土坑の正位置に整然と据えられた備前焼の大甕底部が検出できた。南端、西端にて甕を検出したことから、この間にも甕が列を成して埋められていたものと推定される。土坑 1・2・1100・1101 以外の土坑から大甕が検出できなかった点については、大甕が再利用のため持ち出されたものと解釈される。

埋甕土坑群（東側）（図 34、図版 10） A 区北東側にて検出した埋甕土坑群である。西側と同様の一連の埋甕土坑群である。平面形状は円形、断面形状は碗状を呈している。規模は平均直径 0.7 m、深さ 0.15 m を測る。南北方向に 9 列、東西方向に 5 列の埋甕群を検出した。南東側は疎らで他の遺構や攪乱に切られていることから全容を検出することはできなかった。南北方向の西側から 1 列目の土坑 1061～1069、2 列目の土坑 1070～1077、3 列目の土坑 1078～1080、4 列目の土坑 1086・1087 は等間隔に並んだ良好な状態で検出した。南側の土坑 1081～1083 は並びが不規則であり、規模についても様々であった。西側の埋甕土坑は、土坑 1・9・140・1038 が最南端の列を成している点から、東側の土坑列も土坑 1069 が南端列に該当するものと考えられる。出土遺物には小片の土師器皿、備前焼の大甕片がみられたが、正位置に据えられた状態のものは検出できなかった。大甕は再利用のため持ち出されたものと解釈される。

溝 101（図 25、図版 2） A 区南東側の 4 H・5 H・4 I・5 I 区にて検出した東西方向に延びる小溝である。溝は全体的に浅く、特に東側は大きく削平されている。平面は「コ」の字状を呈する。規模

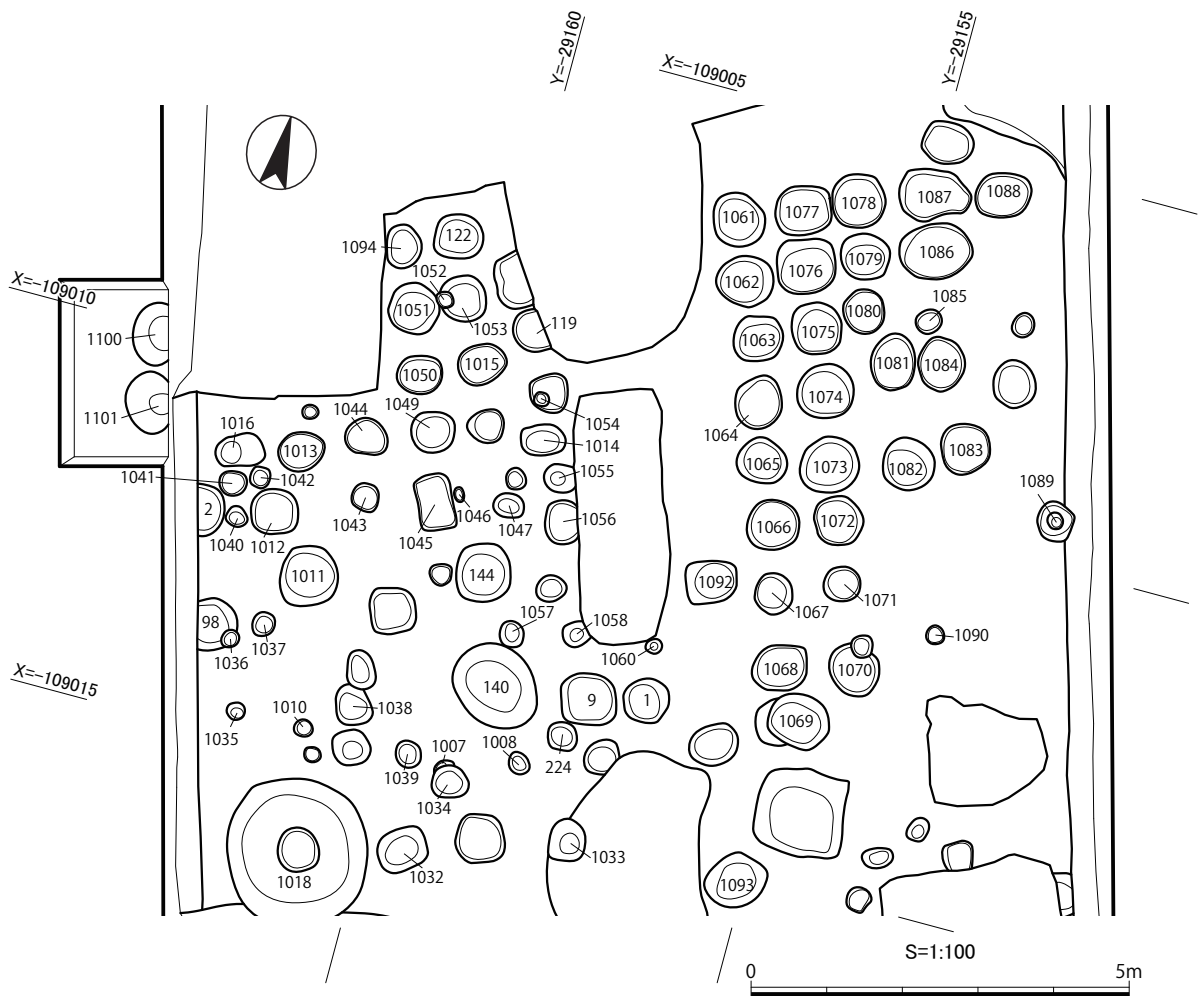


図 34 土坑群平面図

は検出長 3.1 m、幅 0.6 m、深さ 0.1 m を測る。方向は N19° W である。埋土は基本層が暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂泥である。溝内から土師器皿 (図 54 - 58) が出土した。出土した遺物から室町時代に属するものと考えられる。当溝は土坑 1001 を切っており、周辺の遺構の中で最も後出に属する。

溝 168 (図 25、図版 2) A 区南西側の 3 H 区にて検出した南北方向に延びる小溝である。溝は西半分が調査地外にかかっている。平面は直線状を呈する。規模は検出長 1.5 m、幅 0.3 m、深さ 0.1 m を測る。方向は N17° W である。埋土は基本層がにぶい黄橙色 (10YR7/3) シルトである。溝内から土師器皿 (図 54 - 57) が出土した。室町時代に属するものと考えられる。当溝は東西を区画する溝と考えられる。

溝 171 (図 25、図版 4 - 1・2) A 区南西側の 3 I 区にて検出した北東から南西方向に延びる小溝である。東側は土坑 1001 に切られ、西側は調査地外に延びている。平面は直線状を呈する。断面形状は U 字状を呈する。規模は検出長 4.7 m、幅 0.2 m、深さ 0.1 m を測る。方向は N45° E である。埋土は暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルトの単層である。溝内から土師器皿片が出土した。出土した遺物から室町時代に属するものと考えられる。当溝は南側にて検出した溝 172 と平行に延びている。溝の方向や規模から天下龍門の北側に設置されていた築地塀に伴う雨落ち溝と考えられる。

溝 172 (図 25、図版 4 - 3) A 区南西側の 3・4 I 区にて検出した北東から南西方向に延びる小溝

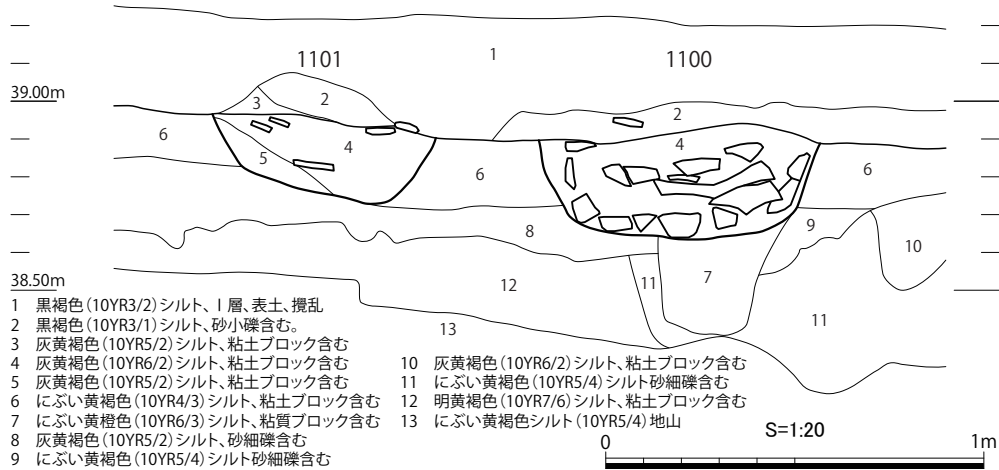


図 35 土坑 1100・1101 断面図

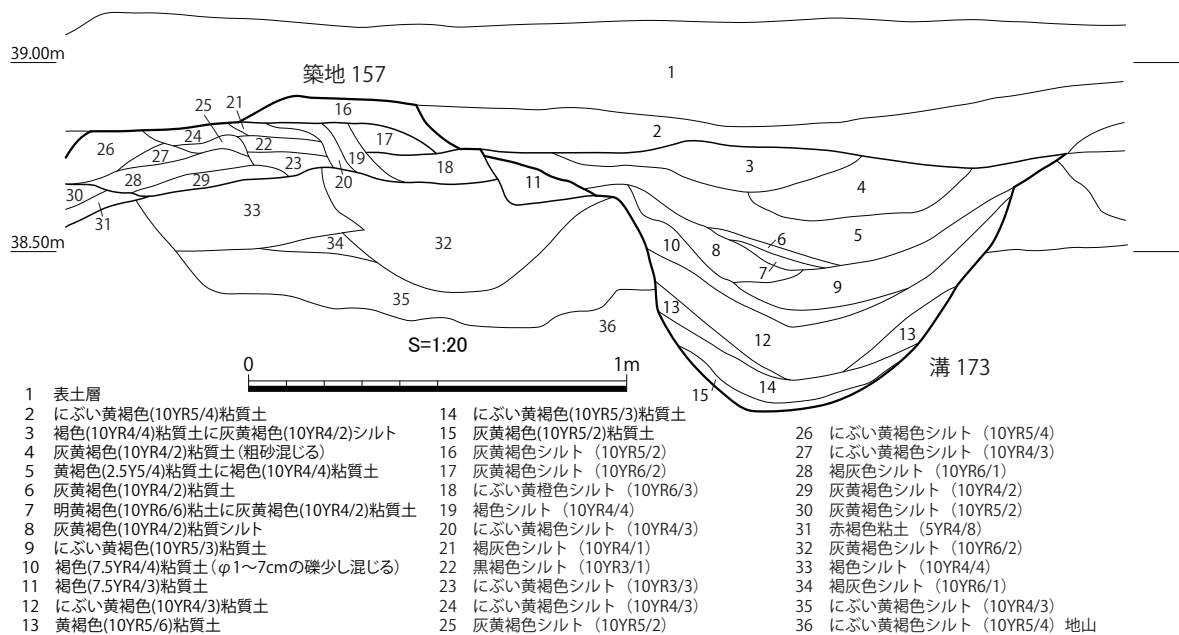


図 36 溝 173 断面図

である。東側は柱穴 66・78 に切れ、西側は調査地外に延びている。平面は直線状を呈する。断面形状はU字状を呈する。規模は検出長 1.3 m、幅 0.2 m、深さ 0.07 mを測る。方向は N45° E である。埋土は暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルトの単層である。溝内から土師器皿片が出土した。出土した遺物から室町時代に属するものと考えられる。当溝は北側の溝 171、東側の溝 173 と同一方向に延びている。溝の方向や規模から天下龍門の北側に設置されていた築地塀北側の雨落ち溝と考えられる。

溝 173 (図 25・36、図版 4-4~7) A 区南東側の 4・5 I 区にて検出した北東から南西方向に延びる溝である。中央は攪乱、柱穴 46・47・57・175 に切られている。溝の西・東側は調査地外に延びている。平面は直線状を呈する。断面形状はU字状を呈する。規模は検出長 4.5 m、幅 1.1 m、深さ 0.7 mを測る。方向は N48° E である。埋土は基本的に褐色粘土層である。中層には直径 0.2 m の円礫が多く含まれていることから、溝の埋没段階が想定される。溝内から土師器皿等 (図 54-91~114) が出土した。出土した遺物から室町時代に属するものと考えられる。当溝は北側の溝 171、東側の溝 173 と同一方向に延びており、溝の方向や規模から天下龍門の北側に設置されていた築地塀南側の側溝と考えられる。溝の南側断面には天下龍門の道路整地面と考えられる褐色粘質土がみられる。その下層には、道路を施工する際の掘方と想定されるにぶい黄褐色粘質土の埋土がみられる。溝の北側は、基盤層を平坦に整地し、版築状に盛土された築地塀が存在している。築地塀は東端の断面で確認できたが、調査地の南東端は大きく削平を受けていることから、平面的には検出できなかった。築地塀に伴う遺構としては、溝北側の版築状の盛土と溝の北辺から北側へ 0.9 m の位置にて検出された柱穴列がある。柱穴は当溝と平行に並んでおり、西側から柱穴 82・49・51・55・233 がある。中央の柱穴 49・51・55 は 2 基が重なる状態で検出されている点から、造り替えが行われた可能性が高い。また、埋土内には多くの焼土と炭層が混入していた。

井戸 169 (図 25) A 区北西側の 3 D 区にて検出した井戸である。中央は攪乱に切られている。平面は円形を呈する。断面形状は「コ」の字状を呈する。規模は直径 1.4 m、深さ 3.5 mを測る。埋土は主に暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト、粘土層である。井戸内から中世の遺物 (図 59-131~136、図 60-137~173) が出土した。出土した遺物から室町時代に属するものと考えられる。構造は素掘で施工しており、下層の井戸枠、水溜部分については精細な調査ができなかった。

4. B 区上層遺構 (鎌倉時代~室町時代)

B 区上層遺構は、柱穴 5050・5215・5274、掘立柱建物 1~6、土坑 5012・5034・5041・5042・5044・5065~5068・5070~5072・5087・5093・5098・5101・5108・5245・5262、溝 5004・5032・5085・5092・5104・5210~5212・5249、井戸 5106 がある。以下、個々の遺構について述べた。

柱穴 5050 (図 37、図版 17-2) B 区中央南寄りの 3 D 区にて検出した柱穴である。平面は楕円形を呈する。規模は長径 0.38 m、短径 0.33 m、深さ 0.29 mを測る。埋土は主に暗灰黄色 (2.5Y5/2) シルトである。柱痕は南東側に抜き取りが行われたものと考えられる。柱穴内から土師器皿 (図 61-183) が出土した。出土した遺物から室町時代に属するものと考えられる。建物として検証できなかったが、西側に隣接する掘立柱建物 1・3 に関連する可能性もある。

柱穴 5215 (図 37、図版 17-2) B 区北側中央の 3 A 区にて検出した柱穴である。平面は円形を呈する。規模は長径 0.18 m、短径 0.16 m、深さ 0.16 mを測る。埋土は主に灰黄褐色 (10YR4/2) シルトである。柱痕は検出できなかった。柱穴内から土師器皿 (図 61-177) が出土した。出土した遺物から室町時代に属するものと考えられる。建物としては検証できなかった。

柱穴 5274 (図 37、図版 17 - 2) B 区南西側の 2 C 区にて検出した柱穴である。南側の柱穴 5010・5283 に切られている。平面は円形を呈する。規模は長径 0.33 m、短径 0.31 m、深さ 0.26 m を測る。埋土は主に灰黄褐色 (10YR4/2) シルトである。柱痕は検出できなかった。柱穴内から中世の遺物 (図 61 - 189 ~ 193) が出土した。出土した遺物から室町時代に属するものと考えられる。南側の建物 3 に伴う柱穴 5010 に近接している。

掘立柱建物 1 (図 38・39、図版 18 - 2) B 区南西側の 1 ~ 3 C・D 区にて検出した総柱型の掘立柱建物である。当建物は掘立柱建物 3 が北側へ半間分平行移動した状態で重なって検出した。建物の方向は、N 18°W である。建物の規模は、梁行 3 間×桁行 4 間の建物である。梁行は全長 5.1 m、柱間は 1.75 ~ 1.85 m、桁行は全長 7.9 m、柱間は 1.85 ~ 2.05 m を測る。柱穴の形状は円形を呈する。柱穴の規模は直径 0.17 ~ 0.4 m、深さ約 0.15 m、柱痕は直径 0.12 m を測る。埋土は主に暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルトである。柱穴から土師器皿片が出土した。時期は室町時代に属する。

当建物は調査地の南西隅に位置している関係から、西側、南側の調査地外に延びている可能性もあるが、北側で検出した建物 2・3 と同規模と考えられることから梁行 3 間×桁行 4 間の建物であろう。当建物に重なる掘立柱建物 3 は、北側へ半間分を移動した状態で検出した。当建物は規模、位置関係から、

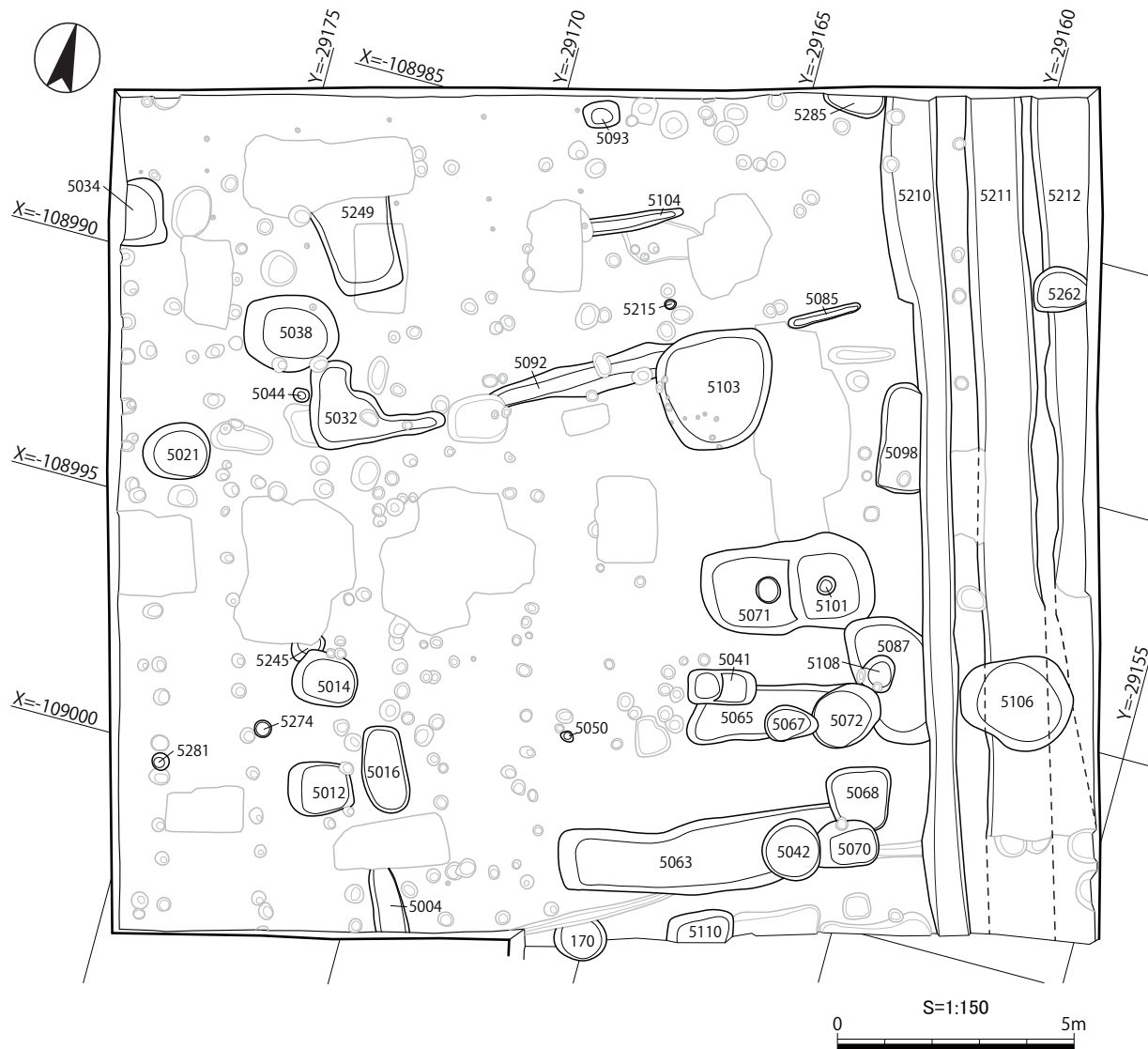


図 37 B 区上層遺構平面図

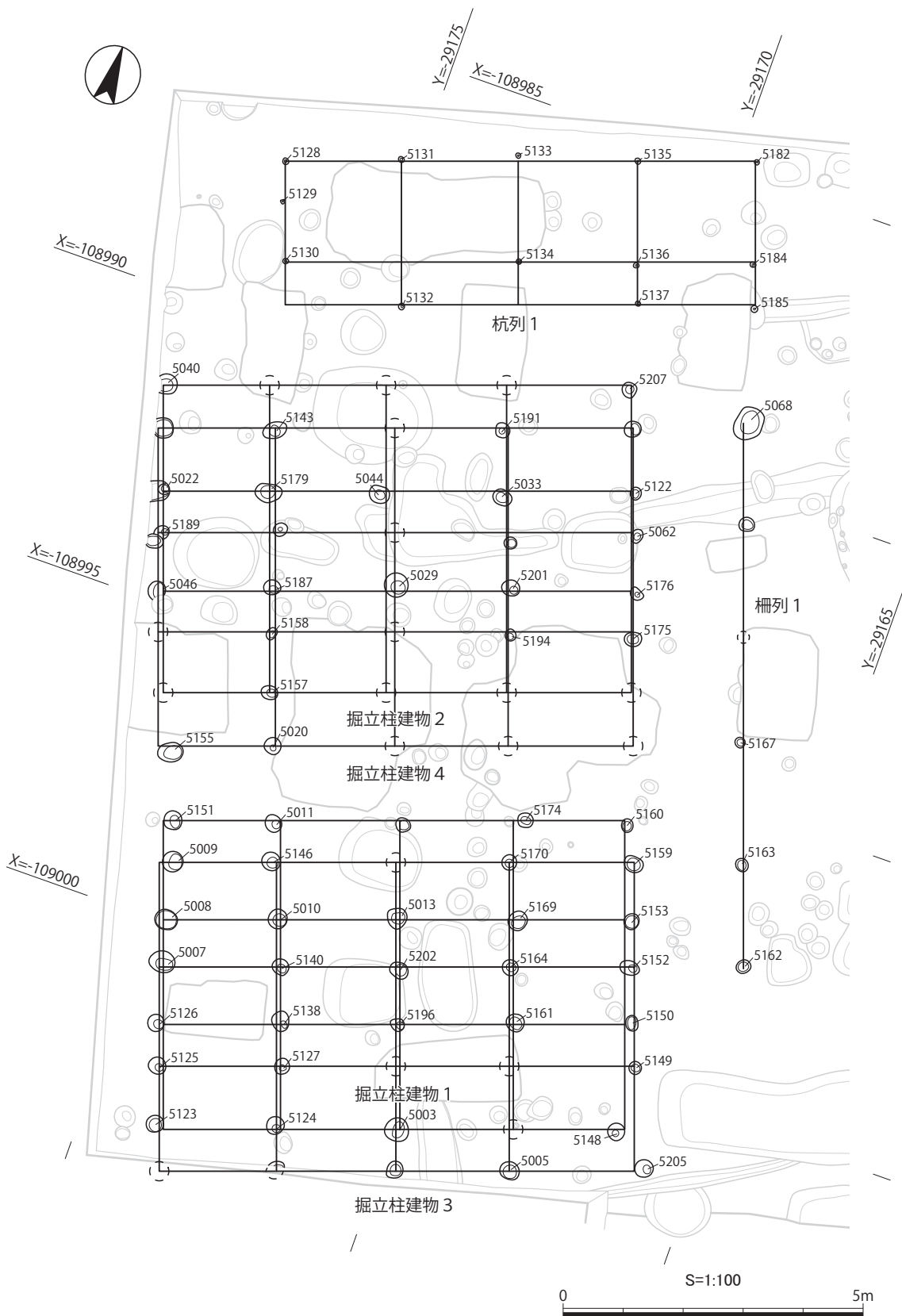


图 38 掘立柱建物·杭列 1·栅列 1 平面图

建物3へ建て替えされたことが推測される。

掘立柱建物2（図38・40、図版18-2） B区西側の1～3B・C区にて検出した総柱型の掘立柱建物である。当建物は掘立柱建物4が北側へ半間分平行移動した状態で重なって検出した。南・北辺の柱穴並びは、攪乱に切られていることから、南辺の東から1間目柱穴5157、北辺の東端柱穴5040、西端柱穴5207のみを検出した。建物の方向は、N 18°Wである。建物の規模は、梁行3間×桁行4間の建物である。梁行は全長8.1m、柱間は1.65～1.7m、桁行は全長8.1m、柱間は1.8～2.1mを測る。柱穴の形状は円形を呈する。柱穴の規模は直径0.19～0.36m、深さ約0.10m、柱痕は直径0.13mを測る。埋土は主に暗灰黄色(2.5Y4/2)シルトである。柱穴から土師器皿片が出土した。時期は室町時代に属する。

当建物は調査地の西側に位置している関係から、西側の調査地外に延びている可能性もある。当建物に重なる掘立柱建物4は、南側へ半間分移動した状態で検出した。当建物は規模、位置関係から、建物4へ建て替えされたものと考えられる。

掘立柱建物3（図38・41、図版18-2） B区南西側の1～3C・D区にて検出した総柱型の掘立柱建物である。当建物は掘立柱建物1が南側へ半間分平行移動した状態で重なって検出した。建物の方向は、N 19°Wである。建物の規模は、梁行3間×桁行4間の建物である。梁行は全長5.2m、柱間は1.7～1.8m、桁行は全長8.0m、柱間は1.9～2.1mを測る。柱穴の形状は円形を呈する。柱穴の規模は直径0.21～0.42m、深さ約0.15m、柱痕は直径0.16mを測る。埋土は主に暗灰黄色(2.5Y4/2)シルトである。柱穴から土師器皿片が出土した。時期は室町時代に属する。当建物は調査地の南西隅に位

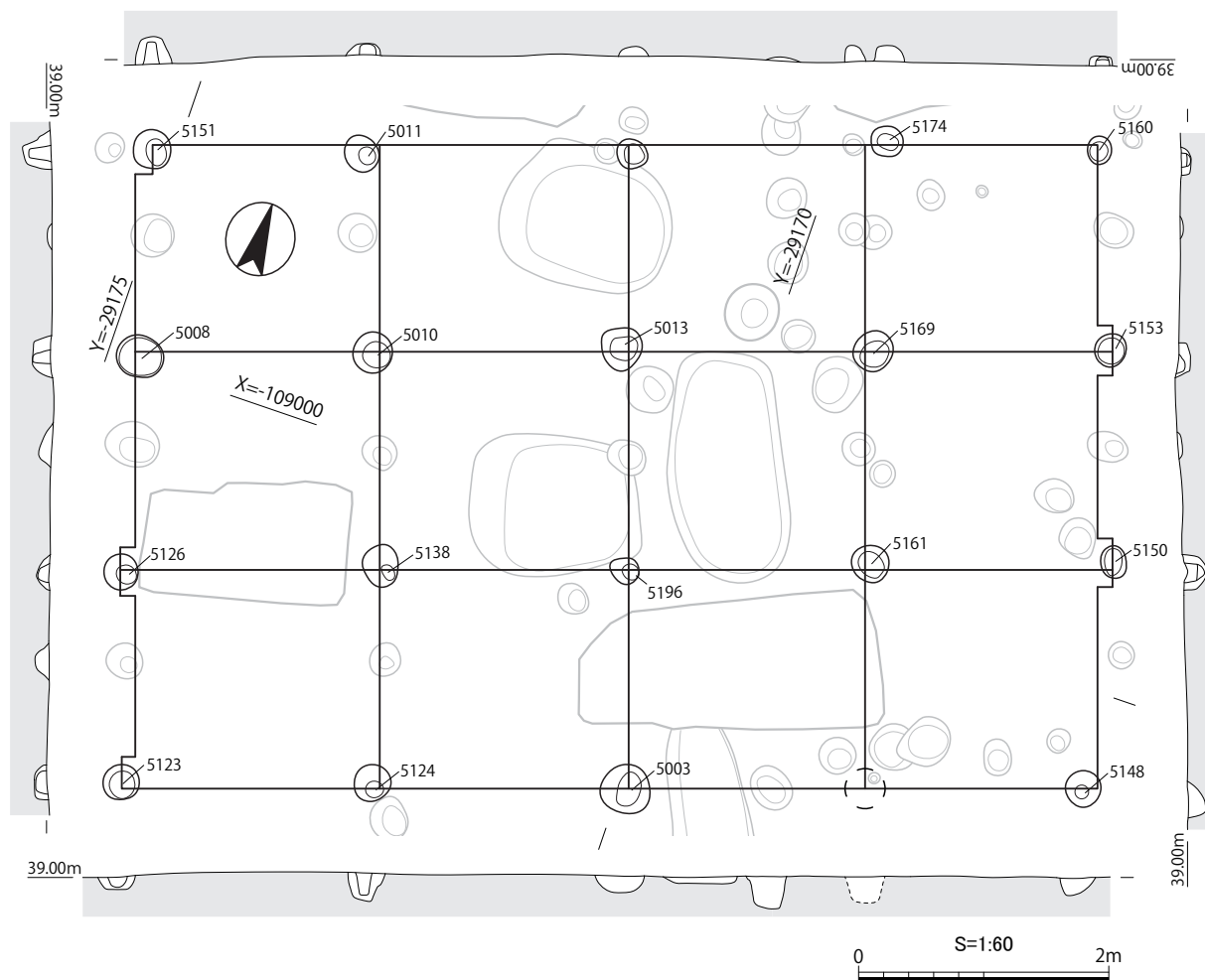


図39 掘立柱建物1平・断面図

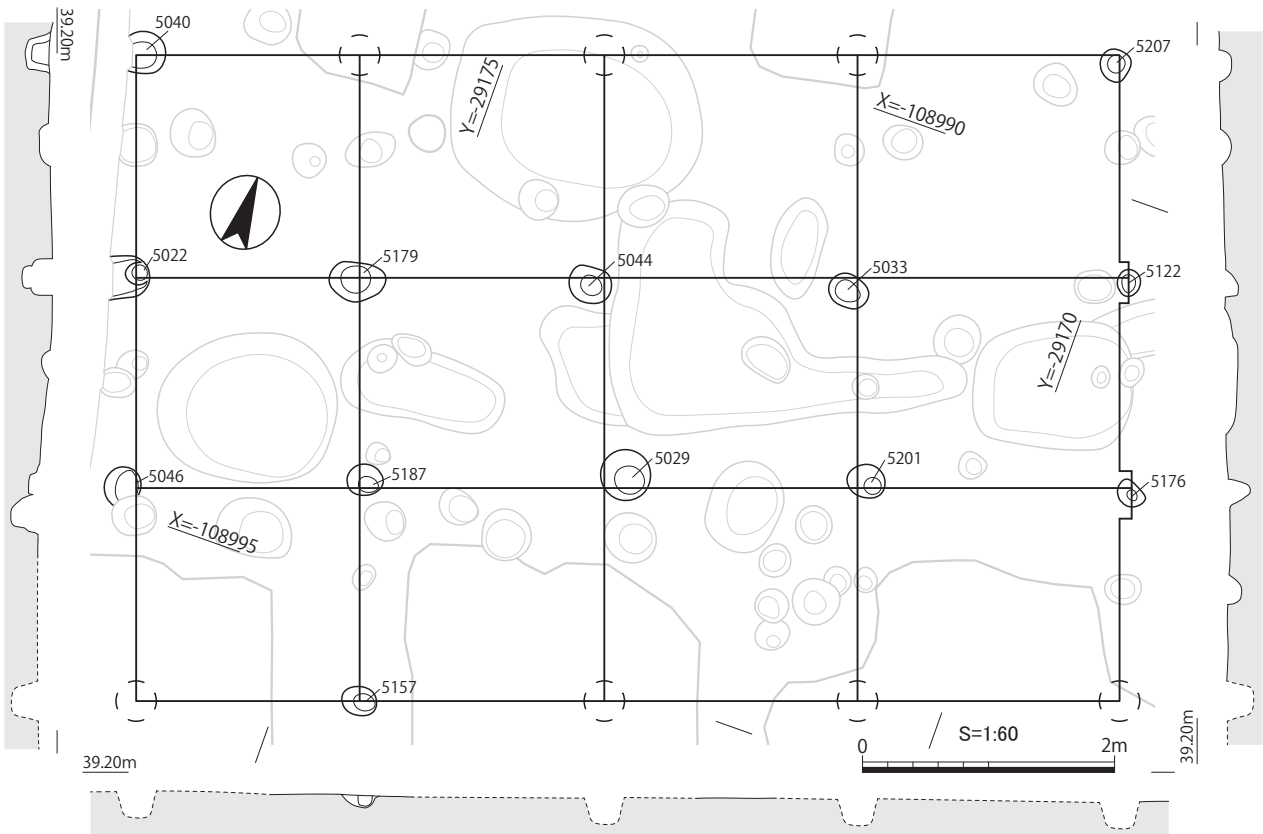


图 40 掘立柱建物 2 平·断面图

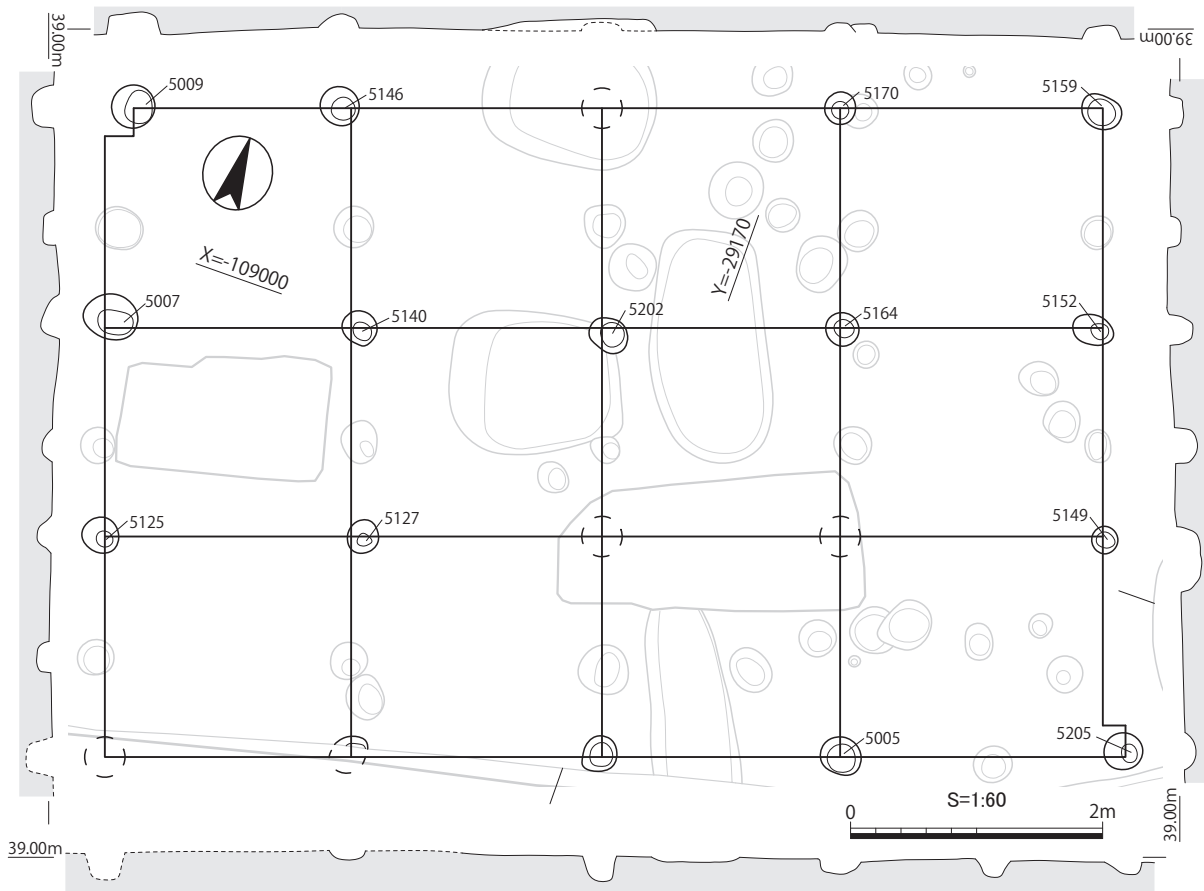


图 41 掘立柱建物 3 平·断面图

置している関係から、西側は調査地外に延びている可能性もある。南側については、延びる可能性を有しているが、北側で検出した同規模と考えられる建物 2・4 と同様の梁行 3 間と推測される。当建物は規模、位置関係から、建物 1 の建て替えと考えられる。

掘立柱建物 4 (図 38・42、図版 18-2) B 区西側の 1～3 B・C 区にて検出した総柱型の掘立柱建物である。当建物は掘立柱建物 2 が南側へ半間分平行移動した状態で重なって検出した。南辺の柱穴並びは、攪乱に切られていることから、西側 1 間目柱穴 515、2 間目柱穴 5020 のみを検出した。建物の方向は、N 19°W である。建物の規模は、梁行 3 間×桁行 4 間の建物である。梁行は全長 5.35 m、柱間は 1.7～1.9 m、桁行は全長 7.9 m、柱間は 1.9～2.1 m を測る。柱穴の形状は円形を呈する。柱穴の規模は直径 0.16～0.37 m、深さ約 0.17 m、柱痕は直径 0.15 m を測る。埋土は主に暗灰黄色(2.5Y4/2)シルトである。柱穴から土師器皿片が出土した。時期は室町時代に属する。当建物は調査地の西側に位置している関係から、西側の調査地外に延びている可能性もある。南側で検出した建物 1・3 と同規模と考えられることから、建物 2 が建て替えされたものであろう。

掘立柱建物 5 (図 43・44、図版 18-2) B 区西側の 1・2 B～D 区にて検出した側柱型の掘立柱建物である。当建物は掘立柱建物 1・3 と掘立柱建物 2・4 の中間に位置する。また、当建物は建物 6 の南・北・東辺が重なった状態である。建物の西辺は調査地外である点から、桁行の規模については不明である。建物の方向は、N 18°W である。建物の規模は、梁行 3 間×桁行 3 間以上の建物である。北辺

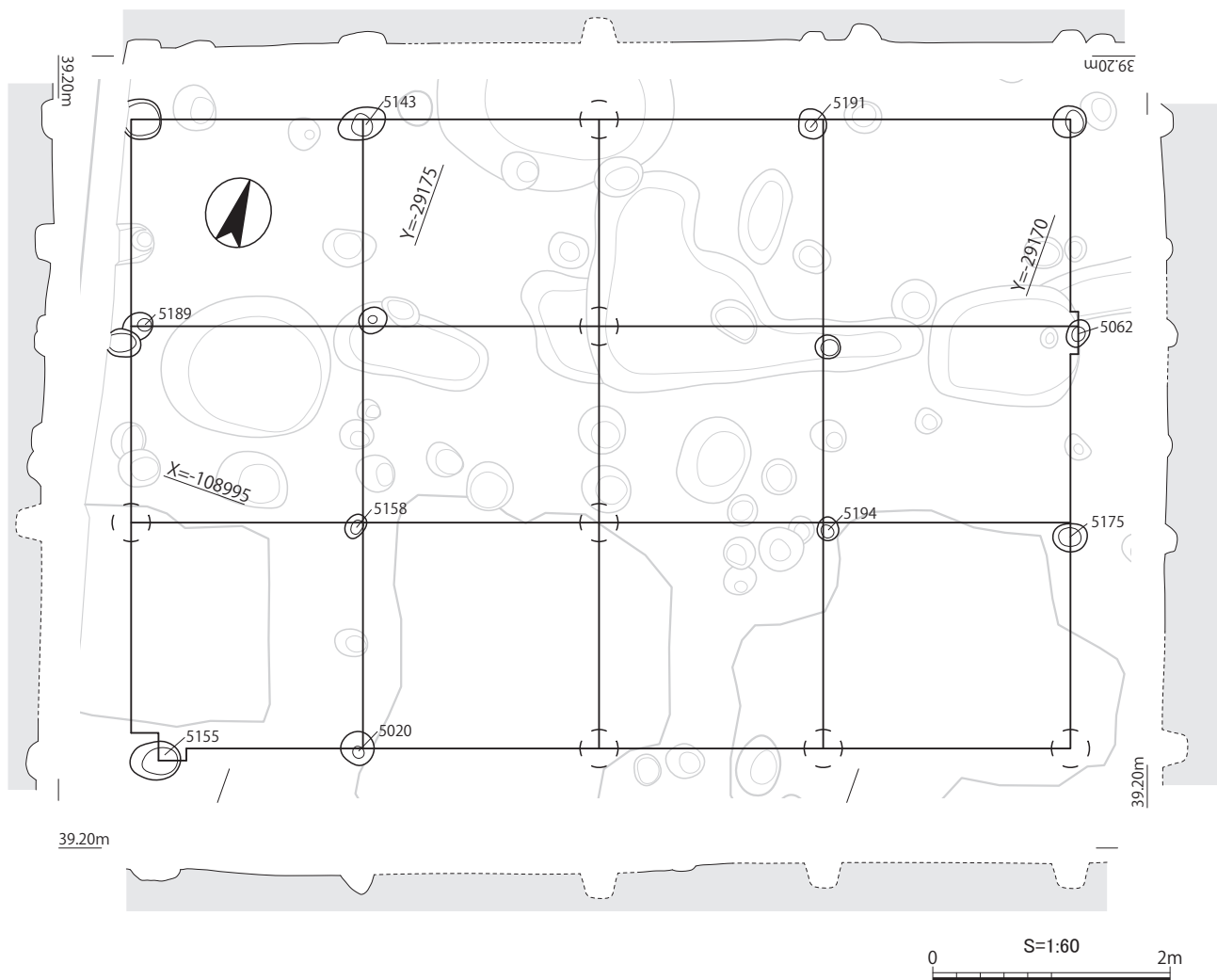


図 42 掘立柱建物 4 平・断面図

の柱穴 5024・5028、東辺の柱穴 5192・5234・5018、南辺の柱穴 5283 は、半間に施工された束柱の可能性が高い。梁行は全長 5.7 m、柱間は 1.8 ～ 1.95 m、桁行は検出長 6.3 m、柱間は 1.9 ～ 2.1 m を測る。柱穴の形状は円形を呈する。柱穴の規模は直径 0.46 ～ 0.75 m、深さ約 0.36 m、柱痕は検出できなかったが、礎板石を有するものが多かった。埋土は主に暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルトである。柱穴から土師器皿片が出土した。時期は室町時代に属する。当建物は重なった状態で検出した建物 6 と同規模であり、南辺柱穴 5269 が建物 6 の柱穴 5267 に切られている点から、建物 6 の建て替えと考えられる。

掘立柱建物 6 (図 43・45、図版 18 - 2) B 区西側の 1・2 B～D 区にて検出した側柱型の掘立柱建物である。当建物は掘立柱建物 1・3 と掘立柱建物 2・4 の中間に位置する。また、当建物は建物 5 の南・北辺が重なり、東辺が東へ約 0.4 m 移動した状態である。建物の西辺は調査地外である点から、桁行の規模については不明である。建物の方向は、N 20°W である。建物の規模は、梁行 4 間×桁行 4 間以上の建物である。梁行は全長 5.55 m、柱間は 1.0 ～ 1.5 m、桁行は検出長 6.1 m、柱間は 1.5 m を測る。柱穴の形状は円形を呈する。柱穴の規模は直径 0.32 ～ 0.45 m、深さ約 0.32 m、柱痕は検出できなかった。埋土は主に暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルトである。柱穴から土師器皿片が出土した。時期は室町時代に属する。当建物は建物 5 と同規模である点から、建物 5 の建て替えと思われる。

柵列 1 (図 38、図版 18 - 2) B 区中央の 3 B～D 区にて検出した柵列である。当柵列は建物 1～

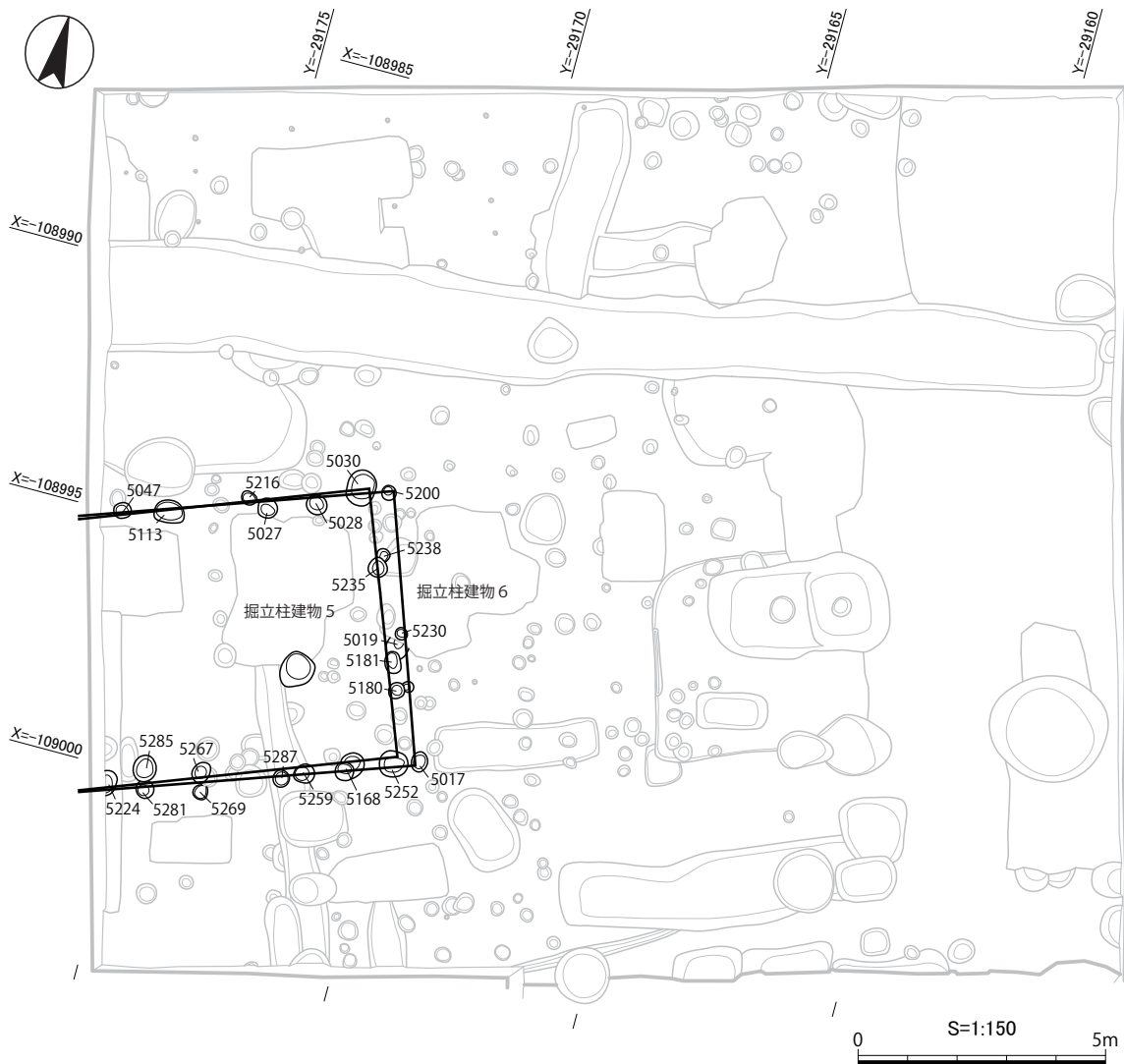


図 43 掘立柱建物 5・6 位置図

6の東側を南北方向に平行した状態で延び、北側の延長線上には杭列1の東辺に沿っている。柱穴の位置が建物4の柱穴と平行している関係から、建物3・4の東側柵と想定される。柵列の南端は柱穴5162で途切れ、建物3の南側まで延びなかった点については、南側に存在する溝5063が要因すると考えられる。柵列の方向はN 19° W、規模は5間である。柱間は1.9～2.1 mを測り、柵列としては幅が広い点に疑問を残す。柱穴の形状は円形を呈する。柱穴の規模は直径0.22～0.25 m、深さ約0.22 m、柱痕は検出できなかった。埋土は主に暗灰黄色(2.5Y4/2)シルトである。柱穴から土師器皿片が出土した。時期は室町時代に属する。

杭列1 (図38、図版18-2) B区中央の2A・B、3A・B区にて検出した杭列である。当杭列は建物2の北側にて東西方向に平行した状態で延びる。柱穴の位置が柵列1に平行している関係から、建物3・4と同時期に施工された可能性が高い。杭列の方向はN 20° W、規模は東西方向に4間、南北

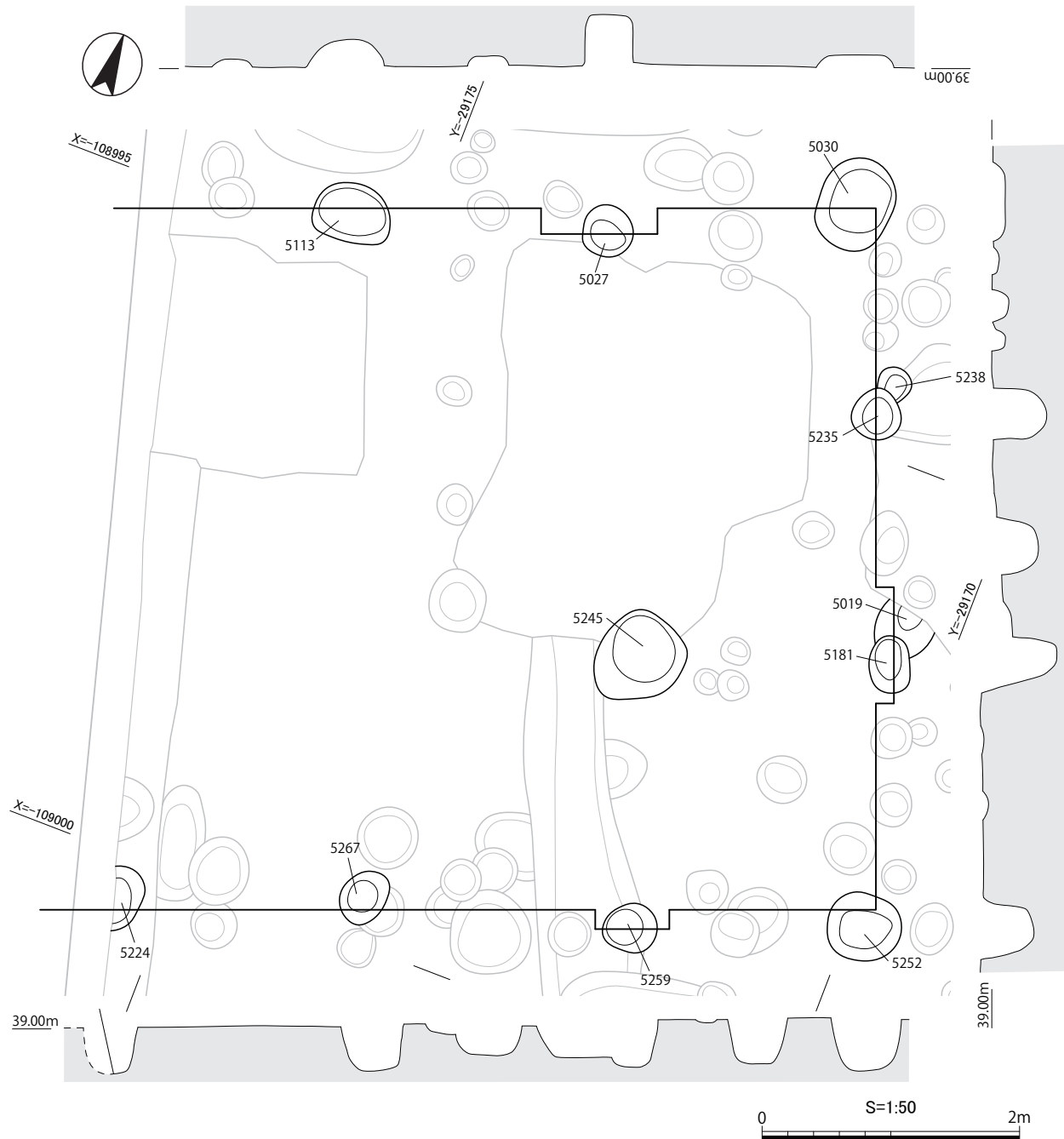


図44 掘立柱建物5平・断面図

方向に2間である。柱間は東西方向が2.1 m、南北方向の北側が0.8～0.9 m、南側が0.35～0.4 mを測る。杭の規模は直径0.16～0.20 m、深さ約0.22 mを測る。

土坑 5012 (図 37、図版 17-2) B区南西側の2D区にて検出した土坑である。平面形状は方形を呈する。断面形状は「コ」の字状を呈する。規模は長辺1.35 m、短辺が1.15 m、深さ約0.36 mを測る。埋土は主に灰黄褐色(10YR4/2)シルトである。土坑は建物に伴う柱穴5202・5196に切られていることから建物1・3よりも古出である。また、建物のほぼ中心部に位置し、柱間に収まっている関係から建物に伴う可能性もある。土坑内から土師器皿(図 61-198～200)が出土した。

土坑 5034 (図 39、図版 21-1) B区北西側の1B区にて検出した土坑である。東側の検出平面形状は方形を呈する。西側は調査地外に延びている。断面形状は「コ」の字状を呈する。規模は長辺0.95 m、検出短辺が0.65 m、深さ約0.22 mを測る。埋土は主ににぶい黄褐色(10YR5/4)シルトである。土坑内から銭貨(図 68-303)が出土した。北側から掘り返しが行われた形跡がある。

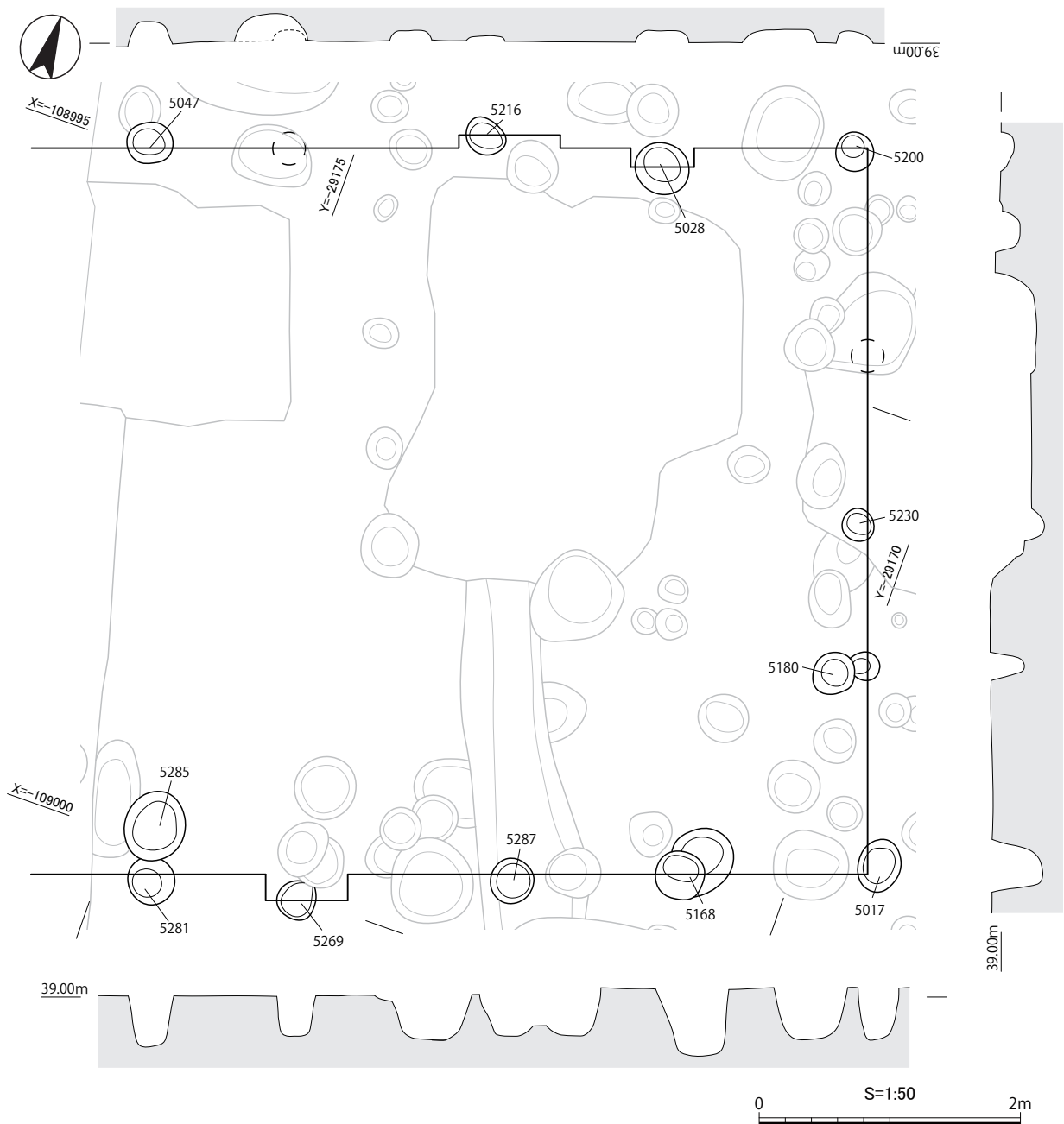


図 45 掘立柱建物6平・断面図

土坑 5041 (図 46、図版 17-2) B 区中央の東より 4 C 区にて検出した土坑である。平面形状は東西方向に長方形を呈する。断面形状は「コ」の字状を呈する。規模は長辺 2.65 m、短辺が 0.75 m、深さ約 0.71 m を測る。埋土は主に灰黄褐色 (10YR4/2) シルトである。土坑は西側から切り込まれた形跡があるので、掘り返しが行われたものと思われる。土坑内から土師器皿等の中世遺物 (図 61 - 201 ~ 206) が出土した。土坑の形状、位置から土坑 5071 で搾った酒を溜める垂壺を設置していた土坑の可能性はある。埋土は確認できなかったことから抜き取られたものと考えられる。

土坑 5042 (図 46・47、図版 23-1・2・6) B 区南東側の 4 D 区にて検出した土坑である。平面形状は正円形を呈する。断面形状は「コ」の字状を呈する。構造は掘方に沿って木質が付着し、中央に箍状の突起がみられたことから、桶状のものを利用した溜井戸の可能性はある。規模は直径 1.4 m、深さ約 0.76 m を測る。埋土は主に灰黄褐色 (10YR5/2) シルトである。土坑は西側の溝 5063、東側の土坑 5070 を切っている。土坑内から中世の遺物片が出土した。

土坑 5067 (図 46・47、図版 23-3・4) B 区南東側の 4 D 区にて検出した土坑である。平面形状は東西方向に長い楕円形を呈する。断面形状は「コ」の字状を呈する。規模は長辺 1.5 m、短辺 0.83 m、深さ約 0.97 を測る。埋土は主に灰黄褐色 (10YR5/2) シルトである。土坑は溝 5065、東側の土坑 5072 を切っている。土坑内から土師器皿 (図 61 - 181) が出土した。室町時代後半に比定される。

土坑 5068 (図 37、図版 17-2) B 区南東側の 4 D 区にて検出した土坑である。平面形状は正方形を呈する。断面形状は「コ」の字状を呈する。規模は一辺 1.3 m、深さ約 0.82 m を測る。埋土は主に灰黄褐色 (10YR5/2) シルトである。土坑は西側の溝 5063 を切り、南側の土坑 5070 に切られている。土坑内から土師器皿 (図 61 - 176) が出土した。室町時代中頃に比定される。

土坑 5070 (図 47、図版 17-2) B 区南東の 4 D 区にて検出した土坑である。平面形状は東西方向に長辺を有する隅丸方形である。断面形状は「コ」の字状を呈する。規模は長辺 1.15 m、短辺が 1.05 m、深さ約 1.2 m を測る。埋土は主に灰黄褐色 (10YR4/2) シルトである。土坑は西側の土坑 5042 に切られ、北側の土坑 5068 を切っている。当土坑は西側の土坑 5042 に造り替えられたものと思われる。土坑内から土師器皿等の中世遺物が出土した。

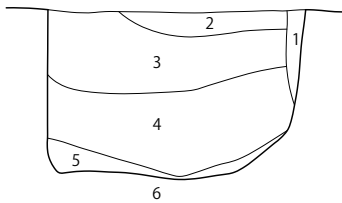
土坑 5071 (図 47、図版 22-3 ~ 5) B 区中央東よりの 4 C 区にて検出した土坑である。土坑は東側の土坑 5101 を切っている。深さは土坑 5101 が深い。両土坑は造り替えが行われた同様のものと思われる。平面形状は東西方向に長辺を有する隅丸方形である。断面形状は「コ」の字状を呈する。規模は長辺 1.95 m、短辺が 1.85 m、深さ約 1.3 m を測る。埋土は主に灰黄褐色 (10YR4/2) シルトである。底部中央には直径 0.4 m、深さ 0.1 m を測る円形のピットを有する。土坑内から土師器皿等の中世遺物 (図 62 - 207 ~ 215) が出土した。土坑の性格は、形状、規模から、A 区にて検出した土坑 1017 と同様の酒造搾り遺構と考えられる。底部中央のピットは男柱の痕跡と考えられる。男柱、横木、重石等は抜き取られており、確認できなかった。

土坑 5072 (図 47、図版 17-2) B 区南東の 4 C・D 区にて検出した土坑である。平面形状は東西方向に長軸を有する楕円形である。断面形状は「コ」の字状を呈する。規模は長径 1.35 m、短径が 1.25 m、深さ約 0.6 m を測る。埋土は主に灰黄褐色 (10YR4/2) シルトである。土坑は西側の土坑 5067 に切られ、北側の溝 5065 を切っている。西側の土坑 5067 に造り替えられたものと思われる。土坑内から土師器皿等の中世遺物 (図 62 - 216 ~ 224) が出土した。室町時代後半に比定される。

土坑 5093 (図 37、図版 17-2) A 区中央北端の 3 A 区にて検出した土坑である。周辺には同様の形状、規模を測る土坑群がみられる。平面は隅丸長方形を呈する。規模は長辺 0.72 m、短辺 0.56 m、深さ 0.18

39.00m

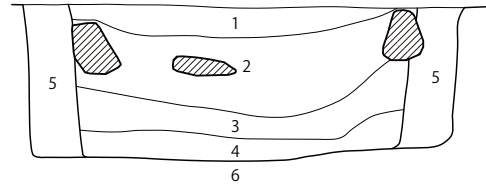
土坑5041



- 1 にぶい黄褐色(10YR5/4)粘質土
- 2 にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト(炭少し混じる)
- 3 灰黄褐色(10YR4/2)粘質土に褐色(10YR4/4)粘質土がわずかに混じる(炭少し混じる)
- 4 灰黄褐色(10YR4/2)粘質土ににぶい黄褐色(10YR5/3)粘質土がわずかに混じる(炭少し混じる)
- 5 オリーブ褐色(2.5Y4/4)粘土
- 6 にぶい黄褐色(10YR5/4)粘質土

39.00m

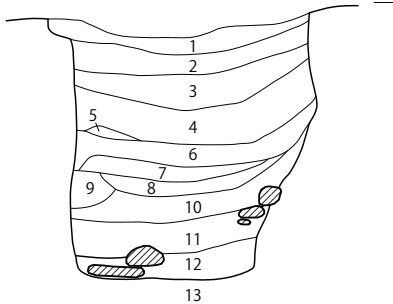
土坑5042



- 1 暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土
- 2 黄灰色(2.5Y4/1)粘質シルト
- 3 暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質シルトに灰黄褐色(10YR5/2)粘土がまだらに混じる
- 4 灰色(5Y4/1)粘土
- 5 にぶい黄褐色(10YR5/4)粘質土
- 6 にぶい黄褐色(10YR5/4)粘質土

39.00m

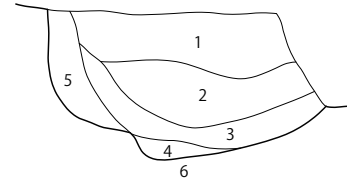
土坑5067



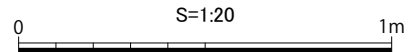
- 1 にぶい黄褐色(10YR7/2)細砂
- 2 にぶい黄褐色(10YR5/3)粘質シルトににぶい黄褐色(10YR6/3)細砂がまだらに混じる
- 3 にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質土ににぶい黄褐色(10YR5/4)粘質シルトがブロック状に混じる
- 4 灰黄褐色(10YR4/2)粘質土(炭多く含む)
- 5 褐色(10YR4/4)粘質シルト
- 6 灰黄褐色(10YR4/2)粘質シルト
- 7 黄褐色(2.5Y5/4)粘質シルトににぶい黄褐色(10YR5/3)粘質シルトがまだらに混じる
- 8 にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質土ににぶい黄褐色(10YR6/4)粘質シルトがわずかに混じる
- 9 にぶい黄褐色(10YR5/4)粘質シルト
- 10 オリーブ褐色(2.5Y4/3)粘質土
- 11 灰黄褐色(10YR4/2)粘質土(粗砂多く混じる)
- 12 にぶい黄褐色(10YR4/3)粘土に褐色(7.5YR4/4)粘土がブロック状に混じる
- 13 にぶい黄褐色(10YR5/4)粘質土

39.00m

土坑5245

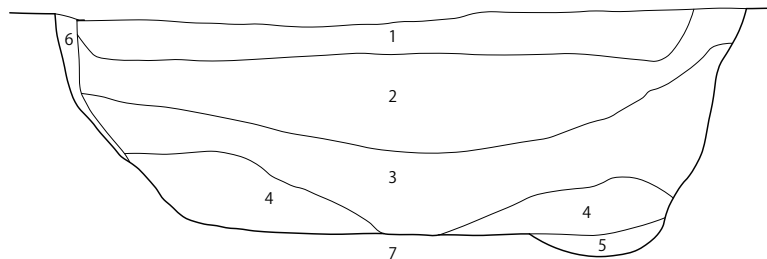


- 1 灰黄褐色(10YR5/2)粘質土に黒褐色(10YR3/1)土の砂粒が混じる
- 2 褐色(7.5YR4/3)粘質細砂(焼土の小ブロックを多量に含む)
- 3 暗褐色(10YR3/3)粘質土に褐色(7.5YR4/3)粘質細砂が混じる
- 4 暗褐色(10YR3/3)粘質土
- 5 黄褐色(10YR5/6)粘質土に黒褐色(10YR3/2)土が混じる
- 6 にぶい黄褐色(10YR5/4)粘質土



39.00m

土坑5071



- 1 にぶい黄褐色(10YR6/3)細砂(φ1~8cmの礫多く含む)
- 2 にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質シルト(φ1~8cmの礫多く含む)
- 3 暗褐色(10YR3/4)粘質土(φ1~8cmの礫多く含む)
- 4 灰黄褐色(10YR4/2)粘質土に褐色(10YR4/4)粘土がブロック状に多く混じる
- 5 にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質土ににぶい黄褐色(10YR6/4)シルトがまだらに混じる
- 6 暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土に褐色(10YR4/4)粘土がブロック状に混じる
- 7 にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト

図 46 土坑・溝断面図

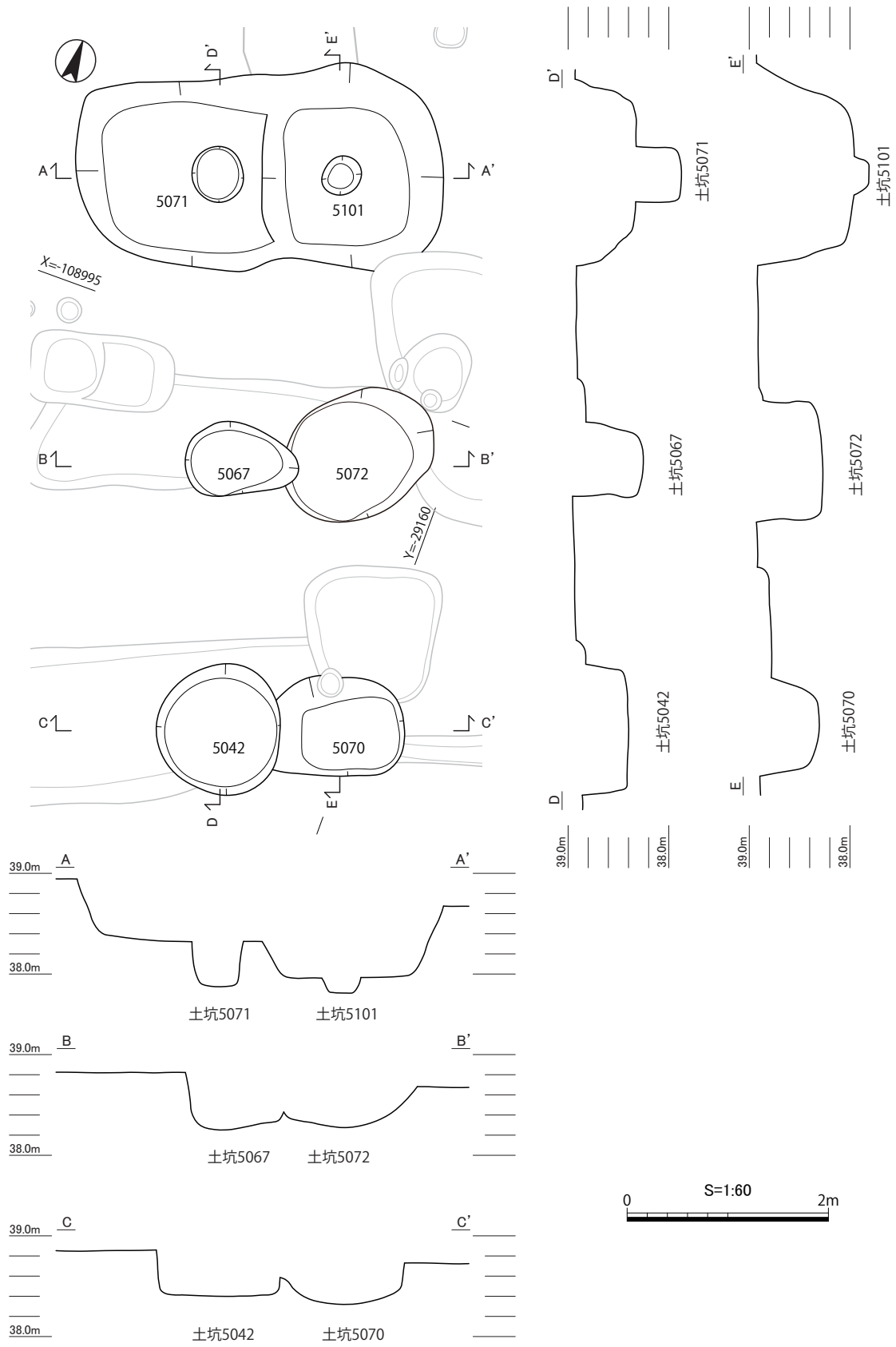


图 47 土坑群平·断面图

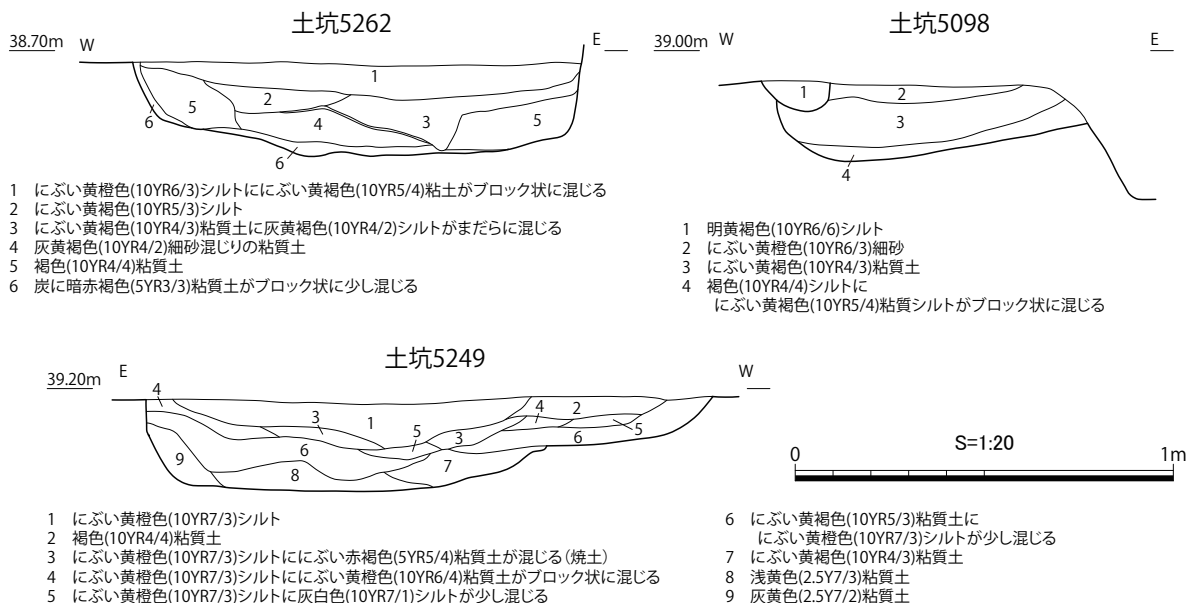


図 48 土坑断面図

mを測る。埋土は主に灰黄褐色（10YR4/2）シルトである。土坑内から土師器皿（図 61 - 184・186・187）が出土した。出土した遺物から室町時代に属するものと考えられる。

土坑 5098（図 48、図版 21-1） B 区中央東よりの 5 C 区にて検出した土坑である。東側は南北方向に延びる溝 5210 に切られている。平面形状は南北方向に長辺を有する長方形である。断面形状は「コ」の字状を呈する。規模は長辺 2.35 m、短辺検出長 0.95 m、深さ 0.2 m を測る。埋土は主に灰黄褐色（10YR4/2）シルトである。土坑内から土師器皿等の中世遺物が出土した。当地は葛野郡条里に推定される 11 坪と 12 坪の境に位置する。土坑の東側は 11 坪に該当する耕作地が広がっている。

土坑 5101（図 47、図版 22-3・4） B 区中央東よりの 4 C 区にて検出した土坑である。平面形状は隅丸正方形である。断面形状は「コ」の字状を呈する。規模は長辺 1.95 m、短辺が 1.90 m、深さ約 1.5 m を測る。埋土は主に灰黄褐色（10YR4/2）シルトである。底部中央には直径 0.4 m、深さ 0.1 m を測る円形のピットを有する。土坑は西側の土坑 5071 に切られているが、深さは当土坑が深い。両土坑は東側の土坑 5101 から西側の土坑 5071 へ造り替えが行われたものと思われる。土坑内から室町時代後半の土師器皿片等が出土した。土坑の性格は、形状、規模から A 区にて検出した土坑 1017 と同様の酒造搾り遺構と考えられる。底部中央のピットは男柱の痕跡と考えられる。男柱、横木、重石等は抜き取られており、残存していなかった。

土坑 5108（図 37、図版 17-2） B 区中央の東より 4 C・D 区にて検出した土坑である。平面形状は楕円形を呈する。断面形状は「コ」の字状を呈する。規模は長辺 0.75 m、短辺が 0.62 m、深さ約 0.41 m を測る。埋土は主に明黄褐色（10YR6/6）シルトである。土坑は大型土坑 5087 の西側を切り、南西側の土坑 5072 に切られている。土坑内から中世の土師器細片が出土した。土坑の形状、位置から土坑 5101 で搾った酒を溜める垂壺を設置していた土坑の可能性はある。埋甕は確認できなかったことから抜き取られた可能性がある。

土坑 5245（図 37、図版 17-2） B 区南西の 2 C 区にて検出した土坑である。平面形状は楕円形である。断面形状は「コ」の字状を呈する。規模は長径 0.65 m、短辺が 0.50 m、深さ約 0.3 m を測る。埋土は主に灰黄褐色（10YR4/2）シルトである。土坑は北側の攪乱に切れ、西側の溝 5232 を切っている。

土坑内から土師器皿等の中世遺物が出土した。

土坑 5262 (図 37、図版 17-2) B 区東端の 5 B 区にて検出した土坑である。平面形状は楕円形で、断面形状は皿状を呈する。規模は長径 1.5 m、短径が 1.2 m、深さ約 0.2 m を測る。埋土は灰黄色 (2.5Y7/2) シルトである。南側の溝 5218 を切っている。土坑の東辺は調査地外にかかっている。土坑内には焼土、炭層が数条みられた。出土遺物には中世の土師器皿等がみられた。

溝 5004 (図 37、図版 17-2) B 区南西側の 2 D 区にて検出した南北方向に延びる溝である。北側は攪乱に切れ、南側は調査地外に延びている。平面は直線状を呈する。断面形状は「コ」の字状を呈する。規模は検出長 1.3 m、幅 0.6 m、深さ 0.27 m を測る。方向は N20° W である。埋土は暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルトの単層である。溝内から土師器皿片が出土した。出土した遺物から室町時代に属するものと考えられる。当溝は浅くなり北側に継続しないが、区画溝と考えられる。

溝 5032 (図 37、図版 17-2) B 区北西側の 2 B 区にて検出した東西方向から北側へ直角に曲がる「L」字状の溝である。北側は土坑 5038、東側は土坑 5056 に切られている。断面形状は皿状を呈する。規模は東西方向の検出長 2.7 m、幅 0.3 m、深さ 0.17 m を測る。方向は N20° W である。埋土は暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルトの単層である。溝内から土師器皿等 (図 63 - 225 ~ 238) が出土した。出土した遺物から室町時代に属するものと考えられる。当溝の東側は浅くなり途切れるが、東側の溝 5092 に継続するものと思われる。区画溝の南西角に該当すると考えられる。

溝 5085 (図 37、図版 17-2) B 区北東側の 4 B 区にて検出した東西方向へ直線状に延びる溝である。西側は攪乱に切られている。断面形状は皿状を呈する。規模は東西方向の検出長 1.7 m、幅 0.2 m、深さ 0.1 m を測る。方向は W29° S である。埋土は暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルトの単層である。溝内から中世の土師器皿等が出土した。出土した遺物から室町時代に属するものと考えられる。当溝の東側は浅くなり途切れるが、東側の溝 5092 に継続するものと思われる。

溝 5092 (図 37、図版 17-2) B 区中央の 2 ~ 4 B 区にて検出した東西方向へ直線状に延びる溝である。西側は土坑 5185、東側は土坑 5103 に切られている。断面形状は皿状を呈する。規模は東西方向の検出長 4.2 m、幅 0.85 m、深さ 0.18 m を測る。方向は W29° S である。埋土は暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルトの単層である。溝内から土師器皿片が出土した。出土した遺物から室町時代に属するものと考えられる。西側の溝 5032、東側の溝 5085 に継続する東西方向の区画溝と考えられる。

溝 5104 (図 37、図版 17-2) B 区中央北側の 3 A 区にて検出した東西方向に延びる溝である。南側の溝 5085・5092 と平行に延びている。西側は土坑 5056 に切られている。断面形状は皿状を呈する。規模は検出長 1.8 m、幅 0.3 m、深さ 0.1 m を測る。方向は W29° S である。埋土は黒褐色 (10YR3/2) シルトの単層である。溝内から土師器皿片が出土した。出土した遺物から室町時代に属するものと考えられる。東西方向の区画溝と考えられる。

溝 5210 (図 37、図版 20 - 1・29 - 2) B 区北東側の 4 A ~ D 区にて検出した南北方向に延びる溝である。断面形状は碗状を呈する。規模は検出長 17.2 m、最大幅 1.3 m、深さ 0.46 m を測る。方向は N17° W である。埋土は主に灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土である。溝内から中世の遺物類が出土した。当溝は位置、方位から葛野郡条里の十一坪と十二坪の坪境の溝と考えられる。西側は居住区、東側は畑地となっている。

溝 5211 (図 37、図版 20 - 1・29 - 2) B 区北東側の 5 A ~ D 区にて検出した南北方向に延びる溝である。断面形状は逆台形を呈する。規模は検出長 16 m、最大幅 1.2 m、深さ 0.4 m を測る。方向は N17° W である。埋土は主ににぶい黄褐色 (10YR5/4) 礫混粘質砂層である。溝内から中世の遺物類が

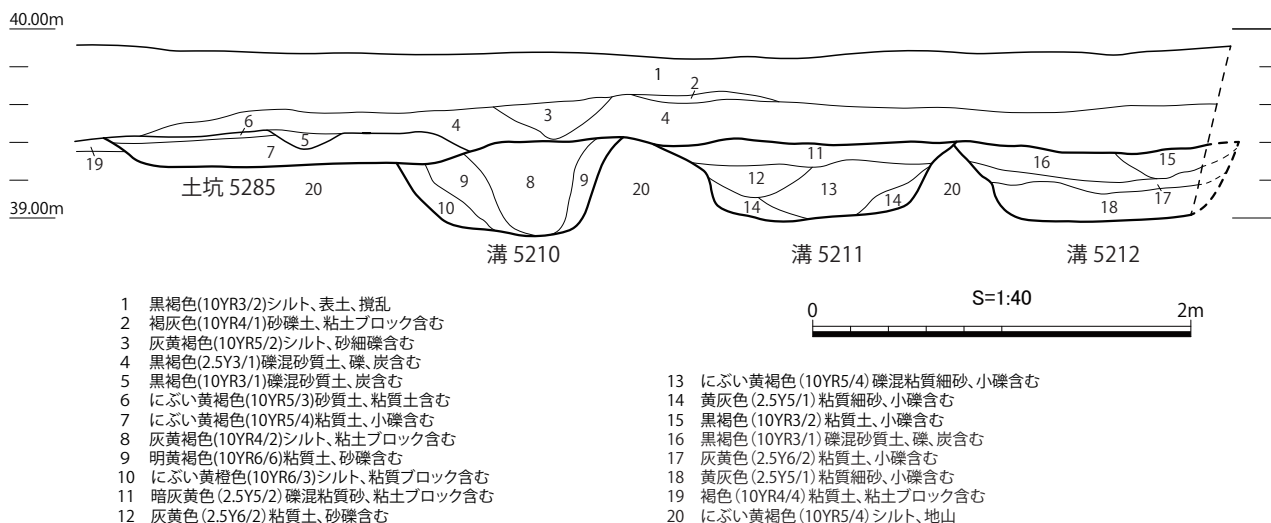


図 49 溝 5210 ～ 5212 断面図

出土した。当溝群は位置、方位から葛野郡条里の十一坪と十二坪の坪境溝に隣接する畑作の素掘溝と考えられる。

溝 5212 (図 37、図版 20 - 1・29 - 2) B 区北東側の 5 A ～ D 区にて検出した南北方向に延びる溝である。断面形状は逆台形を呈する。規模は検出長 18.2 m、最大幅 1.1 m、深さ 0.38 m を測る。方向は N17° W である。埋土は主に黄灰色 (2.5YR5/1) 粘質細砂層である。溝内から中世遺物が出土した。当溝は位置、方位から葛野郡条里の十一坪と十二坪の坪境溝に隣接した畑作の素掘溝と考えられる。

溝 5249 (図 48、図版 29-5) B 区北西側の 2 A・B 区にて検出した南北方向に延びる幅広の溝である。北側は攪乱に切られ、南側は浅くなって途切れている。断面形状は皿状を呈する。規模は検出長 1.9 m、幅 1.2 m、深さ 0.25 m を測る。方向は N25° W である。埋土は暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルトである。溝内から土師器皿片が出土した。室町時代に属する南北方向の区画溝と考えられる。

井戸 5106 (図 48、図版 23-7) B 区南東側の 5 C・D 区にて検出した井戸である。周辺は中世の耕作地、攪乱に切られている。平面は円形を呈する。断面形状は直線状を呈する。規模は長径 2.4 m、短径 2.0 m を測る。深さ 3 m まで掘削を行ったが、下層の井戸枠、水溜部分については精細な調査ができなかった。埋土は主に暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト、粘土層である。井戸内から中世の遺物 (図 61 - 179・180・185・188) が出土した。出土した遺物から室町時代に属するものと考えられる。上部に施工されたと考えられる石組が崩されて散乱していた。

第3節 遺物の概要

遺物はA・B区から出土した総数が23箱を数える。その大半は上層の遺物包含層と遺構から出土した中世の遺物である。その他の遺物は、下層の包含層、遺構と基盤層上位の流路から出土したものが少量ある。遺物の時期は、飛鳥時代から江戸時代までの長期にわたるが、中でも中世に属するものが圧倒的に多い。縄文時代と考えられる遺物は、A区の流路内から少量が出土した。これらの遺物はローリングを受けていることから、上流からの流れ込みと思われる。精細な時期、種別は、著しく摩滅していることから不明である。

飛鳥時代から平安時代の遺物は、A・B区の下層遺構と包含層から出土している。A区は単独の柱穴、土坑、竪穴建物1・2から出土した。B区は柱穴、溝、竪穴建物3から出土した。その内容は、土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦などである。

上層遺構、包含層からは、中世を主体とする土師器、須恵器、焼締陶器、瓦質土器、輸入磁器、瓦、埴、土錘、壁土、銭貨、砥石、木製品などがある。A区は土坑、井戸から多くの遺物が出土した。B区は土坑、溝から比較的多くの遺物が出土した。包含層から出土した遺物は、両区共に少量であった。

以下、飛鳥時代と中世に大きく時期別に分けて記述した。

1. A区下層遺構出土遺物（図49-1～13、図版30-1）

1～13は飛鳥時代から平安時代の遺物である。1・2は須恵器の坏Hの体部である。1は口径6.6cmを測る小形である。体部は浅く直線状に口縁部まで伸びる。口縁部は短く立ち上がった受部を有する。柱穴1010から出土した。2は口径13.5cmを測る大型の坏Hである。体部は深く口縁部まで直線状に延びる。受部は短く立ち上がる。1・2は飛鳥I～II型式に比定される。柱穴1010から出土した。3～8は須恵器の坏Gである。3・4は湾曲した体部から外反した口縁部を有する。口縁端部は丸くおさめる。調整は底部外面がヘラ切りの後ナデ、内面はナデ、口縁部内外面は回転ナデである。飛鳥II型式に比定できる。3は焼土1054から出土した。4は柱穴1043から出土した。5は底部から湾曲した体部を有する。調整は底部外面がヘラ切りの後ナデ、内面はナデ、口縁部内外面は回転ナデである。柱穴1035から出土した。6は底部から湾曲した体部を有する。調整は底部外面がヘラ切りの後ナデ、内面

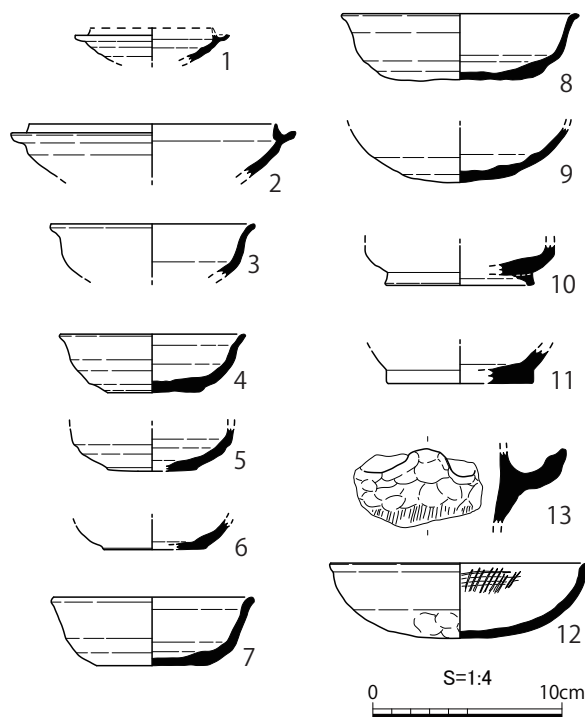


図50 A区下層遺構出土遺物（1～13）

表4 遺物概要表

時代	内容	Aランク 箱数	Bランク 箱数	Cランク 箱数	コンテナ 箱数
飛鳥・平安	土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦類	3箱	1箱	19箱	23箱
鎌倉・室町	土師器、須恵器、瓦質土器、焼締陶器、施釉陶器、輸入磁器、瓦埴類、木製品、金属製品、土製品、石製品、壁土、鉄滓				

はナデ、口縁部内外面は回転ナデである。土坑 12 から出土した。飛鳥 I ~ II 型式に比定できる。7 は湾曲した体部から外反した口縁部を有する。口縁端部は丸くおさめる。調整は底部外面にヘラ切りの後ナデ、内面はナデ、口縁部内外面は回転ナデを施している。飛鳥 II 型式に比定できる。柱穴 1064 から出土した。8 は湾曲した体部から外反した口縁部を有する。口縁端部は丸くおさめる。調整は底部外面がヘラ切りの後ナデ、内面はナデ、口縁部内外面は回転ナデである。柱穴 1012 から出土した。9 は口縁部を欠損しているが、須恵器の坏 H の底部であろう。湾曲した底部から内湾した体部を有する。調整は底部外面がヘラ切りの後ナデ、内面はナデ、体部内外面は回転ナデである。柱穴 1012 から出土した。10 は須恵器の杯 B である。底部に「ハ」の字状に開いた貼り付け高台を有する。底部から湾曲した体部を有する。調整は底部外面がヘラ切りの後ナデ、内面はナデ、内外面は回転ナデ調整する。高台貼り付け部を強くナデている。土坑 12 から出土した。11 は須恵器の鉢底部である。底部は突出的に垂直に張り出す。底部から外上方に延びる体部を有する。底部に糸切り痕を残している。柱穴 1009 から出土した。平安京 I 期新段階 ~ II 期古段階に比定できる。

12 は土師器の杯 C である。内面に暗文ミガキを放射状に施す。飛鳥 III 型式に比定できる。柱穴 1007 から出土した。13 は土師器の把手である。上外方へ湾曲しながら立ち上がる。柱穴 1008 から出土した。

竪穴建物 1 出土遺物 (図 50 - 14 ~ 30、図版 30 - 2)

14 は須恵器の坏 B 蓋である。天井部はわずかに丸みをもち、口縁部は下方へ屈曲し、端部は垂下する。調整は天井部外面をヘラ切り、のちナデ、内面はナデ、口縁部内外面は回転ナデである。京都 I 期新段階から II 期古段階に比定される。

15 ~ 17 は須恵器の坏 H である。15 は口径 7.8cm を測る小形である。口縁部は短く立ち上がった受部を有する。16 は口径が 12.7cm を測る大型である。口縁部は短く立ち上がる。飛鳥 I ~ II 型式に比定できる。17 は口縁部が欠損しているが、底部から湾曲した体部に延びる。

18 ~ 24 は須恵器の坏 G である。18・19・23・24 は平底の底部から上外方に延びた体部と外反した口縁部を有する。調整は底部外面をヘラ切りの後ナデ、内面はナデ、体部内外面は回転ナデである。

21 は垂直気味に立ち上がった口縁部を有する。端部は短く外方へつまみ出している。

22 ~ 24 は平底から湾曲しながら立ち上がる体部を有する。飛鳥 I ~ II 型式に比定される。

25・26 は土師器の坏 C である。25 は浅い体部を有する。口縁部は垂直につまみ出している。飛鳥 IV ~ V 型式に比定される。26 は深めの体部、口縁部

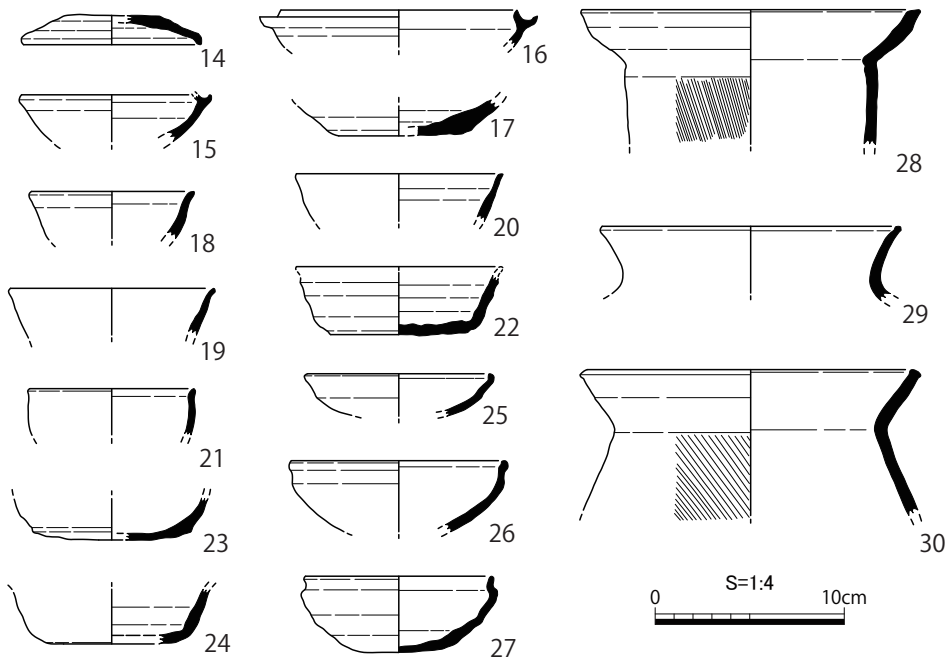


図 51 竪穴建物 1 出土遺物 (14 ~ 30)

は垂直に立ち上がる。飛鳥Ⅲ型式に比定される。

27は須恵器の坏及び坩である。湾曲した体部から垂直に短く立ち上がった口縁部を有する。初期須恵器の羽釜形坏の可能性もある。

28～30は土師器の長胴甕である。28は垂直に立ち上がった体部と上外方に外反した口縁部を有する。胴部外面にハケを施す。7世紀代と考えられる。29は土師器の甕である。「く」の字状に外反した口縁部を有する。屈曲部外面を強くヨコナデしている。30は内傾した体部と上外方に外反した口縁部を有する。胴部外面にハケを施す。7世紀代に比定される。

2. B区下層遺構出土遺物 (図51 - 31 ~ 55、図版31 - 1)

31～55は飛鳥時代から平安時代の遺物である。31は須恵器の坏Gの蓋である。天井部は丸みを持ち、口縁部は屈曲する。端部はかえりを有し垂下する。調整は天井部外面をへら切り、内面はナデ、口縁部内外面は回転ナデ、つまみは有しない。飛鳥Ⅰ～Ⅱ型式に比定される。柱穴5003から出土した。

32は須恵器の坏Hである。口径7.5cmを測る小形である。口縁部は短く立ち上がった受部を有する。

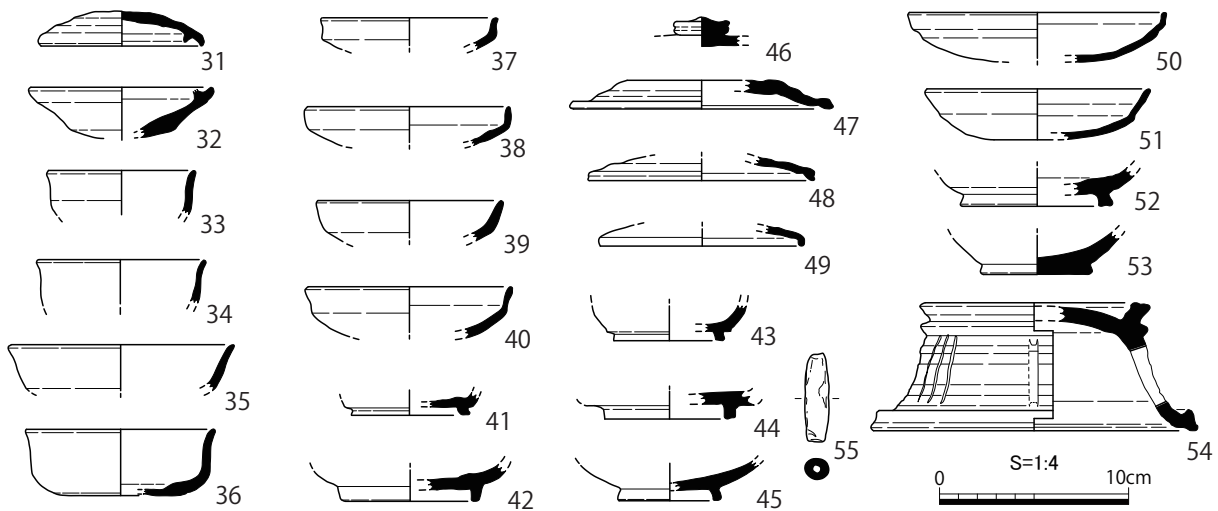


図52 B区下層遺構出土遺物 (31 ~ 55)

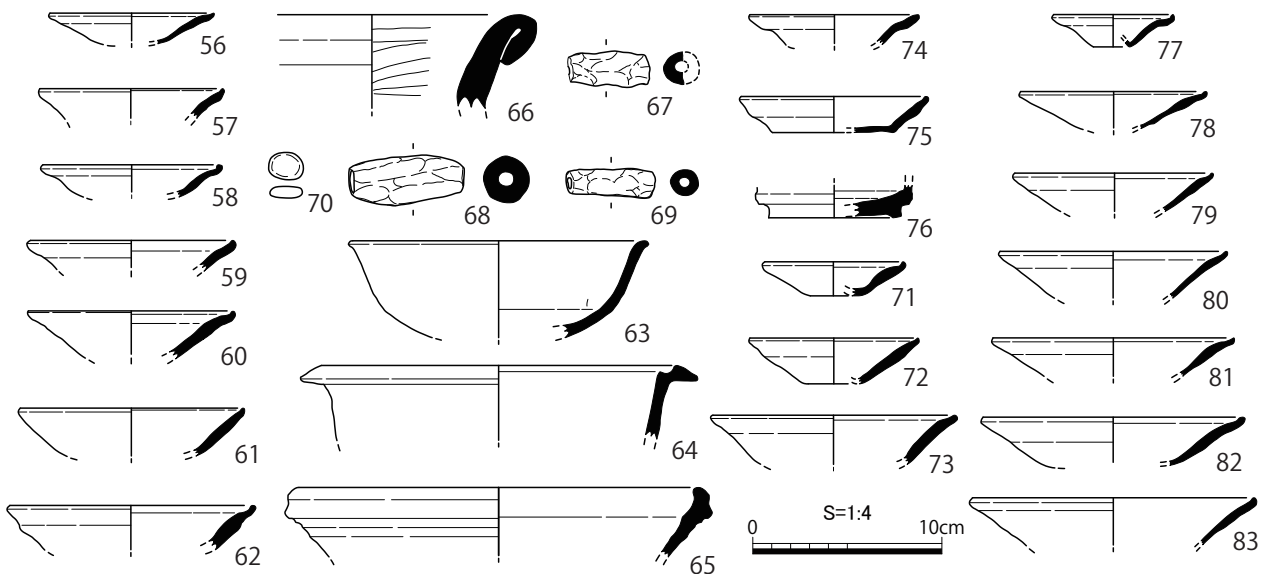


図53 A区上層遺構出土遺物 (56 ~ 83)

時期は飛鳥Ⅰ～Ⅱ型式に比定される。柱穴 5273 から出土した。

33～40 は須恵器の坏 G である。33～36 は深い体部から垂直気味に立ち上がった口縁部を有する。口縁部はわずかに外反する。飛鳥Ⅰ～Ⅱ型式に比定される。33 は柱穴 5261 出土、34 は柱穴 5245 出土、35 は柱穴 5031、36 は溝 5237 から出土した。37～40 は浅い体部から大きく外反し、垂直気味に短く立ち上がった口縁部を有する。飛鳥Ⅰ～Ⅱ型式に比定される。37 は柱穴 5230、38 は柱穴 5274、39 は竪穴建物 3、40 は溝 5226 から出土した。

41～44 は須恵器の杯 B である。全面をナデ、高台を貼り付け強くナデている。41 は柱穴 5230 出土、42～44 は柱穴 5208 から出土した。平安京Ⅰ期新段階～Ⅱ期古段階に比定される。

45 は緑釉陶器の碗である。底部から緩やかに湾曲しながら立ち上がる体部を有する。底部に小さな高台を貼り付けている。内外面に施釉している。10 世紀に比定される。柱穴 5251 から出土した。

溝 5218 (図 51 - 46 ~ 54、図版 31 - 1)

46～49 は須恵器の坏 B 蓋である。46 は天井部に平坦なつまみを有する。47～49 は天井部がわずかに丸みをもち、口縁部は屈曲、端部は垂下する。調整は天井部外面をヘラ切り後ナデ、口縁部内外面は回転ナデである。京都Ⅰ期新～Ⅱ期古段階に比定される。

50・51 は土師器の坏 C である。底部から緩やかに立ち上がった浅い体部を有する。口縁部は短く立ち上がった 50 と上外方へ垂直気味に立ち上がった 51 がある。飛鳥Ⅳ～Ⅴ型式に比定される。

52・53 は須恵器の坏 B である。底部は「ハ」の字状に開いた貼り付け高台を有する。53 は垂直に突出した平底を有する。体部は底部から湾曲しながら外方に延びる。

54 は須恵器の圈足円面碗である。碗面部の陸はわずかに盛り上がり湾曲し裾に浅い海をもつが、明確な内堤はもたない D 2 型である。縁部は上外方に短く伸びて端部に面を有する b 型に分類される。脚部外面の上方に断面三角形の突帯を 1 条有している。脚部は緩やかに外反し、長方形の透かし孔と 3 条の線刻を施している。端部は外方へわずかに拡張し面を有する。時期的な特徴としては、次の 3 点が挙げられる。1 点目は大きさが外縁径 13.2cm を測り小型に分類される。2 点目は脚端部が折り返した工類であること。3 点目は文様帯が長方形透かしに線刻文の組み合わせた省略化がみられる等、以上の特徴から、時期は 8 世紀後半から 9 世紀前半に比定される。

55 は細長い土錘である。長さ 4.7 cm、径 2.1 cm、穴径 0.4 cm を測る。表面は赤色化した淡黄灰色で胎土は密である。

3. A 区上層遺構出土遺物 (図 52 - 56 ~ 83、図版 31 - 2・32 - 1)

56～83 は鎌倉時代から室町時代の遺物である。56～62 は土師器皿である。浅い体部を有する 56 と内湾する 57～62 がある。58 は皿 N 類、Ⅸ期古段階に比定される。溝 101 から出土した。57 は皿 N 類、Ⅷ期中段階に比定される。溝 168 から出土した。58・60 は N 類の土師器皿である。Ⅷ期新段階に比定される。58 は柱穴 39 出土、60 は柱穴 213 から出土した。59 は N 類の土師器皿である。Ⅷ期中段階に比定される。柱穴 56 から出土した。61・62 は S 類の土師器皿である。61 はⅧ期中段階に比定される。柱穴 213 から出土した。62 はⅧ期新段階に比定される。柱穴 108 から出土した。

63 は輸入磁器の龍泉窯系青磁碗である。湾曲した体部から外反した口縁部を有する。柱穴 39 から出土した。15 世紀に比定される。64 は瓦器鍋である。体部から直角に折れ曲がり水平に開いた口縁部を有する。口縁部には蓋の受け部がついている。内・外面はヨコナデを施す。柱穴 83 から出土した。Ⅸ期中期に比定される。65 は須恵器の東播系鉢である。口縁部は受け口状を呈する。平安京編年のⅨ期

古～中頃に比定される。土坑 194 から出土した。66 は備前焼の大甕である。口縁部は玉縁状を呈する。間壁編年の第Ⅲ期後半に比定される。柱穴 167 から出土した。67～69 は土錘である。67 は中型で短い。赤色化し軟質である。柱穴 1026 から出土した。68 は大型で太い。赤色化した軟質である。柱穴 1024 から出土した。69 は小型で細い。焼成温度は低く軟質である。柱穴 1034 から出土した。70 は黒色の碁石である。扁平な円形を呈する。全面は光沢を發している。チャート製である。柱穴 214 から出土した。

柱穴 57 (図 52 - 71 ~ 76、図版 31 - 2)

71・72 は土師器皿である。体部外面上半にナデ調整を施している。器壁は膨らんだ後、口縁部がすぼむ。71 は皿 N 類である。72 は皿 S 類である。Ⅶ期中～新に比定される。73～75 は白色系の土師器皿である。73 は外反気味に立ち上がる口縁部を有する。ヨコナデ調整で、端部を少しつまみ上げている。74・75 は頸部を強くヨコナデしている。Ⅶ期中～新に比定される。76 は陶器の碗である。底部は削り出しの高台を有する。体部は底部から垂直に折れ曲がり立ち上がる。

土坑 150 (図 52 - 77 ~ 83、図版 32 - 1)

77～83 は土師器皿である。77 は皿 Sh 類のへそ皿である。体部外面上半にナデ調整を施している。器壁は膨らんだのち口縁部がすぼむ。時期はⅨ期中に比定される。78～83 は上外方に延びる口縁部を有する。S 大類である。78 はⅨ期中、79～83 はⅧ～Ⅸ期に比定される。

土坑 170 (図 53 - 84 ~ 90、図版 32 - 2)

84～86 は土師器皿である。上外方に延びた体部を有する。皿 S に類する。Ⅸ期中～新に比定される。87 は灰釉陶器の碗である。わずかに内湾する体部を有する。88 は天目茶碗である。突出気味の底部を有する。高台部はヘラケズリしている。体部内外面は施釉している。89 は輸入磁器の龍泉窯系青磁碗である。底部には内湾気味の高台を有する。体部外面に蓮弁文、見込み部に花文を施している。90 は瓦質羽釜である。鏝径は 26cm を測る。鏝は垂直気味に張り出す。体部外面はを施している。鏝は付け根を強くヨコナデし、鏝下の胴部はオサエ、鏝上はヨコナデで調整している。Ⅸ期に比定される。

溝 173 (図 54 - 91 ~ 107、図版 32 - 3)

91～102 は土師器皿である。91～93 は皿 Sh 類のへそ皿である。体部外面上半にナデ調整を施している。器壁は膨らんだのち口縁部がすぼむ。時期はⅧ期古～中に比定される。94・95 は N 類の土師器皿である。小ぶりの体部から上外方へ口縁部が延びる。Ⅷ期中に比定される。96・97 は皿 S 類である。体部は外反気味に延びる。Ⅸ期中に比定される。98～102 は白色系 N 類の土師器皿である。横ナデ調整で、端部を少しつまみ上げている。時期はⅧ期古～新に比定される。

103 は瀬戸系の天目茶碗である。体部は底部から外反しながら立ち上がり、口縁端部は頸部で緩やかに屈曲する。端部は上外方に引き出され丸い。底部及び高台はケズリ調整、その他はナデ調整である。灰白色の胎土に、黒色の釉を底面まで施している。

104 は輸入磁器である。龍泉窯の白磁碗である。口縁部は玉縁状を呈する。Ⅶ期に比定される。105 は須恵器の東播系鉢である。体部は口縁にかけて直線状に延びる。口縁部は受け口状を呈する。内外面をナデ調整し、口縁端部内面を特に強くナ

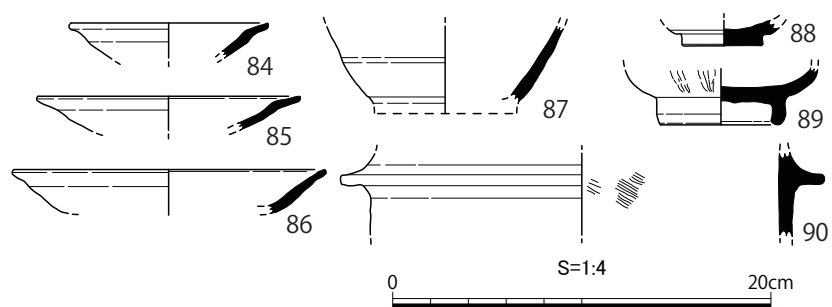


図 54 土坑 170 出土遺物 (84～90)

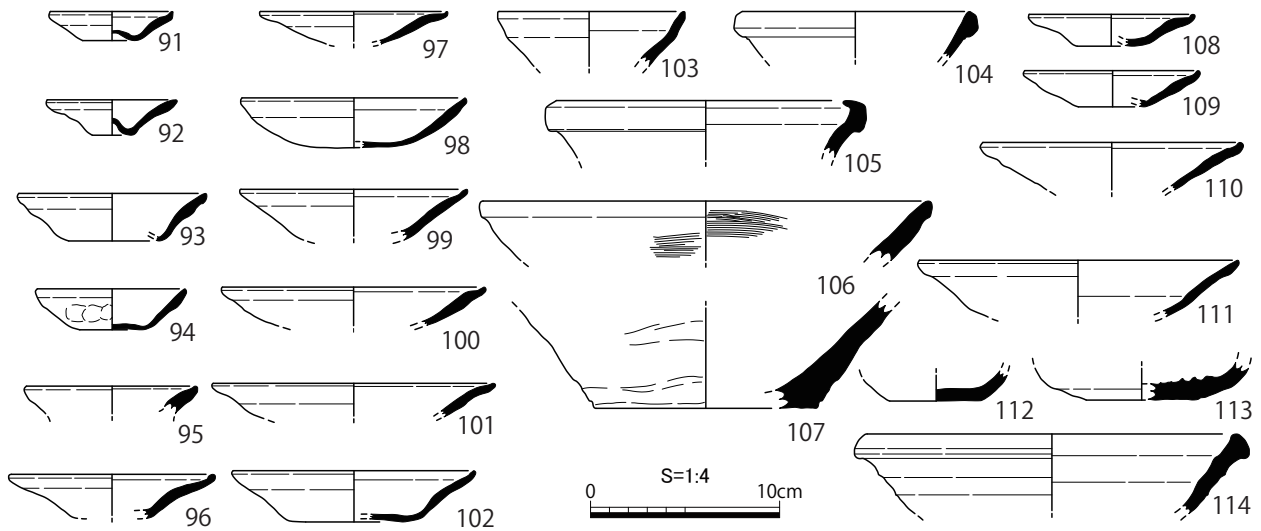


図 55 溝 173・土坑 1001 出土遺物 (91～114)

であるため、端部が立ち上がる。

106・107は陶器の焼締播鉢である。106は直線状に上外方へ延びた口縁部を有する。107は平底から上外方へ延びた体部を有する。Ⅷ期～Ⅸ期に比定される。

土坑 1001 (図 54 - 108～114、図版 32 - 4)

108・109は皿 Sh 類のへそ皿である。体部外面にナデ調整を施している。器壁は膨らんだのち口縁部がすばむ。110・111は S 類の土師器皿である。体部から口縁部まで直線状に延びる。Ⅷ期中～新に比定される。112は灰釉陶器の小鉢である。底部には糸切り痕がみられ、内外面は施釉を施している。

113は瀬戸系の卸目皿である。底部には糸切痕、内面には播り目がみられる。114は東播系の播鉢である。体部は口縁にかけて直線状に延びる。口縁部は断面三角形状を呈する。内外面をナデ調整し、口縁端部内面を特に強くナデる。Ⅳ期に比定される。

土坑 1017・1018 (図 55 - 115～123、図版 33 - 1)

115は S 類の土師器皿である。直線状に延びた口縁部である。Ⅶ期新～Ⅷ期中に比定される。土坑 1017 - 2 から出土した。116～118は皿 S 類である。内湾気味に延びる口縁部を有する。Ⅶ期新～Ⅷ期古に比定される。119は灰釉陶器の小皿である。土坑 1017 - 2 から出土した。

120は青白磁の合子である。内湾した体部から垂直気味に立ち上がり、口縁端部には受部を有する。体部下半に渦巻文を施している。土坑 1017 - 2 から出土した。121は灰釉陶器の碗である。緩やかに内湾した口縁部を有する。土坑 1017 - 2 から出土した。122は焼締陶器の播鉢である。土坑 1018 から出土した。123は土師器の土錘である。焼成温度は低く軟質である。土坑 1017 - 2 から出土した。

埋甕土坑 2・1101・土坑 5103 (図 56 - 124～126、図版 33 - 2)

124～126は備前焼の大甕である。口縁部は折り返し

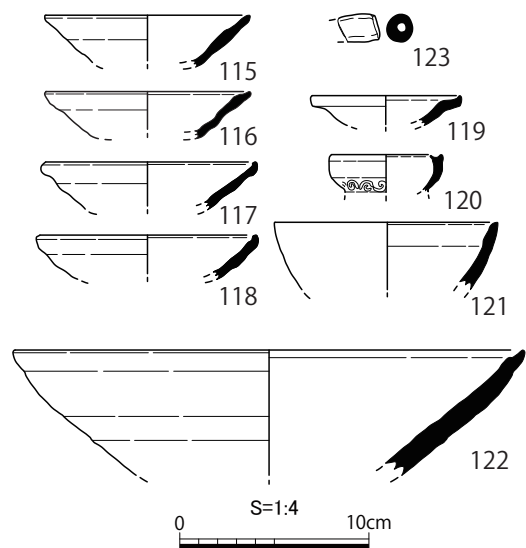


図 56 土坑 1017・1018 出土遺物 (115～123)

肥厚させて、端部は玉縁状である。外面はヨコナデ、内面はヨコナデ、ヨコハケ調整を施している。124は大きく張った体部から「く」の字状に大きく上外方へ外反した口縁部を有する。B区の土坑5103から出土した。125は大きく張った体部を有する。口縁部は「く」の字状に直立気味で上外方へ外反する。A区の土坑1101から出土した。126は大きく張った体部から直立した口縁部を有する。A区の土坑2から出土した。124・125は間壁編年の第Ⅲ期後半、126が第Ⅳ期前半に比定される。

埋甕土坑1100（図57 - 127・128、図版33 - 3）

127・128は備前焼の大甕である。127は大きく張った体部から「く」の字状に大きく上外方へ外反した口縁部を有する。口縁部は折り返し肥厚させて、端部は玉縁状を呈する。内外面ともにヨコハケ、頸部外面は強いヨコナデで稜が形成されている。128は大きな平底である。内側は上げ底状を呈する。体部は上外方へ直線状に広がる。内外面はヨコナデ、底部はナナメハケ、ヨコハケ、ナデを施している。間壁編年では第Ⅲ期後半に比定される。

井戸169（図58 - 60 - 129 - 175、図版33 - 2・4）

129・130は備前焼の大甕である。129は大きく張った肩部から上外方へ直立気味に立ち上がる口縁部である。端部は折り返し肥厚させて玉縁状を呈する。内外面ともにヨコハケ、頸部外面は強いヨコナデで稜が形成されている。130は大きな平底から上外方へ内湾しながら立ち上がる。底部の内側は上げ底状を呈し、体部は上外方へ直線状に広がる。内外面はヨコナデ、底部はナナメハケ、ヨコハケ、ナデを施している。間壁編年の第Ⅲ期後半に比定される。

131 - 156は土師器皿である。131・

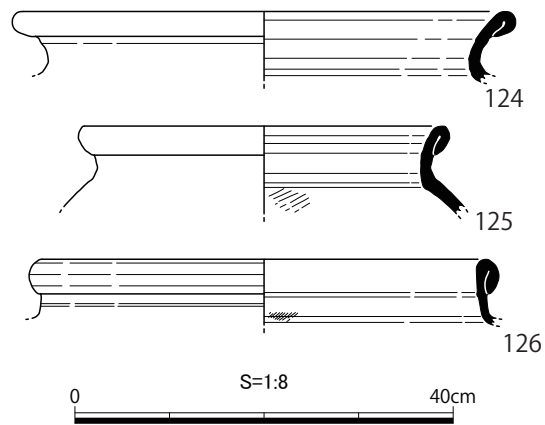


図57 埋甕土坑2・1101・土坑5103出土遺物（124～126）

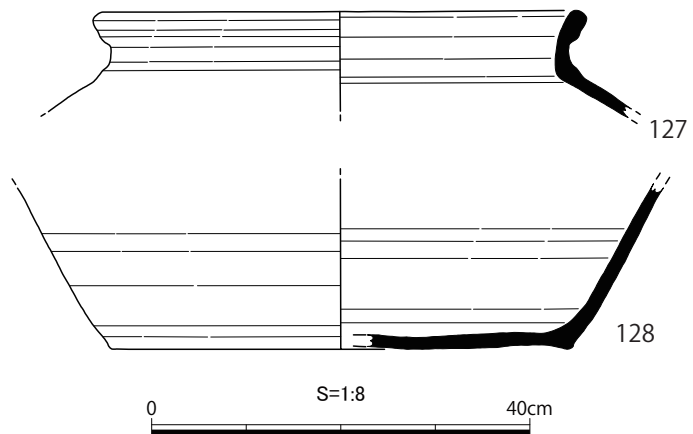


図58 埋甕土坑1100出土遺物（127・128）

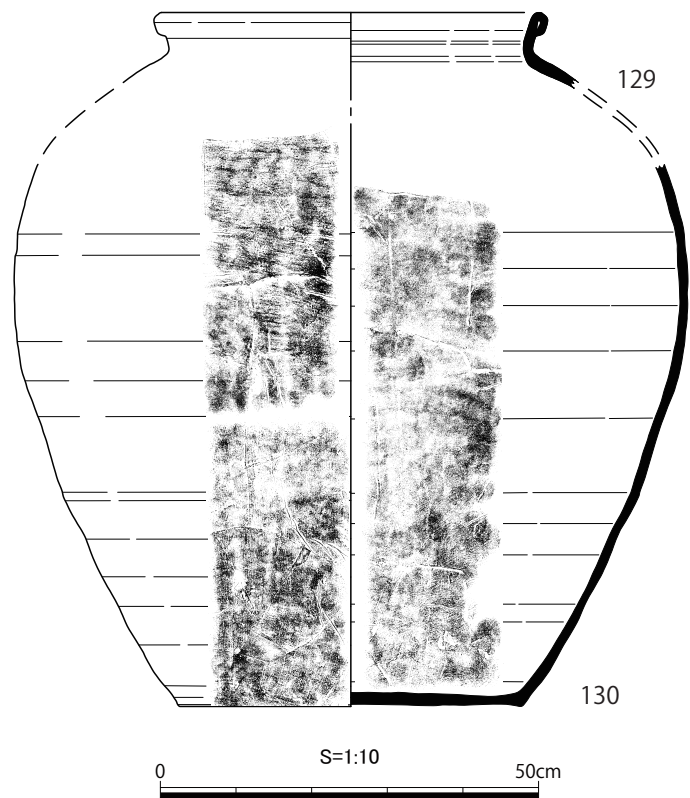


図59 井戸169出土遺物（129・130）

132は皿Sh類のへそ皿である。131・132は体部外面上半にナデ調整を施している。器壁は膨らんだのち口縁部がすぼむ。Ⅷ期中に比定される。133・134は内湾した体部を有する皿S類である。Ⅶ期中に比定される。135～137は皿S類の土師器皿である。直線状に延びる体部を有する。Ⅷ期中に比定される。138は器高の低いS類の土師器皿である。Ⅳ期新に比定される。139～156は白色系のやや褐色化した土師器皿である。139～143はヨコナデによって外反させている。皿N類である。Ⅷ～Ⅸ期新に比定される。144～156は皿S類である。Ⅷ～Ⅸ期新に比定される。

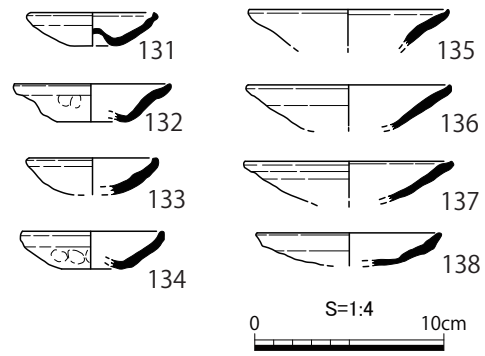


図 60 井戸 169 出土遺物 (131～138)

157・158は天目茶碗である。内湾した体部から口縁部が短く外反する。159～162は輸入磁器の青磁碗である。無文の龍泉窯である。159～161は湾曲した体部から外反する口縁部を有する。162は青磁碗の底部である。高台を有し、見込みに蛇の目釉剥ぎが施されている。

163は青磁の壺である。頸部から大きく外反した口縁部である。端部は短くつまみ上げて直立する。

164は瓦器鍋である。口縁部は水平方向に張り出し、端部は尖っている。体部外面にユビオサエ、内面にヨコハケを施している。165は陶器の壺である。垂直気味に立ち上がった体部から内傾した肩部を有する。肩部に「大」字状の線刻を施している。166は備前焼の大甕である。玉縁の口縁部を有する。間壁編年の第Ⅲ期後半に比定される。167は常滑産の播鉢である。体部を大きく外反させ、口縁端部を上方に高くつまみ上げる。頸部外面を少しつまみ出す。残存している部分の内面下部は、使用のため磨滅している。播目は確認できなかった。

168～172は瓦器の羽釜である。168は体部から口縁部へ大きく内湾する羽釜である。169～171は体部の上位に断面三角形の鐙を有する。169は垂直に伸びた体部を有する。口縁端部は内側につまみ出している。170は外傾した体部を有する。口縁端部は内側につまみ出している。171は内湾した体部を有する。口縁端部は内側につまみ出している。15世紀に比定される。172は小型の三足羽釜である。脚部は底部から内湾した状態で延び、端部は猫足状を呈する。京都Ⅵ期に比定される。

173は瓦質の奈良風炉である。体部は内湾しながら口縁部まで延びる。端部上端は面を有する。体部に2条の突帯とその間に宝相華文に斜格子文を組み合わせている。その下位に円形の透かしを有する。京都Ⅶ期中段階に比定される。

174は陶器の鍋把手である。基部は直線状に延び、断面は中空の楕円形を呈する。端部は扇状を呈し薄く仕上げている。器部は欠損している。全体に灰釉を施している。

175は瓦質の塼である。上面は丁寧なナデ仕上げ、下面は板ナデを施している。上面はすり減った磨滅がみられる。全面に面取りを施している。厚さ3cmを測る。

4. B区上層遺構出土遺物 (図 61 - 176～188、図版 35 - 1)

176～184は土師器皿である。176・177は皿Sh類のへそ皿である。体部外面上半にナデ調整を施している。器壁は膨らんだのち口縁部がすぼむ。京都Ⅶ期中～新に比定される。土坑 5068 から出土した。177は体部外面上半にナデ調整を施している。器壁は膨らんだのち口縁部がすぼむ。京都Ⅶ期中～新に比定される。柱穴 5215 から出土した。

178は皿S類である。京都Ⅳ期新に比定される。土坑 5067 から出土した。179は皿S類である。京

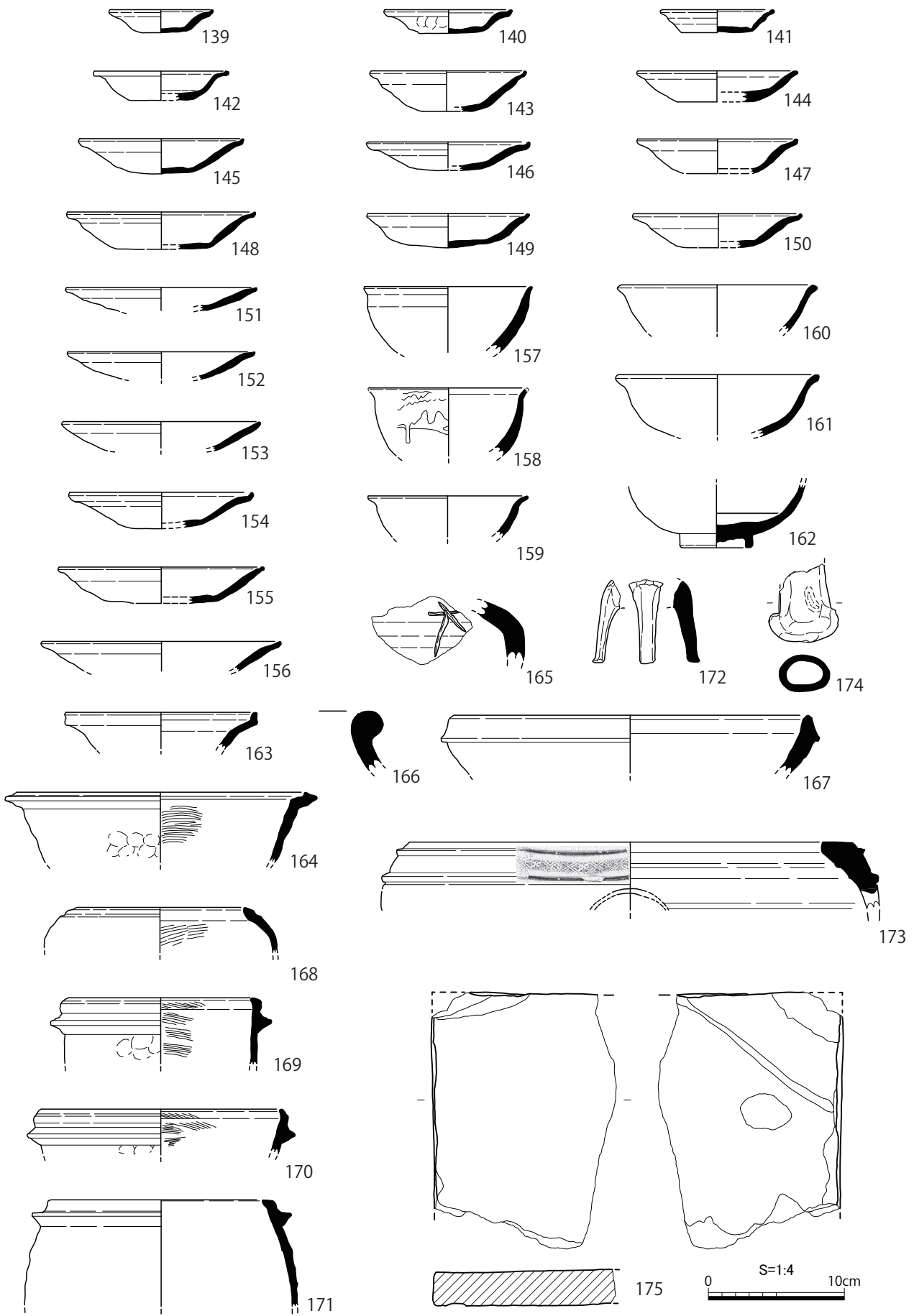


図 61 井戸 169 出土遺物 (139 ~ 175)

都IV期新に比定される。井戸 5106 から出土した。180・181 は皿 N 類である。京都 X 期古に比定される。180 は井戸 5106 から出土した。181 は土坑 5067 から出土した。182 は皿 S 類である。京都 VIII 期新に比定される。土坑 5093 から出土した。183 は皿 S 類である。京都 X 期古に比定される。柱穴 5050 から出土した。184 は皿 N 類である。京都 IX 期中に比定される。土坑 5093 から出土した。

185 は青磁の碗である。龍泉窯である。体部外面に蓮弁文を施している。井戸 5106 から出土した。186 は陶器の播鉢である。体部から口縁部は外外方へ延びる。口縁端部は内側を上方へつまみ上げ、外側に面を有する。土坑 5093 から出土した。187 は瓦質土器の火鉢及び風炉である。口縁部外面に細い貼り付け突帯とその間に格子文のスタンプを連続して施している。土坑 5093 から出土した。188 は瓦質土器の火鉢である。口縁部外面に細い貼り付け突帯を有する。突帯間は無文である。体部の器壁は厚いが、器高は浅い。脚部はアーモンド状の半円形装飾を左右に 2 対飾っている。京都 XI 期古段階～新段階に比定される。井戸 5106 から出土した。

柱穴 5274 (図 61 - 189 ~ 193、図版 35 - 2)

189 ~ 191 は土師器皿である。皿 S 類の京都 IX 期古 ~ X 期新に比定される。192 は青磁の碗である。体部から口縁部にかけて緩やかに延びる。体部外面に蓮弁を施している。龍泉窯である。193 は土錘である。体部は太く端部には面を有する。焼成温度は低く軟質である。

柱穴 5281 (図 61 - 194 ~ 197、図版 35 - 2)

194・195 は皿 S 類の土師器皿である。京都 VIII 期新に比定される。196 は青磁の碗である。体部外面に蓮弁を施した龍泉窯である。197 は白磁の碗である。体部は上外方に延び、端部は玉縁状を呈する。

土坑 5012 (図 61 - 198 ~ 200、図版 35 - 2)

198 ~ 200 は土師器皿である。198 は皿 Sh 類のへそ皿である。体部外面上半にナデ調整を施している。器壁は膨らんだのち口縁部がすぼむ。京都 VII 期中 ~ 新に比定される。199 は皿 S 類である。京都 VIII 期新

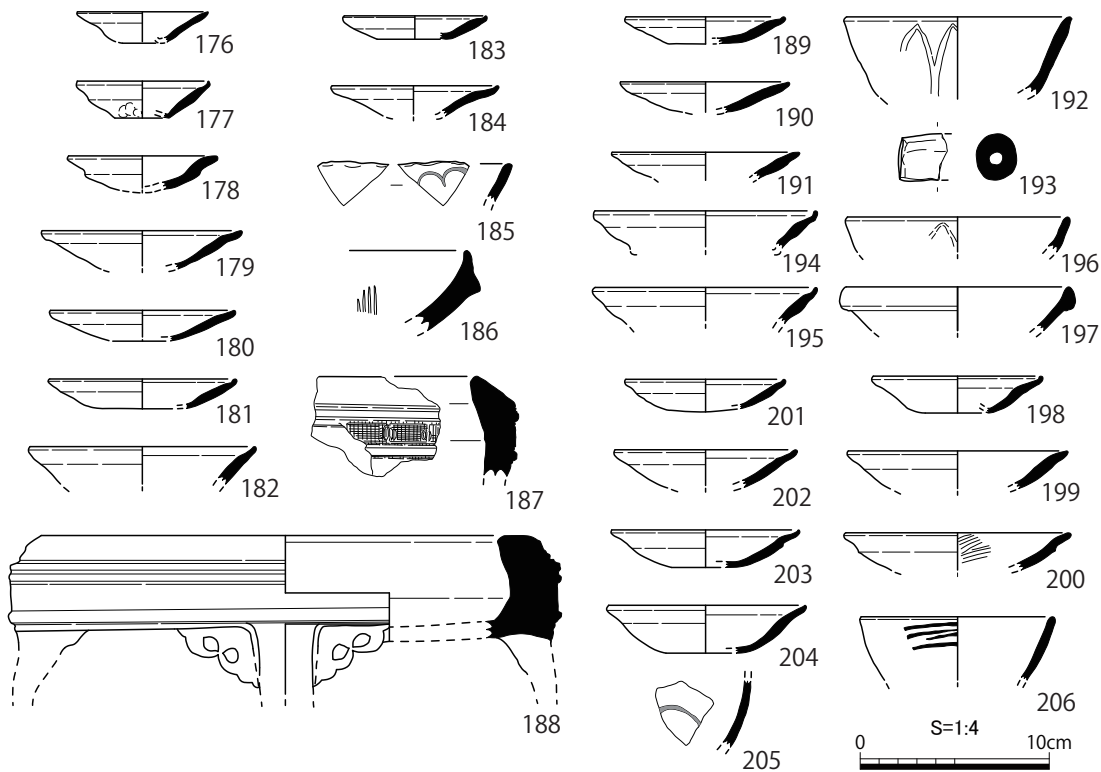


図 62 B 区上層遺構出土遺物 (176 ~ 206)

に比定される。200は皿N類である。京都VII期中に比定される。

土坑 5041 (図 62 - 201 ~ 206、図版 35 - 2)

201 ~ 204は土師器皿である。201は皿S類である。京都VIII期新に比定される。202は皿S類である。京都VIII期新に比定される。203は皿S類である。京都VIII期新に比定される。204は皿S類である。京都VIII期新に比定される。205・206は青磁の碗である。205は内湾した体部片である。206は青磁の碗である。体部から口縁部は直線状に内湾している。龍泉窯である。

土坑 5071 (図 62 - 207 ~ 215、図版 35 - 2)

207 ~ 213は土師器皿である。207 ~ 209は皿Sh類のへそ皿である。体部外面上半にナデ調整を施している。器壁は膨らんだのち口縁部がすぼむ。時期はVII期中 ~ 新に比定される。210はS類である。京都VIII期新に比定される。211は皿S類である。京都VIII期新に比定される。212・213は皿S類である。京都VIII期新に比定される。214・215は青磁碗である。214は体部から緩やかに外反した口縁部を呈し無文である。215は蓮弁を施している。龍泉窯である。

土坑 5072 (図 62 - 216 ~ 224、図版 36 - 1)

216 ~ 219は土師器皿である。216・217・219は皿S類、218は皿N類である。216は京都X期古段階、217・219はIX期新段階、218はVII期中段階に比定される。220は瀬戸・美濃系の天目茶碗である。221・222は青磁碗である。221は体部に雷文を、222は突出気味の高台を有した龍泉窯である。

223は瓦器の羽釜である。直立気味の体部に垂直状に張り出した鏝を有する。224は土錘である。

溝 5032 (図 63 - 225 ~ 238、図版 36 - 2)

225 ~ 230は皿Sh類のへそ皿である。体部外面上半にナデ調整を施している。器壁は膨らんだのち口縁部がすぼむ。VIII期中に比定される。231 ~ 236は皿S類である。231・234はVIII期古 ~ 新段階、232・235・236はIX期中段階、233はVII期中段階に比定される。237は青磁碗の底部である。大きく張った体部と小振りの高台を有する。龍泉窯である。238は東播系の播鉢である。口縁部は大きく開き端部は受口状に肥厚している。

包含層 (図 64 - 239 ~ 264、図版 36 - 3、37 - 1)

239は土師器の鍋である。浅い湾状の坏部を有する。坏部は比較的に浅く、口縁部内縁の突帯も小さくなっている。口縁部は水平に張り出して、わずかに垂下している。端部は凹状の面を有するが拡張は少ない。飛鳥I期に比定される。A区南側の包含層から出土した。

240 ~ 245は須恵器の坏身、坏蓋である。240は丸みを持つ天井部と垂下した口縁部を有する坏蓋である。調整は天井部外面をヘラ切り、のちナデ、内面はナデ、口縁部内外面は回転ナデである。坏H

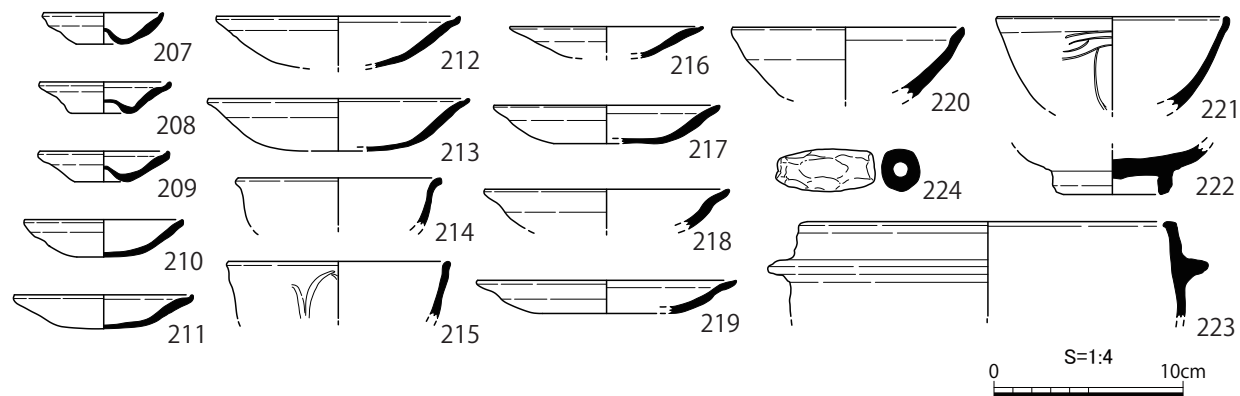


図 63 土坑 5071・5072 出土遺物 (207 ~ 224)

類の飛鳥Ⅱ期に比定される。A区南側の包含層から出土した。241は天井部がわずかに丸みをもち、屈曲した口縁部を有する坏蓋である。端部にはかえりを有し垂下する。調整は天井部外面をヘラ切り、のちナデ、内面はナデ、口縁部内外面は回転ナデである。坏G類の飛鳥Ⅱ期に比定される。B区北側の包含層（溝5218上位）から出土した。242は須恵器の扁平な坏蓋である。天井部は低く平坦である。口縁部は屈曲して垂下する。調整は天井部外面をヘラ切り、のちナデ、内面はナデ、口縁部内外面は回転ナデである。坏B類の飛鳥Ⅴ期に比定される。B区北側の包含層から出土した。

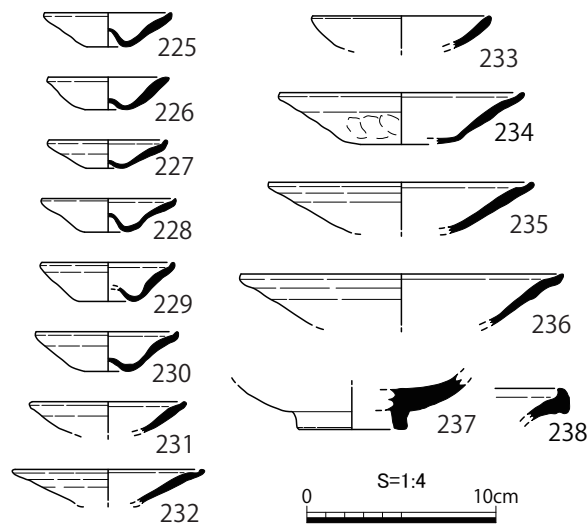


図64 溝5032出土遺物（225～238）

243～245は須恵器の坏身である。243は体部から口縁部まで内湾しながら延びる。端部は上方につまみ上げている。坏G類の飛鳥Ⅰ期に比定される。A区南側の包含層から出土した。244は平底から屈曲した体部が上外方へ延びる。坏G類の飛鳥Ⅱに比定される。A区の包含層から出土した。245は底部に「ハ」の字状の高台を有し、底部から屈曲して上方に延びる。B区北側の包含層から出土した。

246は緑釉陶器の碗である。体部は底部から大きく内湾しながら延びる。底部には小さな高台を有する。内外面に釉を施している。B区北側の包含層（5071混入品）から出土した。

247は須恵器の甕である。体部は欠損しているが、内湾していたものと思われる。口縁部は「く」の字状に外反する。端部は面を有する。B区包含層から出土した。

中世の遺物は土師器、陶器、瓦器、土製品、石製品がある。248～259は土師器皿である。248・249は皿Sh類のへそ皿である。体部外面上半にナデ調整を施している。器壁は膨らんだのち口縁部がすぼむ。Ⅸ期中である。B区包含層から出土した。249はⅨ期古である。250～259は皿S類である。250・251はⅩ期古である。252～259はⅨ期古～新である。B区包含層から出土した。

260は瓦質の羽釜である。直立気味に立ち上がる体部と垂直に張り出した鰐を有する。B区から出土した。京都Ⅷ期新に比定される。261は陶器の播鉢である。5本を一単位とする櫛描きの播目がみられる。底部から頸部に向かって引いたものとみられる。体部は大きく外反させ、口縁端部を上方につまみ上げ、外面は幅広い垂直の面を有する。内面下部は使用のため磨滅している。B区包含層から出土した。

262は砥石である。上面、両側面を使用している。粘板岩製である。263・264は土錘である。263は小型、264は大型である。焼成温度が低く軟質である。B区包含層から出土した。

丸瓦（図66－265、図版37－2）

265は右巻きの三巴文である。巴文は頭が丸く尾を長く引く。巴の頭は断面形状台形である。範面に木型痕が残る。周縁には少量の雲母粉が付着する。顎部及び丸部は横ナデ調整、瓦当裏面は指頭圧痕と横ナデ調整である。瓦当裏面は横ナデ及び上下方向のナデである。丸部接合部に瓦当裏面の剥離がみられる。18世紀中頃である。B区の土坑5223から出土した。

平瓦・鬼瓦・埴（図66－266～273、図版37－2）

266～268は軒平瓦である。266は宝珠を中心に両方に2転した雲形唐草文を持つ。顎部から凸部と凹部、凸部は横ケズリ調整である。18世紀中～19世紀に比定される。A区包含層から出土した。267

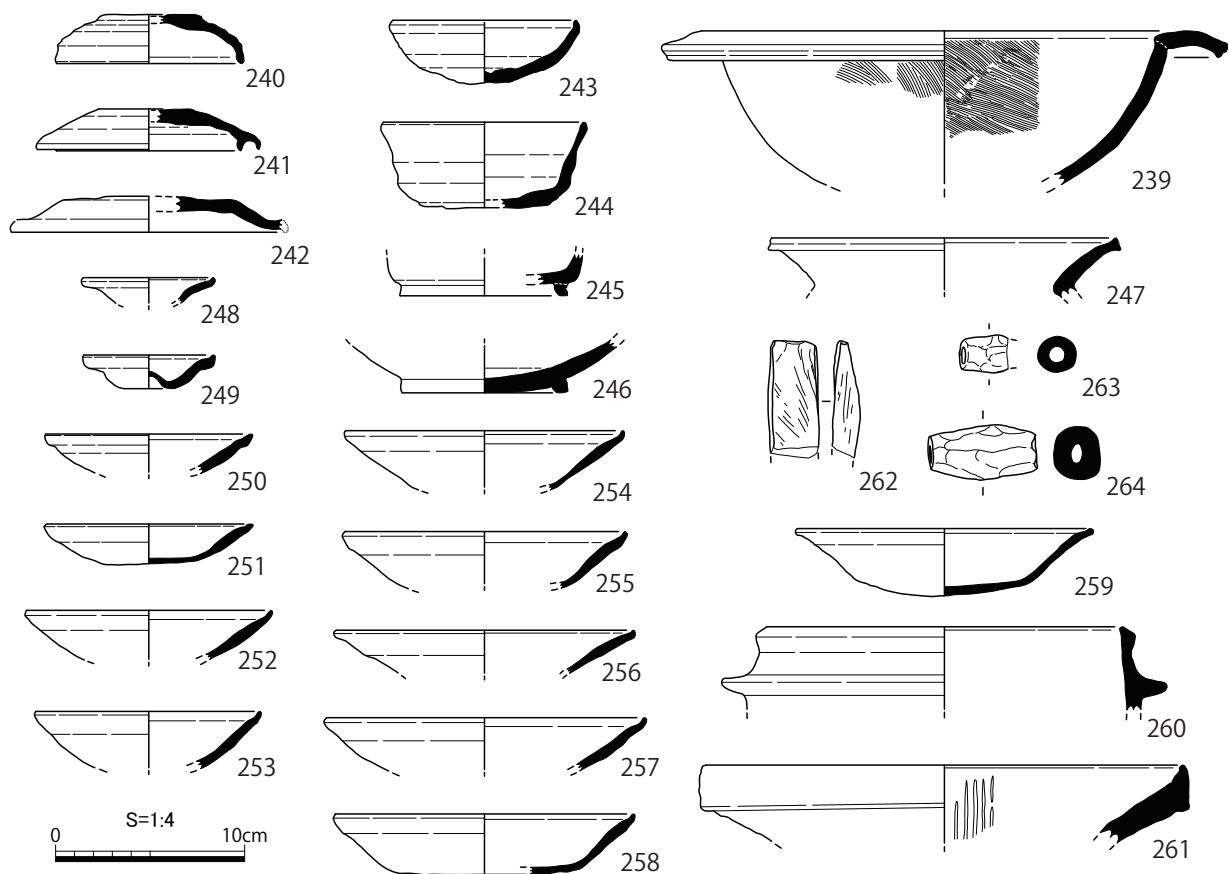


図 65 包含層出土遺物 (239～264)

は剣頭文蕨平瓦である。顎部から平瓦部にかけては横ナデ調整、側面は縦ケズリ調整、凹面は布目圧痕である。作りは瓦当貼り付け技法である。13世紀中頃に比定される。A区土坑24から出土した。268は連珠文軒平瓦である。瓦当に小さな宝珠を一行に並べている。A区土坑1001から出土した。

269は鬼瓦である。窪んだ両目と中央に盛り上がった鼻を有する。下方の口は欠損している。上端に外縁の突出部が巡る。上方は薄い作りとなっている。B区土坑5044から出土した。

270～272は平瓦である。270は上下面に布目がみられる。271・272は上面に布目、下面に縄痕がみられる。271の側面は上方へつまみ上げている。B区溝5218から出土した。

273は方形敷博である。一辺23cm、厚さ3.5cmを測る。胎土は白灰色で表面に炭素が吸着し黒色を呈する。上面、側面共に丁寧なナデ調整を施している。裏面は板ナデにて粗く仕上げている。上面は滑らかに磨り減っている。A区の土坑201から出土した。

木製品 (図 66・67 - 274～300、図版 38 - 1)

274～291は木製の箸である。A区の井戸169から多量に出土した。その中から完形品を選出し、分類を行った。完形品は155本を数え、大きく分けてA類(274～279)、B類(280～285)、C類(286～291)の3分類が可能であった。その大きさは、最短160mm、最長245mmを測る。箸を長さで分類すると、220mm以上のA類(大型品)が15本(9.6%)、190mm以上～220mm未満のB類(中型品)が137本(88.4%)、190mm未満のC類(小型品)が22本(14.2%)であった。結果的にはB類の190mm～220mmが約90%を占めていた。

形態からの分類は、側面を加工した際の面取り数と太さの計測を行った。面取り数については、4面、5面、6面、8面があった。その中で最多は6面の71本(45.8%)、5面の41本(26.4%)、4面の38本(24.5%)、

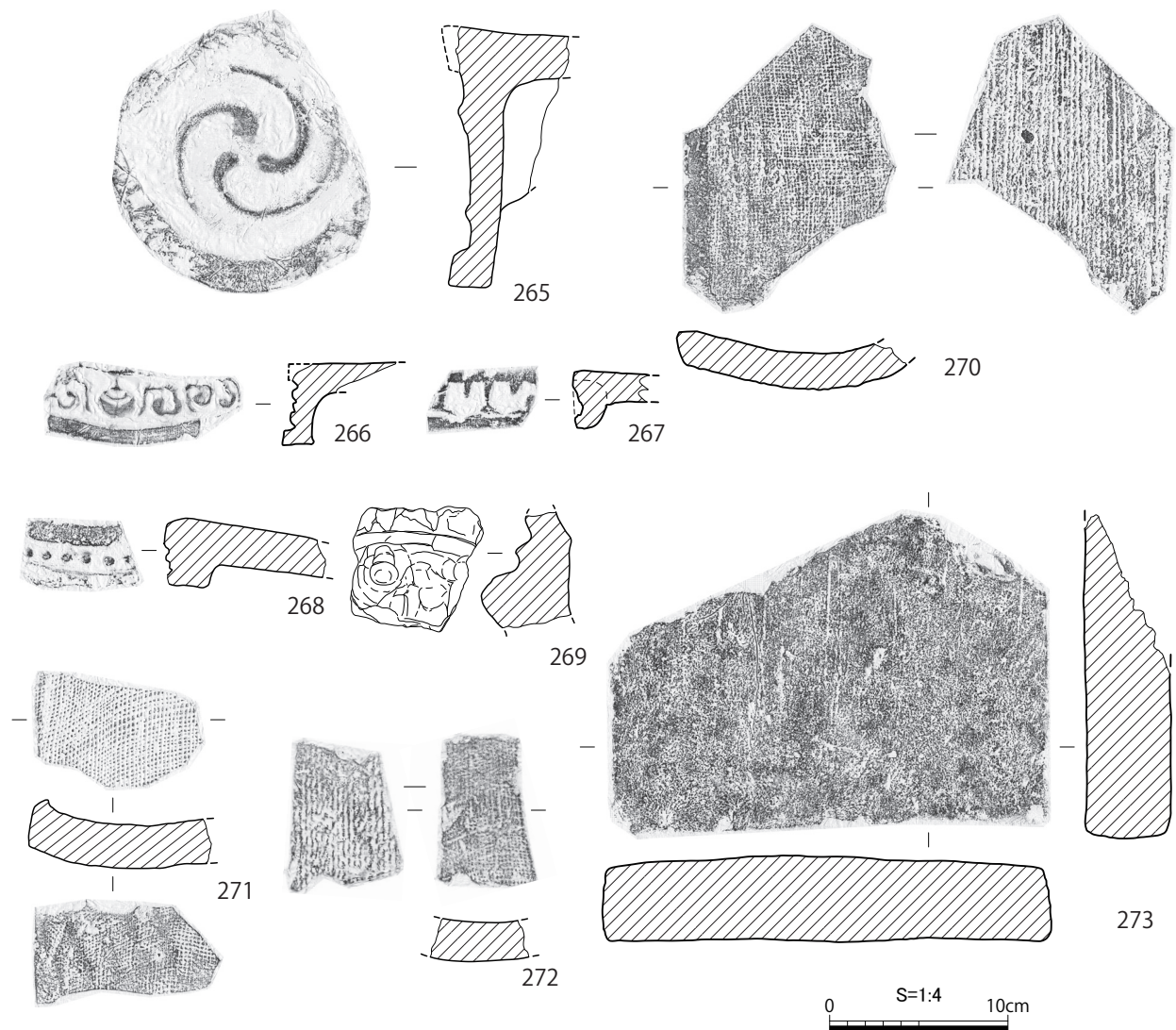


図 66 瓦・塼 (265 ~ 273)

8面の5本(32%)となった。結果的には6面が約半数を占めていた。

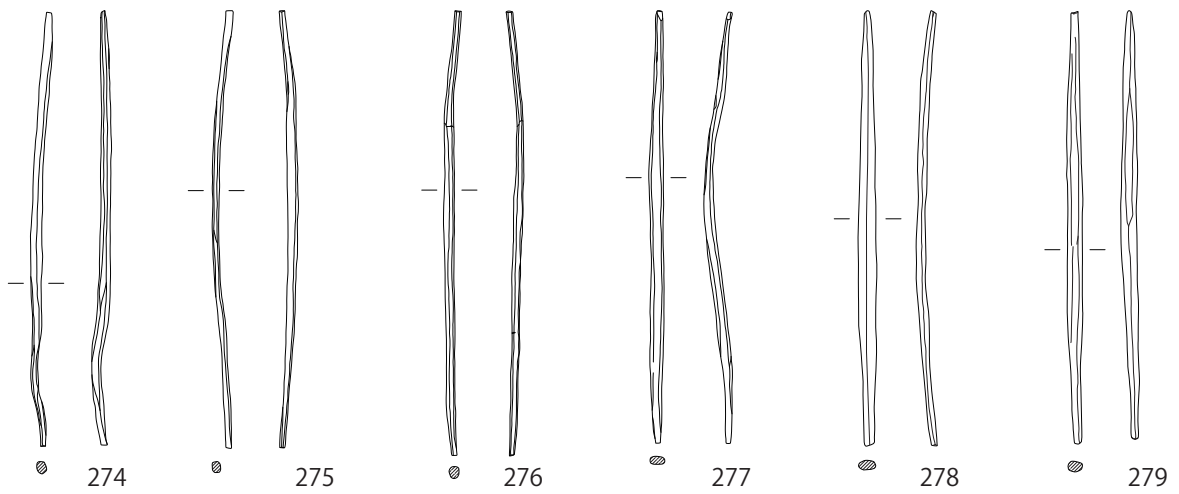
太さからの計測をみると、最小4mm、最大12mmで、5mm未満が11本(7.0%)、5mm以上8mm未満が120本(77.4%)、8mm以上が12本(7.7%)となり、5mm~7mmが約70%を占めていた。

以上から、この遺構から出土された箸については、長さ190mm~220mm(6~7寸)のB類が多く、面取りに関しては、4~6面、太さは5~8mmの範囲に標準的な規格があったことが分かる。

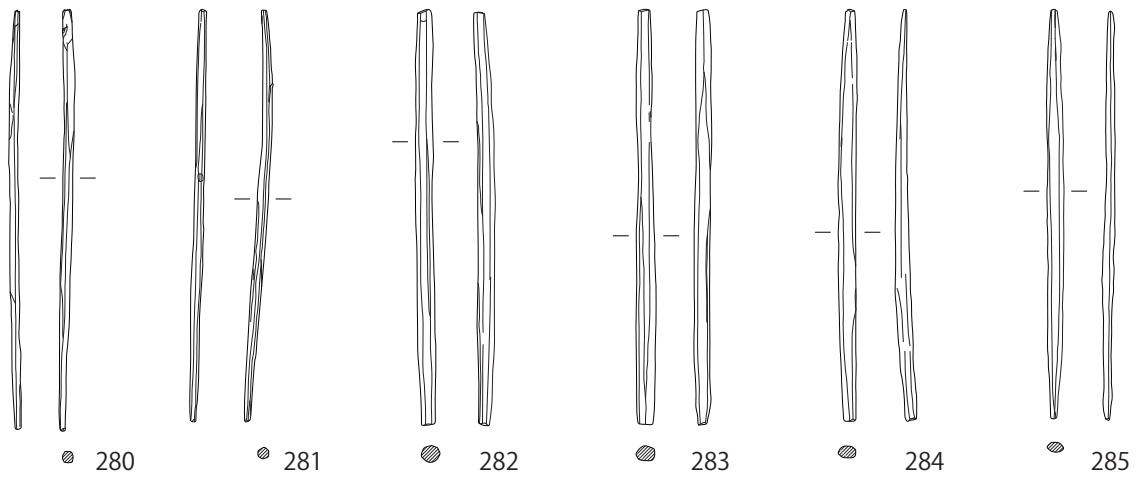
全体的な傾向としては、面数が少なくなるほど箸の全長が短く、面数が多くなると全長が長くなる傾向が見られた。また、面取りについては、最多の8面が全て太さ10mm以上、長さ210mm以上であり、最少4面については太さ8mm以下、長さ200mm以下が大半であった。すべての箸は木目方向に加工しており、両端に向かって細く削られる、いわゆる「利休箸」の形態をとるものが多い。

これらの箸は、井戸169埋土の下層からのみ、土師器、陶磁器類、その他木製品などと共にまとまって出土しているため、井戸を廃棄する際に混入したのではなく、井戸としての機能をはたしている時期、もしくは井戸が廃棄される前に、投入されたものと思われる。井戸169は室町時代の遺構であるA区南側の酒造りの遺構と同時代であると考えられ、箸も同様に室町時代に比定される。

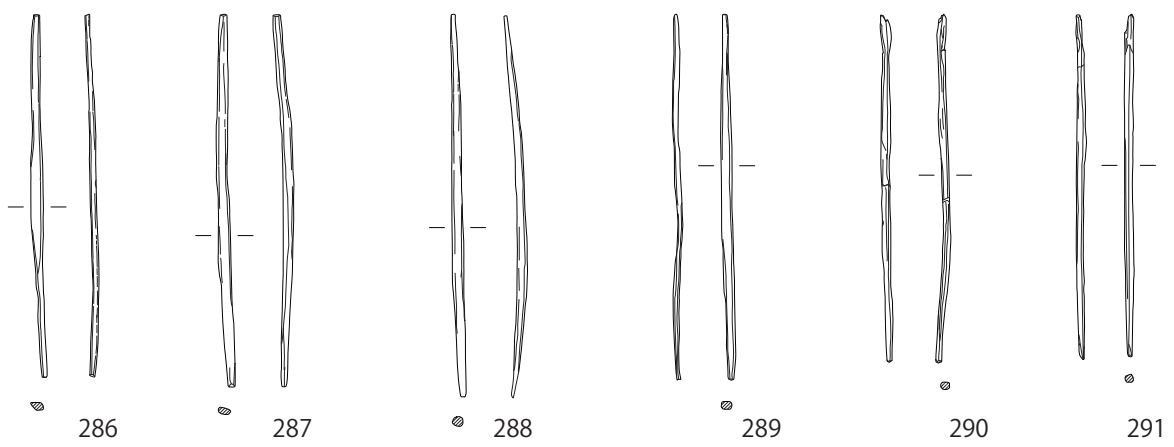
292は漆器椀である。底径は7.0cm、残存高は1.6cm。口縁部は欠損している。外面は黒漆、内面は黒漆の上に赤漆で落ち葉のような模様が描かれている。



A類



B類



C類

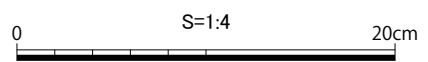


図 67 木製品 (箸) (274 ~ 291)

293～295は薄い板材である。293は幅1.9cm、長さ10.5cm、厚さ0.1cmで、中央に2カ所の小さな穿孔があり、四隅の一角が切り取られている。294は幅3.5cm、長さ11.5cm、厚さ0.1cmで、中央に穿孔が2カ所、3mmの大きい孔と1mmの小さい孔がある。295は幅6.0cm、長さ11.0cm、厚さ0.1cmで、中央やや長辺寄りに2カ所の小さな穿孔がある。

296・297は曲物の破片である。296は直径22cm、厚さ0.3cmの薄い円形の破片で、両端を欠損している。端に縦0.7cm、横0.2cmの長方形の穴が開いている。297は推定で直径23cm、厚さ0.7cmの円形の破片である。片側が欠損している。

298は用途不明木製品である。全長は17.3cm、棒状部分は11.0cm、厚さは皿状部分が1.2cm、棒状部分は0.9cmになる。皿状部分は長方形を呈し、長辺5.5cm、短辺2.3cm、くぼみ部分は長辺3.3cm、短辺1.2cm、深さが0.2cm、縁は0.5cmと分厚い。棒状部分の角は削られており、滑らかな形状である。

299・300は用途不明の部材である。299は幅3.5cm、長さ16.2cm、厚さ1.2cmの部材で、短辺の片端1.7cmは加工され薄くなっている。穿孔が長辺の片端に7cmほど離れて2カ所、短辺の両側に1カ所ずつみられる。300は幅6.3cm、長さ17cm、厚さ1.2cmの部材で、短辺の両端に2カ所ずつ穿孔がみられる。

銭貨（図67 - 301～303、図版38 - 2）

301～303は銭貨である。301は洪武通寶である。無背である。明朝建国後の洪武年間(1368～1398年)に鑄造され、多くの種類がある。室町時代末期に大量に輸入されるが、国内でも多くの模鑄銭が造られている。A区土坑67から出土した。302は開元通寶である。唐代において武徳4年(621年)に初鑄され、唐代のみならず五代十国時代まで約300年にわたって流通した。A区土坑59から出土した。303は摩滅により判断できないが、開元通寶であろう。B区土坑5034から出土した。

搾り木製具（図68 - 304～307、図版39）

土坑1017 - 1・2のほぼ中央に設置された男柱と横木である。土坑1017-1から男柱(305)、土坑1017-2から男柱(304)と横木(306・307)が出土した。材質は分析の結果、全て栗材であった。

男柱304は円柱状を呈し、下半は緩やかに広がる。基底部分は木取に対して斜めに面取りしている。

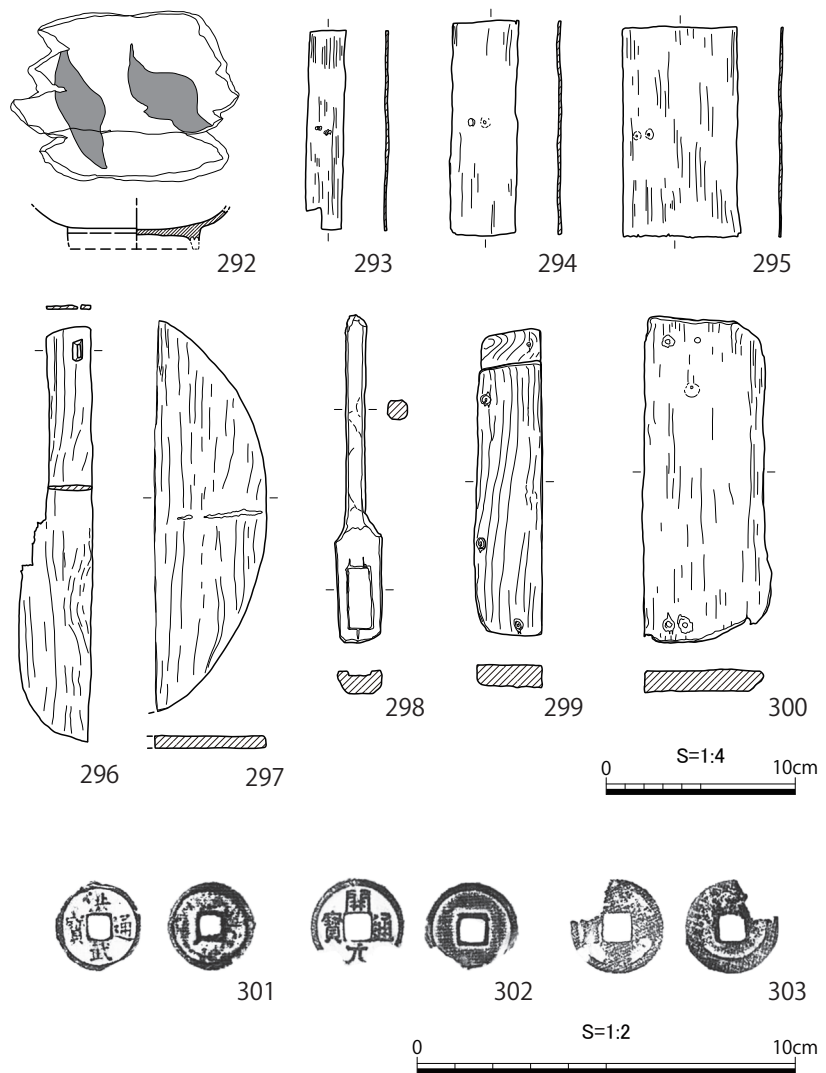


図68 木製品・金属製品（292～303）

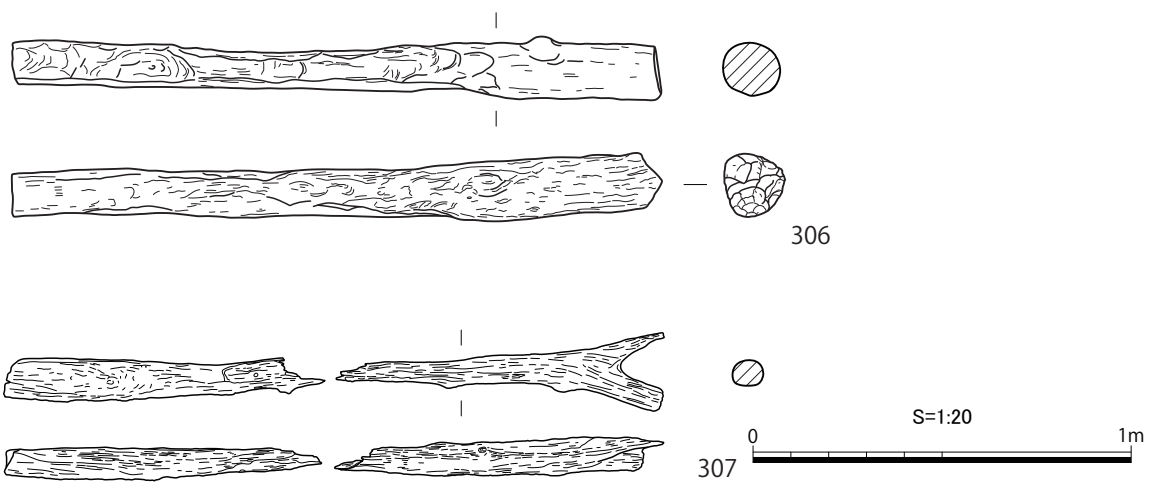
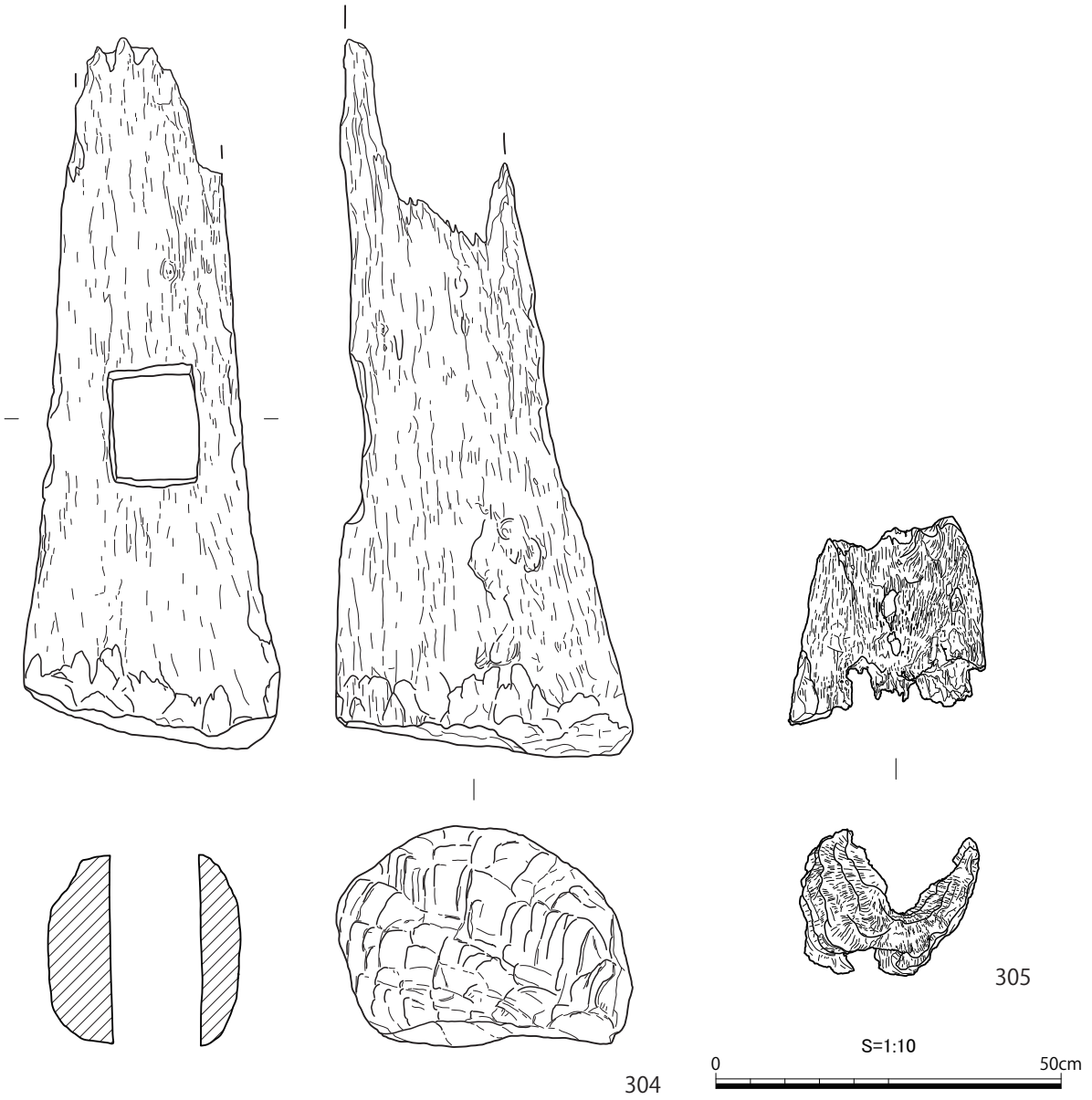


图 69 土坑 1017 木製品 (304 ~ 307)

断面は円形を呈する。基底部から 1.0 m までを検出したが、上位は残存していなかった。基底面は手斧にて研った痕跡を明瞭に残している。樹表は薄く取っているが、顕著な加工は施していない。全長 0.95 m、最大径 0.45 m を測る。男柱には 2 か所のほぞ孔が施されており、下位は下端から 0.3 m の位置に縦幅 0.18 m、横幅 0.12 m の長方形を呈するほぞ孔が穿たれている。上位は明確な輪郭を確認することはできなかったが、下位と同規模のほぞ孔を有していたものと考えられる。下位のほぞ孔には横木 306、上位のほぞ孔には横木 307 が通されていた。

横木 306 は男柱の下位ほぞ孔に南北方向に通されていた。全長 1.8 m、最大径 0.16 m を測るが、北端と南端では大きさ、形状が異なる。北端は断面が方形を呈し、一辺 0.12 m を測る柱状に横木の中央まで面取り加工が施されている。南端は材木の樹皮を残した直径 0.16 m を測る丸材である。横木の北側半分は男柱のほぞ孔を通るが、南半分はほぞ孔より太いので通らない。横木が中央で止まる工夫は、男柱が左右に移動しないように固定を施したものと考えられる。

横木 307 は男柱に接する中央の箇所欠損していた。横木は男柱の上位ほぞ孔に東西方向に通されていた。全長 1.8 m、直径 0.15 m を測る樹皮を残した丸材である。基部は面取りしているが、枝先は二股に分かれた自然の股木を用いている。男柱に基部から西方向に通され、土坑の西壁に充て、左右に動かない様に固定していた。枝部は横方向に置き、上に重石を置いていた。

壁土 (図 69 - 308・309)

308・309 は A 区の上層遺構の土坑 150 から出土した壁土である。全体に二次焼成を受け、赤色化して硬化がみられる。308 は全長 4.2cm、幅 2.3cm、厚さ 2.2cm を測る。壁土はきめ細かい粘質土にスサ、細砂、小礫を練り入り込んだ状態である。表面の仕上げした部分は剥離しており、残存していなかった。断面の状況から下塗り、中塗りに該当するものであろう。309 は全長 4.3cm、幅 3.8cm、厚さ 2.7cm を測る。壁土はきめ細かい粘質土にスサ、細砂、小礫を練り込んでいる。表面に下塗りと考えられる黄褐色の粘質土、中塗り部分には大きめのスサがみられる。壁土は土坑 150 の南側に隣接する築地塀 157 に使用されていた可能性が高い。

鉄滓 (図 69 - 310・311)

310 は円形状を呈した鉄滓である。全長 5.9cm、幅 5.7cm、厚さ 5.2cm を測る。A 区土坑 194 から出土した。表面は赤色化した砂礫を含む粘質土と黒色化した鉄分が混ざり合っている。鉄分が多く含まれていることから比較的重い。土坑 194 の近隣にて鎌倉時代に製鉄が行われていたことが想定される。311 は楕円形の形状を呈した 2 個の塊が接合している。全長 7.8cm、幅 4.8cm、厚さ 4.2cm を測る。A 区の上層包含層から出土した。表面は全体に被熱にて赤色化し、滑らかな面がみられる。破損した断面は黒色化して細かい気泡状の孔が数多くみられる。

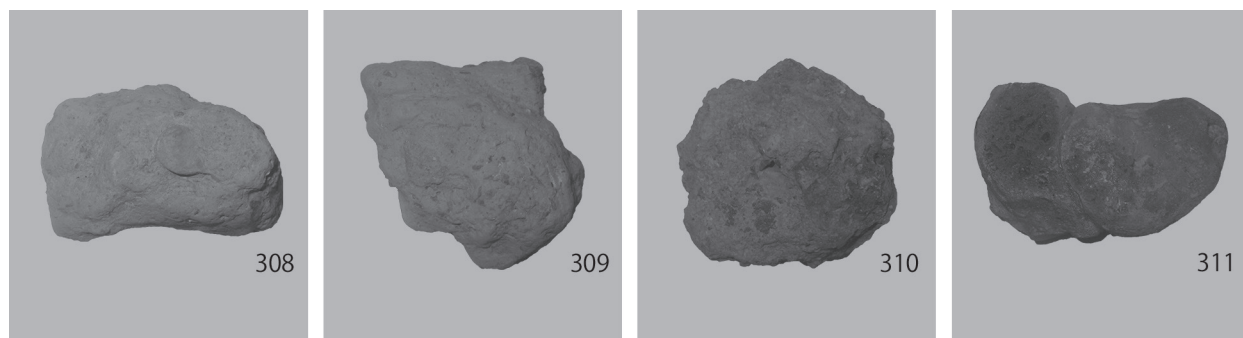


図 70 壁土・鉄滓 (308～311)

第Ⅲ章 まとめ

第1節 小結

今回の調査は古代から中世に至るまでの遺構・遺物の成果を得ることができた。その中で古出のものとしては自然流路がある。流路から縄文土器と思われる細片が出土しているが、精細な時期を決定できなかった。しかし、自然科学分析の結果、縄文時代早期に属することが判明し、また、流路は北側から南側の桂川に向かって急激な流れによって当地の基盤を形成した堆積土層であることも明らかとなった。

古代の成果としては、飛鳥時代から平安時代にかけての集落を構成する竪穴建物や柱穴、土坑、溝がある。竪穴建物¹⁾は嵯峨地域での検出例が数少ないことから、貴重な資料の追加となった。飛鳥時代については、以前から推測されていた集落範囲²⁾がさらに西側へ広がることが判明した。溝は山城国葛野郡条里³⁾に関連していることが想定できることから条里の復元を行うことができた。

中世の成果としては、酒造等に関連する搾り遺構、埋め甕土坑群、酒蔵の礎石建物や天龍寺の天下龍門に伴う施設、掘立柱建物、畑作地等がある。搾り遺構や埋め甕群は、応永33(1426)年に作成された応永釣命絵図の中に150余り描かれている塔頭に含まれるものと推測される。これらの酒造遺構は礎石建物である酒蔵内の施設であり、酒造元は調査地に近接した蔵修庵⁴⁾、真光庵⁵⁾が有力である。両塔頭のいずれかが酒造⁶⁾を行っていたものと考えられる。

天龍寺の天下龍門に伴う施設は、調査地の南端にて龍門と同一方向の築地塀、側溝、雨落ち溝を検出した。当地は天龍寺の天下龍門の北側に隣接しており、北壁等の龍門の施設と考えられる。これらの施設が埋め戻された時期を検証することができ、掘立柱建物は4回の建て替えの変遷を追うことができた。また、畑作の西限を区画する溝5210は、山城国葛野郡条里の十一坪と十二坪の坪界と一致することが判明した。

以下、調査成果を調査地の変遷について述べ、まとめとした。調査地の変遷は1期(縄文時代)、2期(古代)、3期(中世1)、4期(中世2)の4時期(図71)に分けた。酒造遺構については、2期にて古代の居住区と条里、3期にて男柱を主体とする搾り施設と埋め甕土坑、礎石建物について述べた。

調査地の変遷

1期 縄文時代

弥生時代に入ると水稲耕作に生活基盤が置かれるため、河川や湿地に近い段丘上に集落が営まれる。当地からも縄文土器と推測される細片が出土したが、遺構に伴うものは確認できなかった。弥生時代の遺跡は、今回の調査地より東へ約1.5kmの東嵯峨野周辺で中期に集落が始まったことを示唆する竪穴住居跡⁷⁾や畿内第Ⅳ様式の遺物が検出⁸⁾されており、更に東側では村ノ内町遺跡、和泉式部町遺跡、松室遺跡から検出⁹⁾されている。また、今回の調査地である西嵯峨野では弥生時代に関連する痕跡は確認されていないが、縄文時代中期から後期までの遺構、遺物が史跡大覚寺御所跡・嵯峨院跡の調査にて確認¹⁰⁾されている。

今回検出された流路は、北側から南側へ蛇行しながら流下し、流路の中央には流れの速かったことを示す砂礫の堆積と流路側辺には緩やかな流れによる堆積のシルトがみられた。流路の形状、堆積状況から数回に及ぶ激流が出現し、短期間に埋没したことが想定される。今回の「考察(1)現地堆積層の観察」分析の結果、流路は縄文時代早期中葉に埋没したことが判明しており、それまでの期間に複数の

氾濫によって当地の基盤が構築され、安定した土地が形成されたものと考えられる。平安時代の状況を復元できる「山城国葛野郡班田図」には、当地が北西から南東方向に向かって流れていた河川が存在していたことを検証できる「川原」の記載¹¹⁾がある。

2期 古代

当期は飛鳥時代から平安時代までの遺構を中心にまとめた。周辺の調査成果は、嵯峨北堀町遺跡の立会調査¹²⁾にて飛鳥・奈良時代の遺構、遺物が分散した状態で検出されており、その範囲は鹿王院一帯が遺跡の中核となることが想定¹³⁾されていた。集落の範囲としては、当調査地を北限として東側を有栖川、西側を瀬戸川、南側を西高瀬川に限られた低位沖積段丘の先端及び氾濫平野に展開していたものと考えられていた。その範囲は東西500m、南北約400mと推定されていたが、今回の調査にて更に西側へ200m広がっていることが判明した。

嵯峨地域で確認されている飛鳥時代の遺跡は、嵯峨折戸町遺跡・嵯峨北堀町遺跡の2遺跡と嵯峨天龍寺造路町で行われた調査にて検出した竪穴建物、天龍寺の広域立会¹⁴⁾にて出土した遺物が知られるのみで、総体的には少数である。嵯峨折戸町遺跡は7世紀中頃、嵯峨北堀町遺跡は7世紀後半から9世紀の遺物が出土している。当調査地に近接しているものは、嵯峨北堀町遺跡の東側、南東側にて柱穴(図9-69)、土坑(図9-67・68・71)が確認されている。包含層を含めると鹿王院の西側(図9-71・84～86・88～90)と北西側(図9-67～70・72・74)、南側(図9-93・95・96・97・101)に19か所の集中がみられる。これらの成果は、平成元(1989)年に有栖川より西側の鹿王院周辺から始められた立会調査¹⁵⁾が発端であるが、その後の調査が少ないことから不明な点が多かった。

今回の調査で検出した古代の遺構は、竪穴建物3棟、焼土1基、土坑2基、柱穴17基、溝3条を数える。中でも飛鳥時代の竪穴建物や山城国葛野郡条里¹⁶⁾に関連する溝の検出については貴重な成果となった。竪穴建物は南側に2棟、北側に1棟があり、南側は切り合っていることから建て替えと想定される。調査地の中央にて検出した焼土は原形を留めていないが、竪穴建物に付随した竈と考えられる。竈を竪穴建物と想定すると、南の竪穴建物1・2から約4m、北の竪穴建物3から約12m間隔で並んでいた可能性がある。建物に伴う支柱穴は確認することができなかったが、竪穴建物1・3共に北側辺の中央にて竈を検出した。竈の燃焼部中央には同規模のチャート製の支脚を有していた。これらの集落は、北側の丘陵地帯に展開する群集墳の墓域¹⁷⁾と南側の居住区に分かれながらも当地の基盤となって発展したことが伺われ、また、当地の開発者である秦氏¹⁸⁾と密接な関連があったものと推定される。

山城国葛野郡の条里と想定される東西方向に延びる溝5218をA区で検出した。また、近接地には同様の古代に比定できる溝5226・5237を検出した。中でも溝5226・5237は飛鳥時代まで遡る可能性があり古出である。溝5226・5237の性格は区画溝と考えられるが、溝5218に切られており、南側へ延びなかった。溝5218から須恵器、土師器、円面硯、布目瓦等の遺物が出土していることから、官衙的な要素を有している。時期は出土遺物から平安時代に比定され、性格は位置、方向、規模から嵯峨野に施工されたと考えられる山城国葛野郡の条里(図72)と推測される。

山城国葛野郡条里制は郷名「和名抄」山城国葛野郡十二郷の『山城国葛野郡班田図』に描かれている内容が重視されている。今回検出した溝5218についても山城国葛野郡班田図の研究をされている諸説¹⁹⁾を用いて復元²⁰⁾を試みた。山城国の条里制は、弘福寺田数帳に天平15(743)年と記されていることから、奈良時代には完成していたものと思われる。その範囲は平安京が造営される以前の山城国葛野郡・愛宕郡・紀伊郡・乙訓郡に設定され、資財帳に記されている内容と五条荒時里や広隆寺敷地等の地



図 71 遺構変遷図

名と照合することから、北西隅から始まって東側へ数え進む千鳥式並坪であることが判明している。葛野郡の条里は36丈の正方形を1里としたものが桂川の南側に3里、北側に6里、計9里が独立した状態で構成されている。各里には固有名詞が付けられており、北西側が小倉里、西側中央が社里、南西側が櫛原西里、北東側が大山田里、東側中央が小山田里、南東側が櫛原里、桂川南側の西側が大井里、東側が小社里、南東側が會称西里である。北側の条里は東西に2里、南北に3里(図72)が独立した状態で施工されており、桂川の南側東側へ続く三条以降や平安京の条坊のように南北軸に従っているのに対し、真北より西側へ大きく16度振れた状態で他とは方向を異にしている。その要因としては、当地の地形が微高地などの起伏から西傾²¹⁾であったことが挙げられている。

当地に条里制が造営された発端は、当地が以前から宮中の遊樂の地となっており、嵯峨天皇が造営した嵯峨山荘や嵯峨野の農地開拓がいち早く進んでいたことが挙げられ、嵯峨野の開発に大きく発展したものと考えられている。条里が施工された後に当地には数多くの寺院が造営され、その中でも釈迦堂に向かう出釈迦大路や朱雀大路、天龍寺の正面道路である造路が条里に沿った状態でみられることから、嵯峨野の開発起点となっており、後の「巨大都市複合体²²⁾」といわれる中世都市嵯峨に発展する。

当調査で検出した溝5218は、固有名詞の里名が小山田里の南側、櫛原西里東側の櫛原里である。条里呼称法による土地表記としては、二条三里十一坪と十二坪に跨る北辺に相当する。溝5218は北側に推定される一坪界から約24m離れているが、条里地割を半折型と推定(73図)すれば、北側一段歩(21.8m)より2.2mの小差となる。溝5218は検出長20.1m、幅1.8m、深さ0.56mを測る。溝の構造は逆台形を呈した畦畔等の施設を有しない素掘りである。当郷は平安初期になるまで陸田が多かったことが広隆寺資財帳より読み取れ、「山城国葛野郡班田図」にも田・野原と表記²³⁾されている。当溝の埋土についてもシルト層であり、粘質土層がみられないことから、水路としては常時機能しなかったことが想定される。また、調査地東寄りに南北方向の条界が想定された箇所には溝5210があり、東側には畑作の素掘溝が平行に連続している。中世には溝5210の南側へ継続した溝191が出現し、当溝を境に西側の居住区と東側の畑地に分けされていたことが推定される。溝5210～5212の時期は中世に比定されるが、古代から引き継いだ葛野郡条里に関連する可能性は高い。溝5218は出土遺物から飛鳥Ⅳ期(7世紀後半)頃に開削され、平安時代に埋没したことが考えられ、また、溝内から円面硯、布目瓦や近接地から緑釉陶器が出土していることから、近隣に官衙施設が存在していたものと推測される。

今日までの広域立会調査によって検出されている平安時代の溝は4条を数え、「山城国葛野郡班田図」の復元による檀林寺と大堰離宮、大井寺に関連している。檀林寺に関するA～Eの復元²⁴⁾があり、当溝が一致する復元案は最も南側に推定されたDが該当する。推定の溝は平成7年度の調査²⁵⁾にて検出された幅3.1m以上、深さ0.95mを測る平安時代前期の濠171と立会調査7-36で検出された溝19である。溝19は東西方向に15m以上伸び、濠171は野々宮神社の南側から東西方向に延び、復元された条里に沿っている。その延長先は溝19と合致し檀林寺の北辺に沿っている。

大堰離宮に関しては、立会調査7-36にて検出された溝7がある。溝は10m以上の規模を有し、復元されている条里と同様の東西方向へ延びている。延長線上は大堰離宮の北辺に合致することから、これらの溝は両寺院等が平安時代前期頃に施工された条里地割りに沿って造営されたことが想定される。

大井寺に関しては、嵐山谷ヶ辻子町の調査で検出された溝44²⁶⁾がある。溝は宮本説²⁷⁾に合致した東西方向の条里に沿っている。溝内からは「大井寺」銘の軒平瓦等が出土しており、大堰川北岸の嵯峨野や平安宮との強い関係が推測²⁸⁾されている。

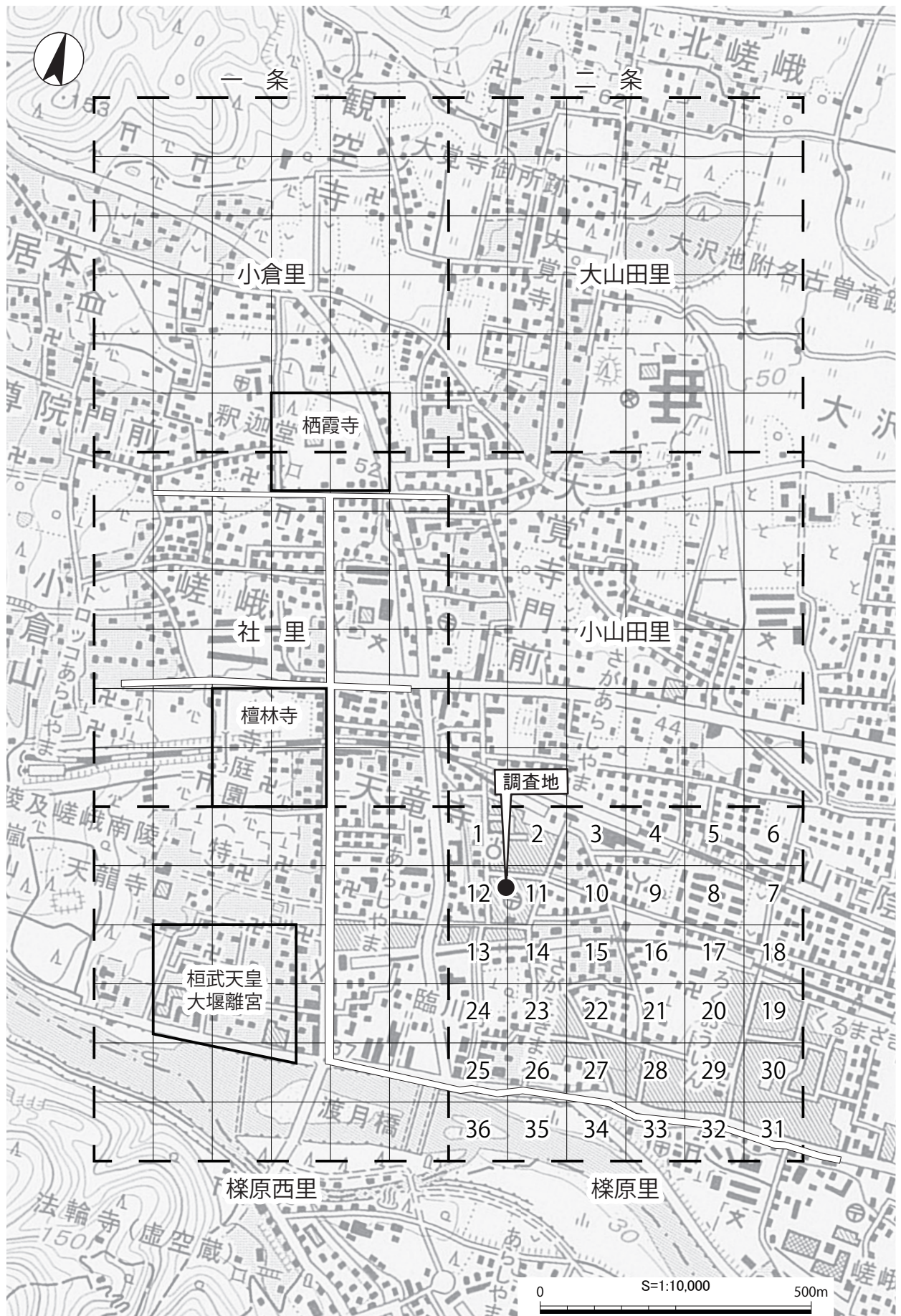


図 72 平安時代の嵯峨復元図

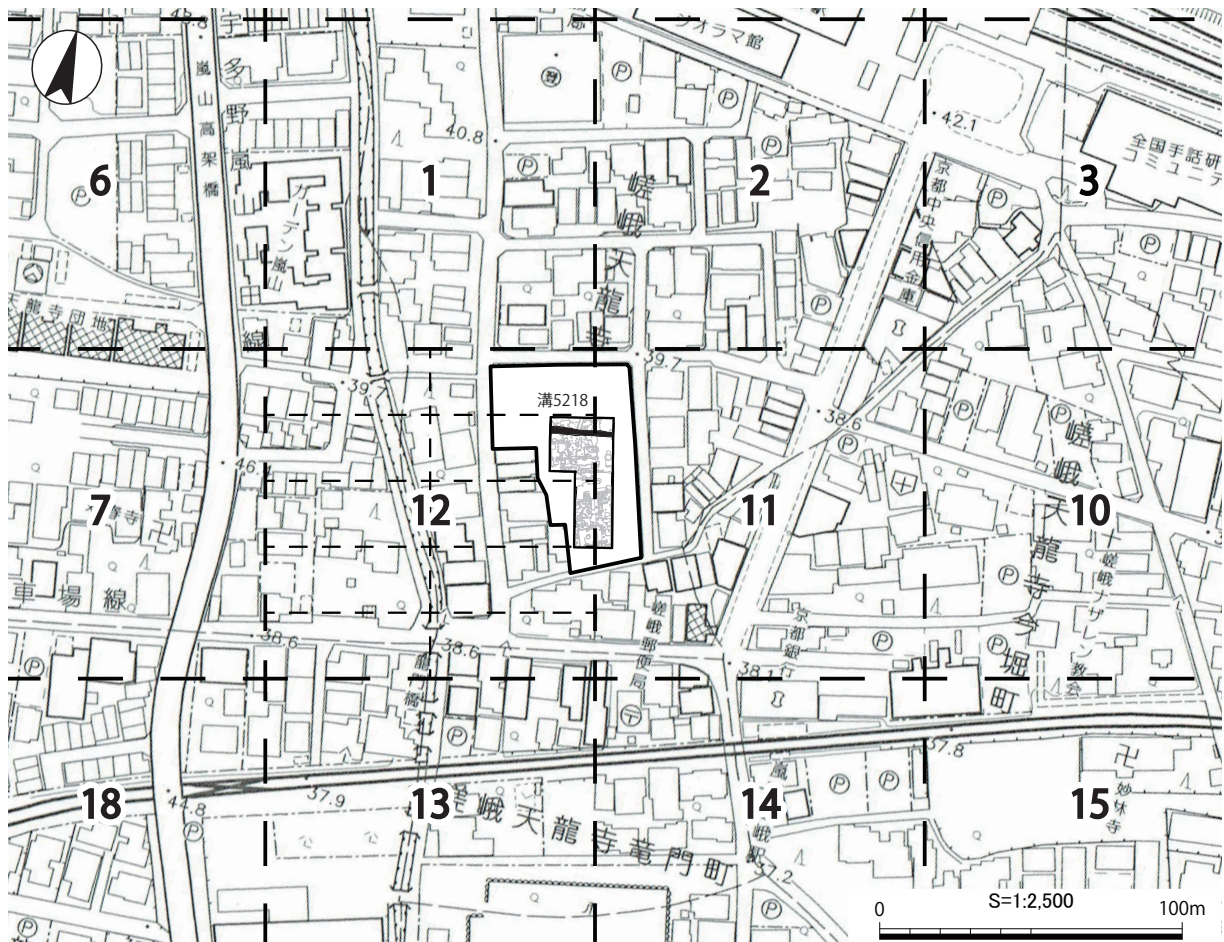


図 73 調査地周辺の条里制復元図

3期 中世1 (14世紀初頭～15世紀中頃)

中世1の成果は、鎌倉時代から室町時代の居住、酒造等の生産、天龍寺関連のものが有り、遺構面として最低でも2時期の変遷が垣間みられる。変遷は3期(中世1)を京都Ⅶ期中段階～京都Ⅷ期新段階(14世紀初頭から15世紀中頃)、4期(中世2)を京都Ⅷ期新段階～京都Ⅹ期新段階(15世紀中頃から16世紀後半)とした。当3期は天龍寺が創建された延元4(1339)年頃に天龍寺の寺域として塔頭が造営されてから正長元(1428)年の土一揆が勃発するまでと想定した。

3期の遺構としては、A区北側、B区北西の掘立柱建物(建物1～6)、礎石建物、A・B区にて検出した酒造に関連する埋め甕土坑(2・1100・1101・東西土坑群)、搾り遺構(土坑1017・1018・5071・5101)、A区の南端で検出した天龍寺の天下龍門に伴う施設(溝171～173、築地塀157)、区画・畑作溝(191・152・5210～5212)等がある。3期の中で古出のものは、京都Ⅶ期中～新段階に比定される柱穴5215、土坑5068等がある。これらの遺構は天龍寺が創建される以前の鎌倉時代後半に比定されることから、当地が天龍寺の寺域としての塔頭が出現する以前に何らかの建物や土坑等の施設が存在していたことが推測される。

建物としては掘立柱建物、礎石建物、礎石列を検出した。B区西側の掘立柱建物は調査地外に延びており全容を確認できなかったが、掘立柱建物5が4間×3間、掘立柱建物6が5間×4間の規模と想定され、南辺柱穴の切り合い関係から、建物6は建物5の建て替えと考えられる。建物5は京都Ⅷ期古段階に創建、京都Ⅷ期新段階に建物6に建て替えられ、時期的には既に天龍寺が創建されていることから塔頭に関連する可能性もある。建物の北東に「L」字状に延びる溝5032がある。溝は建物の北東角に

接していることから、同時期に存在した田畑等の区画溝と考えられる。

礎石建物1は半間の柱間を有する2間×2間の建物である。浅い柱穴には小型の礎石を有していた。建物内に井戸169を取り囲むことから井戸の建屋と考えられる。井戸は建屋の中央に位置していないことから、建屋の東側に何らかの作業場を有していたものと推定される。

礎石列は途切れており、全容を確認することはできなかったが、計13列を検出した。検出した礎石はすべてが同一の建物と想定し復元を試みた。その結果、南北長12m、東西長14mの礎石建物を推定した。建物は礎石間が平均1.8mを測るが、1間約1.2m、半間の約0.9mを測る箇所も多くみられた。礎石からの出土遺物は少量であるが、時期的には京都Ⅷ期古段階に比定されることから、天龍寺が創建直後の室町時代前半に建っていたことが考えられる。また、礎石建物内には埋め甕を有していたと想定される土坑を多数検出した。礎石建物の復元と埋め甕土坑の配列状況から、建物は酒蔵と推定される。

酒造工程に関しては、清らかな水源を得られる井戸、麴を発酵させる麴室、搾り場、窯場、垂壺、貯蔵場が必要である。今回の調査においては、井戸169・5106、搾り場1017-1・2、5071・5101、垂壺1018・5041・5108、A区中央を検出したが、加熱・火入れする釜場や麴室（地下室）は検出できなかった。当酒造は搾り場（酒揚げ・上槽）を有していることから清酒造りであったことが考えられる。

酒造関係の土坑1017・1018については、第Ⅱ章調査成果、3. A区上層遺構で精細に述べた通りであるが、遺構の性格としては酒造を行ったことを前提とした。酒造と同様の搾り工程を有する品種としては、油、醤油、和三盆、藍甕等がある。これらの品種の搾り工程は、酒造と同様の男柱を使用したものが多く、搾りの前後工程を除けば、その状況は非常に類似している。油製造は搾り工程で楔を使用した「搾め木」や男柱と撥木同様の長木にて圧力をかけて搾る「長木²⁹⁾」の圧搾機を使用し、酒造と若干に違った機材を使用しているが、醤油、和三盆製造は「押し槽」に搾る用品を布袋に入れて敷き詰め、男柱の端につるした重石の加圧で搾る天秤方法（図75）であり、一見してその違いは判断できない。しかし、これらの製造は近世以降に量産が始まってからと考えられる。また、品種的に多数の埋め甕を必要とするほどの大量生産はないものと判断できることから、酒造が最も適格と判断した。

埋め甕土坑は、大甕が抜き取られた土坑を含めて復元すると、西地区と東地区に分かれる。西地区は東西方向6列、南北方向9列、計54基、東地区は東西方向9列、南北方向14列、計126基、合計180基の埋甕が設置されていたものと考えられる。埋め甕土坑に甕が残存する箇所は少数であり、全容を把握できないが、破損した備前焼の大甕から京都Ⅷ期古段階に貯蔵用の大甕が設置されたものと考えられる。残存していた大甕は、土坑の底部に設置された状態で検出された土坑1001・1101がある。両者ともに破損が激しく、細片になっている箇所もみられることから、人為的に破壊した可能性がある。大甕は全て焼締陶器の備前焼³⁰⁾である。大きさは一石甕（約200リットル）を使用していたと推定される。時期は間壁編年³¹⁾Ⅲ～Ⅳ期前半に限定されることから、14世紀中頃に比定される。大甕のほとんどは持ち去られ、抜き取り穴の検出に留まったが、大甕が残存していた埋め甕土坑1100・1101については人為的な破損³²⁾がみられる。これらの状況と遺構の時期（14世紀中頃）を検証すると、天龍寺が完工した貞和元（1345）年から正長元（1428）年の土一揆が勃発及び文明9（1477）年の応仁・文明の乱まで稼働したことが考えられる。当塔頭の酒造も酒屋、土倉と同様に両事件に関連して襲われ、倒壊した可能性は高い。

搾り工程で中心となる施設（図74・75³³⁾）は、男柱と「もろみ」を入れた酒槽、圧力をかける撥木、重石がある。撥木の基部は男柱によって支えられ、撥木の端部には圧力をかける重石を縄にてぶら下げている。重石の重力を利用した槌の原理で搾る「天秤しぼり」である。今回の調査では酒槽、撥木、重

力を掛ける重石は確認できなかったが、垂直に設置された男柱と男柱が浮上しない様に設置した十字の横木と重石を検出することができた。土坑 1017 は東西に 2 基があり、土坑の切り合い関係から東側の 1017-1 が古出で、西側の 1017-2 が造り替えられた新出である。規模は 1017-1 が一辺約 1.8 m、深さ 0.8 m、1017-2 が一辺約 2.1 m、深さ 1.6 m を測り、形状は平面が隅丸方形、断面が逆台形を呈する。構造は方形の約 3 分の 1 の箇所にも男柱を垂直に設置している。男柱が土坑の中心に位置していない点については、発酵した「もろみ」を入れる酒槽を置く場所を確保したものと考えられる。土坑 1017-1 の場合は、男柱の西側に南北に長い約 2.4 ～ 3.0 m、幅約 1 m、深さ約 1 m の酒槽を置き、槽からの注ぎ口は北側の土坑 1018 に設置していた垂壺に溜めていたことが想定される。また、土坑 1017-2 の場合は男柱の東側に酒槽を置き、北側の土坑 1018 に槽口より注ぎ、垂壺に溜めていたものであろう。酒槽は通常 3.5 m を測ることから男柱から垂壺までの距離と適合する。土坑 1018 は 2 段掘り込みがみられ、下段は直径 0.52 m 深さ 0.22 m を測る円形を呈し、中央には円形の扁平石が設置されていた。また、上段の掘方底部には砂層が敷き詰められており、大甕を安定する際に移動を考慮した工夫と考えられる。

男柱は柱材の表皮を剥いだ状態で面取り等の加工を施していないが、伊丹市や灘の酒蔵で検出されているものは断面形状が正方形に面取り加工されている。この件に関しては、今日まで検出されている酒造遺構が近世遺構であり、近世以前の状況との違いと解釈したい。材質については、水性環境にも腐り難く、防菌性のあるタンニンを多く含んだ耐久性の強い栗の木を使用している。男柱の構造は、底面に粗い鉾による加工と底面から上位に 0.3 m と 0.48 m に 0.18 × 0.12 m の方形貫孔を穿っている。孔は酒造を搾った時に男柱が浮上しない様に横木を貫通させるための貫通しである。横木は上下に 2 段があり、十字に施工している。横木の上には重石を数多く積み上げており、粘質土で版築状に構築している。伊丹郷町の搾り施設は、江戸中期になると大量の酒造生産となり、単基式から大型化した 2・4 基連式の搾り施設³⁴⁾ が出現する。当遺構は一見、2 基連式にみられるが、切り合い関係から 1 基の搾り施設の造り替えと考えられる。

この搾り施設は酒蔵と考えられる礎石建物の南西角に位置しており、酒蔵の南西側には男柱を設置した土坑 1017-1・2 と北側に絞った酒を貯める垂壺を設置した土坑 1018 がある。

搾り工程の遺構は、B 区にも同様の土坑 5071・5101 がある。土坑の中央には男柱の痕跡がみられ、形状、規模も類似している。2 基の土坑は土坑 1017 と同様に切り合っており、時期は古出の土坑 5101 が 3 期の京都Ⅷ期中段階、土坑 5071 が 4 期の京都Ⅸ期中段階に埋め戻されている。土坑内からは男柱材や重石は検出できなかったが、近接した土坑 5103 から備前焼の大甕片が出土しており、当地にも酒造関連の酒造施設や酒蔵が存在していたものと考えられる。変遷としては土坑 5101 が京都Ⅷ期古段階に稼働し、土坑 5101 の機材が抜き取られた京都Ⅷ期中段階に土坑 5071 へ造り替えられ、土坑 5071 の機材抜き取りの京都Ⅸ期中段階まで稼働したことが想定される。土坑の埋土が単層である点からも土坑内の男柱、横木、重石等の施設材が抜き取られ、廃棄されたことが推定される。

酒造の稼働時期は土坑 1017-1・1018 の貯蔵用埋め甕 1100・1101 が京都Ⅷ期古段階であることから、土坑 5101 と同時期に稼働したものと考えられる。1017-2 の造り替えの時期については定かでないが、5071 と同じ京都Ⅷ期中段階の可能性が高い。1017-2 は男柱等の施設を抜き取らずに廃止していることから最終の搾り場であったことが判明し、B 区と同様の京都Ⅸ期中段階と考えるのが妥当であろう。また、土坑 1017-2 の重石に加工時期を比定できる矢穴痕(図 31・図版 14-7) がみられた。使用されていた石材は長辺 0.62 m、短辺 0.55 m、厚さ 0.29 m を測る方形の花崗岩である。おそらく近隣で使用されていた寺院の石垣材を搾り施設の重石に転用したものと考えられる。矢穴³⁵⁾ は切り石の長辺に

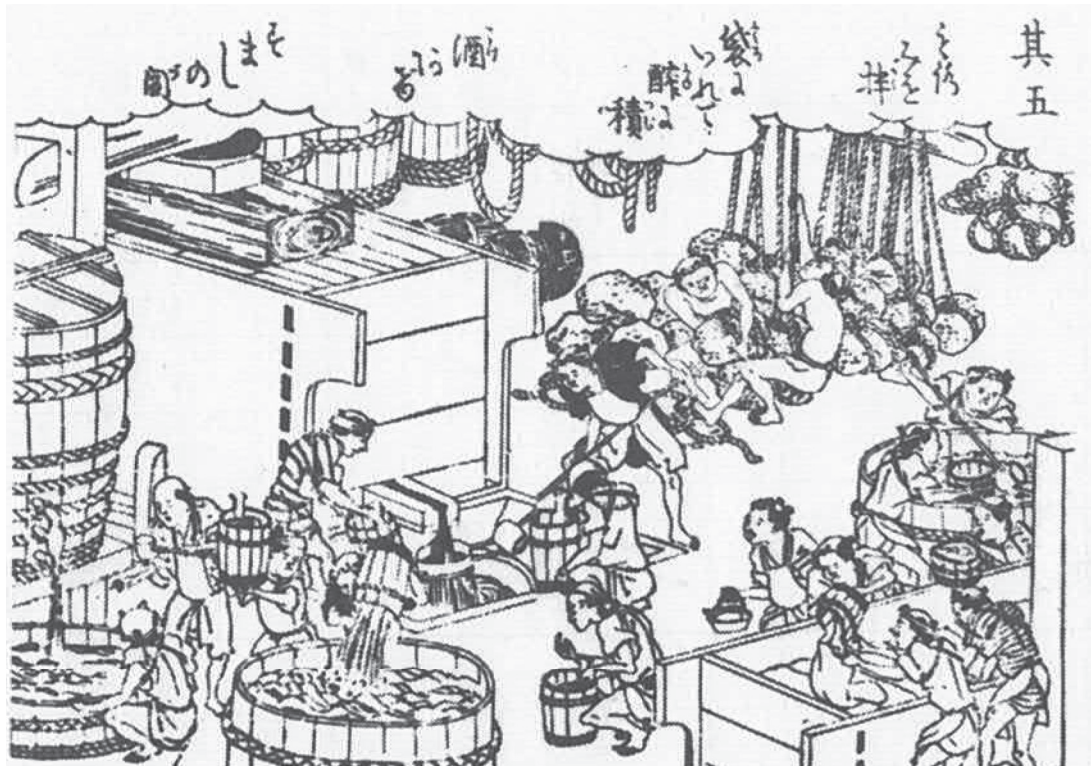


図 74 搾り工程絵図 (日本山海名産図会より)

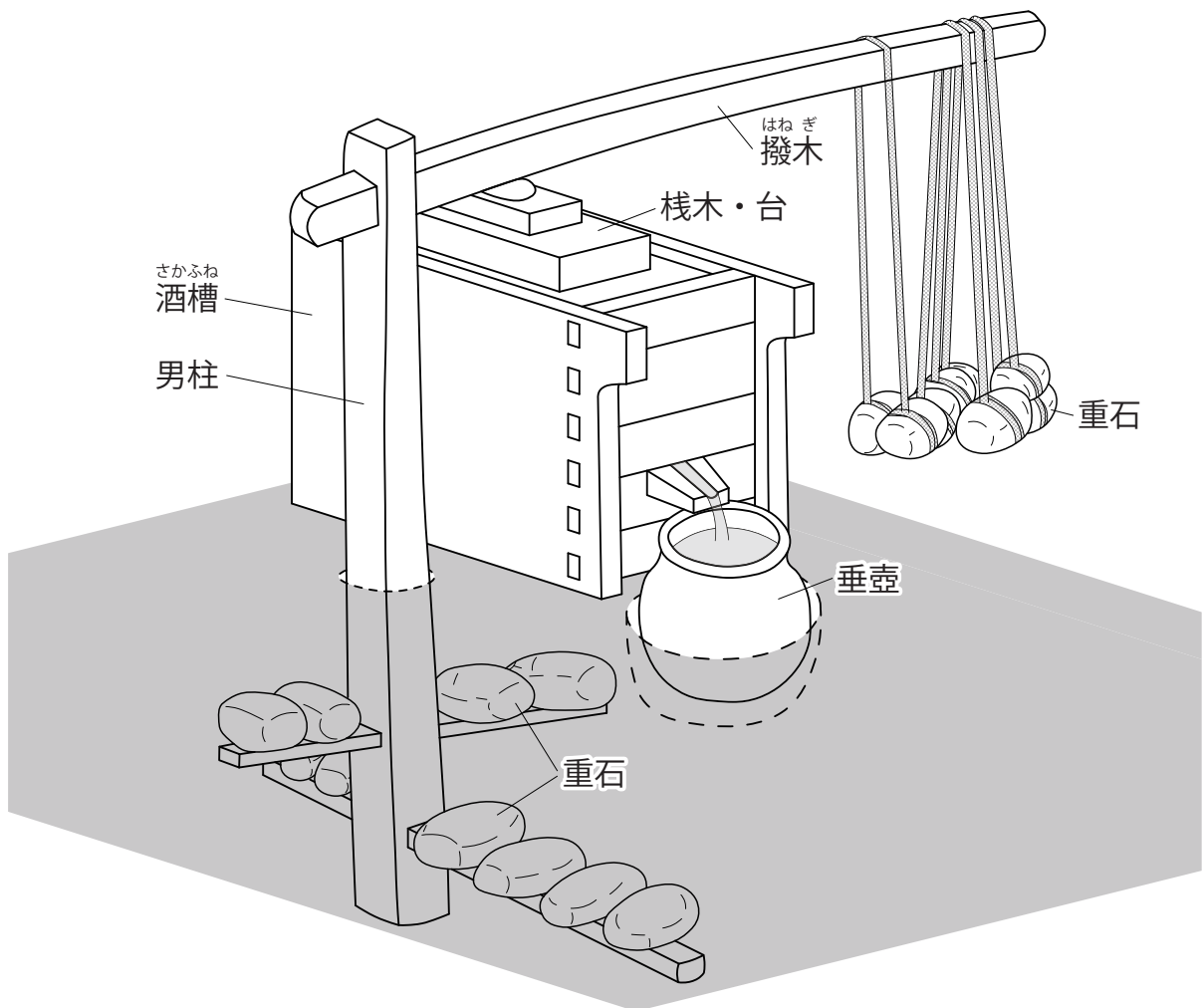


図 75 搾り施設復元図

3か所が穿たれていた。平面は隅丸の逆台形を呈する。底面は丸みを帯びた船底状、縁部は内湾して浅く立ち上がる。最大規模は矢口幅約12cm、深さ約8cmを測る。矢穴の形状から石材加工の時期を推定すると、13世紀に比定される古Aタイプに該当³⁶⁾する。古出の矢穴としては、大和郡山市額安寺宝篋印塔³⁷⁾があり、京都市内の事例としては、13世紀の右京区嵯峨小倉山二尊院十三重塔や15～16世紀に比定される銀閣寺庭園の石垣³⁸⁾がある。矢穴技法の起源は中国稔南部の浙江省杭州出身である伊行末一行³⁹⁾を俊乗房重源が招いたことが深く関与⁴⁰⁾すると言われており、近年の研究では日本に伝播した時期が12世紀中頃にまで遡る可能性が指摘⁴¹⁾されている。

当地の酒造時期は、土坑内出土遺物や矢穴、放射性炭素年代測定による検証から14世紀年代に比定される。これらの結論を総合すると、酒造が行われたのは室町時代初頭から中期頃と考えられる。

当時期の銘酒は、「柳酒」「梅之酒」「嵯峨酒」などの醸造酒のほか洛外の濁り酒⁴²⁾があった。公家・武家衆の酒宴は必ずしも澄み酒と限られたわけではなく、濁り酒もまた供用されていたといわれており、また、寺院醸造の僧坊酒や遠方の酒も含まれていたことが想定⁴³⁾されている。

当酒造は天龍寺塔頭に位置することから、天龍寺の禅宗寺院に関連しており、当寺で著名な角倉酒屋⁴⁴⁾の僧坊酒（嵯峨酒）であった可能性がある。「嵯峨酒」は都の貴紳が嵯峨野で遊楽を楽しんだ後に、角倉酒屋に立寄って酌み交⁴⁵⁾したといわれている。

当時の酒造は土倉・酒屋にて行われ、その数は応永32（1425）年の洛中洛外にて342軒⁴⁶⁾、嘉吉元（1441）年に327軒があり、応仁の乱まで酒屋数の変動もなく繁栄を続けた。その数の中で17軒は嵯峨地域にみられたことから、洛外において突出した軒数を誇っている。また、嵯峨地域の酒造は南北朝の合一をみた明徳3（1392）年以降、室町期における多くの公家にて土倉・酒屋で行われており、臨川寺周辺に集中していたことが応永32（1425）年の酒屋交名⁴⁷⁾に記されている。臨川寺は朝廷・幕府より手厚い保護を受け、種々の課税を免除する特権を付与していることから、当寺周辺には土倉・酒屋が集中⁴⁸⁾していた。室町幕府は土倉・酒屋が販売にて得た利益を資金として運用し、金融業を営むことに対して土倉役・酒屋役と称する役銭を賦課した。幕府の重要な財源となる税収入を得るために土倉・酒屋の発展を支援した。その結果、各地で借金苦に耐えかねた農民たちが酒屋、土倉、寺院を襲い私徳政を要求した土一揆が正長元（1428）年に勃発した。私徳政の根拠としては、「代替わりの徳政」であるとされている。その後も吉元（1441）、享徳3（1454）年の徳政一揆、さらに応仁の乱で京在陣中の武士を交えた悪党による一揆、文明8（1476）、同12（1480）、同16（1484）年には酒屋土倉に対する放火、一揆が連続に起った。また、同18（1486）年の京の徳政一揆、明応8（1499）年の山城国土一揆の際には、幕府は酒屋土倉の傭兵の援助を受けて応戦した。このように酒屋土倉には、傭兵を常備するほどの財力があつたこと判明する。当僧坊酒造も正長元（1428）年から明応8（1499）年までの土一揆による影響で廃止された可能性がある。

京都市内には多くの造り酒屋が繁栄したが、文安の麴騒動によって商人同士が商圈をめぐる争いが勃発する。しかし、そうした俗世の混乱とは無縁に淡々と酒造りを続ける僧坊酒はさらに評価を高めることになったといわれており、こうして室町時代前期には全盛期を迎えたことが伺える。

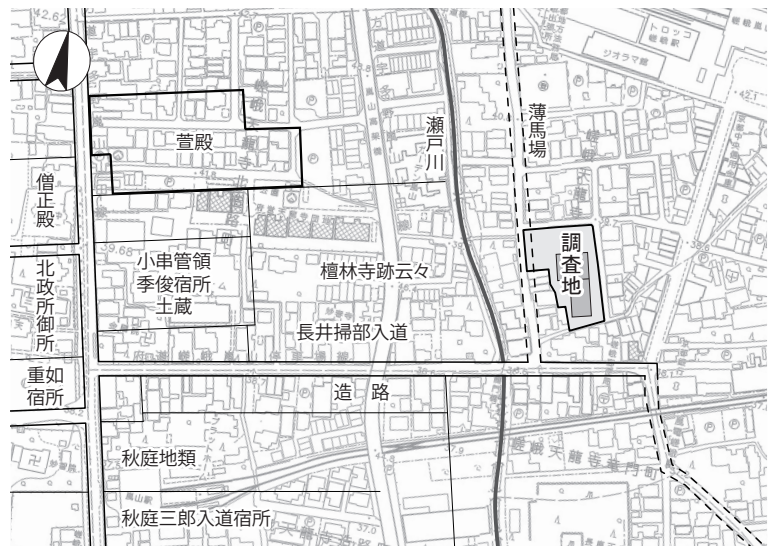
酒造に関連した遺構は、搾り遺構や埋め甕を主体とした遺構が近世の有名な酒造元⁴⁹⁾や京都市内で検出⁵⁰⁾されている。その多くは正方形の区画内に収まっている3～4列程度の規模をもつ埋め甕である。埋め甕が最も多いものとしては、京都市立下京中学校の建設に伴う発掘調査にて200基以上が検出されている。埋甕の状況についてルイス フロイス⁵¹⁾は、「日本人はその酒を大きな口の壺に入れ、封をせず、その口のところまで地中に埋めておく」と記していることから推測できる。

左京五条三坊九町跡・烏丸綾小路遺跡で検出された酒屋に関する遺構は、5 時期の変遷が復元⁵²⁾されており、13 世紀後半から 14 世紀中頃に「酒屋」と考えられる町屋が成立する。14 世紀後半に廃棄されるが、再び 15 世紀後半に「酒屋」が成立する。時期、位置関係から蜷川家文書の『土倉酒屋注文』に記載されている酒屋の「澤村又次郎」との関係が指摘⁵³⁾されている。

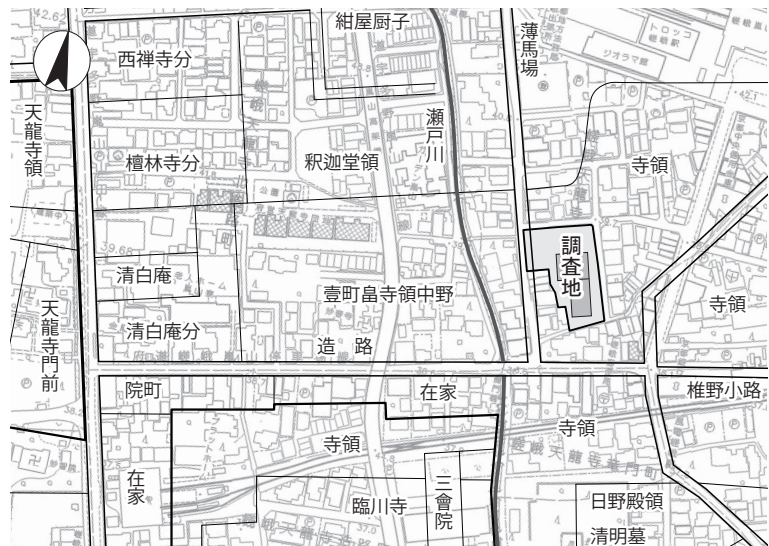
酒造遺構は埋め甕土坑以外に搾り施設や麴を発酵させると思われる麴室を伴うが、今日までの調査においては現在のところ確認されていない。その要因としては、施設の造り替えの段階で男柱や重石等の機材を抜き取り、残存しないことから性格不明の土坑の検出に留まる可能性が高く、搾り遺構としての判断が難しいものと解釈される。また、麴室と想定される地下室は検出されているが、麴菌は確認されていない。京都市内に 347 軒の酒屋が存在していたことが応永 33 (1426) 年の酒屋交名に記述されており、今後の調査においても酒造遺構が検出される可能性は高い。

天龍寺の天下龍門に伴う遺構は、A 区の南端で検出した築地塀 157、溝 173、溝 171・172 (図 71) がある。築地塀 157 は天下龍門の大門と門の内側にある広場の北側築地塀、溝 173 は築地 157 に沿った塀南側溝、溝 171・172 は築地塀の北側雨落ち溝と考えられる。いずれも天下龍門の区画 (図 76) と同一方向の N 50° E 振っている。現存する龍門の痕跡とみられる小径とは北側に約 8 m の広がりを持つが、北東方向へ平行に延びる。

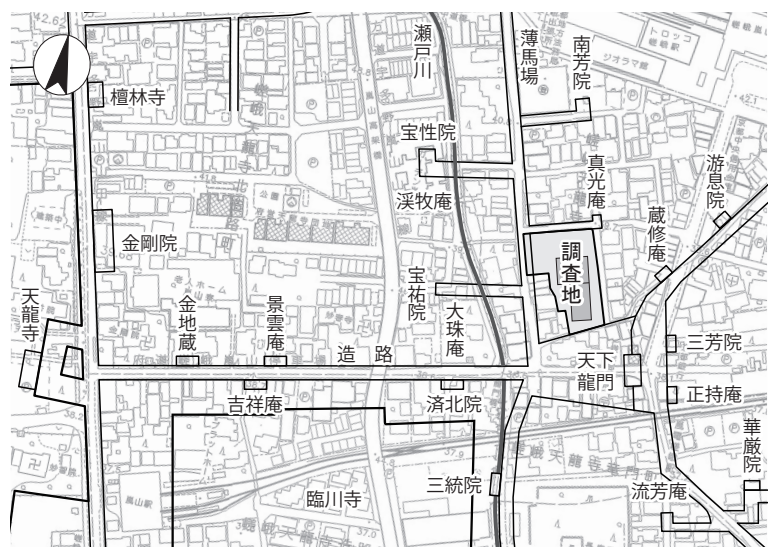
天下龍門は天龍寺の正面から西方



1. 鎌倉時代後期



2. 南北朝時代



3. 室町時代

0 100m

図 76 調査地周辺の中世復元変遷図

向へ直線状に延びた造路の東端に位置する。規模は天龍寺から約 380 m 東側の地点に建立されており、天龍寺が最盛期の頃は門の内側が全長約 90 m、最大幅約 60 m を測る二等辺三角形形状の広場を有していたことが山城国嵯峨諸寺応永鈞命絵図（図 8）より推測できる。

嵯峨の中世は、鎌倉時代後期の「嵯峨亀山殿近辺屋敷地指図」、南北朝時代の「山城国臨川寺領大井郷界畔絵図」、室町時代の「山城国嵯峨諸寺応永鈞命絵図」からその状況を復元することができる。これらの絵図を元に嵯峨の変遷（図 76 - 1 ~ 3）を試みると、基本となる西側に延びた造路は鎌倉時代後期（図 76 - 1）に亀山殿と、その北側に隣接する北殿御所から西側に延びる状況で描かれている。天下龍門の出現する箇所は道が途切れており、南側へ「L」字状に折れ曲がっている。南北朝時代（図 76 - 2）になると、その位置は同様に南側へ折れ曲がる状況が継続する。更に造路は直線状に延びた推野小路と北側へも延びる道が出現しており、天下龍門が建造されていない状況がみてとれる。この交差点は後の天下龍門が出現する重要な起点となったことは明らかである。室町時代（図 76 - 3）になると幅広く、大きな門が建造され、この段階の北側築地塀等が今回検出した遺構に該当する。建造された時期を絵図から推測すると、龍門が出現前の状況を描いた「山城国臨川寺領大井郷界畔絵図」（図 76 - 2）の貞和 3（1347）年から、幅広い龍門が出現した「山城国嵯峨諸寺応永鈞命絵図」（図 76 - 3）の応永 33（1426）年以前と想定できる。また、検出した遺構から築地塀等の終始を検証すると、その決め手は築地塀の倒壊、塀側溝の埋没と考えられる。築地塀の倒壊については構造物なので検証する方法が難題であるが、築地塀の南側溝である溝 173 については、溝上層の埋土から京都Ⅷ期新段階に比定できる土師器皿を検出することができた。また、埋土には多くの焼土が含まれていたことから、焼失による崩壊が想定される。天龍寺が火災に見舞われた事項は大きなものだけで延文 3 年（1358）、貞治 6 年（1367）、応安 6 年（1373）、康暦 2 年（1380）、文安 4 年（1447）、応仁 2 年（1468）、文化 12 年（1815）、元治元年（1864）の 8 回がある。溝 173 が埋没した時期と当時の歴史的事項を検証すると、文安 4（1447）年の大火が大凡符合する。これらを総合すると、天下龍門の既存した最長期間は、応永 33（1426）年から大火によって倒壊した文安 4（1447）年と推測される。

これらの施設が埋め戻された時期を検証することで、天龍寺の最盛期に存在した数多くの塔頭が戦災などで徐々に撤退し、寺域が衰退する過程の一端を追うことができた。

4 期 中世 2（15 世紀中頃～ 16 世紀後半）

中世 2 の成果は、室町時代中期から末期の居住区、畑作、採掘坑（図 71 - 4 期）がみられる。遺構面としては他の時期より数少ない。時期は京都Ⅷ期新段階～京都Ⅹ期新段階に比定した。時代背景としては、正長元（1428）年の土一揆が勃発し、応仁元（1467）年の応仁の乱に終焉を経た安土桃山時代までを想定した。4 期の遺構としては、居住区の掘立柱建物、柵列、杭列、畑作、天下龍門の倒壊後の採掘坑がある。

掘立柱建物は B 区の西側にて掘立柱建物 4 棟、柵列 1 条、杭列 1 基を検出した。掘立柱建物は全て同規模の 4 間×3 間であり、南北に整然と並んだ状態で 2 棟の建物を建て替えている。建て替えは建物 1 と建物 2 が同時期に建っており、南側へ半間分の移動にて掘立柱建物 3・4 が建て替えられている。時期は掘立柱建物 1・2 が京都Ⅸ期古段階～京都Ⅹ期古段階、掘立柱建物 3・4 は京都Ⅹ期古段階に建て替えられ、京都Ⅹ期新段階まで建っていたと考えられる。

柵列 1 は 5 間の規模を有する。北端の位置が掘立柱建物 4 と並んで同一であることから、同時期に建てられた可能性が高い。南端は溝 5063 の手前にて途切れており、掘立柱建物 4 の南辺と揃っているこ

とから同時期に存在したものと推定される。

杭列は性格不明であるが、掘立柱建物 2・4 と平行に設定されている。また、柵列の並びと杭列の東端が並ぶことから、同時期に存在していたのものであろう。掘立柱建物、柵列の東側は空間を有して、東端に畑地が広がっている。

畑地は南北方向に素掘り溝 5210～5212 によって耕作されている。埋没時期は中世と考えられるが、西端の溝 5210 は葛野郡条里の十一坪と十二坪の坪界（図 73）の位置と一致しており、古代条里にまで遡る可能性がある。坪界の溝 5210 の南側延長部には溝 191・152 が継続している。

天下龍門の倒壊後に出現する 2 基の粘土採掘土坑 1001-1・2 は、龍門の築地塀に平行した状態で切り合っている。土坑の形状が築地塀に規制された北東方向に沿った状態であることから、天下龍門が現存していた終末期か倒壊直後と考えられる。その後の築地塀がなくなったことで、北側の畑作が南側に拡張され、素掘溝 101・152・160 が南北方向に出現している。

これらの遺構を検証することで、天龍寺の最盛期に存在した数多くの塔頭が戦災などで徐々に撤退し、寺域が衰退する過程の一端を追うことができた。また、これらの遺構に伴う礎石建物は酒蔵であったことが推定でき、当地は寺領域であることから、寺院が酒造を行っていたことが想定される。さらに、酒造は清酒であった可能性が高く、その起源が室町時代前半にまで遡る可能性を提示できた。酒造元に関しては、応永釣命絵図に記載されている東側の蔵修庵、北側の真光庵が深く関わっていたものと考えられる。

今回の調査によって天龍寺の天下龍門や塔頭に関連する寺域内で酒造を行っていたことを立証できる搾り遺構、埋め甕群や官衙的な性格を有する葛野郡条里溝を検出することができたことは大きな成果といえる。

註

- 1) 平成 4 年に嵯峨天龍寺造路町で関西文化財調査会にて行われた発掘調査で検出している。小椋山一良「嵯峨・嵐山地域の遺跡」『京都嵯峨野の遺跡－広域立会調査による遺跡調査報告－京都市埋蔵文化財研究所調査報告第 14 冊』(京都市埋蔵文化財研究所 1997 吉川義彦他『臨川寺旧境内発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第 4 冊(京都市埋蔵文化財研究所 1978
- 2) 小椋山一良(京都市埋蔵文化財研究所「京都嵯峨野の遺跡－広域立会調査による遺跡調査報告－京都市埋蔵文化財研究所調査報告第 14 冊」(京都市埋蔵文化財研究所 1997
- 3) 天長 5 (828) 年頃に作成された『山城国葛野郡班田図』の復元による山城国葛野郡の条里制。
- 4) 蔵修庵は天下龍門を出て北東側へ伸びる街道に沿った所に記されている塔頭である。調査地の東側に隣接していたものと考えられる。天下龍門は『山城国嵯峨諸寺応永釣命絵図』に描かれている。応永三十三 (1426) 年、足利義持の命により臨川寺住持月溪中珊が制作した。天龍寺正面の天下龍門に通じる東西道路 (造路) と山門前を横切る南北道路を主要路として五山天龍寺と十刹の第二臨川寺・第五宝鐘寺 (鹿王院) が描かれている。
- 5) 真光庵は調査地の西側に南北方向に伸びる薄馬場路に沿った所に記されている。路の東側に記されていることから、調査地の北側に隣接していたものと考えられる。
- 6) 室町時代初期の古文書『御酒之日記』に寺院で造られる僧坊酒と呼ばれる酒の製造が盛んであった。
- 7) 東嵯峨野周辺で中期竪穴住居跡や畿内第Ⅳ様式の遺物が検出している。註 2 に同じ。
- 9) 村ノ内町遺跡は弥生時代中期の集落が確認されている。和泉式部町遺跡は弥生時代中期から古墳時代中期に集落が確認されている。松室遺跡は弥生時代の竪穴住居、土坑、溝が検出されている。平田 泰「太秦地域の遺構分布」『京都嵯峨野の遺跡－広域立会調査による遺跡調査報告－京都市埋蔵文化財研究所調査報告 14』(京都市埋蔵文化財研究所 199

- 10) 縄文時代中期から後期までの遺構、遺物が史跡大覚寺御所跡・嵯峨院跡の調査で検出されている。1-2 文 434 で縄文時代中期の縄文土器を土坑から検出している。
- 11) 京都市編『京都の歴史』第一巻「山城国葛野郡班田図」描き起こし図・概念図) 1979
- 12) 平田 泰「2 太秦地域の遺構分布」『京都嵯峨野の遺跡 広域立会調査による遺跡調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告 14、1997
- 13) 鹿王院・車折神社周辺の遺構分布図にて飛鳥・平安時代の集落範囲を考察されている。小檜山一良「3 嵯峨・嵐山地域の遺跡」『京都嵯峨野の遺跡—広域立会調査による遺跡調査報告—京都市埋蔵文化財研究所調査報告 14』(京都市埋蔵文化財研究所 1997
- 14) 註 2 に同じ。
- 15) 註 2 に同じ。
- 16) 『山城国葛野郡班田図』の復元による山城国葛野郡の条里制。大堰川北側の嵯峨野に 6 里分の条里と栖霞寺・栖霞寺路・檀林寺・檀林寺路・宇智内親王御墓が示されている。
- 17) 鎌田元一『嵯峨野の古墳時代 御堂ヶ池群集墳発掘調査報告』京都大学考古学研究会 1971
高橋美久二「嵯峨野の古墳と秦氏」『史跡でつづる京都の歴史』法律文化社 1977 年
- 18) 東 洋一・加納敬二「嵯峨野における秦氏の到来期について—地形から見た嵯峨野の開発過程—」研究 紀要第 10 号—(京都市埋蔵文化財研究所設立 30 周年記念号—(京都市埋蔵文化財研究所
井上満郎『渡来人』リポート 1987 年。同『古代の日本と渡来人』明石書店 1999
山尾幸久「古代の洛西と葛野の秦氏」『洛西探訪』淡交社 1990
田辺昭三「考古学から見た平安京以前」『京都の歴史・1』京都新聞社 1993
- 19) 条里制の復元は葛野郡班田図の研究をされている諸説があり、条里研究には福山敏男、金田章裕などの論考があり、また葛野郡班田図の書誌的研究は宮本救、西山良平、山口英男らによって進められてきた。
足利健亮編『京都歴史アトラス』中央公論社 2008
金田章裕『平安初期における嵯峨野の開発と条里プラン』「追手門学院大学文学部紀要」12、1978
金田章裕『桂川の河道変遷と東寺領上桂荘』「京都市歴史資料館紀要」10、1992
金田章裕『郡・条里・交通路』「平安京提要」角川書店 1994
金田章裕「条里と村落の歴史地理学研究」大明堂 1995
金田章裕・石上英一・鎌田元一・栄原永遠男編『日本古代荘園図』、東京大学出版会
西山良平「山城国葛野郡班田図」1996
福山敏男「山城国葛野郡の条里について」歴史地理 71-4 1938
宮本 救「山城国葛野郡班田図補考」成蹊大学一般研究報告 1981
宮本 救「山城国葛野郡班田図」竹内理三編『荘園絵図研究 東京堂出版 1982
宮本 救「山城国葛野郡班田図補説」日本歴史 1999
山口英男「山城国葛野郡班田図」(東寺宝物館編『東寺とその荘園』、東寺宝物館 1993
山口英男「荘園絵図調査報告 5 山城国葛野郡班田図」東京大学史料編纂所紀要 1992
山口英男「荘園絵図調査報告 6 山城同葛野郡班田図」東京大学史料編纂所紀要 1993
山田邦和『日本中世の首都と王権都市-京都・嵯峨・福原-』第 4 章「中世都市嵯峨の変遷」文理閣 2012
渡邊秀一「山城国葛野郡班田図に描かれた古代景観—加筆内容をめぐって—」『文学部論集第 86 号』2002
- 20) 山田邦和『日本中世の首都と王権都市-京都・嵯峨・福原-』第 4 章「中世都市嵯峨の変遷」文理閣 2012 掲載の「平安時代嵯峨復元図」を引用、加筆させて頂いた。
- 21) 地形が微高地などの起伏から西傾であったことから真北から 16 度西側へ振れた説や葛野郡条里は一条、二条付近で既に地割が存在していた。正方位の条里が設定されていたが、後に修正された。金田章裕「条里と村落の歴史地理学研究」大明堂 1995

- 22) 山田邦和『日本中世の首都と王権都市-京都・嵯峨・福原-』第4章「中世都市嵯峨の変遷」文理閣 2012
 山田邦和「中世都市嵯峨の変遷」(金田章裕編『平安-京都 都市図と都市構造』京都大学学術出版会、2007)
 山田邦和『京都市史の研究』吉川弘文館 2009
- 23) 京都市編『京都の歴史 第一巻』第2章 山背国の展開 第2節 律令制の成立 班田と条里「山城国葛野郡班田図」京都市史編さん所 1979
- 24) A説、西田直二郎氏、B説、金田章裕氏、C説、鳥居治夫氏によるものがある。小檜山一良「嵯峨・嵐山地域の遺跡」『京都嵯峨野の遺跡-広域立会調査による遺跡調査報告-京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊』(叻京都市埋蔵文化財研究所 1997)
- 25) 平成7年度の調査にて検出されているが、未報告。小檜山一良「嵯峨・嵐山地域の遺跡」『京都嵯峨野の遺跡-広域立会調査による遺跡調査報告-京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊』(叻京都市埋蔵文化財研究所 1997)
- 26) 江谷 寛「臨川寺旧境内」『佛教芸術 115号』毎日新聞社 1977
- 27) 宮本 救「山城国葛野郡班田図補説」日本歴史 1999
- 28) 「大井寺」銘の同范軒平瓦は天龍寺境内、嵯峨院跡、平安宮太政官跡から出土している。
- 29) 『製油濫觴』「長木の図」(離宮八幡宮所蔵) 長木式圧搾は貞観年間に山崎離宮八幡宮の神官が発見したといわれている。
- 30) 中野晴久「中世常滑窯の研究」博士論文、愛知学院大学大学院 2013
- 31) 間壁忠彦『備前焼』『備前焼の編年表』(考古学ライブラリー 60) ニューサイエンス社 1990)
- 32) 柏田有香『-中世の酒屋と墓-平安京左京五条三坊九町跡-烏丸綾小路遺跡の発掘調査』「第210回京都市考古資料館文化財講座」(叻京都市埋蔵文化財研究所 2009)
- 33) 木製の箱(酒槽)に「もろみ」を入れた酒袋を敷き詰め、上に蓋板、棧木、台を載せて更に上に撥ね木を重ねて圧力をかけて搾る「天秤しぼり」方法である。撥ね木の基部は男柱によって支えられ、端部には圧力をかける重石が縄にてぶら下げている。重石の重力を利用した槌の原理で搾る。絵図は『日本山海名産図会』に記載されている日本各地の産物についてその採取や生産のようすを絵入りで記したもので、寛政11年(1799)に刊行、巻之一には「造釀(さけつくり)」と題して伊丹の酒造業の様子が具体的に描かれている。使用する道具や機械は進化しているが、基本的な酒造工程は現在も同じである。
- 34) 伊丹郷町の酒造業は、元禄年間から享保年間(17世紀後半~18世紀初頭)、文化・文政年間(19世紀前半)に盛期を迎え、酒造の大量生産によって単基式から2基連式、大型化した2基連式の搾り施設が出現する。これらの変遷は、発掘調査成果と一致している。
- 35) 藤川祐作「千刈採石場-神戸水道千刈水源池中州の石英粗面変岩を産出する採石場-」『たからづか』13、1997
 藤川祐作「年表-石工・石造遺物・矢穴-」『川瀬の糞』5、1998
 森岡秀人・坂田典彦「矢穴・矢穴痕の多様性と機能的位置づけ」芦屋市教育委員会『徳川大坂城東六甲採石場Ⅳ 岩ヶ平石切丁場跡』芦屋市文化財調査報告第60集 2005
 森岡秀人「大型硬質石材の採石活動に占める矢穴技法の特質と意義」川上邦彦先生古稀記念献呈論文集 2015
- 36) 森岡秀人氏に現場にて矢穴のご教示を頂いた。
- 37) 奈良県大和郡山市額安寺宝篋印塔にみられる矢穴は、記載されている銘年号から文応元(1260)年に比定されたもっとも古い例である。
- 38) 内田好昭「史跡 慈照寺(銀閣寺)旧境内」京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告(公財)京都市埋蔵文化財研究所 2008
- 39) 伊 行末は鎌倉時代の石工である。南宋時代に現在の中国浙江省寧波付近で生まれ、鎌倉時代初頭に来日し南都焼討後の東大寺復興にあたった。我が国の石工集団「伊派」の創始者であり、子孫は「伊」「猪」「井」を冠する苗字を名乗り日本各地にその足跡を残している。
 山川 均「石造物が語る中世職能集団」日本史リブレット 29 小川出版社 2006
- 40) 小島 毅(監修)、山川 均「寧波と宋風石造文化」汲古書院 2012
- 41) 森岡秀人「大型硬質石材の採石活動に占める矢穴技法の特質と意義」川上邦彦先生古稀記念献呈論文集 2015
- 42) 加藤百一『室町期における公家・武家衆の酒宴(1)-その作法と遊戯化-』第98巻第10号日本醸造協会誌 2003
- 43) 「尺素往来」1巻。元旦・三節会以下の儀式・祭礼・武事・仏法など諸般事項にわたり関係語彙を集録し、正月から歳暮にいたる消息文を擬作した書。一条兼良著と伝える。

- 44) 延徳2(1490)年制定の「酒屋条目」の中に「嵯峨谷酒家役事」
- 45) 加藤百一『日本の酒 5000年』120頁(技報堂・1987)
- 46) (「北野神社文書」) 吉田元「江戸の酒」岩波現代文庫 2016、吉田元「酒(ものと人間の文化史)」法政大学出版局 2015
 荻野繁春「壺・甕はどのように利用されてきたか」1992『国立歴史民俗博物館研究報告書第46集』国立歴史民俗博物館 1992、『吾妻鏡』
- 47) 酒屋交名『酒屋交名』(『北野天満宮史料 古文書』北野天満宮、1978、34～46頁)
- 48) 野田泰三『角倉一族の歴史と文化的活動について』「了以以前の角倉氏と嵯峨地域」京都光華女子大学研究紀要第51号 2013
- 49) 「京都西条と四日市遺跡—四日市遺跡平成13年度調査(西条本町地区)」『阿岐のまほろば25』(財)東広島市教育文化振興事業団 文化財センター 2002
 「豊臣時代の埋甕遺構」『秀吉の大坂城 豊臣石垣コラム』豊臣石垣公開プロジェクト 2018
 長岡京跡右京第1019次調査で埋甕を据え付けた建物2棟内から、74個の甕の据付穴が発見され、酒の醸造に係る遺構と考えられている。右京八条二坊七町「掘立柱建物SB88」から埋甕23基が検出された。甕は高さ1m、胴回り0.8mの大甕であった。建物が官営でなく民間醸造所であったとすると商業的規模で酒造りが行われていたことが指摘されている。また、奈良の西大寺旧境内では9世紀末頃に埋まった埋甕が発見され、寺院の食堂に伴う貯蔵施設と考えられている。
 平安京や奈良町、広島県福山市草戸千軒町遺跡にて14世紀前半の埋め甕11基が検出されている。宇治市街地跡などでは鎌倉時代から室町時代の埋甕が発見され、酒造などの用途が想定されている。
- 50) 京都市内で約14か所が発見されている。(丸山義広『土倉と酒屋の遺跡』第252回京都市考古資料館文化財講座 連続講座「遺跡が語る戦国時代の京都」第2回(公財)京都市埋蔵文化財研究所 2014)
- 51) ルイス フロイス/著、岡田章雄/訳注「ヨーロッパ文化と日本文化」岩波文庫 1991
- 52) 註32に同じ。
- 53) 註32に同じ。

I. はじめに

今回の自然科学分析では、酒造り絞り場遺構で検出された柱や横木の樹種同定と、下層遺構面での深掘トレンチ断面の堆積層の観察結果および地山をなす堆積層中（調査区基盤層）から採取した試料の放射性炭素年代測定の結果を報告する。

なお本報告では、調査区基盤層に挟在する古土壌を構成する腐植から得られた年代値をふまえ、遺跡立地と関係する地形発達史について若干の検討を試みた。以下に、分析結果とその考察を述べる。

II. 放射性炭素年代測定

1. 試料と方法

年代試料は、遺構検出最終面を構成する古土壌（14C-1）で、調査区南西隅部西壁の深掘トレンチから採取した（写真6）。測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1. 5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

表1 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-36930	試料No. 14C-1 層位：基盤層中の古土壌	種類：土壌（ヒューミン） 状態：wet	湿式篩分：106 μm 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸： 1. 2N, 水酸化ナトリウム：1. 0N, 塩 酸：1. 2N）

表2 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	δ ¹³ C (‰)	暦年較正用 年代 (yrBP ± 1σ)	¹⁴ C年代 (yrBP ± 1σ)	¹⁴ C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
PLD-36930 試料No. 14C-1	-26. 16 ± 0. 29	8294 ± 28	8295 ± 30	7452-7396 cal BC (34. 2%) 7376-7321 cal BC (34. 0%)	7477-7287 cal BC (88. 5%) 7273-7258 cal BC (1. 5%) 7226-7194 cal BC (5. 4%)

2. 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ¹³C）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、図1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代（yrBP）の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差（±1σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68. 2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い（ ^{14}C の半減期 5730 ± 40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正にはOxCal4.3.2 (較正曲線データ：IntCal13) を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

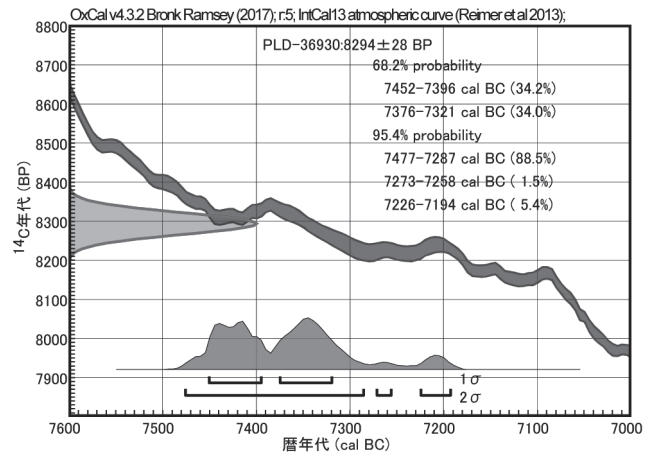


図1 暦年較正結果

3. 考察

(1) 現地の堆積層の観察

飛鳥時代から中世までの遺構が検出されている下層遺構面では、南北方向へ流下する蛇行が目立つ流路（NR5300）が検出された。このNR5300については、北側に位置する既往の調査地点でも確認されており、その調査において考古遺物の包含が確認されていたため、本調査でも掘削調査を行う必要性が示唆された。

なお、NR5300については、下層遺構面での検出当初、砂礫が充填する部分のみが流路堆積物と認定されていた。報告者が現地調査を行った下層遺構面の発掘調査の終了段階には、調査区北端において、NR5300を横断するように掘削された東西方向に伸びる溝（SD218）が完掘されており、その北側掘方の斜面の断面において、流路堆積物の上部の堆積状況の観察が可能になっていた。この部分で観察を行った結果、NR5300内の堆積層は、砂礫層だけでなく、その周囲のシルト層にまで広がる可能性を認識することができた。

一般的に流路の発掘調査を行う場合には、できる限り流路内に堆積物を残すことなく掘削を行うのが望ましいと判断される。そのため、今回の発掘調査では、報告者が指摘した可能性を検証するため、NR5300を横断するように調査区内の北端、中央付近、南端において深掘トレンチを設定して、埋没状況を確認した。

(2) 深掘トレンチの堆積状況

まず始めに、SD218部分での堆積層の観察結果を述べる。溝斜面部分の断面観察では、下層遺構面の基盤をなす堆積層（以下、下層遺構面構成層とする）と、その下部に存在する古土壌と判断される堆積層が確認される。下層遺構面構成層は、灰白色を呈するシルトを多量に含む細粒砂（0.125-0.250mm）～中粒砂（0.250-0.500mm）で構成される。古土壌は暗褐色を呈し、腐植を多量に含む砂質シルトからなり、未分解の植物遺体を挟み、塊状無層層をなす層相から、土壌生成層準と解釈され

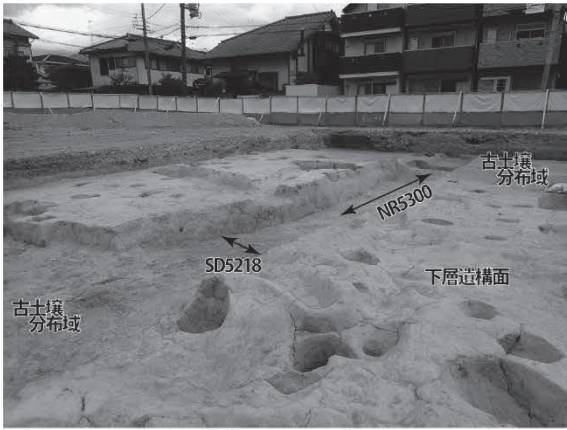


写真1 調査区北端の流路検出状況（南西から）

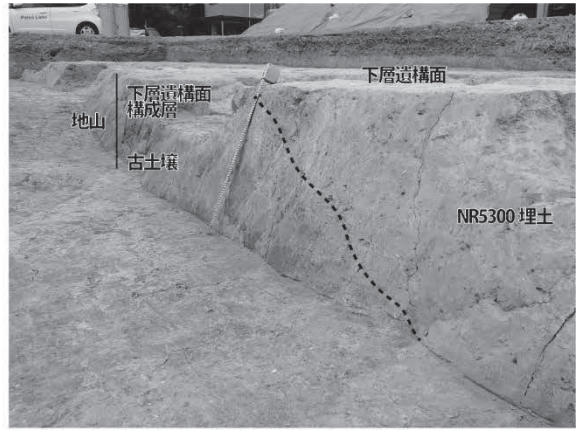


写真2 調査区北端の流路肩部断面（南東から）

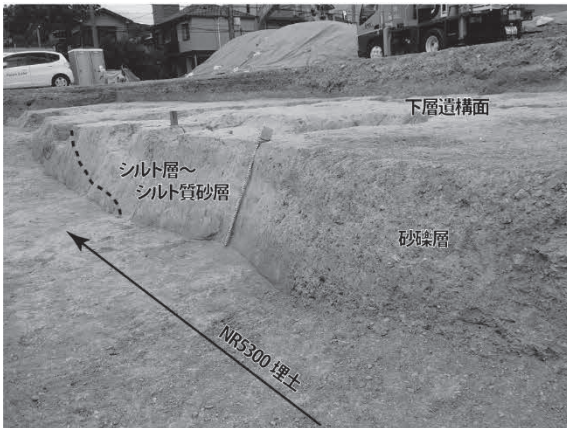


写真3 調査区北端の流路内砂礫層堆積状況（南東から）

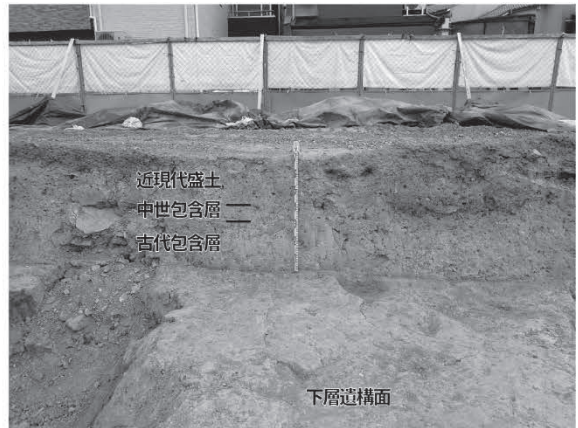


写真4 調査区東壁の最終遺構検出面の被覆状況（西から）



写真5 調査区東壁の最終遺構検出面基盤層（南西から）

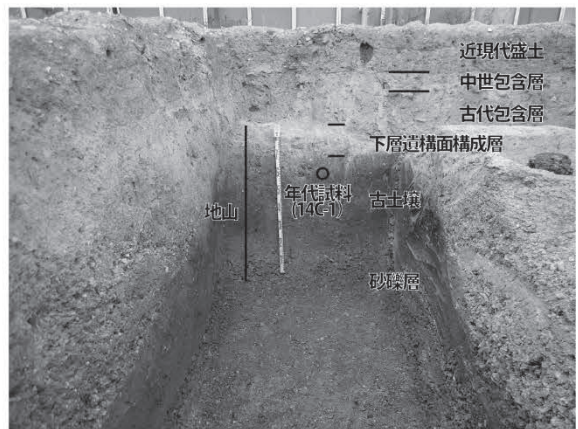


写真6 調査区南西隅部の最終遺構検出面基盤層（南東から）

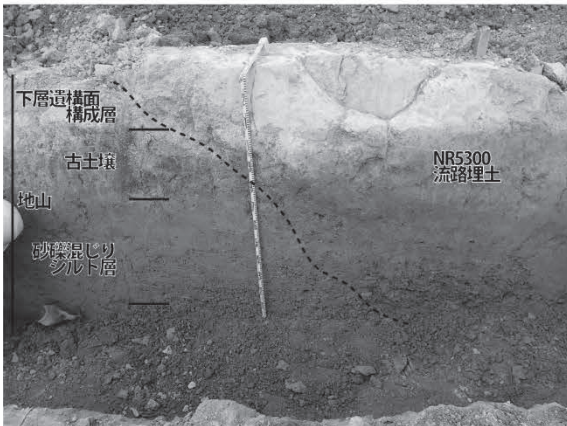


写真7 調査区北端の流路肩部深掘状況（南から）



写真8 調査区北端の流路肩部深掘状況（南東から）



写真9 調査区北端の流路砂礫層深掘状況（南東から）



写真10 調査区中央の攪乱部の流路砂礫堆積状況（南西から）



写真11 調査区中央の攪乱部の流路内砂礫断面（南から）



写真12 調査区中央の攪乱部の流路内砂礫断面（南から）

る（写真では古土壌と表記）。

完掘された遺構や攪乱部の底面では、古土壌が露出している部分が広く認められる。また、SD218の底部では、古土壌上面が、上記したNR5300を充填する砂礫層および周囲のシルト混じり砂層（写真では流路埋土と表記）によって侵食される様子が確認される（写真1）。このような堆積状況は、SD218肩部の斜面断面でも認められ、シルト層～シルトを多量に含む細粒砂層が古土壌を流路状に侵食している（写真2）。また、NR5300の河床堆積物と当初認識された砂礫層は、シルト層～シルトを多量に含む細粒砂層を再侵食して充填する状況も捉えられる（写真3）。

上記した観察結果は、深掘トレンチ断面において詳細な堆積状況が把握できる。NR5300によって侵食される堆積層（地山）では、最上部に灰白色シルトを多量に含む細粒砂～中粒砂が層厚30～40cm程度、その下位に古土壌をなす暗褐色砂質シルトが層厚30cm前後、黄灰色砂礫混じりのシルト層、そして底部に粗粒～極粗粒の中礫（16-64mm）の礫層が層状に堆積する（写真7）。一方、NR5300部分では、シルト層～シルトを多量に含む細粒砂層と、これを再侵食して堆積する砂礫層が、最大深度層厚100cm前後の流路状の堆積空間を充填する（写真8）。砂礫層については、数枚の再侵食面が認められ、何回かの洪水によって間欠的に埋没した状況がうかがえる（写真9）。

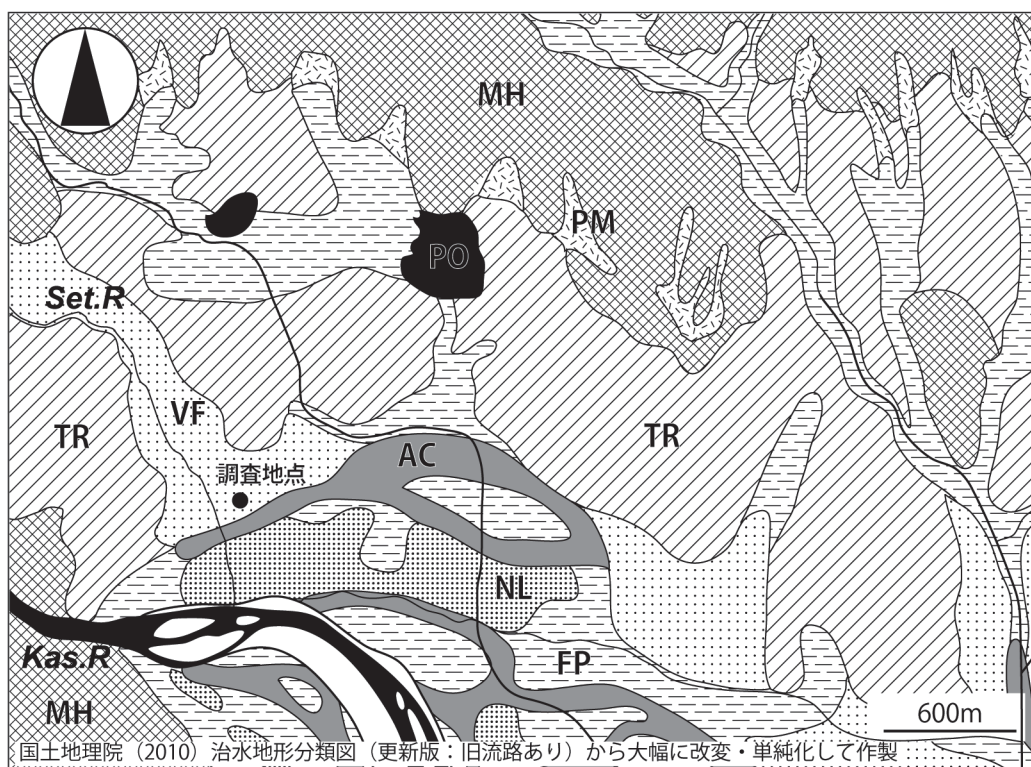
なお、砂礫層については、調査区中央部付近の攪乱断面において良好な堆積状況が観察された。この部分の観察によると、砂礫層は、斜交層理・葉理が形成されており、粗粒の中礫（16-32mm）を最大礫径として、極粗粒砂（1-2mm）、細礫（2-4mm）の砂礫で構成されることが認識できる（写真10-12）。

以上の深掘トレンチの観察結果から、調査区では、NR5300によって侵食される堆積層（地山）が付近の地形面を構成する基本層序をなす堆積層と認識される。この基本層序中に挟在する古土壌は、層厚30cm程度と比較的厚く発達しており、この段階に地形面が安定して、土壤生成が卓越していたとみなされる。ただし、古土壌中からは、考古遺物が検出されておらず、埋没時期が不明であった。このため、調査区付近の地形面が安定した時期に関する年代情報を得る目的で、今回はこの古土壌腐植を採取し、放射性炭素年代測定を行った。その結果、腐植は、縄文時代早期中葉頃の8295±30 yrBP（約9400-9100 cal BP : 2σの暦年代範囲）の年代値を示した。

(3) 遺跡の立地環境と調査区基盤層の形成過程

本遺跡は、国土地理院（2010）の更新版の治水地形分類図（京都西北部）によると、東西を段丘面に挟まれた開析谷の谷底低地に形成された扇状地をなす沖積氾濫原面上に立地する（図2）。深掘トレンチで観察された下層遺構面の基盤をなす基本層序部分の堆積層は、扇状地の構成層の上部～最上部付近に相当すると判断される。一方で、下層遺構面の上部には、シルト主体の浮遊洪水堆積物を母材とすると推定される人為的擾乱堆積物の古代包含層が層相30cm程度、その直上に中世包含層が10cm程度被覆しており、現地表面との間に近現代の盛土が累重する。このような下層遺構面の被覆層の堆積状況から、今回の調査区では、古代以降の堆積層の被覆がかなり薄い状況がうかがえるとともに（写真4）、下層遺構面より上位においては洪水の影響をあまり受けない堆積環境下にあったと考えられる。

以上のような、下層遺構面を被覆する堆積層の埋没過程にもとづくと、調査区付近では、古代以前に氾濫原面が既に離水しており、調査区に流入する洪水がほとんど発生しないような堆積環境下にあったとみられる。縄文時代早期中葉頃に発達した古土壌については、遺構検出最終面構成層の灰白色



凡例 MH：山地・丘陵 TR：台地 PM：山麓堆積地形 VF：沖積扇状地 FP：沖積氾濫原
NL：自然堤防 AC：旧流路 PO：池 Kas.R：桂川 Set.R：瀬戸川

図2 遺跡周辺の地形分類図

シルトを多量に含む細粒砂～中粒砂層によって層厚30～40cm程度被覆される。この下層遺構面構成層からは、遺物が出土しておらず、年代測定が可能な試料も得られていないため、堆積年代は不明である。ただし、縄文時代早期中葉頃の古土壌から下層遺構面までの堆積層の積層が活発ではないため、調査区付近では、縄文時代段階において氾濫原の離水が進んでいたと想定される。したがって、下層遺構面構成層の表層部に、本来は古土壌が形成されていたと予想されるが、本遺跡とその周辺で人間活動が本格的に認められるようになる飛鳥時代以降の人間活動によって、ある段階に削平が進んだと考えられる。

以上から、調査区付近の氾濫原は、洪水の影響をほとんど受けないような安定した地表面が、飛鳥時代以前に長期間にわたって維持されるような堆積環境下にあったとみなされる。さらに、年代測定および調査区の基本層序の堆積層の観察結果をふまえると、本遺跡が立地する沖積扇状地面では、すでに縄文時代早期後葉に活発な地形形成を終えていた可能性が指摘できる。調査区付近は、縄文時代早期に間欠的で弱い浮遊泥質堆積物の供給を受けながら氾濫原面上において土壌が上方へ付加的に発達するような安定した地表環境下にあったと解釈される。

また、NR5300については、下層遺構面から100cmほど下刻しているが、侵食によって形成された堆積空間を充填するのみで、周囲へ洪水堆積物を積層させていない点が着目される。このような埋没状況から、NR5300の形成時期には、氾濫原面で離水が進行していた様子がうかがえる。このNR5300については、調査区付近を流下する瀬戸川に由来すると思われる。今回の深掘トレンチの観察結果から、下層遺構面構成層の形成段階以降には、調査区周辺において瀬戸川がすでに下刻傾向をなしており、活発な氾濫原形成を行っていなかったと推測される。

さらに、NR5300では、流路内に浮遊泥質洪水堆積物が厚く累重する堆積状況も興味深い。この成因の一つとしては、南方700m前後で合流する桂川が、増水時に支流の瀬戸川よりも高く水位上昇することによって、合流点付近の支流路内の水が排水不良になり易い地形条件の存在があげられる。このため、合流点付近の瀬戸川では、増水時に流路内が滞水するケースが多く、浮遊泥質堆積物による埋積が進行したと推測される。なお、調査区の南側に隣接して、桂川の旧流路（埋没河道）が地形判読されている（図1）。この旧流路が最終面流路の機能時に主流路であった場合には、瀬戸川と桂川の合流点は現在の場所よりもさらに嵯峨遺跡に近い位置に存在したことになる。

上記してきた本調査区付近の氾濫原の地形発達史については、周辺の発掘調査結果をふまえ、さらに詳細に検討を行っていくとともに、遺跡形成過程についてのより具体的な記載が課題として認識される。

引用文献

国土地理院（2010）治水地形分類図 京都西北部（更新版） 1：25000.

（辻 康男）

Ⅲ. 樹種同定

1. 試料と方法

試料は、酒の絞り場遺構の構築材5点である。なお、試料No. W2とW4は同一材と考えられている。試料の時期は、いずれも室町時代である。写真13、14に試料採取位置を示す。

樹種同定は、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラールで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡および写真撮影を行なった。

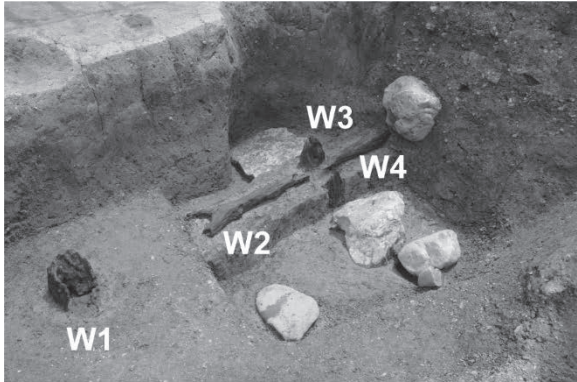


写真13 酒絞り場遺構樹種同定試料（その1）



写真14 酒絞り場遺構樹種同定試料（その2）

2. 結果

同定の結果、試料はいずれも広葉樹のクリであった。同定結果を表3に示す。

以下に、同定された材の特徴を記載し、図版に光学顕微鏡写真を示す。

表3 樹種同定結果

試料No.	樹種	時期	備考
W1	クリ	室町時代	
W2	クリ	室町時代	W4と同一材
W3	クリ	室町時代	
W4	クリ	室町時代	W2と同一材
W5	クリ	室町時代	

(1) クリ *Castanea crenata* Siebold. et Zucc. ブナ科 図版1 1a-1c (No. W3)、2a-2c (No. W4)、3a-3c (No. W5)

年輪のはじめに大型の道管が1~3列並び、晩材部では徐々に径を減じる道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状である。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列である。

クリは、北海道の石狩、日高地方以南の温帯から暖帯にかけての山林に分布する落葉中高木の広葉樹である。材は重硬で、耐朽性が高い。

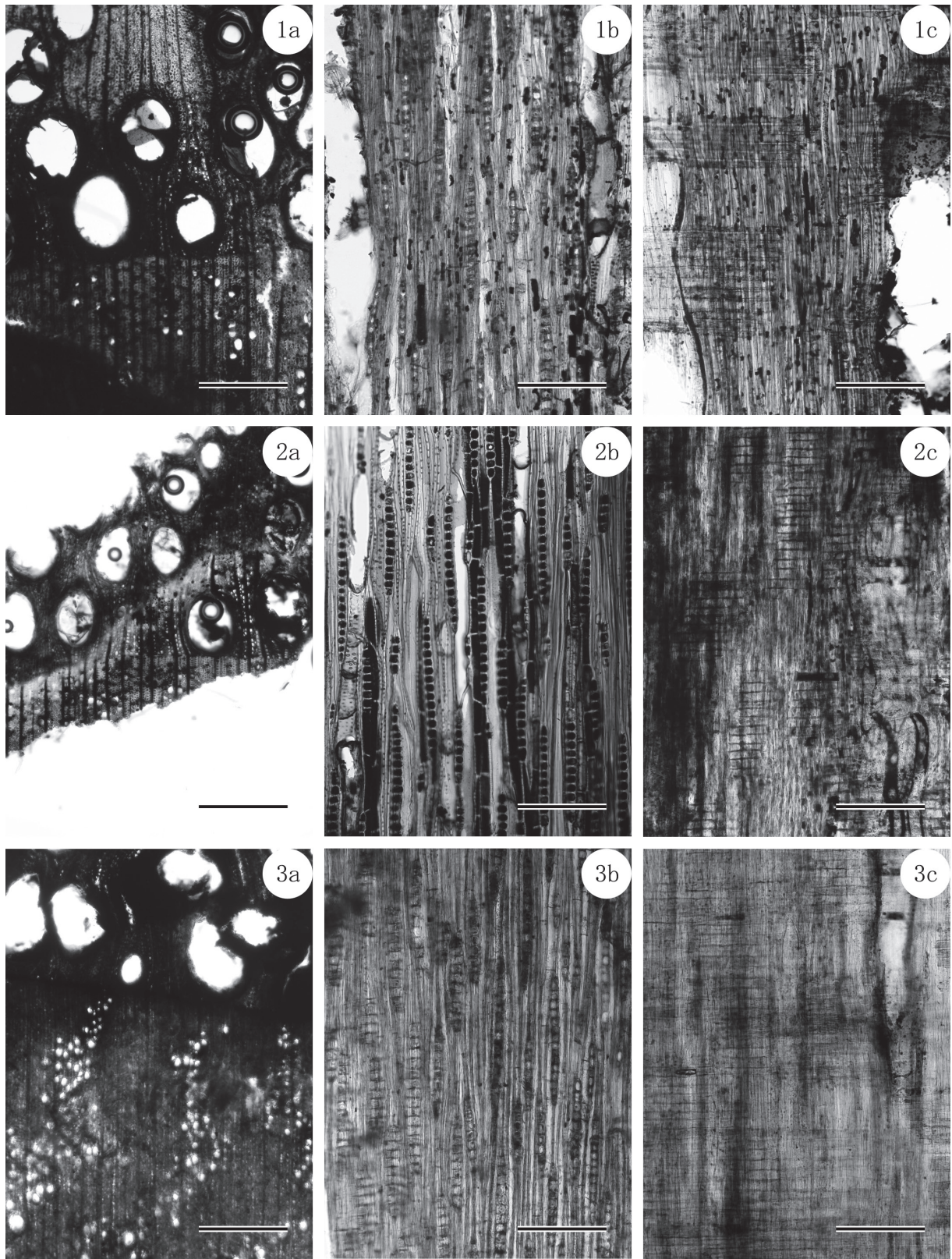
3. 考察

同定の結果、酒の絞り場の構築材5点はいずれもクリであった。クリは堅硬な樹種で、耐朽性が高い（伊東ほか，2011）。

引用文献

伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌，238p，海青社。

（小林克也）



図版1 嵯峨遺跡出土木製品の光学顕微鏡写真

1a-1c. クリ (No. W3)、2a-2c. クリ (No. W4)、3a-3c. クリ (No. W5)

a: 横断面 (スケール=500 μm)、b: 接線断面 (スケール=200 μm)、c: 放射断面 (スケール=200 μm)